

ればならない。更らに遡つてみると、對岸の上ノ關港は中世の海驛で、殊に室町時代には大内氏が明との勘合貿易を掌つた事もあり、上ノ關の薬師丸(五百石)は貿易船として知られてゐた。謡曲西國下の中に、「賑ふ民の釜戸關」とは即ち此の上ノ關港をいふのである。即ち上ノ關と室津とは、狭い海峡を挟んでの二重町 Dual Towns である。

以上は、室津港の時代的推移の概要を述べたに過ぎないが、これらを基調としての社會經濟的推移を、瀬戸内海地域の港市の人文的風土としての地域的進化を、室津港の如く退化 Degeneration せる所と、尾ノ道・神戸の如く進化 Evolution せる所の二つの類型的な港市に就いて、歸納し説明しなければならぬ。

八 人文的風土としての交通

交通を人文的風土として見る場合、其の最も重要なものは道路である。道路といふと、我々日本人の直ちに聯想するものは、街道即ち官道 Public Road である。しかし人文的風土としての道路には、東海道とか中仙道とか奥州道中とか甲州道中とか日光道中とかをも含むけれども、峠を踏えたり溪谷に沿ふたり、濱邊に沿ふたりしてゐる田舎道をも含むのである。自然的風土に依據してゐる道路は、即ち人文的風土としての道路は、寧ろ此の種の田舎道こそ價値多きものであり、それを基準としつゝ地域的進化の上から、街道と併せて考察すべきものである。し

かし此の意味に於ける道路の考察は、我が國には、極めて少ない。否殆んどないといつてもよい。従つて、かゝる記述は、實地踏査によつて蒐集するより外はない。だから自分は、かゝる道路の考察方法はイギリスのベロックの道路『The Road』に據るべきであると思ふ。此の書は一九二四年に公にされてゐるが、氏は其の十年許前に、『ふる路』『The Old Road』なる一書を公にしてゐる。此の書はイギリス海峡に面してゐるワイト島附近から、其の背後地の道路の變遷を研究したもので、此の『道路』の準備研究であつたと見られる。此の『道路』は、左の順序で説かれてある。

前半たる道路概論には、

- 一、道路の起源
- 二、沼澤と水の横斷
- 三、通過
- 四、植物の障碍
- 五、政治的影響
- 六、道路の反應

後半たるイギリスの道路には、

- 一、歴史上の道路
- 二、イギリスの道路研究
- 三、五の時期
- 四、昔の通路
- 五、ローマ人の道路
- 六、闇黒時代
- 七、車での運輸と現代道路
- 八、將來

これを瀬戸内海地域に就いていへば、山陽道にしても、また四國にしても、海岸と山麓との中間に位してゐる地域の道路の研究は、徳川時代の封建制度に伴ふて出來た、比較的整ふた各藩の主要道路より遡つて、主な「ふる

路」として知られてゐる道路と、次には徳川時代に官道として用ゐられてあつた道路の特質とを比較すべきである。しかし此の様に道路を考察する事は、實地に踏査して資料の蒐集をなすより外はない。

(註) 「ふる路」が、山麓から漸次平野の方に移動してゆく傾向にある事は、何れの國にも見られる。それはふるい村落が、水田を作り得る所であり、また居住にも好適な地區としては、山麓の扇状地であるから、ふるい民居は夙に山麓に出来たらしい『和名抄』に出てゐる郷名の地理的位置が多く山麓である事はそれを證據立て、餘ある。これに就いては、自分は既に、『日本の聚落殊に村落立地の地理學的考察』(『聚落と地理』)に述べた。また川野正雄氏の小豆島の研究に於て、「古い道路の位置」と題して、

現在の道路即ち縣道は、主として海岸に沿ひ、或は海岸より、現在の聚落の交通に便利な様に設けられてあるが、それらの道路の所在地は、もとは砂濱で全く道路のなかつた處であり、これに反してもとの道路は、現在の聚落の位置よりは遙かに上方の山の麓を巡り巡つて通じて居る。ある處では、現在の山路よりも、一層上方の山の中腹を縫ひつゝ通じて居る。このやうな古い道路の位置から推しても、現在の海邊の聚落を形成する迄には、山地の方から海濱の方へと、長い年處を經つゝ、下へ下へと聚落が下つて來た過程を窺ひ知る事が出来る。

といつてゐる。だから人文的風土としての道路は、官道の特質を明かにするに先ち、かゝる道路の特質を研究する事が必要である。

瀬戸内海地域の交通として、道路に次いで重要なものは港灣である。都市としての港市が、瀬戸内海地域の人文的風土の一特色であるやうに、港灣を交通其の者として考察する時には、港灣の立地的關係を基調とする事が其

の主要觀點でなければならない。更らにそれを具體的にいへば、廣島市のやうに三角洲の上に發達してゐる港灣の位置、其の利用状態、港灣の位置と利用状態と密接の關係にある産物の生産地區、それらを綜合しての港灣の特色を川の港灣として見る時、そこに港灣としての廣島の風土があらはるのである。試に「誰人の著述やらん其の名を求むれども不知人に問へども答ふる者なし」(文化十二乙亥年彌生の末)と題してある序文のある『廣島獨案内』の一節を摘記すると、

水主町武家町也淺野甲州下屋敷有り其外御船頭水主之者家住ス御船藏數多アリ船御奉行屋敷續テ松原ノ出崎アリ彌生カ鼻ト云フ(彌市ト云船番有ル故也)暑夏ノ時分ハ諸人此松へ出夕涼ミヲナス南ヲ見渡セハ海中ニ山有テ富士山粧ヒタリ名附テ安藤ノ小富士ト云フ誠絶景双ブ方無シ龍堀トテ船入アリ太守ノ御船數百艘繫キ並ヘテ夥敷太岸木ヨリ綱打揚太守御上下之節諸土方御送り迎ノ御目見ニ出勤ノ場也大岸木ヨリ川御坐敷爲召御船ノ傍リハ緞子ノ切幕緞紹服縫ノ天幕御水主ノ者ハ同音ニテ船歌へ櫓拍子ヲ合セテ謠フ聲モ關敷粧ヒハ申スモ中々恐有リ誠ニ繁榮ノ御國筆紙ニ盡シ難シ。

此の水主町のある洲は、西は本川東は元安川の間に介在してゐて、北端の元安川と本川との分流點には相生橋が架つて、其の少し南には中國街道の一部分である中島本町が通つてゐる。中島本町の南の地續に材木町・木挽町などのあるのと、南端の吉島町の川沿に二三の製紙場や其の他の工場の多いのとは、河運に恵まれた風土的特質であ

る。自分は此の河港としての廣島に赴き、それを瞥見するの機を見たが、風土としての港灣の考察は、其の機能の變遷を明かにすべき地圖並風景畫の蒐集と更らに實地觀察とを併せ行つた上に築き上げられなければならない。此の見地からすれば、廣島に就いての以上の記述は、風土としての港灣の考察の一部を構成するもので、三角洲として變遷多き廣島に就ては、少なくとも、廣島の古圖（元中・天正・明治）などを、其の機能の變遷を明にすべき基礎材料とする必要がある。しかしこれらの古圖も、今は一二の廣島市人の所藏たるに過ぎない。

〔註〕 風土としての港灣の考察は、其の機能の變遷を明かにすべき數多の地圖と、風景畫の蒐集とを必要とする事を述べたが、自分は、先年横濱市の復興を紀念として開かれた大横濱土地博覽會に於て、横濱市に關する幾多の地圖と風景畫とを觀覽する事を得て、更らに此の感を深くした。今日横濱市の核心をなしてゐる中區は、横濱市發祥の中心地區であるが、こゝは二百七十年前には入海であつた事は、吉田氏が所藏してゐる新田開發以前の地圖並新田開發後の圖（その新田が吉田新田といふのは、吉田氏が萬治二年から九年の日子を費して寛文七年に埋立開發の難工事を完成したので、將軍家綱から命令されたものである）と横濱先史遺蹟分布圖と横濱史蹟圖とによつて、其の基礎概念が得られた。これに次いで明治十四年に内務省地理局測量課で作つた横濱實測圖と、鳥瞰圖としては、玉蘭齋橋本謙が安政六年に公にした御開港横濱全圖と、横濱市野毛町尾崎富五郎が明治二十四年に公にした横濱眞景一覽圖繪が、當時の港灣の機能の活躍を見るに優れた好資料である。御開港横濱全圖には、「此圖者上洛人自子安村一眺望之眞景而予所寫也」とあり、また横濱眞景一覽圖繪には、「今回横濱眞景圖繪標題致し探探細ニ記載致ト雖、紙中狭ク、只風船ノ上ヨリ望シ如ク市中ノ景色名所有ノ儘ヲ認メ候得バ横堅トモ正面ヨリ御一覽頗度僕一世一代ノ書納ニ候也横濱住人七十史の富左り筆」とあるのに、港灣としての風土が、如何に此の二人の圖工の精神に活躍し

てゐるかを證據立てゝゐる。更らに風景畫としては、最もパノラマ的な鳥瞰圖樣のものに五雲亭貞秀（萬延元年）の横濱みやげがあり、之に次いで一蘭齋國綱の神名川横濱風景（文久年間）、廣重の横濱海岸圖繪（萬延元年頃）がある。開港場としての横濱の港區とそれに續いてゐる街區の活躍してゐる風景は、五雲亭貞秀の神名川横濱新開港圖並一勇齋國芳の横濱本町圖に見られる。なほ部分的に港灣の風土景を描寫してゐるものに、逸品の多い事を見逃してはならない。風景の部分的に描かれたものとしては、廣重の武州横濱野毛と神奈川臺の見はらしがあり、前者には緑の滴つてゐるやうな野毛山と茶色の崖と紺を流したやうな海との色彩が、巧に調和されてをり、後者には旗亭からの雪見のさつぱりした港氣分が遺憾なくあらはされてゐる。筆者は明かではないが、明治三年頃の横濱鐵橋（吉田橋）の圖には、橋上並其の附近の人物や車馬の様子に、明治初年の姿や横濱の國際的な情景が描かれてある。明治五六年の横濱海岸通の圖や明治十年頃の海岸通の眞景には、港圖の國際的な氣分がよく出てゐる。

自分は、これらの地圖や風景畫を見くらべて、港灣としての横濱の風土的特質を握るの機會を得たのであるが、更らに臨地觀察を遂げる事によつて、それが立地的な考察になり得る。瀬戸内海地域の港市の交通の風土的特質もかゝる史的研究方法によつてはじめて握り得るのである。

〔註〕 科學的な地理書に挿入される畫は、我が國に於ては、それが寫眞に限られてゐた。然るに、序言に引用したブリューンの「フランスの人文地理」の挿畫は、奇麗な三色版と達筆なペン畫が挿入され、精確な地圖の外には一枚の寫眞も挿入されてゐない。自分はこれを見て、風土地理に挿入されるべき畫は勿論、其の研究法の如きも、型にはまつた從來の地理學的研究法から脱離しなければ、其の目的を達する事が出来ないと思つてゐる。

島國日本の風土的特質を鮮明すべき類型的な地域は、以上述べた瀬戸内海地域の外に、廣き地域としては日本海地域、太平洋地域、中央山地、關東平野などがあり、更らに小さき地域としては、各自の郷土地域にも求められる。近來盛んに擡頭して來た郷土地理の研究の如きも、こゝに提唱する風土地理の研究方法与同質的のものである。また歴史地理學が、最近若き史學者の間に注目點となるに至つた事も同じ思潮と見られるのである。瀬戸内海地域に就ての考察は、新しき試みである丈に、未だ習作の域を脱しないが、かゝる基礎的な考察に基く風土日本の地域的研究は、傳統日本の再認識を要する今日としては、重要な役割を果たすべき學的方向を有つものである事を信するもので、かゝる研究方向の確立には地理學者と史學者との協働が、新に結成される時機の將來が待望されてゐる。

村落社會

四 村落社會考察の一基準

一 はしがき

我々の常に研究對象としてゐる村落社會は、一定の地域的關係に置かれてある農業人口によつて構成されてゐる。此の村落社會の組織・活動及び傾向が、如何なる社會的特質を有つてゐるか、觀點の重心となるにしても、農業人口を支持する地域的意義が、常に其の基底となつてゐる以上、村落社會の研究には其の地域的意義が重要な一つの役割を有つ。

我々の村落社會は、人類の一つの型として、また舊い傳統を有する國家構成の一要素として、如何なる特徴をあらはしてゐるか。それが徳川時代から明治・大正を経ての今日までに如何に推移したか。是等の研究は、純正學術の見地からしても、更らに社會改良の見地からしても、共に重要な研究問題である。

然るに、從來我が國の村落に就いての研究並論議は、主として地方行政の上から、また農業經濟の上からは相當になされてゐるが、その社會的實在としての本質に就いての研究並論議は、比較的閑却されて來た。其の理由を

詮議する事は、それを他日に譲るとして、我々同志が、村落社會學會の名の下に新に集つたのは、此の社會的實在としての村落社會の究明に幾分でも寄與しやうとする企からであり、自分の此の企に参加したのは、從來多少研究してゐる地理學の方面から、村落社會の存立に就いて、其の地域的意義を明かにすべき役割に就いて考へて見たいからである。

しかし、地理學の方面に於ても、村落社會が其の研究の對象となつて來たのは、歐米の學界に於ても最近の事で國際地理學會に於ては、一九二八年、イギリスで開かれたものに、漸くはじめて村落居住の研究が特殊の題目として論議された位である。すべて歐米の學風に追隨して來た我が國の地理學界に於ては、これに關しては僅かに少數の文獻を見るに過ぎない。従つて、村落社會の立地的意義の解明に對して、最も必要とする日本の類型的な地域に於ける村落社會の地理的意義を明かにし得るやうな基礎的文獻は、寧ろこれから着手し、また集成さるべき状態にある。だから、自分のこゝに述ぶる意見も、これから着手さるべき村落社會の地理學的研究に對しての一つの提案たる役割を目標としてゐる。

二 家族の觀察

村落社會の構成分子としての家族の觀察は、村落社會の研究の第一歩である。

然らば、家族の觀察を如何にすべきか。これを土地と生活の交渉を重要觀點とする地理學の見地からすれば、家族の觀察に必要な土地は、其の家族を支へてゐる耕地と林野と宅地でなければならない。この家族の生活を支へる耕地としては、田ばかりの所もありまた畑ばかりの所もあり、また田畑兼營の所もあり、山林のある所またない所もある。牧畜を兼ね營む所では原野が相當に利用され、漁業を兼ね營む所では漁場もまた土地の一種目たり得る。是等の土地利用の地積と其の率。これが觀察の要點である。しかし、これを地理學的に考察するには、土地利用の地積と其の率に就いての數字が必要であると共に、作圖が最も重要な作業となつて來る。「觀察」を主要條件とする地理學に於ては、臨地觀察をなし得ざる場合にも讀圖は十分に其の補足たり得る。従つて土地利用の觀察には臨地觀察を第一義とするけれども、作圖がこれに伴はなければならぬ。否、作圖は臨地觀察に伴ふものではなくして、作圖は臨地觀察の一部を構成する。だから臨地觀察をなし得ぬ時にも、讀圖は其の代用をなし得る。家族の觀察に必要な土地利用の地圖は、一つの家族の立つてゐる地圖丈では、土地と生活の交渉を明かにする上に於て、はつきりした材料たり得ないけれども、種々な型の村落社會に於ける家族に就いてのものが集積されると、それが生物の標本のやうな役割をするやうになる。家族の住家の立つてゐる宅地の利用をあらはした地圖も、また土地利用圖と同じ意義を有つ。

家族の觀察に要する生活に就いて、土地との交渉を明かにすべき重要な觀點は、生産の手段であり、言葉を換へ

ていへば、生産する労働方法である。先づ生産物を土地と密接に結びつけて見る方法として、土地利用圖に作物の分布を跡付ける。次に労働方法を土地と密接に結びつけて見る方法として、月別に、更らに旬別に主要な農業作業を跡付ける圖表を作る事である。作物分布圖もまた労働作業季節別圖表も、一枚丈では役立たないが、これが集積されると、村落社會夫々の地理學的意義がはつきりして来るばかりでなく、それらを比較する事により暗示する處が多いものがある。労働力の量なり質なりをカーブで、もあらはす科學的方法があれば、それを種々の型の村落社會の家族の労働力の表現に利用し、それを比較する事によつて、何等かの方則が見出されはしまいかとも考へたりしてゐる。しかも労働力が、作物の變化なり、また動力の應用なりによつて、また其の生活標準なり生活狀態なりの變化につれて、如何に變つて來たかを、成るべく實證的に圖表によつてあらはす方法があれば、一層それがはつきりして來るとも考へてゐる。これは今日我が國に於ては、まだ地理學の範圍に取入られてゐないけれども、村落社會の研究に役立つべき地理學的基底としては、農學方面の専門家と協働して着手さるべき研究題目たり得ると信じてゐる。労働力の具體化と見るべき農具が、各地の風土に順應しつゝ生み出された型の特質と其の變遷なども、また此の見地から考察すべき重要なものゝ一である。

要するに、村落社會の生活と土地との交渉を實證すべき細胞としての家族をかく觀察しやうとする。家族の選定の方法に就ては、農學者との協働に待ちたいと思ふ。

三 部落の觀察

土地と部落との交渉を明かにすべき、部落の觀察方法は極めて困難である。土地と生活との交渉を重要觀點とする一つの家族に就いての觀察は、其の家族が、或は自作農であり、或は自作兼小作農であり、或は小作農であるにしても、それが一つの家族である丈に、其の家族を通じての土地と生活との交渉が明かにされ易い。

しかし部落は一つの組織立つた社會集團である。此の組織立つた社會集團の立つてゐる土地と生活との交渉の觀察は、一つの家族のやうに單純にはなし得ない。例へば土地の利用を觀察するにしても、其の地積が廣いから、臨地觀察には多くの時間と努力とを要する。此の場合に於て、臨地觀察に代るべきものは、正確な統計であるが、行政上の村落を統計の單位としてゐる我が國の現狀に於ては、部落の觀察に要する統計の作成には、土地の利用狀態なり、また生産物の種類なり其の産額なりが、其の目的の爲に新に作成されなければならぬ。

此の場合に於て、土地利用狀態に就いて、最も重要な觀察點は、耕地(田畑)、山林、原野などの地積と其の率は勿論であるが、それらに就いての部落民の所有關係。——自部落と他部落との率、地主、自作、小作との率——である。更らに耕地に就いては作物別の反別である。次に生産する労働方法であるが、部落の場合には、地主と自作と小作とに分ちて見る必要があり、また主要作物の推移による變化、動力利用の結果によつて生ずる變化などもま

た考察すべき事項である。しかもそれが村落社會研究の見地からして、土地の所有關係と生産手段たる労働が、其の部落の有つ社會集團の存立に如何なる密接な關係があるか。此の密接な關係を明かにする爲めの調査事項は、如何なる問題から先に着手するべきであるか。是等は、農學者殊に實證的村落社會學者の協働に待つべきものでありまた村落社會の心理を研究する心理學者との協働を要する問題であり、また青年指導に實地にたづさはつてゐる實際家の意見をも徴すべき研究事項でもあるから、我々村落社會研究の學徒としては、以上の見地から類型的部落の生活形態の協働的研究を具體的に進めてゆく方法を講じなければならない。

四 村落社會の考察方法

我が國の現状では、すべて行政上の村落があらゆる研究上の單位となつてゐるけれども、其の社會的實在は、舊い傳統を有する國家丈に、永い歴史的發達を異にする部落の存在意義が強いから、先づ部落々々の有つ社會的實在が、如何に行政上の村落社會を特色づけてゐるかを觀察しこれらを歸納しなければ、行政上の區劃を單位としての考察文では、村落社會の正鵠を捉へにくい。勿論行政上の村落の統計に現はれる^{アヴェレリツツアリユ}平均値にも、何等かの社會的意義があらはれるに違ひない。しかし此の平均値の有つ社會的意義は、部落々々を觀察して得た實證的研究によつて、解釋付けられなければならない。

だから土地と生活との交渉を實證する上から行政上の村落の解釋は、其の内の類型的諸部落の臨地觀察の比較考察が必要である。従つてそれが單純な水田場であり、または畑場である場合は、基準となるべき一二の部落の臨地觀察が、直ちに行政上の村落の社會的意義を解釋付け得るけれども、行政上の村落内の部落々々が、風土を異にしまた産業を異にする結果、それが土地利用の上にもまた生産する労働方法の上にもあらはれてゐる場合には、例へ行政上の關係を異にしてをつても、隣村の同型部落と比較考察し、行政上は一つの村落であつても、社會的意義からは數多の部落が集合してゐる複雑性を備へてゐる村落の有つ平均値が、單純な村落の有つ平均値と如何なる差異あるかを人口や産業の統計の上に明かにすべきである。

村落社會の單位として、かゝる重要な意義を有つてゐる部落が、從來何故に法治的に顧みられなかつたか。それには大きな二つの理由がある。其の一つは、概念法案が尊重された結果、行政上の單位となつてゐる村は、從來監督行政を主とする内務行政の立場からは、其の機能の内容を十分調査研究する必要が認められなかつたし、指導行政を主とする農林行政でさへ、二十年前までは、行政の對象としての部落はあまり考へられてゐなかつた。それは農商務省當時 調査の實務に當つた自分の經驗した所である。其の二つは、村落研究に縁深き地理學並史學に於て村落立地の原因を發生的に考察する學風は、明治期までは少なかつたからで、自分は新渡戸博士の『農業本論』によつて、夙に村落の形態を知り、また地人相關の具體的な對象を村落生活に探らうとした結果、當時部落を研究の

對象とする必要を感じたけれども、一般學界は殆んどそれを研究の對象としなかつた。かゝる研究上の主張から其の方法論を世に問ふために公にした『都市と村落』(大正三年)の中には、行政上の戸塚・下戸塚・諏訪・源兵衛の四部落に就て考察し、また大正九年、齋藤朝鮮總督が其の主張たる文化政策を農村に實施すべき基礎調査を委囑された際にも、同じ主張から、朝鮮部落調査を提案し、朝鮮固有の部落を歴史上・内治上・經濟上・社會上・教化上に類別し、また、外に内地人關係の部落、外國人關係の部落をも認めつゝ實地踏査し、それらの生活の概相と特相とを考察し其の結果を『朝鮮部落調査豫察報告』(大正十年)として公にした。後述の「地方人口」に於て、「村落居住と人口との關係」を研究するに當つて、標準部落の比較考察に及んでゐるのも、同じ研究上の方法論の提唱に基いてゐる。

この日本社會の基礎構造である部落が、近年に至つて、農村行政は勿論、内務行政に於ても、行政並に施政の注目點となつて來た事は、かゝる主張を抱樹してゐたものから見れば、當然過ぎる事であつて、寧ろ遲きを怪しんでゐる。

五 村落共同體の地理學的研究

一 概 觀

こゝに村落共同體として取扱はれた部落は、東京市の西郊約 50 km にある山村恩方村^{アング}の案下(Angé)部落である。

案下部落は、關東山塊の北東麓(標高 700 m—850 m)に開けた案下川(Angé Rivère)谷に沿うて占居し、其の居住地區(Terrain pour l'habitation)の位置は、標高約 350 m 内外にある。

(註) かゝる標高 350 m の高度までに分布し、500 m 以上の北斜面には櫛が點在してゐる。即ち櫛は標高 350 m の高度までに分布し、500 m 以上の北斜面には櫛が點在してゐる。

八王子市からの乗合自動車は、一日に四回、案下部落に往復するやうになつてゐるが、此の乗合自動車の窓からは恩方村にはいと、村の北南境をなしてゐる標高 800 m 内外の最高地區である草生地(Terre herbeuse)は、仲秋の澄み切つた空には、周囲の緑濃い杉や檜の常緑樹の林(Bois de feuille aigüe)から際立つて黄色になつて見える。自動車は川下の下案下で止まるので、下りてまはりを見まはすと、右岸に沿うてゐる狭い地區は 300 m—400 m

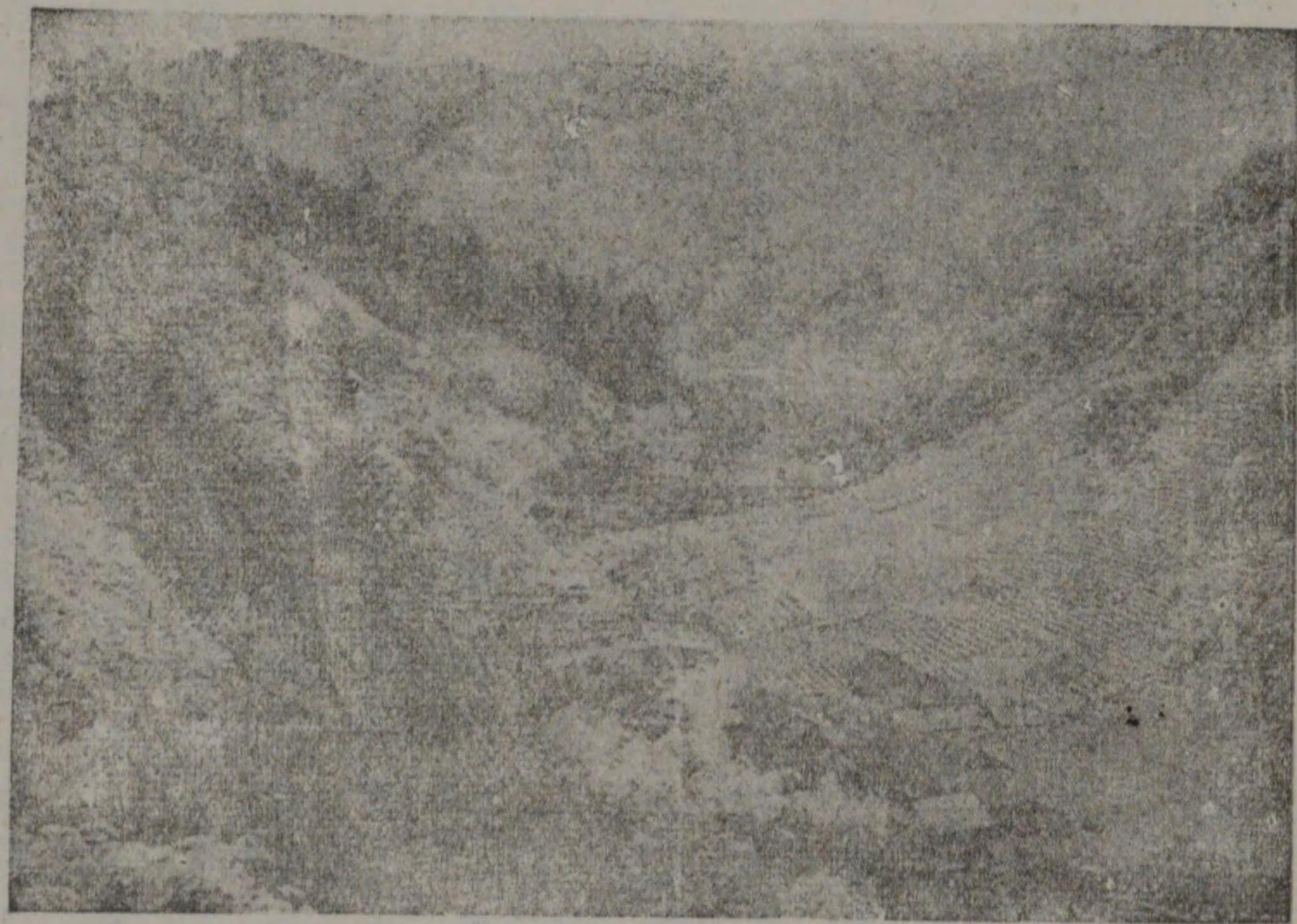
に更に 500 m にと、急な傾斜をなして迫つてゐるのに、左岸に沿うてゐる廣い地區は、300 m—500 m まで同じ標高でありながら傾斜が緩やかであるだけに、その土地利用が、右岸が杉檜林の植栽に利用されてゐる事が多いのに反し、杉檜林よりも雜木林 (Bosquet) が多く、なほ桑畑 (Champ de mûriers) や普通畑 (Champ ordinaire) に利用されてゐる所さへある。居住地區は左岸に沿うてゐる道路 (Chemin) 沿と、耕地を後にした地區に多い。——居住地區の一部は道路と沿岸との間にもあるが。

下案下と上案下の位置を、あはせて大觀するには、下案下部落と河を隔て、相對してゐる急傾斜地に上るに如くはない。川に架かつてゐる素朴な一本橋を渡り、少しばかりの桑畑の中を過ぎて、急な坂路を上つてゆくと、所謂小佛層といはれる灰色の粘板岩か、可成り風化が進んでゐるので、ザラ／＼の破片の小路に散らばつてをり、それが母岩となつて出來てゐる土壤は植物の成育に適してゐる。

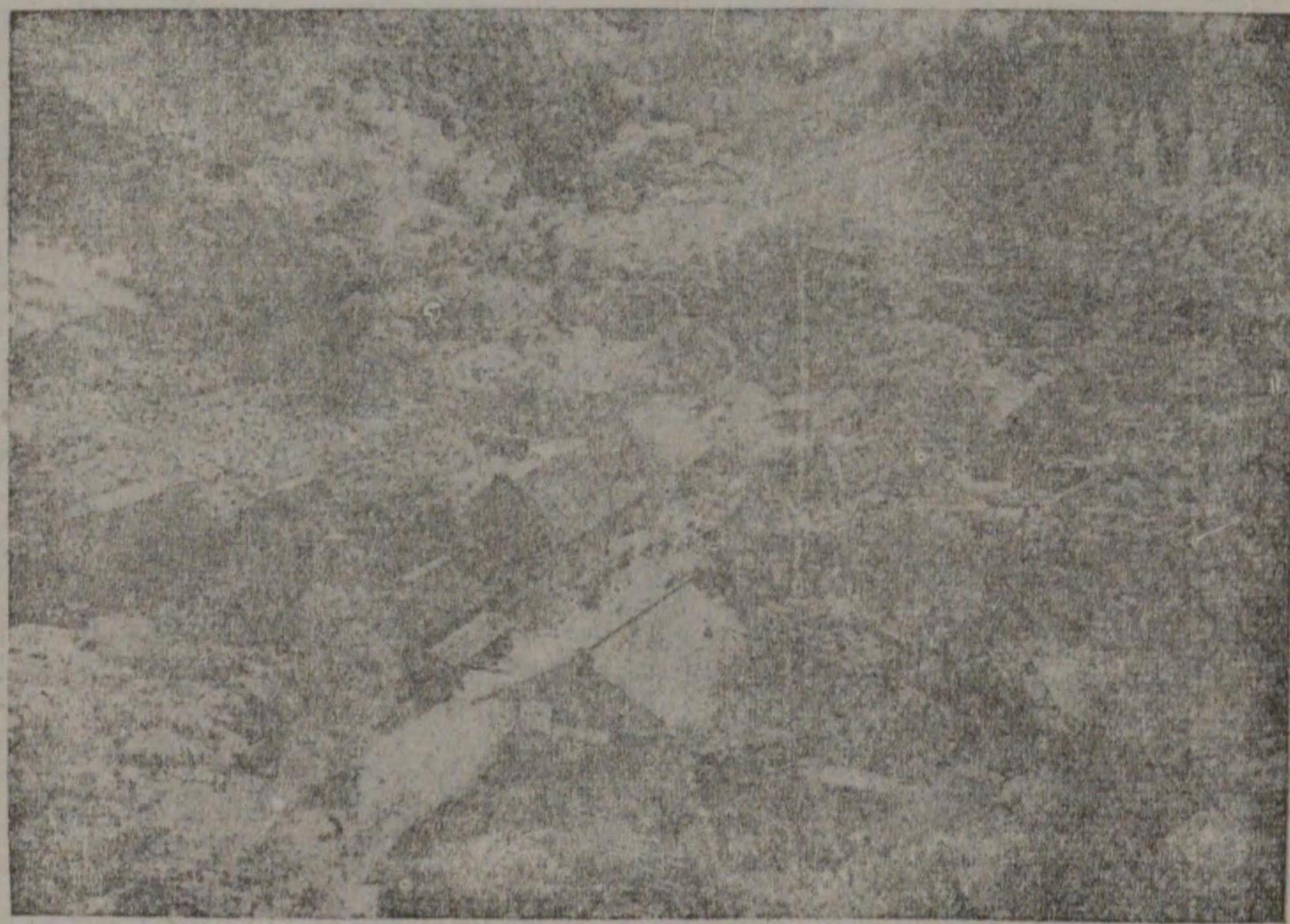
眼下に下案下 (第一圖「下案下から上」を見下すと、宅地の狭き事もはつきりわかるが、養蠶業が盛んなるにつれて家構 (第二圖「街村的な上案下」参照) が變つて來てゐる事も、比較して見られる。——蠶を飼ふのに、もとは普通の家の中でやつたのが、次には二階で、更に次には屋外でといふ飼育法の變化が、舊い家構と新しい家構が列んでゐるので首肯される。

かく高い處から、下案下と上案下との位置を見比べると、其の間僅かに數丁より離れてゐないが、此の二つの小

第一圖 下案下から上案下への鳥瞰



第二圖 街村的な上案下



小さな部落の發達過程には、相當の時間的差異があるやうに考へられる。案内された菱山榮一氏に聞いて見ると、上案下と下案下とは合せて四六戸しかないが、神社も寺院も別々であり、部落間の感情も融和してゐないさうだ。

高い所に立つて、二つの小さな部落の生活環境としての位置を比較してみると、下案下の居住地區がいはゞ野ざらしの地形であるのに、上案下は二つの川が落合つてゐて、まとものよい奥まつた處である所から推しても、またカミ・シモの名稱からいつても、上案下の方がふるくはないかと思はれる。かゝる調査に就いては、此の部落には微すべき史料がなく、また故老も居ないのが遺憾である(寺院も今は上案下の方が一つしかない)。

此の部落では、今日少しの水田もないが、居住の初めにも少しの水田を作らずに陸稻とか粟とかを作つたものであらうか。川水の豊かな上案下としては、それを利用して幾分でも水田を作つたのではなからうかと思はれる。川水が豊かでしかも良いから、今日でも多く飲料水に用ゐられるし、雑穀を搗くための大きな水車 (moulin à eau) が、三箇所にも設けられてゐる。普通畑が少なくなつた(五十年前には80%であつたのが今日は殆んどない)ので、今日では水車が利用される機會も少なく、それが山村の一景觀として僅かに残存してゐるに過ぎない。

二 土地と産業と労働

山村としての案下部落の住民が、森林資源に依存する事はいふまでもない。しかし時間的に其の利用の差異を比

較すると、そこに著しい變化がある。即ち土地利用圖 (I. Utilisation de terre) が示すやうに、五十年前 (1884) には、全面積の 63% (30 Oha) は雑木林で、それが主に薪炭林として利用され、殊に製炭は盛んで八王子まで馬によつて輸出された。當時は薪炭林に要する勞力は、一年を通じて必要であるばかりでなく、製炭には可成りの技術を要するから、部落民の勞力は、男女を通じて年中用ゐられた(炭俵編みは女子の重なる副業であつた)。然るに明治以後に於ける社會經濟の變遷殊に資本主義的經濟の影響は、部落民の土地所有と土地利用の關係を變化させ、それが此の部落の森林資源の利用と所有にも具體化するに至つた。之を利用の方面から見ると、五十年前に 68% を占めてゐた雑木林は、今日では 39% 8 に減じ、その代り用材木としての杉檜林は 52% に増してゐる。かゝる森林の資源の利用の變化は、實に

- 一、用材林は栽植後約三十年を要するから、小資本にての其の經營に當り難き事。
- 二、かくて森林の所有は、他部落並に他町村の有産階級の手に移り、五十年前には、他有か 9% であつたものが現在では一躍 35% に上るに至つた事。
- 三、用材の騰貴率が薪炭に比して比較的大きく、其の賣上高も大きい事。
- 四、用材林は薪炭林に比べると、監督にも便に、また其の評価も容易である事。
- 五、官憲の林業奨励は用材林に限られてゐた事。

の諸要因が因果關係をなして結果されるに至つた。かゝる杉檜林の部落内に於ける空間的擴大は、それが雜木林の地積を縮小した許りでなく、民家の屋根葺並に炭俵の原料等の供給地たる草生地の面積をも著しく狭めるやうになり、今日草生地の地區は、五十年前に 22% であつたものが、僅かに 800 m 内外の地區 (1%4) に限られるに至つた事は、1933 年の土地利用圖 (Utilisation du terrain en 1933) の示す如くである。

(註) 1933 年の土地利用圖と、1884 年の土地利用圖とを比較して、杉檜林地區の地理的分布上、我々の見逃してならない事は、新に擴大された杉檜林地區は、其の栽植に適する陰濕な地區 (主として右岸の傾斜面) に廣まつたのに反して、雜木林は比較的傾斜の緩やかな左岸に残されてゐる事である。勿論個人の所有關係は、それらの通則を除外してゐる事實もある。

(註) 草生地は、初めは全部共有的な入會地であつたが、入會權の解除や其の他で分割賣却され、個人有となつたものが多い。かく個人有とならなかつた昔の共有的な草生地は、蘆・葛の子・五倍子・柏の葉等を、部落民の誰にでも自由に利用し得るやうになつてゐた。草生地の代りに出來た用材林は、勞力の需要を部落民供給に求めはするが、それが季節的でありまた一時的であるから、其の勞働需給の關係は、反つて一時に部落外から求めなければならぬ。かくして用材林は草生地に比べると、部落民生活の全體への關與が少くない譯になる。

此の森林資源の利用の變化は、それが直ちに森林の所有關係に重大な推移を來たしたし、運輸の方法と道路面の改修にも近代的な技術を採用するに至つた。而して道路の改修は、部落民個々にリーヤカーの利用を可能にした。

(註) 江戸と甲府の間に通じた甲州街道の裏道として知られてゐた此の街道は、中央線が開通してから、殆んど公道の用をなさなかつたが、道路が改修された今日では、トラックに積まれた電柱が、二時間で東京市に達するやうになつた。以前は板や角

材にして賣出したものだが、道路がよくなつたために、重くても、丸太のまゝで賣出すやうになつた。林地からの運材の方法が、肩又は背負梯子で運んだのを、修羅や櫓等の装置を用ゐて能率を高めるやうになつたし、案下からの運搬具も、五十年の間に馬の背から荷車、それから荷馬車・トラックと變つた。従つてそれにも部落内の勞働の需要を著しく減ずるに至つた。1884 年頃に多かつた馬の飼養 *Elevage de chevaux* が今日極めて少なくなつた事は、中央線の開通によつて運搬業 (馬力) が職場を失つたり、其の他の運輸方法が變つたからである。

森林資源の利用の變化が、土地利用と土地所有の推移に反映し、しかもそれが山村案下の勞働の需給並に交通の革新に影響した事に次いで、案下の産業と勞働とに重大な關係を有つてゐるものは、養蠶業と織物業である。

經濟生活の變遷過程 (II. Cours du changement de la vie économique) に示してあるやうに、1884 年頃には養蠶業と織物業は、共にまだ全部落民の産業ではなかつた。然るに此の二つの産業は、年と共に發展し 1920 年頃には絶頂となつた。家内工業としての重要であつた絹織物業が、其の後絶滅するに至つたのは、資本主義的な工場經營に奪はれ、爲に工女としての移出を餘儀なくしてゐる事は、1884 年以後 50 年間の人口移動 (III. Transition dans cinquante ans depuis 1884) にもそれが含まれてゐる。養蠶業が盛んとなつたにつれて、桑畑 *Champ de mûriers* が 1%3 (6ha) から 2%1 (10. ha²) に増し、しかも五十年前には山畑として分散してゐた桑畑 (一圖) が、勞働賃銀の關係から、居住地區に近い普通畑がそれに置き代へられるやうになつたのは、日本の農業經濟と勞働の集約化を立證する好例である。

(註) 經濟生活の變遷過程を示してゐる圖表(Ⅱ圖参照)にあらはれてゐるやうに、大麥が減じた事は、普通畑が桑畑に置き代へられ、また輸出百合の栽培(Cultivation de lis)が新に起つた爲である。薪の産額が、炭のそれと五十年前と全く反對に上下するやうになつたのは(Ⅱ圖「經濟生活の變遷過程」参照)、前者が道路がよくなつたので運賃が下り、炭焼に比べて勞力が少ない事と、炭の原料を供給する雜木林が少なくなつたのに、薪としての移出が多くなつた爲である。

部落の産業の生産過程が季節の變化に伴つて、如何に勞働の調節にあらはれるかは、月別勞働力配分表(II. Distribution de force de travail par mois)の如くで、これを此の部落に於ける主なる産業別に類別して見ると、

I' 養蠶と林業を兼ね營む農業 Agriculture-compris sériculture et sylviculture) 穀物と蔬菜栽培(Céréales, Légumes)と桑畑(Champ de nûriers)に關する勞働は、十二箇月間通じて行はれ、殊に養蠶に關する勞働日数は、五月に於て最も多いが、養蠶(Sériculture)と草刈(Tailler broussailles)に關するものは季節的であり、しかもそれらの勞働を要する季節が相反してゐる處に、勞働調節の上の興味がある。

II' 炭焼業(Métier de charbonner de bois)と林業勞働(Travail de forêt)には、五月から十月にかけて從事し、其の月数は五月が最も多く、七月には少ない。炭焼はそれが主業であるだけに、之に關する勞働は七月の外は毎月これに携はり、殊に十一月と二月と三月が盛んである。

III' 日雇業(Travail à la tâche)が伐木(Couper de bois)と、運材(Transporter de bois)に、また他の林業勞働(Travail de forêt)に、其の勞働を提供する事は當然で、草刈への提供はこれに次いでゐる。

たゞ是等の勞働の配分過程が、土地利用のそののやうに、五十年前でなくとも、「經濟生活の變遷過程」に示されてあるやうな主要産業の趨勢を比較し得るのに適切な時期、例へば1920年後に於ける主要なる産業別の勞働の配分と比較する事が出来るならば、なほ夫等に關しての賃銀も比較し得る資料が明かになるならば、後に述べる人口移動との因果關係を明かにする上に、更に確證を提示し得るであらう。

三 居住と人口

此の部落の居住が、極めて制限された環境に置かれてゐることは、已に前節によつても明かであるが、居住景觀圖(II. Aspect de l'habitation)と其の斷面圖(Plan de section)によつて更にそれが鮮明されるであらう。しかも其の生活内容の複雑さと、其の人口現象の動向こそは、端的に此の部落生活の限度を明示してゐる。

部落の生活内容の複雑さは、其の職業構成(II. Constitution de profession)の分類の多様と其の變遷(en 1881, en 1934)を比較する事によつて明かであるから、其の概要を左に述べる事にしよう(1884年—1934年)。

主業としての農業(Agriculture)が13であるのに、炭焼業(Métier de charbonner de bois)と運搬業(Métier de transport)が共に12であり、夫等の三業を營む者が、何れも多くの副業(Métier accessoire)を有し、しかも夫等の副業がこの小さな部落としては極めて複雑性を有つてゐる事は、純農村のそれではなくして、

街村的機能を有してゐるからである。是等の副業の種類が、1884年と1934年とを比べると、農業を主業とするものに、それが著しく單純化しており、1884年には炭焼・織物・運搬・日雇・商業などの副業があつて、それが合せて主業の13に對して13であるのに、1934年には主業たる農業が16であるに、副業の炭焼が1であるのに徴しても知られ、従つて人口の支持力が極めて弱くなつた事を物語つてゐる。

之を人口現象、殊に其の過剰人口の行方 (où va la surpopulation) に徴するに、50年間にはいつて來たもの (Familles tout entière) が三月であるに、全戸出たもの (Familles tout entier qui se transfèrent) が十戸(都市に出たものが多い)である。従つて大正九年の國勢調査の時に、58世帯あつたものが、昭和五年には46世帯に減じてゐる。なほ五十年來定住してゐるもの (Familles quis ne bougent jamais depuis 50 ans) と、それから部落内に分家したもの (Famille qui s'est divisée) と、部落外に分家したものを比べて見ると、部落外殊に都市に分家したものの多い事も、此の部落の過剰人口の行方を實證するもので、外に出稼してゐるもの (Migration temporaire dans 1933) の數が四十二人 (unpoint indique un individu) に上り、其の分布を見ると多くが八王子市に、東京・川崎の二市に行互つてゐるのがこれに次いでゐる。なほ案下部落の東方に分布してゐるものは、恩方村内の織物工場に行つてゐるものであらう。これを職業別と性別から見ると、男女を通じて織物職工 (Ouvrière de tisser) であるもの、多いのは、村落の過剰人口が、附近の近代的産業組織に吸収されたといふ通則と、此の部落が、傳

統的に織物業に對しての訓練があつた事を證するもので、外に男子が織物工場 (Ouvrier de tissere) に働くものが四人ある事で一層それが明かになる。従つて、部落内の人口構成 (Constitution de l'âge en 1933) が、男女を通じて、十三四才から二十五六才までの働き盛りの人達の離村を餘儀たくしてゐる事が首肯されるであらう。なほ各戸の家族員數 (Constitution du membres de famille en 1933) をも算出したが、これらの差異は、一々各戸の職業に比較して更に其の理由を検討する必要がある。

四 結 言

こゝに想像を逞うせしむるならば、上案下に居住し始めた住民は、山村としての生活環境に、最も多くの生活資源を求めたのであらうし、殊に共同體としての其の機能は、下案下の住民と共に、耕地や森林が多く私有財産化した當時に於ても、共有地たる萱野の残存は、長く彼等の共同體としての形體と機能とを保たしめたであらう。ドウマンジョン氏の「村落と地方共同體」なる名論文には (Villages et Communautés rurales, Annales de Géographie, Juillet 1933 田中館秀三氏譯「地方共同體の地理學的基礎」)(東北帝大文科會編『文化』1、10)、人類文化の歴史的發達の過程として、

一、農業の極めて幼稚な時代に見られる所謂原始的村落共同體。

- 二、定住的なる農耕地に育まれたる組織的村落共同體。
- 三、孤立的な農園に棲む農夫と、共同體の交易地であり、且つ政治的中心地である村落との結合から構成された近代的地方共同體。

の三つの基本的形態を認め、しかも二の中には、

(一) 農耕地の區分、(二) 共有財産の存在、(三) 土地分配の週期的更新を結果した事を述べ、最後の「社會的結合の地理的基礎」の節に、

地方共同體進化の階梯に於て、我々は常に村落結合の根柢に地理的基礎の存在を認める。……水田地域の村落には外の何れにも見ることも出来ない永久の堅固なる特殊な共同體の組織が形成された。……共同體を論ずる際に、多く用ひられつゝある血族的關係とか、種族的組織とかいふ言葉は、地域の關係、又は地域的組織と書き換へられなければならない。さうすれば、遠き昔より、地方共同體の間に文明と文化の進歩し來りたる過程に於て、重大な要素をなしたるものは地理學的法則である。

といつてゐるが、フランスのやうな村落地理研究に關する文獻殊に社會學的な研究が、極めて豊富な學界に於ては、村落共同體の地理學的考察が可能であるけれども、我が國の聚落地理學的研究の現狀に於て、地誌的研究のみが多くして、歴史的並に社會學的研究の乏しき實情からしては、村落共同體の地理學的研究殊にドウマンジョン氏のな

してゐるやうな総合的な研究は、案下部落の研究のやうな部分的な研究の集積された後に求めるより外ないであらう。

附記 恩方村は、數年前から村落研究のフィールドとした所で、こゝに協同者菱山榮一、松井翠二郎二氏がある。挿入せる諸圖の原圖は、悉く菱山氏の手になつたものであり、以上の資料も同氏に據つた。

一九三四年八月、ポーランドのワルソーに、第四回の國際地理會議の開催されるに當つて、自分は今回新に設けられた景觀Landscapeの部門に對して、幾分の寄與をなすべく、全國の師範學校の協力によつて、拙案による村落生活に關する景觀寫眞を、

一、土地利用(I、平野及び溪谷に於ける水田、II、山麓の土地利用、III傾斜地及砂丘の土地利用、IV、漁村及漁港の土地利用)

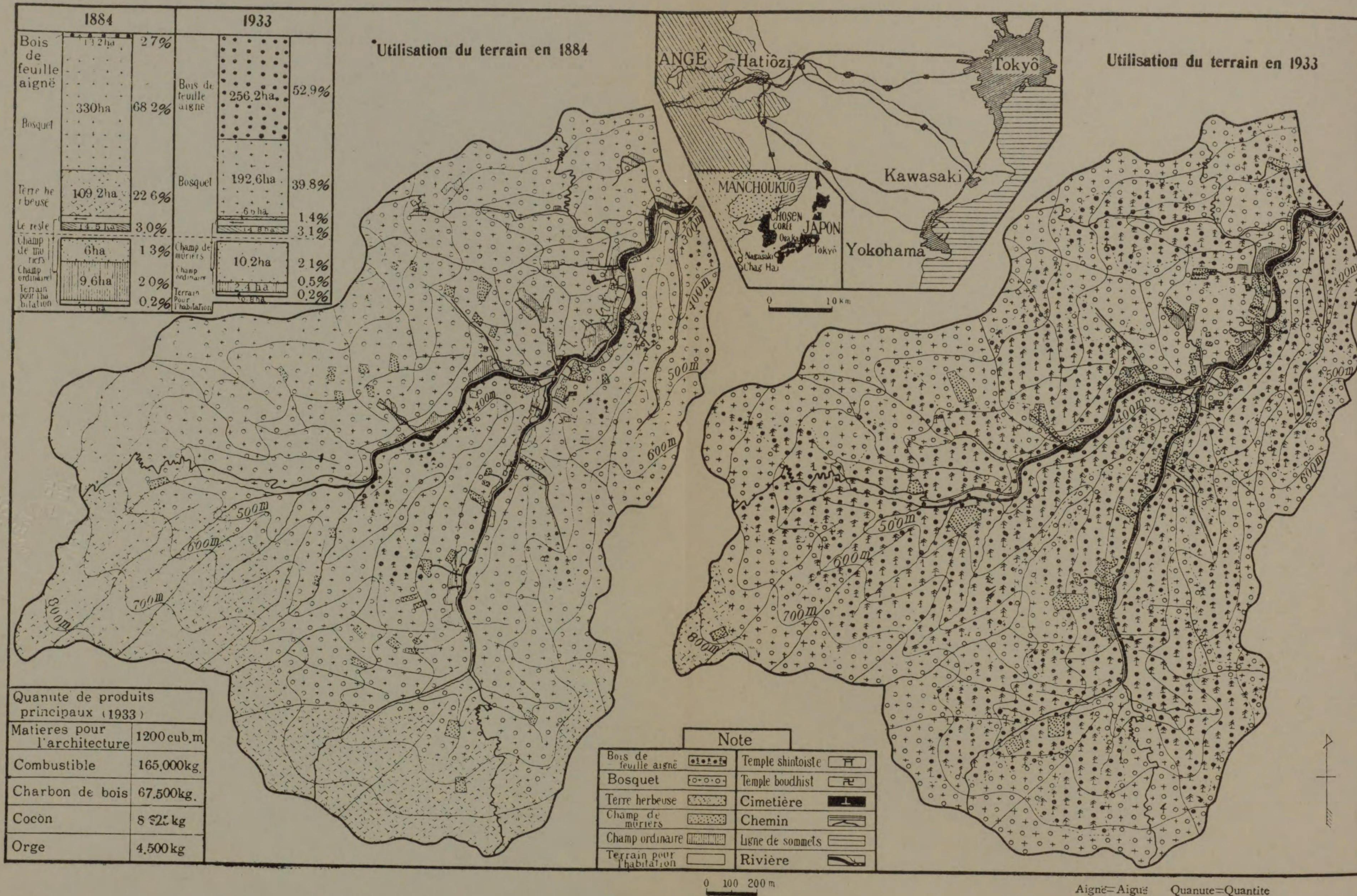
二、勞働(I、水田への栽培、II、養蠶、III、狩漁及び伐木、IV、製鹽、V、村落工業)

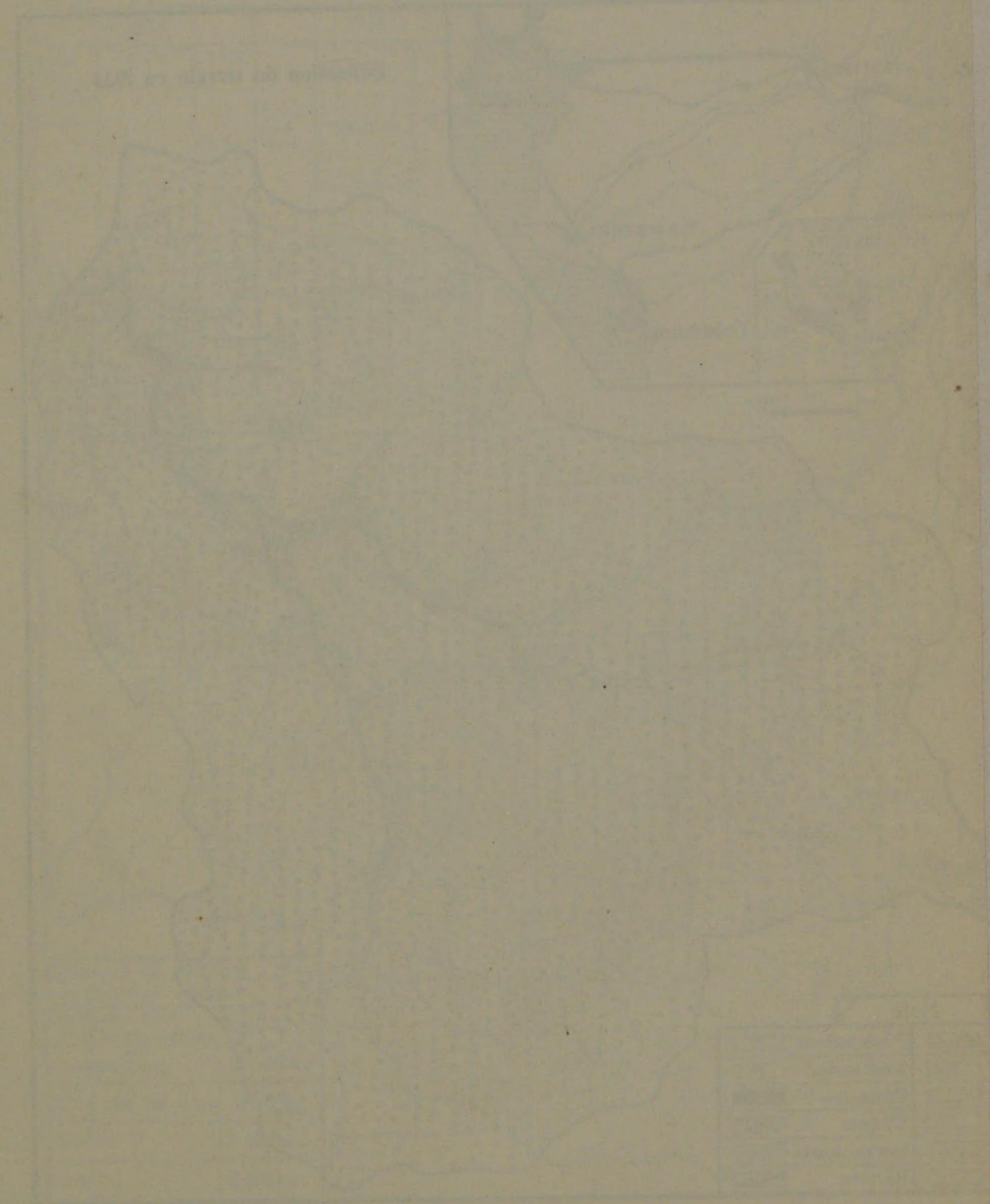
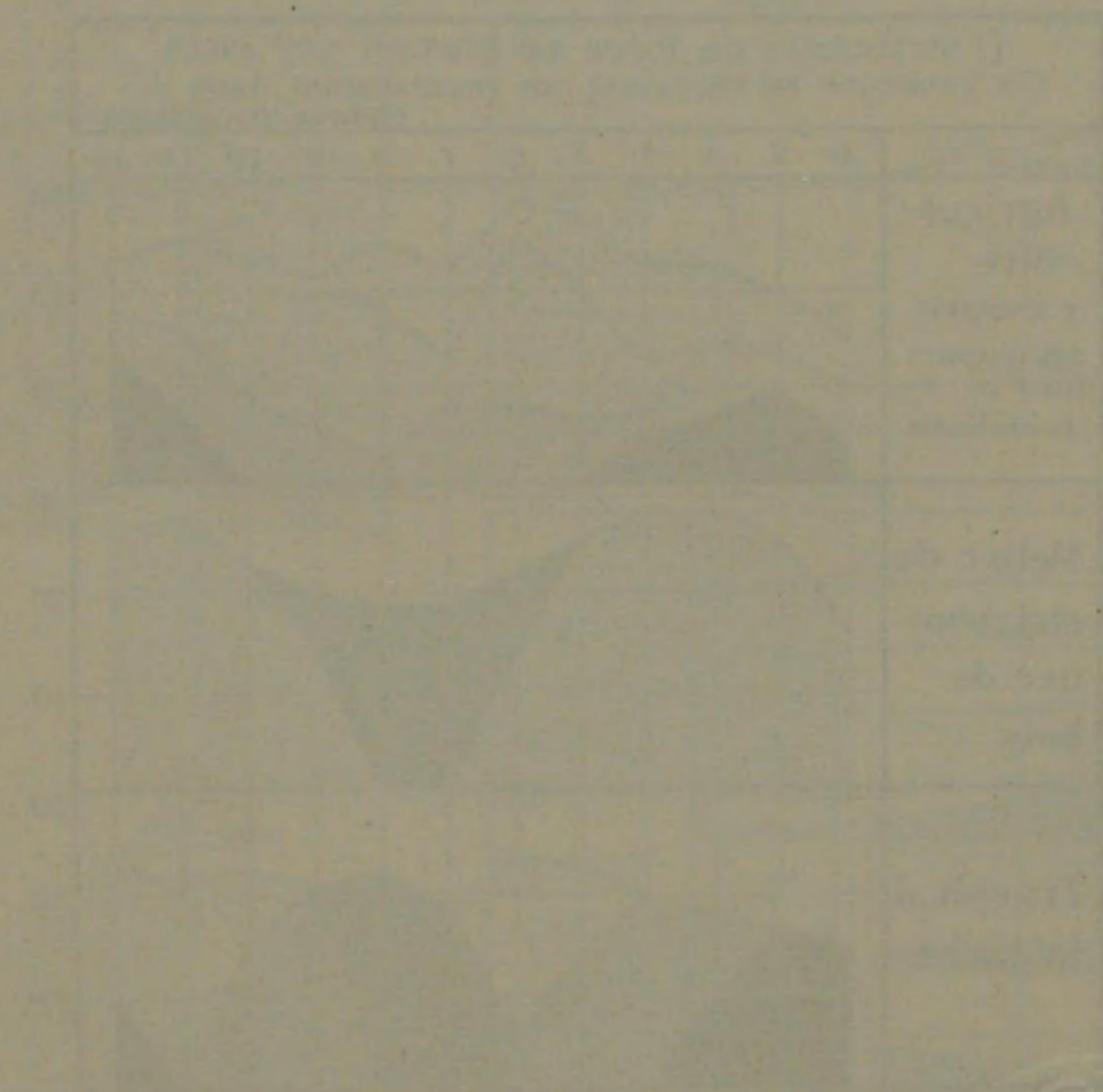
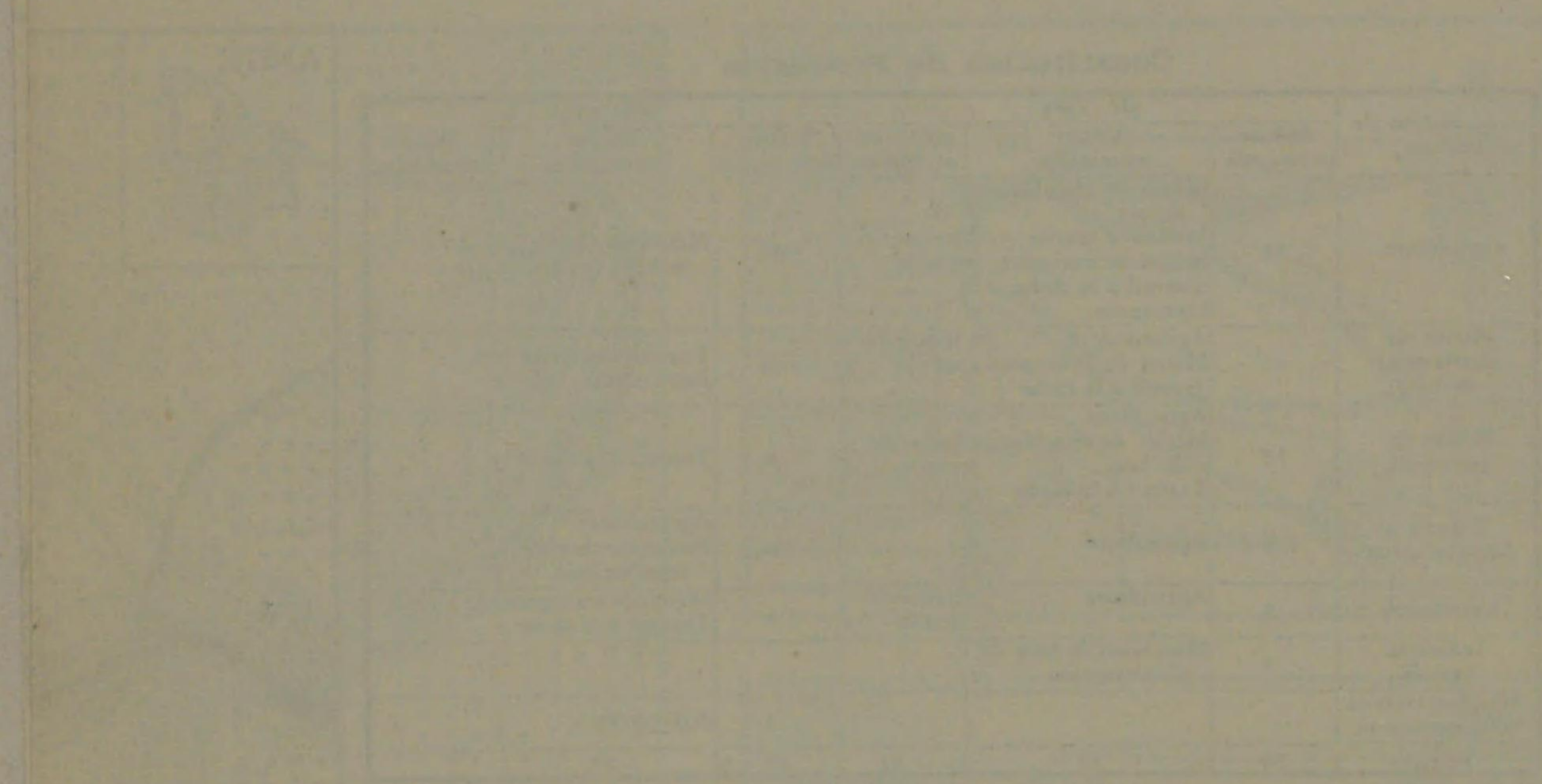
三、村落居住(I、凝集、II、家構、III、生活様式)

に分類し、大阪百餘枚(寫眞の數約五百枚)を持參したが、同會議に附設された展覽會は、各國から出品された地圖展覽會Exposition of Mapsの外には、これを日本景觀展覽會Exposition of Japanese Landscapeとして特に陳列されたもののみであつた。従つて來會者の非常な注目點となり、會長ポーマン氏は、其の中から數十枚を選択して其の寄贈を依頼され、また閉會に際しては、次回の一九三八年のアムステルダムに開催される第五回の會議の際にも、地圖展覽會の外に、特殊の展覽會をも要望した程であつた。自分は殊に、案下部落に關する左の三枚の地圖の彩色したものを、案下部落の數多の寫眞と共に、日本の村落生活の機構を明らかにする爲に、特に日本景觀展覽會の中に陳列した。ベルギーのミシヨット氏、スウイスのレー

マン氏、ドイツの若きドー氏など殊に注目され、何れも印刷寄送を懇望された。病氣で缺席されたフランスのドウマンジョン氏も、特に書を寄せ印刷寄送されたき旨を申越された。だから、特に地理教育研究會の矢鳥氏の諒解の下に、佛文のままの地圖を本稿に挿入し、之を右會議に列席した歐米の主なる學者に寄贈する事にした。こゝに讀者に御斷りすると共に、作圖者菱山氏に深厚なる謝意を表する。十一月二十八日附で、ドウ・マルトンヌ氏から受取つた手紙によれば、今まで別々であつた村落居住と人口との二つの委員會がドウマンジョン氏を會長とする一つの委員會となり、其の研究項目は、新に決定された。本稿と地圖を本書に轉挿し得た事を矢鳥氏に謝したい。(1934年12月)

Utilisation de terre du hameau Angé, dans un certain Village de montagne aux environs de Tokyô

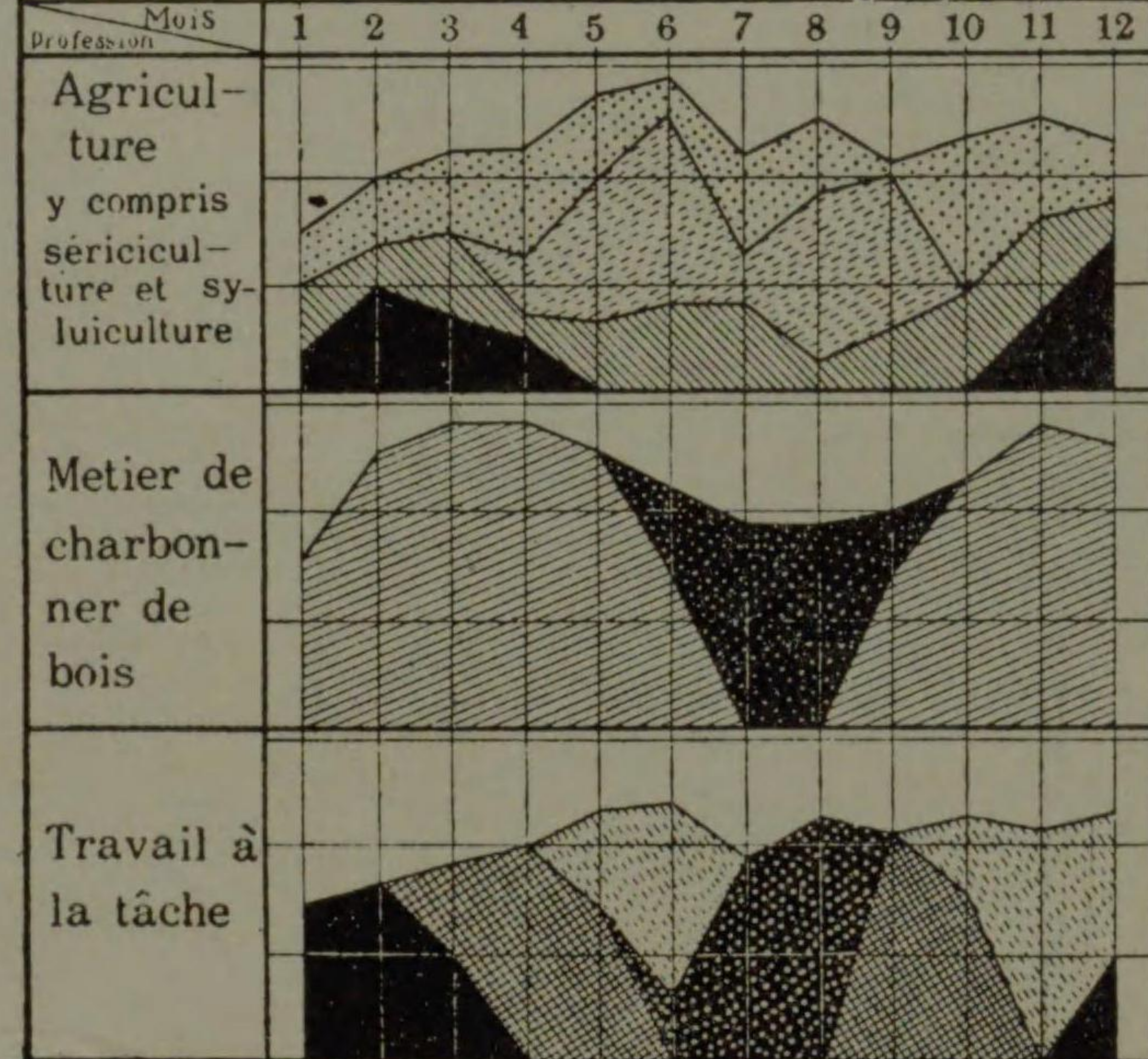




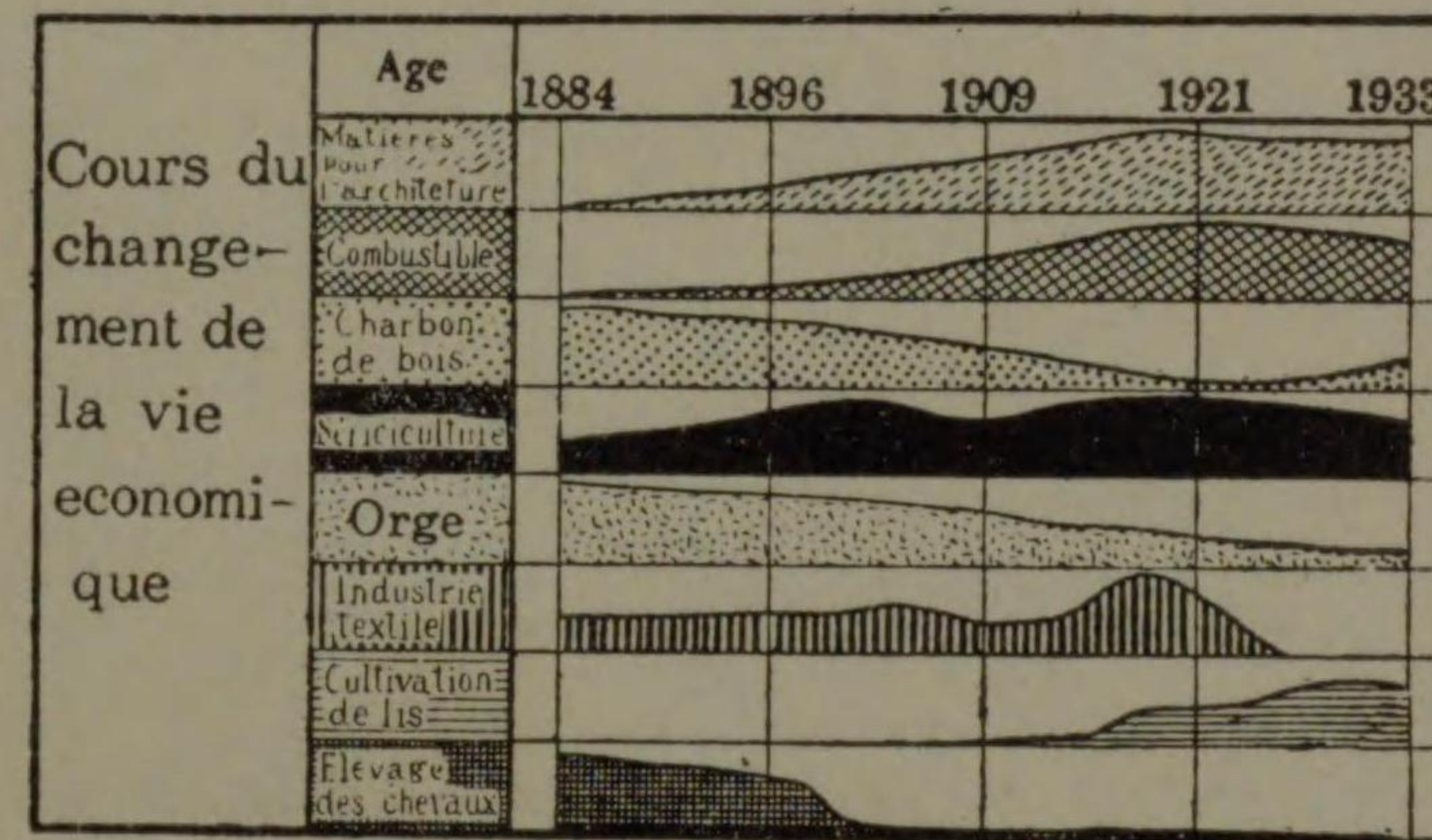
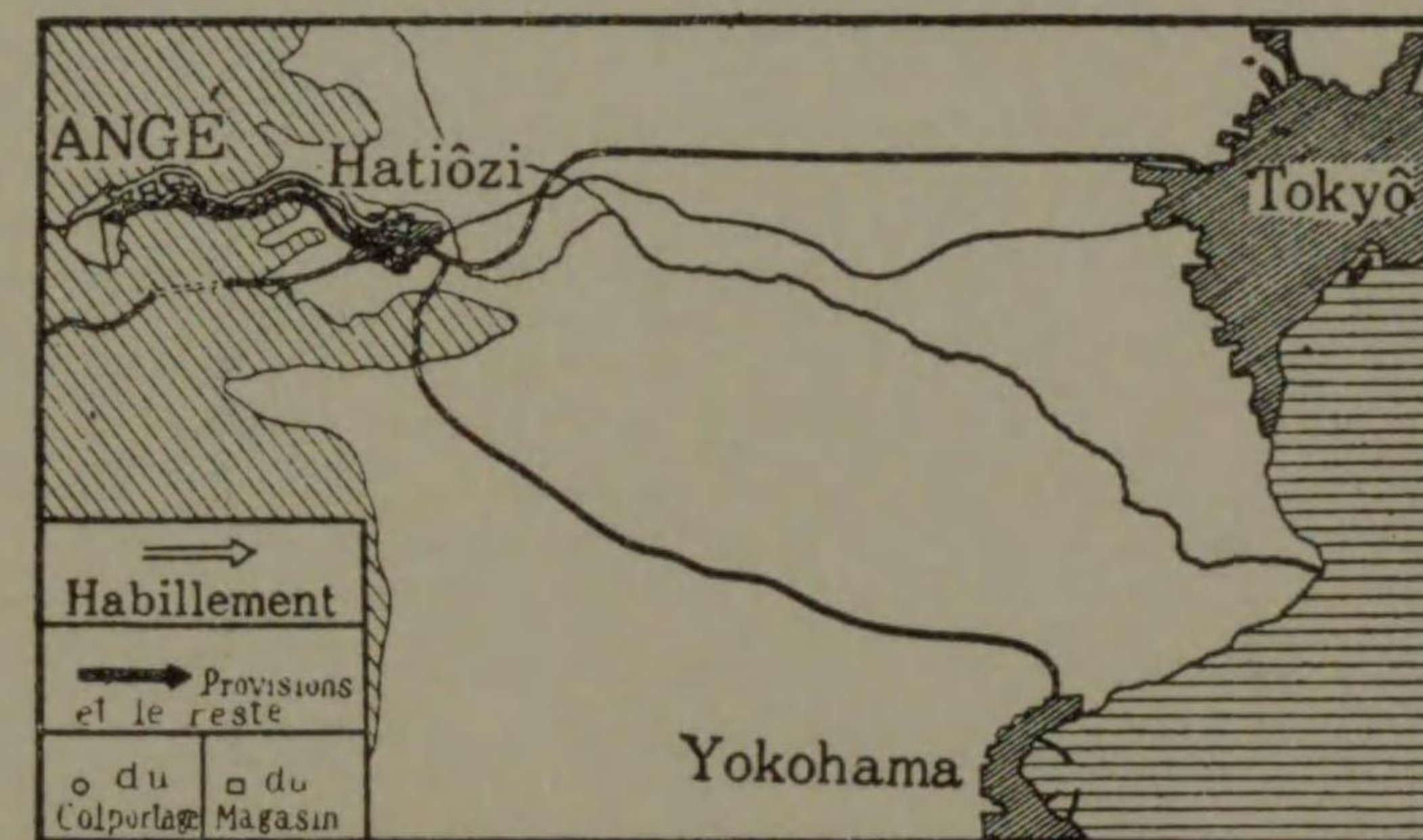
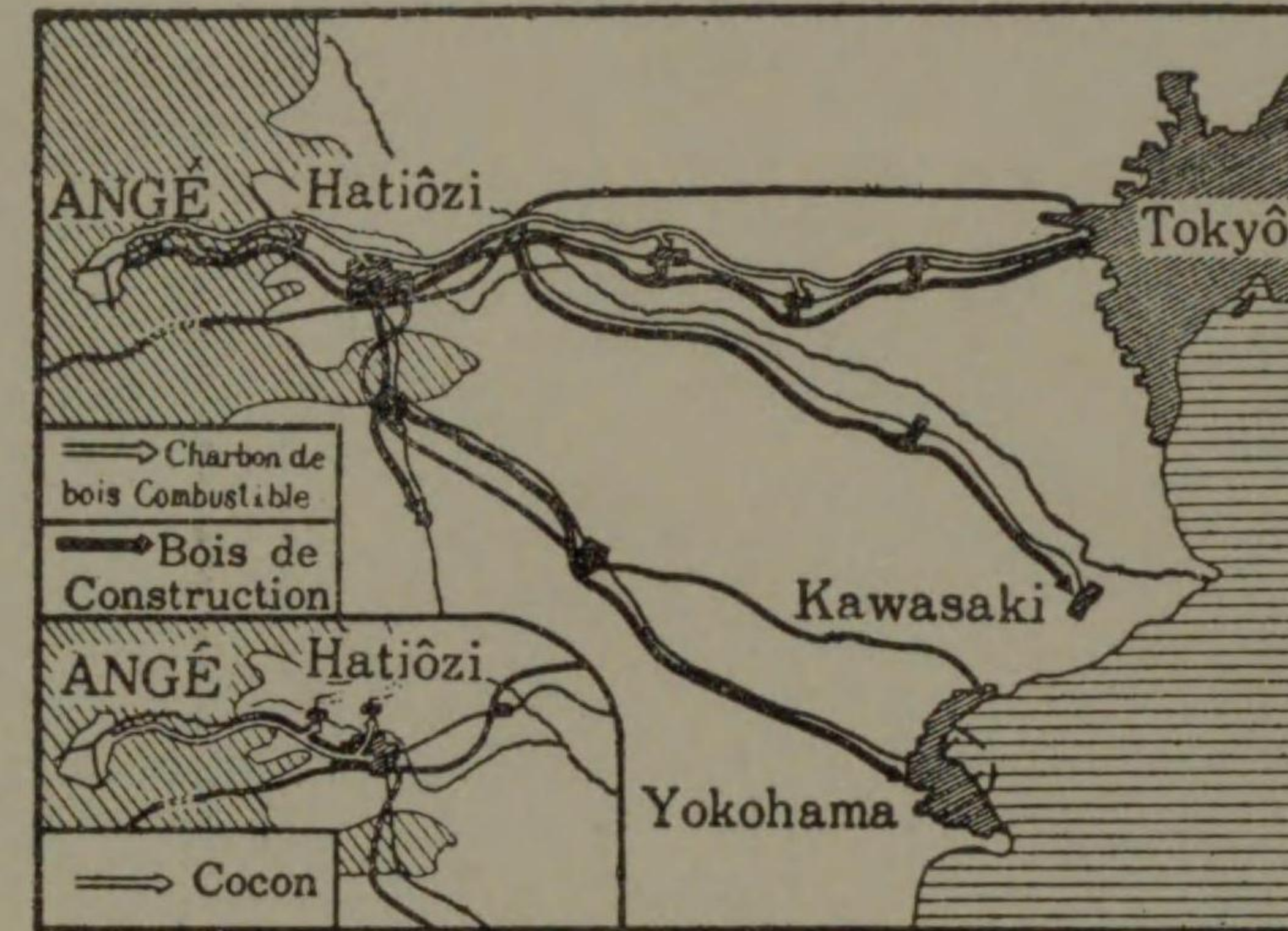
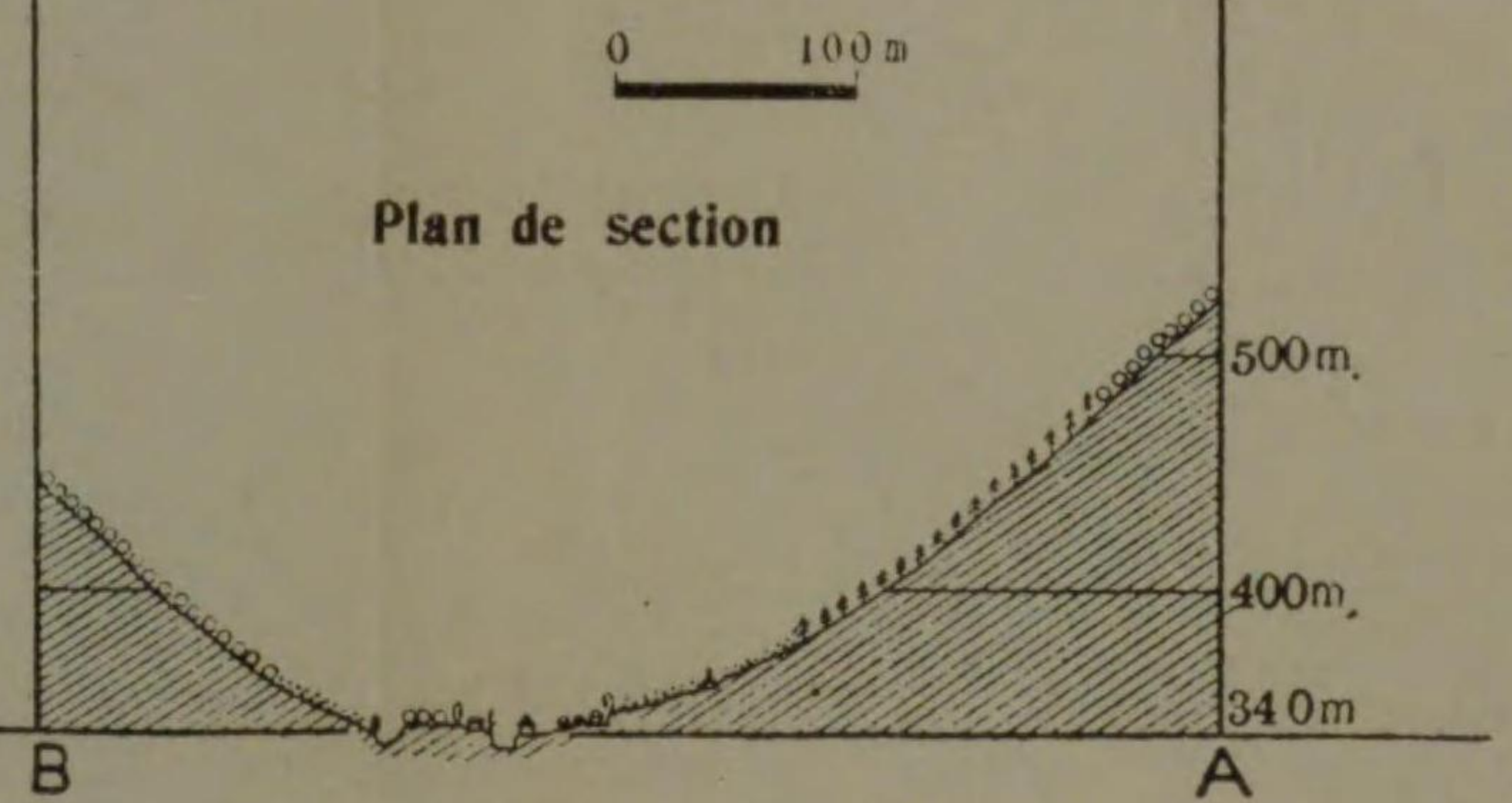
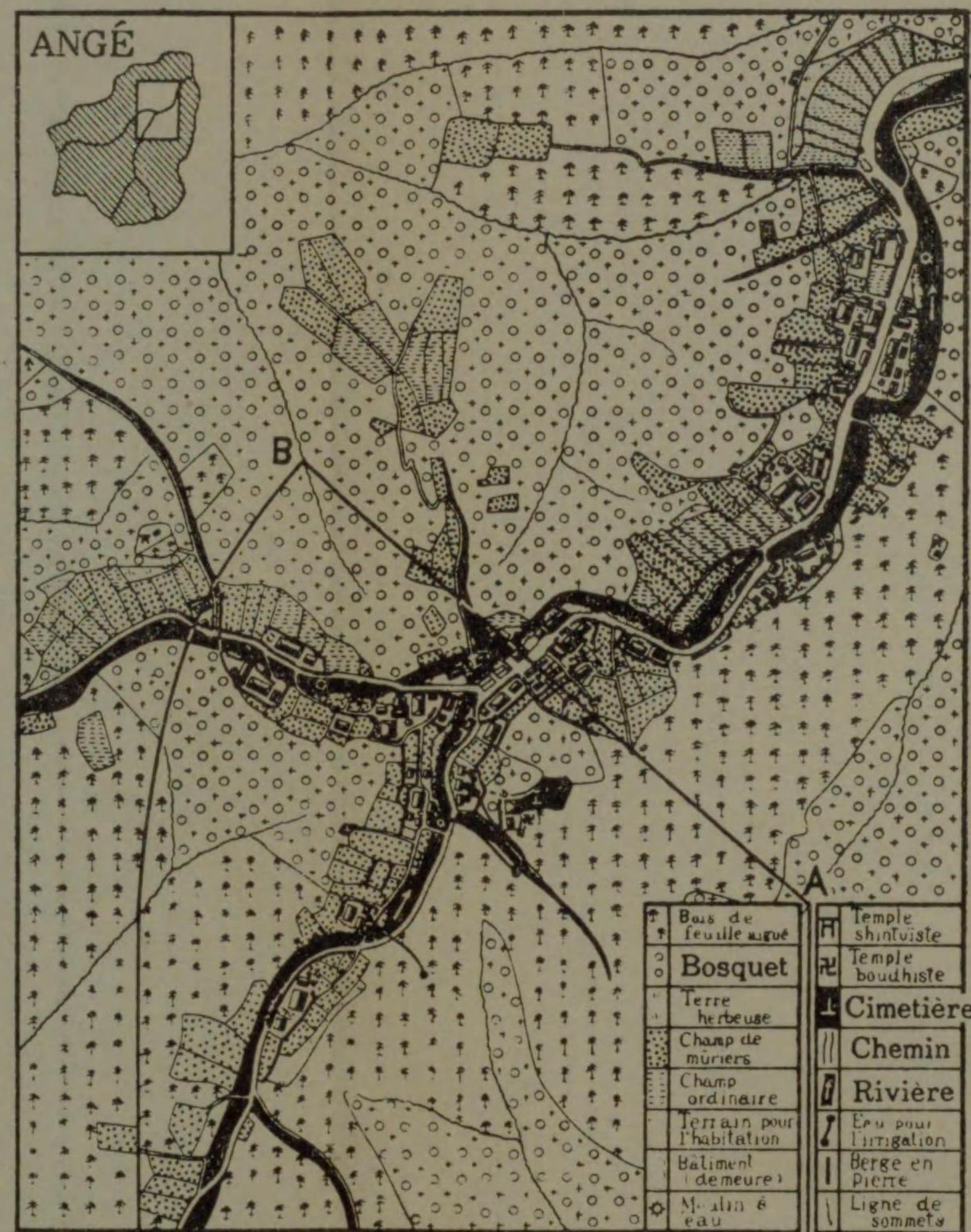
Constitution de Profession

Constitution de profession	en 1884			en 1934		
	Métier principale	Métier accessoire	accessoire et Métier	Métier principale	Métier accessoire	Métier accessoire
Agriculture	13	Métier de charbonner de bois 7 Industrie textile 2 Métier de transport 2 Travail à la tâche 1 Commerce 1	Industrie textile 2	16	Métier de charbonner de bois 1	
Métier de charbonner de bois	12	Agriculture 8 Métier de Transport 2 Travail à la tâche 2	Industrie textile 2	8	Travail à la tâche 7 Agriculture 1	
Métier de transport	12	Agriculture 7 Métier de charbonner de bois 3 Travail à la tâche 2	Industrie textile 4	4	Travail à la tâche 3	
Travail à la tâche	7	Agriculture 1		10	Agriculture 2 Métier de charbonner de bois 3	
Commerce	5	Agriculture 3 Marchand de bois de Construction 1	Industrie textile 1	5	Métier de transport 2 Travail à la tâche 1	
Industrie textile	1					
Marchand de bois de construction				3	Agriculture 3	
Totalité	50	42	9	46	23	

Distribution de force de travail par mois
On l'examine en choisissant un représentant dans chaque profession

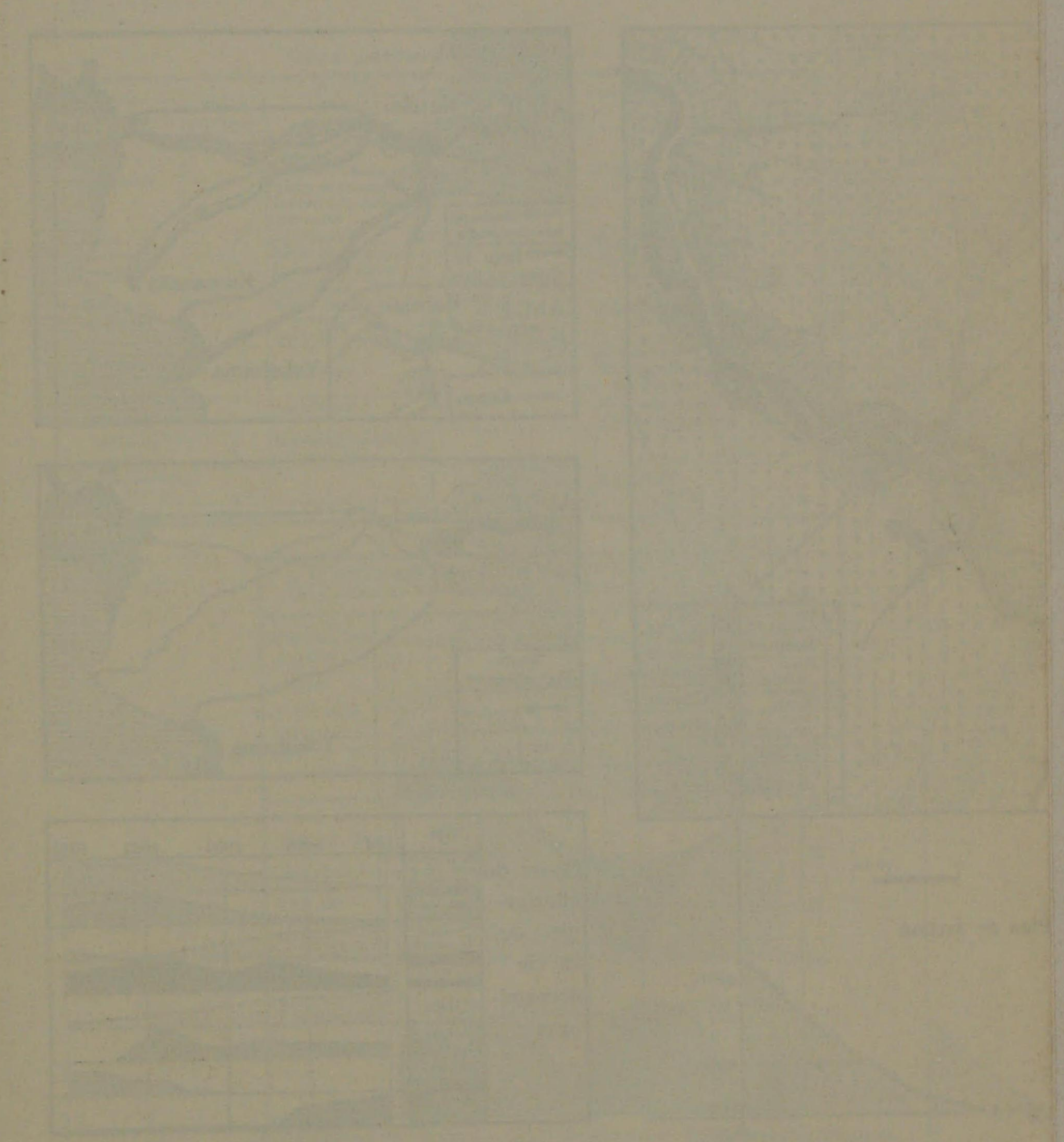
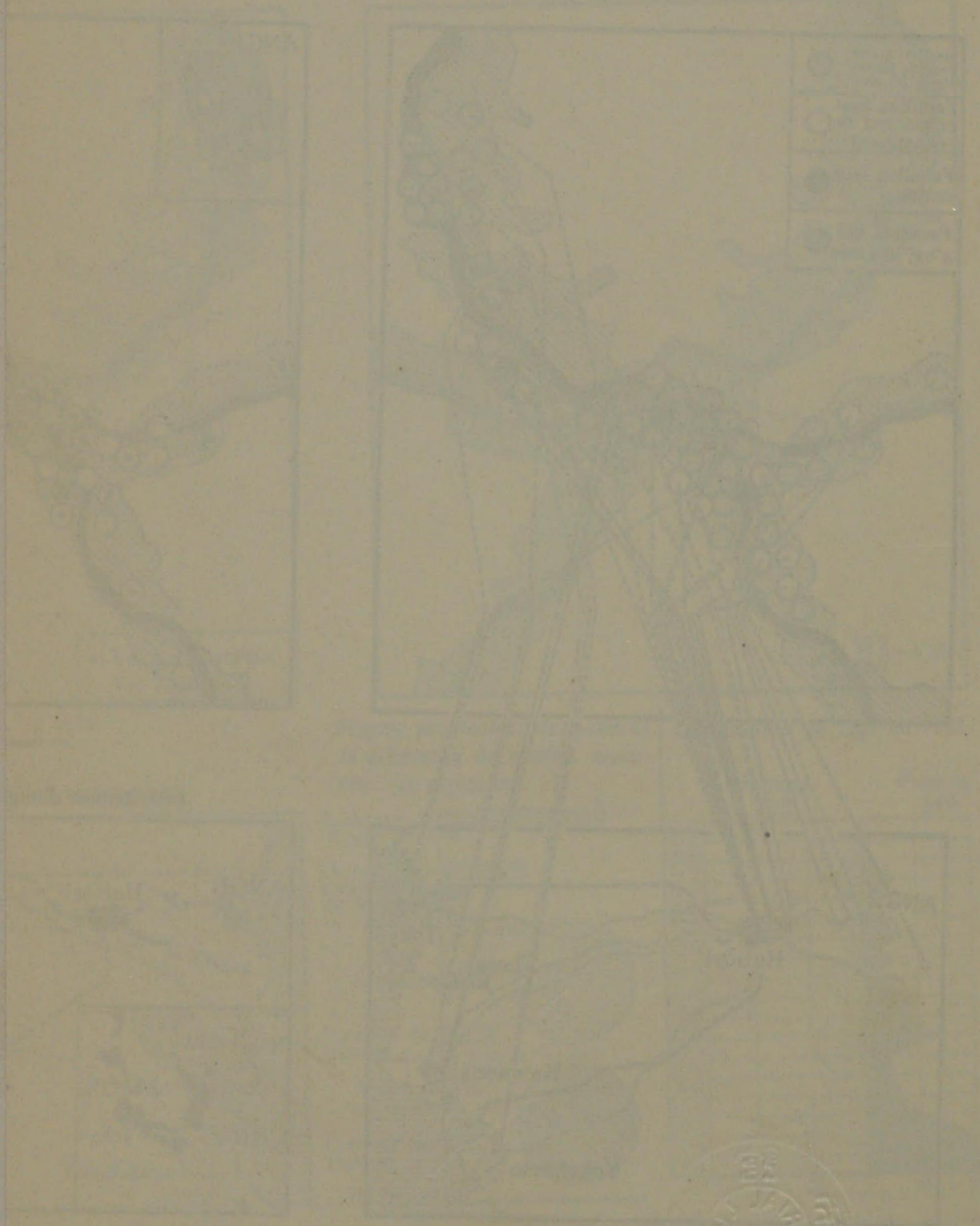


Champ de mûriers Sériculture Céréales Légumes
 Tailler broussailles Charbonner de bois Travail de forêt
 Transporter de bois Couper de bois



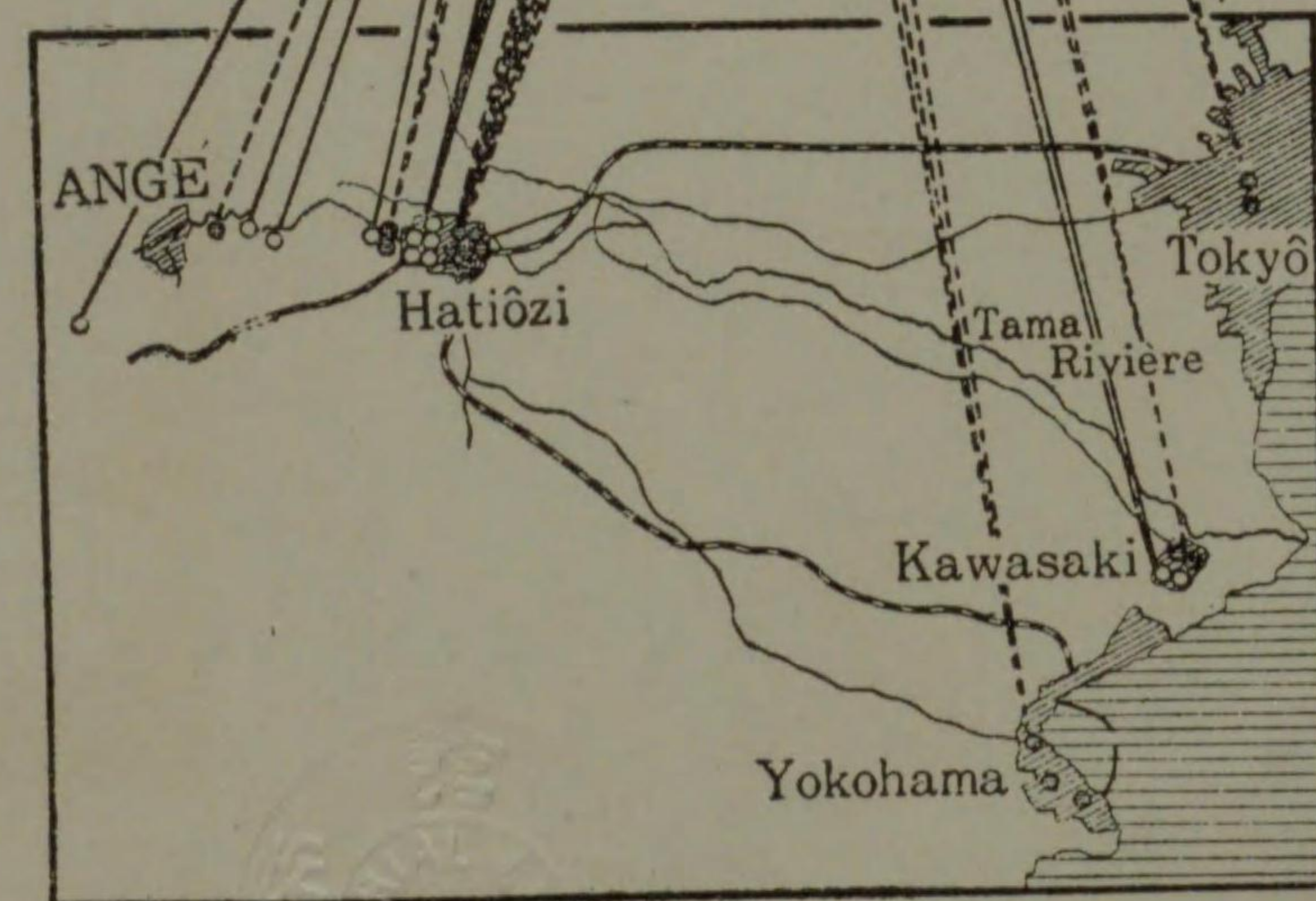
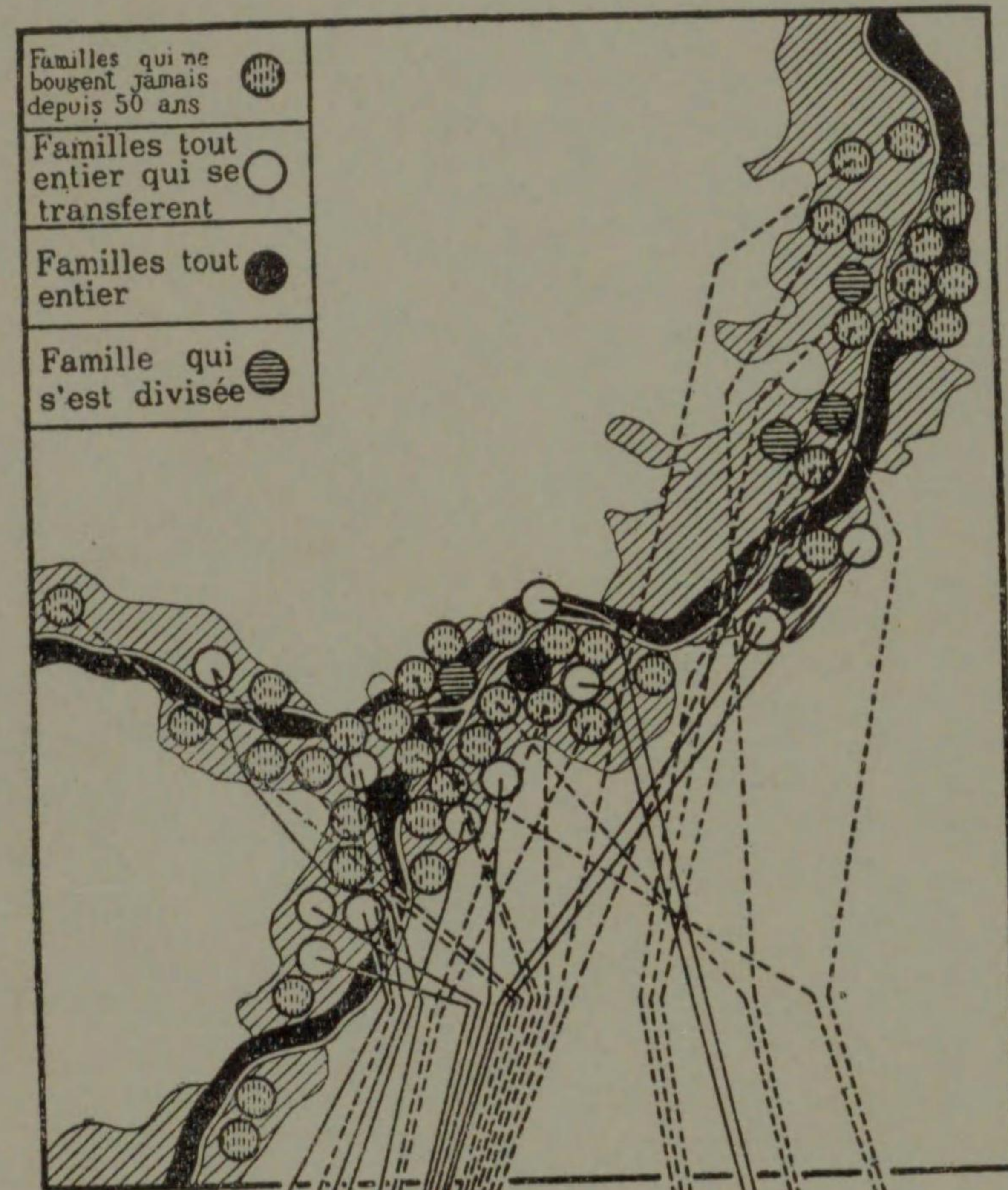
Per= Par Sylviculture= Sylviculture

III
Tribunales de Justicia en Chile 1821



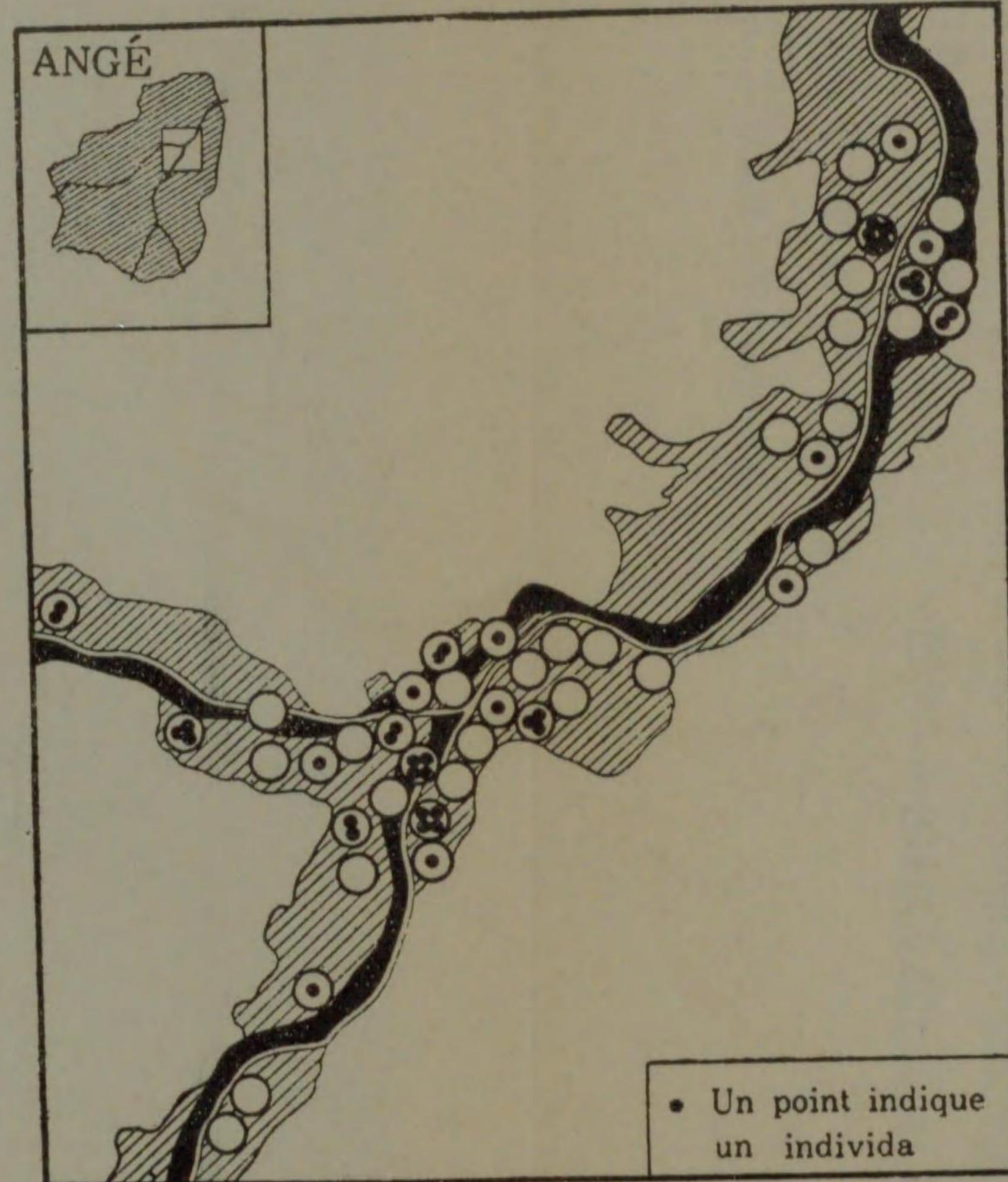
III

Trasition dans cinquante an depuis 1884

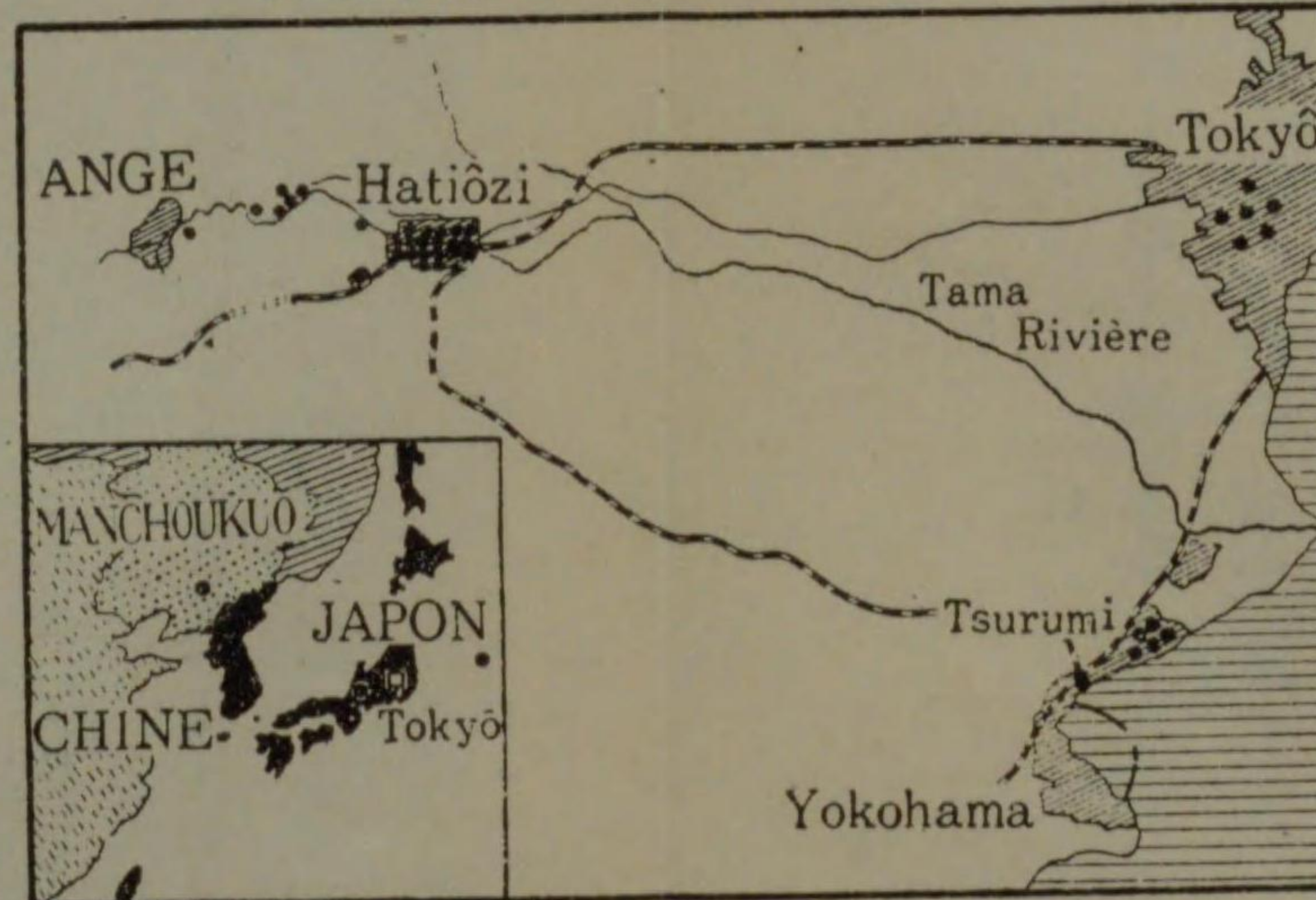


Ou va surpopulation

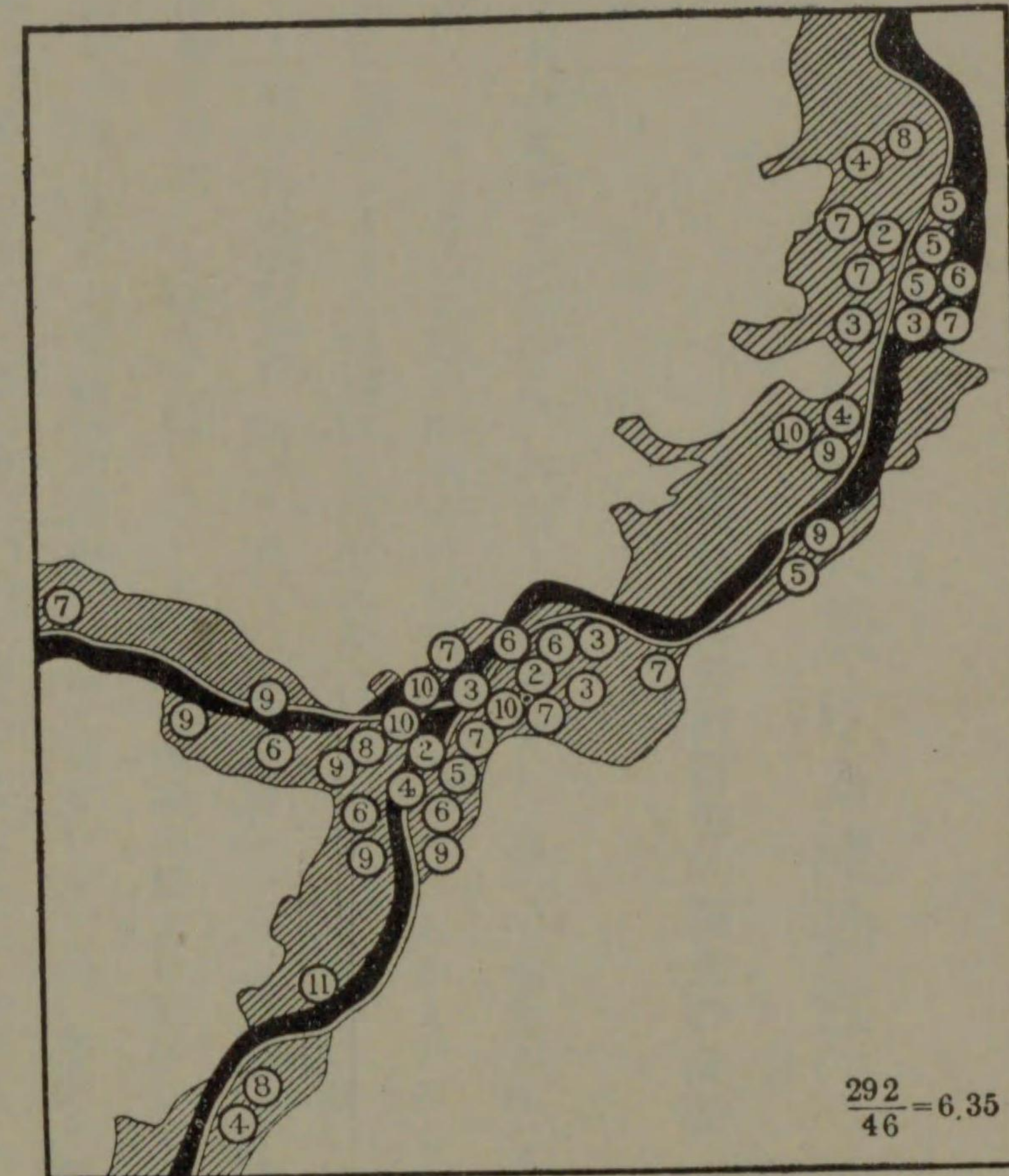
Migration temporaire dans 1 33



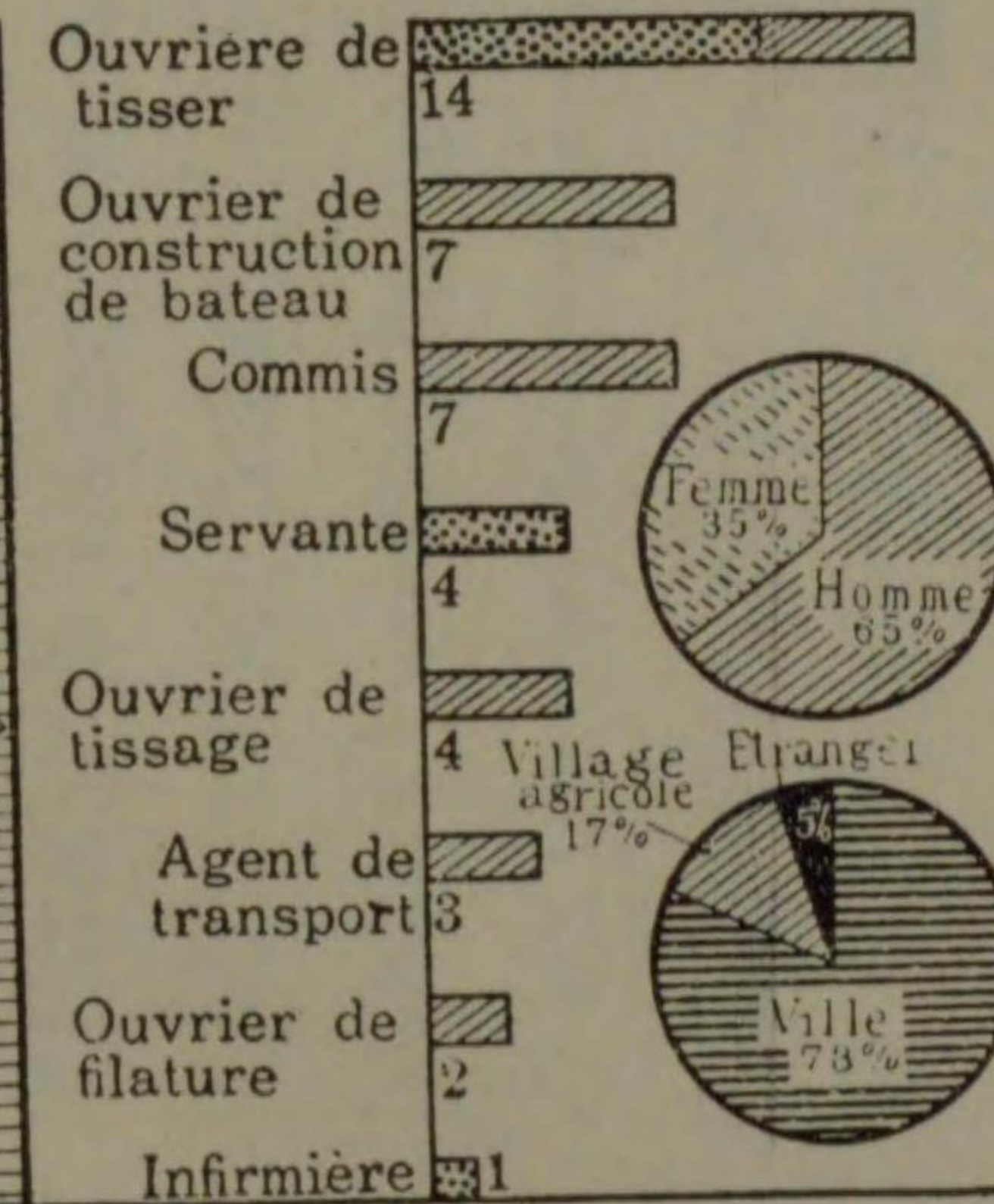
Distribution d'migrants temporaires



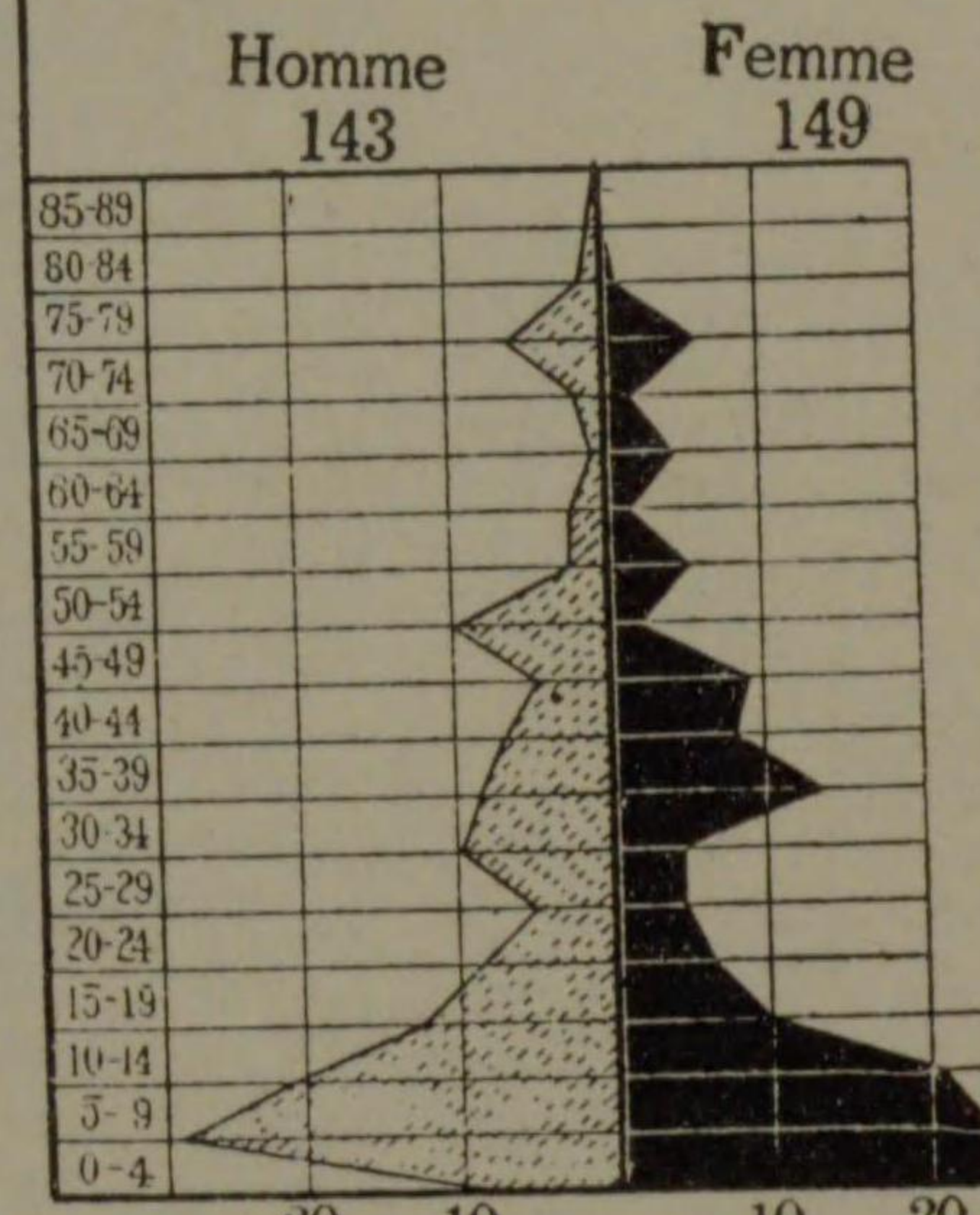
Constitution du membres de famille en 1933



Migrés provisoires du point de la différence de metier, sescuelle et regionale



Constitution de l'age en 1933



Sexuelle=Sexuelle individu=un individu

六 村落社會に於ける流動性

——農村社會の社會學的調査の必要——

こゝに村落社會といふのは、行政上の村の中に、幾つか包含されてゐる部落をその呼稱單位とする。部落はいふまでもなく、その多くは徳川時代の行政單位であつた。しかもそれらの立地的關係は、或は山間に或は山麓にまた或は平野に集團してゐる地域的集團であるばかりでなく、彼等の長い定住生活は、それらを構成する家族集團の多數をして、概ね血縁的關係を結びしめてゐる所が多いから、地域的集團であると共に血縁的集團であるものが多い。従つて信仰の對象たる社寺を同うし、また同一地域の風土に依存してゐる關係上、生産過程を同うし、所有關係による階級的構成は或は主従關係の處がない譯ではないが、長い年處を経て養はれた郷土的感情は、互に相通するものがある。故に日本の村落社會の動向を測定するには、この部落を基準とする事が最も合理的である。殊に近年農業恐慌あつて以來の農村經濟の打開の爲には、この有機的な機構を有つ部落を單位としての指導、獎勵、施設等が、著しく必要視されるに至つた。かゝる情勢を十數年前の農村對策の單位が、何れも行政上の村を基準とした時代に比ぶれば、全く隔世の感なきを得ない。

こゝに提示する郷土社會の踏查地域は、山梨縣の大部を占めてゐる甲府盆地、即ち所謂國中クニナカの東部を占めてゐる東山梨郡(四町二十ヶ村)で、有名な大菩薩峠の西側笛吹川沿岸の流域である。ふるき秩父街道は、北は雁坂峠を踰えて笛吹川の右岸に沿ひて甲府市に達してゐるし、青梅街道は北東は大菩薩峠の北部柳澤峠を過ぎ、鹽山・日下部の二町を通り、笛吹川を渡つて秩父街道に合し、徳川時代になつて開通した甲州街道は有名な笹子峠を過ぎ、勝沼町を通つて、甲府近くでこれまた秩父街道に合するやうになつてゐる。郡の大部は山地であつて、耕地の如きも畑が七割四分なるに比して、田は僅かに二割六分、全郡の畑の八割二分が桑畑であるのに徴しても、その地勢が推せらるゝであらう。のみならず、國中のうちでも古代文化は榮えた所で、古墳は勿論延喜式の式内社なども多く、養蠶の如きも夙に行はれ、従つて人口も稠密であり、殊にその位置は東京市に近く、その牽引力もまたつよく行はれる地域である。(九「小地域の人口研究」と讀圖の重要性」参照)

ある公務を以て山梨縣の調査に従事した際、一つの研究基準として、村落社會の流動性をトすべく縣内で最も流動性の多いこの郡に就て、或は踏查により或は調査票によりその傾向を測定した。本篇はその調査の一部である。

一 多様性

踏查は數日間に過ぎなかつたが、村落社會の機能は、山麓から平野にかけて、僅か三四里の距離でありながら多様性をもつてゐるのに驚かされた。これは夙に開けた地域である事が重因の一つであると思はれる。例へば式内社が三つもあるO村の如きは、五八五戸の小村であるのに、五區(五部落)に分れた部落が、それ々の氣風が異り、Y部落はまとまりがよく裕福であり、T部落は昔から乾物屋がはいらぬといはれるほど儉約である。しかし土地所有關係が一方に偏よつてゐないから、自作農創設にも意見がまとまつて積極的になり得た。はやく養蠶を營んでゐるから生活程度は高い。また隣村のK村はO村と異つて、大きな地主があり、殊にK部落は相當の地主が集まつてゐるので小作人も多く農閑期には行商に出るものが少なくないが、養蠶組合は地主が骨折つてゐる丈に大變よくいつてゐる。この部落ばかりでなく村全體で養蠶組合は一三もあり、製絲工場も各部落にある。笛吹川沿の小さな山村にK村とI村とあるが、前者は、南向の傾斜地で風通もよく桑畑が畑地の九割六分も占め、殆んど養蠶を專業としてゐるので、繭の價格が暴落したため多額の負債に悩んでゐる。I村も桑畑は八割三分もあるが、地味も風通もK村ほどよくないから、養蠶はそれほどでなく、海外への移民が多く出ており、温室でメロンをつくる人さへある。最北のM村は、養蠶もやるが繭の價格が下つてから炭焼をするものも多く、男女青年が離村するものが多い。南部には小村ながら四つの村が組合となつて一つの小學校を建てゝゐる處があるが、そのうちのW村は、全村殆んど小作人であるから、小作地は全耕地の七割一分を占めてゐる。小作爭議以來殆んど全村の小作人組合が出来てゐる小作料の滞納が多いが、生活改善、殊に住宅改善は他の村落より目ざましいほどである。

二 社會性の流動

村落社會の社會構成が、その傳統を如何に固持してゐるか、また如何にそれが動搖してゐるかの測定には最近社會學者はその研究基準として、結婚年齢及通婚地域の變化を取上げてゐる。今この郡に於ける通婚地域の變化を數個の部落に見ると、

結婚年齢 は何れの部落でも後れるやうになり、男は二十七八歳、女は二十四五歳を常とするが、最も精細な統計を得た部落を例示すると、左の如くである。

女	男		
	一四—一九歳	二〇—二四歳	二五—二九歳
	(大正一一年)	(昭和元年)	(昭和六年)
一四—一九	一八人	一三人	一四四人
二〇—二四	一六一	五七	一四四
二五—二九	一八四	一九〇	二〇五
三〇—三四	七一	六七	七〇
一四—一九	一三〇	一二三	九六
二〇—二四	二四一	二三九	二六七

二五—二九
三〇—三四

七八
二九

七七
二七

七六
二六

これは、甲州街道沿のU部落で、ほゞこの郡の標準と見て然るべきであらう。然るにこゝに異例とすべきは鹽山町に近いS部落で、報告を送つて來た百餘部落の中で、各項共最も精確な資料を記入して來た所だが、反つて結婚期が早くなつて左の數字を示してゐる。

男	昭和元年—五年
二九—三〇歳	二九—三〇
女	二五—二六

男	昭和五年—一一年
二七—二七歳	二七
女	二四

これは農業の經營が多角的になり、しかも産業組合の進展、共同作業の遂行等がこの部落の各家族集團に於ける労働力が要請されて來たためではなからうか。現にこの部落に於ての青年會は二十八年の歴史を有し、すべての事業が組織的に行はれ、青年の如きも一般に労働日誌を記入してゐるほどの勤勞さである。

通婚地域 は、何れの部落でも徳川時代から明治の初期にかけては固定してゐたが、最近は女子が都市への出稼また向都心の激化によつて、村落社會に於ける結婚率少なき結果、その通婚地域は擴大されるやうになつた。女子は都市から更に進んで満洲などにゆくものさへある。

以上 結婚期の年齢を詳報して來たU部落の左の報告は、一般の傾向をトし得るであらう。昔は交通機關が不備であつたから、他郷に嫁にゆくのを非常に心配したが、近年は距離はあまり問題にされなくなつた。また昔は親達は家柄だの財産だのを重んずる傾向があつたが、今日は結婚する本人達は、自から人物本位に相手を選ぶやうな傾向になり、結婚も本人達の意見が尊重されるやうになつた。殊に近年は經濟界も思想界も急變して來たから、結婚問題に就いても傾向が變つて本人達の意志が尊重されて來た。

郷土觀念の動向の如きも、また社會性の流動を測定するに重要なものであるが、結婚年齢及通婚地域の變化のやうに、これを數量的に表現する事は困難である。故にこゝには各部落の報告を綜合して、靜的より動的への方向を示唆するの外はない。即ち自覺の乏しい部落に於ては、因襲的な黨派的な觀念が強く、それが普通には傳統的な傾向のみを示してゐるが、更らに政黨の影響を受けて一層深化してゐる所が少なくはない。しかし前に引用したU部落の報告には、

戸數に於ても南北に分れてをり、また家屋が集團的に存在してをらずに分散してゐるから、昔はあまり交際も頻繁でなく、爲に区内に何か衝突するやうな事件があると、感情の行違が生じ、事々に南北二區が別々に仕事をすゝる傾向があり、南區はすべて穩健であるのに北區はこれと反對の傾向があつた。しかし各種團體の構成により交際の近接は、南北二區の對立する傾向を薄くするやうになつた。また一方には交通機關の發達は、我が郷土と他

の郷土との交通を自由にし、従つて自からの部落を思慕する心は、昔ほど濃厚でなくなつたやうに思はれる。それには海外への發展觀念なども一因となつてゐると思ふ。

この郷土觀念の動向に就いては、部落によつて相當な差異があるから、如何にこれを醇化してゆくべきかを究明する事は、農村に社會教育を施す上に重要な問題であるばかりでなく、農村の社會事業を遂行してゆく上にも、その準備工作として、村落社會の實體を把握して、それに應病投藥する事が考へられなければならない。言葉を換へていへば、農村の社會事業は、かくすべきでありとする理念を遂行するに先だつて、夫々の特異性に即した社會性、しかもそれが如何に流動しつゝあるかの現實把握が、先行の問題とせられなければならない。それへの方法としては、學術的調査方法が行政的官府的調査方法を基礎附けなければならない。

三 人口流動に基く保健問題

山梨縣が、その地勢と産業との相關に基く人口過剰の必然性から、また東京・横濱の二大都市に近接してゐる地域性から、人口流動が著しく、最近の調査によれば、山梨縣の本籍人の約四分一は縣外に流出してをるし、更にこれを増加人口（一九二〇—一九三〇年）に就いて見れば、その約七割が流出してゐる。之を東山梨郡の諸部落に於ける青年の離村傾向に就ての報告に見るに、

K部落 七十戸の山村で、その氣候は奥羽地方にも近く、自作が多く小作の少ない所、青年(男)の在郷者四十四に對して十九の離村者を出してゐる。

O部落 百三十七戸の山間の小さな集團村、自作と自小作と合せて小作と同數で、外に日雇もある所、青年(男)の在郷者六十二に對して十七の離村者を出してゐる。

M部落 四十戸の山村で、しかも中央線初鹿野驛に近い所、大部は自小作であるが、在郷青年(男)十七に對して十九の離村者を出してゐる。

K部落 百四戸の山麓村で勝沼驛に近い所、自作と自小作合せて六十一戸であるのに小作は四十戸、青年(男)の在郷者四十四名に對して離村者は四十五名に達し、うち長男の離村者九名に達してゐる。

S部落 九十六戸の平野村で、鹽山町に近く青梅街道に沿ふてゐる。自作と小作と合せて二十五戸であるのに、自小作は六十五戸に達してゐる。在郷青年(男)六十一名に對し、離村者は五十二名であり、その中長男は十八名で、その過半は自小作農の出身である。

これらの離村者一々に就き、本人の年齢、戸主の職業、離村の年月、離村當時の教育程度、離村先の職業等を詳述する事を得ないのを遺憾とするが、農村青年の離村の傾向は豫想以上に著しきものがある。のみならず、女子青年の離村もまたこれに準じてゐる。これらの離村は、之を大量的に觀察すれば、農業技術の合理化からするものも

あるであらうが、社會事業的見地からすれば、それらに對する家族的救済が、今日より一層徹底するに於ては、より多くの在郷青年を定着せしめ得る問題も考へられるし、過剰人口の所理の見地即ち社會政策的見地からすれば、それらに對する職業指導が今日より一層徹底すべき必要も、また問題になつて來るのである。

次に問題とさるべきは、これらの人口流出、殊に青年の流動が、再び郷土に歸り來つた時の保健の影響である。これに就いては、最近十年間の死亡率並に罹病傾向の報告を求めたが、報告提示の期間が、折悪しく養蠶の上簇期であつた爲、數量的の報告に接する事を得なかつた。それにしても歸村者の死亡率が、多く肺病と記入されるものゝ多いのを見て、その豫想的の中してゐるのに驚かされた。最近農村への社會政策の實施方法として、醫療機關が重要なテーマとなつてゐるが、如何にこれを遂行すべきかに就いても、これまた學術的調査方法が行はれた上での立案が望ましい。

四 農村社會の社會學的調査の必要

我が國の農村の研究調査は、從來、行政系統の所屬の關係上、農林省(その前身農商務省時代からそれが行はれ、筆者の如きも、十數年前、囑託として農村調査のモデルとしての茨城縣猿島郡長田村を約五十日間調査した事があった)・農會等に於て行はれ、その研究範疇の關係上、農學部所屬の學者によつてそれが指導された。殊に經濟更生

部の創設以來、一層農山漁村の經濟的調査研究が遂行される事になった。勿論今日の農山漁村の緊急な問題は、その經濟的救済が焦眉となつてゐるから、それらに就きての調査研究が必要であるとしても、村落社會生活の傳統は經濟的調査を必要とすると共に、なほその社會的考察をも必要とする。従つてそれらの研究調査を基礎としての對策が講ぜらるべき問題は、相當にあるべき筈である。たゞ行政系統の所屬の關係からすると、内務行政系統に於ては、從來農山漁村への對策の行政を一轄した獨立の課がなく、また整備した調査機關も少ない。(社會局の中には農政に造詣深かつた故丹羽長官時代に、庶務課の中に調査係が創設され、その調査が着々發表されて行政上の資料にはなつてゐる)。たゞ村落社會を研究範疇とする社會學關係に於て、近年少壯學徒によつて、その研究業績が發表されるやうになつては來たが、これを農學部關係の研究に比すれば、極めて寥々たるを免れないのは、農政が夙に農村の科學的研究調査を學者に要請したのに比して、社會政策乃至社會事業が、農村社會の科學的調査研究を關係學者に要請しなかつた事も、重要な一因をなしてゐるものと信じてゐる。

かゝる見解からすると、農村社會政策も、また農村社會事業も、それへの施設をなすがための指導と獎勵には、何等かの形態と機能に於て、農村社會の社會學的調査が遂行されなければならないと信ずる。一昨年創刊された『農村研究』に於ける池田學士の「農村社會學とは何か」といふ論文は、この點に就いて示唆するものが多く、その中に掲げた農村社會學的調査の基本項目(農村社會調査)は、

一、環境調査 二、諸集團調査 三、社會事情調査

の三部門から成つてをり、殊に、最後の社會事情調査に於て、最後に社會運動を擧げまた附録として左の五項

- 一、村民主として農民と非農業者との關係
- 二、村民主として農民と都市勞働者との關係
- 三、農村生活に對する工業化の影響
- 四、村民の農業其他生活一般に對する關心
- 五、村民人口移動の原因・數量・性質等(農村社會の内的規定要件として)

を擧げてゐるのは、筆者の主張する農村社會學的調査の必要に合致するものである。

社會政策並に社會事業の遂行への基本としての農村社會の社會學的調査は、從來農學者によつてなされたるものまた社會學者によつてなされたものはあるが、一步進んで若き農學—社會學徒の手によつて、それが打ち建てられなければならない。それには、農村省及農會が、農學者に要請したやうに、内務省は農村社會學者に要請する所あつて然るべきであり、それには何等かの調査研究施設が必要であると考へる。

(註) この小篇は、約二ヶ年前の立論であるが、その後支那事變が勃發し、これと聯關して厚生省が新設され、農村に對しての社會施設は、行政的に著しく遂行されるやうになつた。従つてその基本的な調査研究もまた附帶的に起りつゝあるのである

が、この論旨は一層必要になるのであるから、特に加除する事はしなかつた。小論の中に紹介した池田學士は、その論考をまとめて、最近『農村社會學研究』を公にされたが、その第三篇に於て、農村社會誌學としての農村社會的學調査の指針と研究を示してゐる。即ちその研究として、(一)生計狀況並に地方的中心地への距離の農村生活に對する關係、(二)農村生活の社會學的調査を報告してゐる。(一)に就ては、その生計狀況は經濟的要件のみがその生計を支配的に規定するものではなく、地方的中心地への距離的關係が多分に經濟的要件による規定を制約乃至阻止する傾向ありとなし、これに對しての社會施設乃至教育施設は、農民の要求を效果的にするために、地方都會中心主義を排して享受度の最も高い部落中心主義に移行すべしとする理論的根拠を主張してゐる。即ち政策單位として部落中心説を主張してゐる。また(二)に就ては、農村問題が今日經濟問題の域を脱して、所謂社會學的立場を必要とする問題として出現した以上、説明も對策も經濟學の理論にのみその解決を委ねないのは當然であるとし、農村の依存する諸集團と、農民にその構成の基礎をおく農村協同體をその研究の對象となすべきであるとなし、それらの農村集團の構成上の合理的運営に就き、合理的構成としての隣保圈の必要を主張してゐる。最近、地方制度調査會に於ける農村自治體振興の單位として部落が考へられてゐるやうであるが、それを合理的構成たらしむるには、學術的にも、また實證的にも検討されてこそ、始めて法認の實績が擧げられる。

地方人口

七 中部日本の人口移動の地域的考察

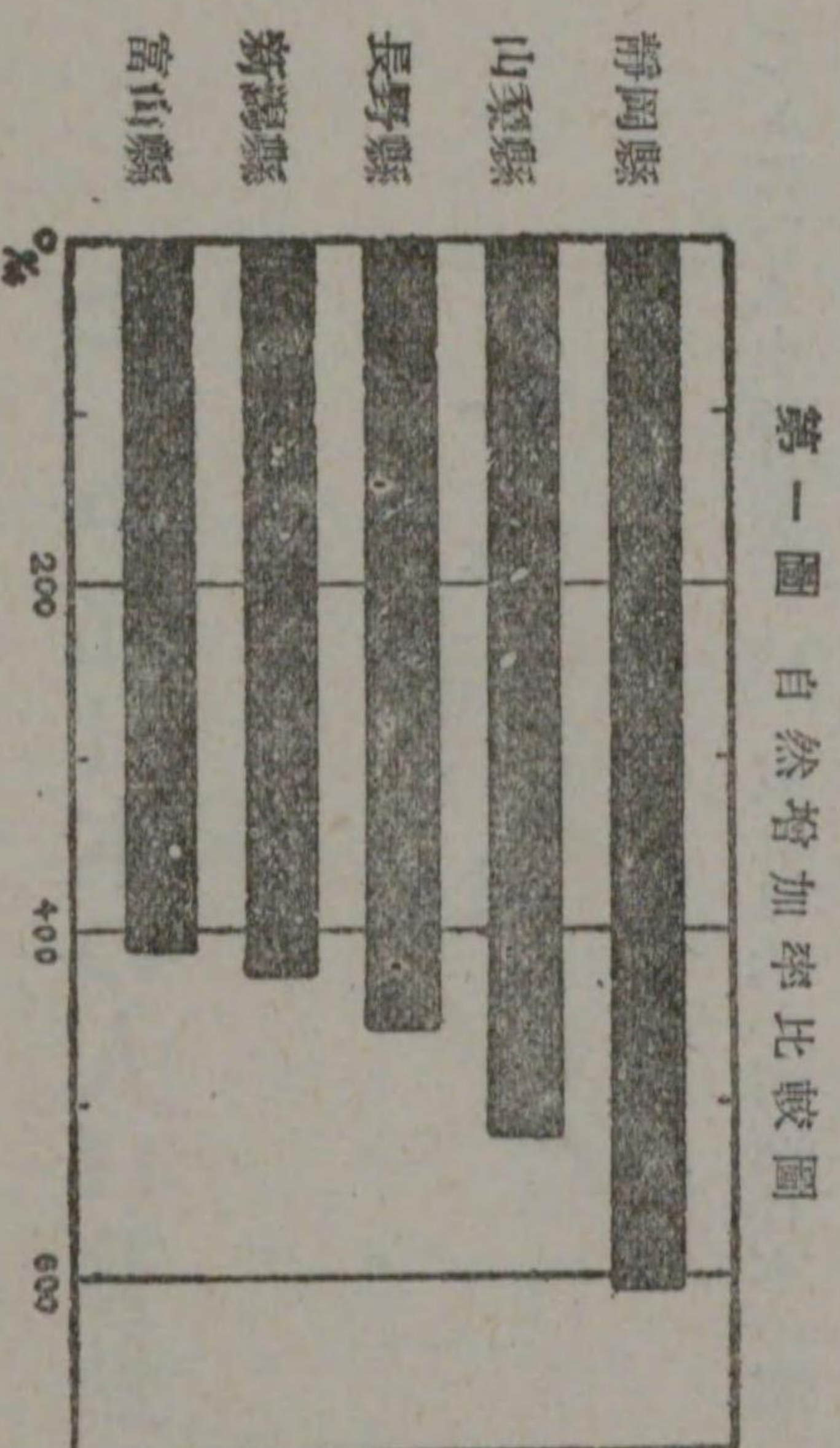
一 序 言

ここにいふ中部日本とは、東北日本と西南日本の間介在する中部の大地域の中で、中央部には、高原盆地を挟む高峻な山嶽地域を中心とし、北は日本海岸、南は太平洋岸に傾斜する一大地域を意味し、これを行政区劃に従へば、新潟・富山・長野・山梨・静岡五縣に包括されてゐる地域を呼稱する。本篇は、この地域の人口現象中、殊に人口移動の特質を縣單位に比較研究した過程の要約である。これら五縣の人口移動の特質の究明は、人口の自然増加、現住人口の増加と移住人口との關係の研究を前提とする必要があるから、本篇にはこれらの研究から始め、終りに人口移動の經濟的解釋に及んでゐる。なほ、これらの地域的特質を鮮明にするには、更らに郡別に考察する事によつて、それが實證される。それに就ては山梨縣を例示した。

二 人口の自然増加と現住人口の増加の傾向

一 自然増加と出生並死亡との関係

先づ自然増加に就いて検討するに、それが三十年間（一九〇〇年—一九三〇年）に現はれた傾向は、五縣中静岡縣その率最も高く六〇・七・二％、山梨縣これに次ぎ五一・七・九％を占めてゐる。五縣中その率の最も低い富山縣は四一・一・三％で、最高の静岡縣に比べると六割八分に當つてゐる。新潟・長野の二縣は、それぞれ四五・五％、



第一圖 五縣の自然増加率比較圖

四二・四・四％を示してゐる。（第一圖自然増加率比較圖参照）
更らにこの三十年間を、五年毎を一期として期別に考察すれば、多少の差異はあるとしても、大體に於て三十年間に於けるそれと略同様の傾向を示してゐる。（第一表自然増加率・出生率並死亡率表参照）

次にこの自然増加の直接原因をなす出生率並死亡率から見ると、概して出生率・死亡率共に高位を占むる富山

第一表 自然増加率・出生率並死亡率表（總人口1000に付）

期 間	新 潟 縣		富 山 縣		長 野 縣		山 梨 縣		静 岡 縣	
	自然増加	出生	自然増加	出生	自然増加	出生	自然増加	出生	自然増加	出生
第一期 1900—5年	56.6	171.0	70.5	184.8	65.4	166.2	65.6	167.3	77.5	181.4
第二期 1905—10年	73.7	183.0	76.1	189.4	58.5	163.4	75.3	176.3	76.4	182.4
第三期 1910—15年	75.1	191.0	84.1	204.3	70.3	174.4	84.3	182.9	91.9	194.3
第四期 1915—20年	47.7	172.2	45.7	177.2	50.4	168.1	69.2	179.6	71.6	181.9
第五期 1920—25年	70.8	194.4	64.4	204.4	67.9	160.1	80.5	186.2	89.2	198.4
第六期 1925—30年	80.6	189.3	68.9	191.8	78.9	169.5	82.5	175.6	95.2	192.3

註 期間の區別に就ては後節参照 縣統計及帝國統計年鑑に據る

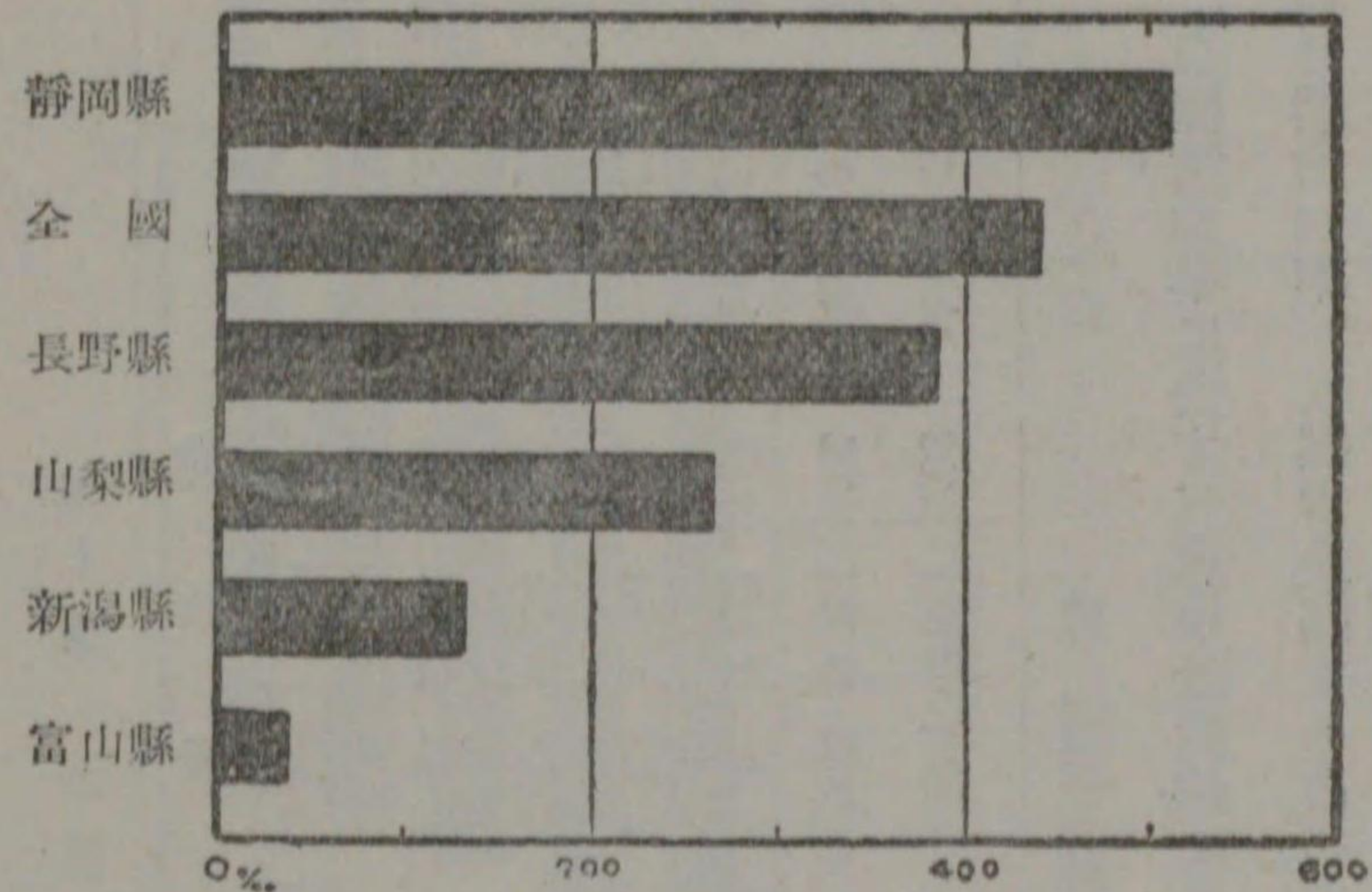
縣が、自然増加率に於て五縣中最低位にあるのは、死亡率が出生率に比して極めて高い結果である。これに反し静岡縣の自然増加率が五縣中最高位を占めてゐるのは、出生率に比し死亡率が極めて低い結果に歸せられる。長野縣は出生率・死亡率共に比較的低く、山梨縣も亦出生率は比較的低い、死亡率が著しく低い結果、寧ろ自然増加率を高からしめてゐる。新潟縣は出生率に比して死亡率比較的高いから、自然増加率は五縣の中位にある。

之を要するに死亡率の傾向は、五縣中富山縣最悪の状態を示し、静岡・山梨の二縣は良好なる状態にあるものと

二 人口の自然増加と現住人口の増加の傾向

云ひ得やう。富山縣に於ける死亡率をかく高からしめてゐる諸原因については、風土上・社會經濟上、詳細なる調査を俟つて明かにすべきであるが、人口現象夫れ自體から見ると、乳幼児の死亡率の極めて高きことも亦その一重因と見得るのである。

第二圖 現住人口増加率比較圖



第二表 現住人口増加率表

縣 名	現 住 人 口		増加實數	増加率
	1900年	1930年		
全 國	44,739,932	64,450,005	19,739,932	441.5
新潟縣	1,710,215	1,933,326	223,111	130.5
富山縣	749,536	778,953	29,417	39.1
長野縣	1,241,515	1,717,118	475,603	383.1
山梨縣	498,938	631,042	132,014	264.6
静岡県	1,187,941	1,797,805	609,864	513.4

註 縣統計及帝國統計年鑑に據る

二 現住人口の増加傾向

更らに現住人口の増加傾向を見るに、五縣中静岡県は最高率を示して五・一三・四%を占め、第二位を占むる長野縣は、これより遙かに低く三八・一%に過ぎない。最低位にあるのは富山縣で、僅かに三九・一%の増加率を示し、新潟縣も

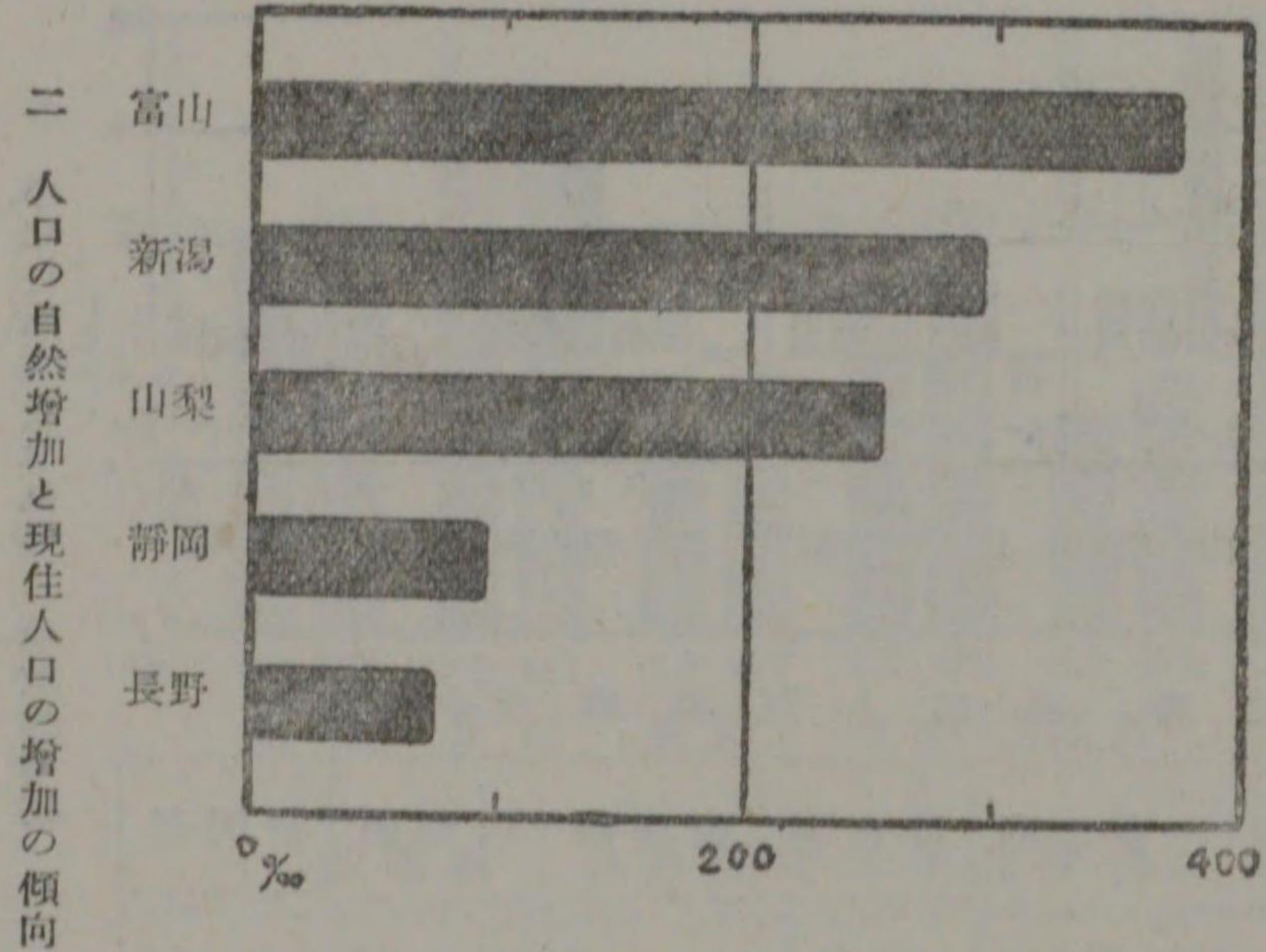
亦その率低く一三〇・五%、山梨縣は二六四・六%である。かゝる現住人口増加の地域的差異はさきに考察した如く自然増加によつて多少の影響を受くることは勿論ではあるが、その主因は移出入人口の増減に歸せられることは、前掲の自然増加に比して現住人口の地域的差異の極めて大なることによつて知られる。(第二表現住人口増加率表参照)

三 移出入人口の超過傾向

現住人口の増加の主因たる移出入の超過は、自然増加と現住人口の較差によつて知ることを得るが、一般に自然増加の傾向は、現住人口の増加の傾向よりも高率であつて、その較差に現はる、移出入の傾向は概して移出超過を示してゐる。

三十年間(一九〇〇年—一九三〇年)に於ける移出超過の現住人口に對する比率、即ち移出超過率は、現住人口増加の最も低かつた富山縣に於て、五縣中の最高位三七・一%を示し、新潟縣これに次いで二九三・九%、山梨縣はこれより僅かに低く二五三・二%を占めてゐる。移出超過率の最も低いのは長野縣で、僅

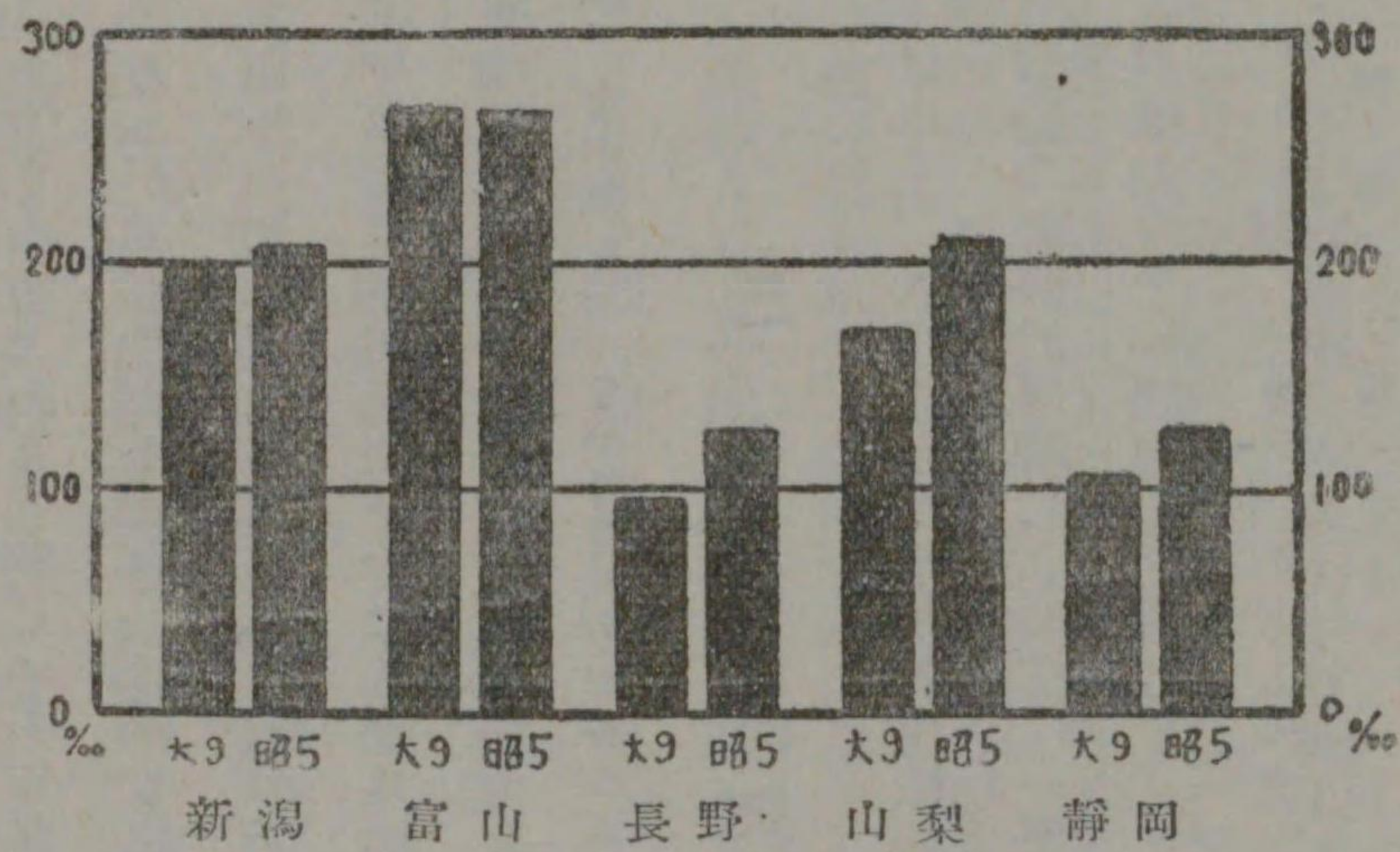
第三圖 移出入超過率比較圖—全期



二 人口の自然増加と現住人口の増加の傾向

二 人口の自然増加と現住人口の増加の傾向

第五圖 縣外現在者率比較圖



第四表 縣外現在者率比較表

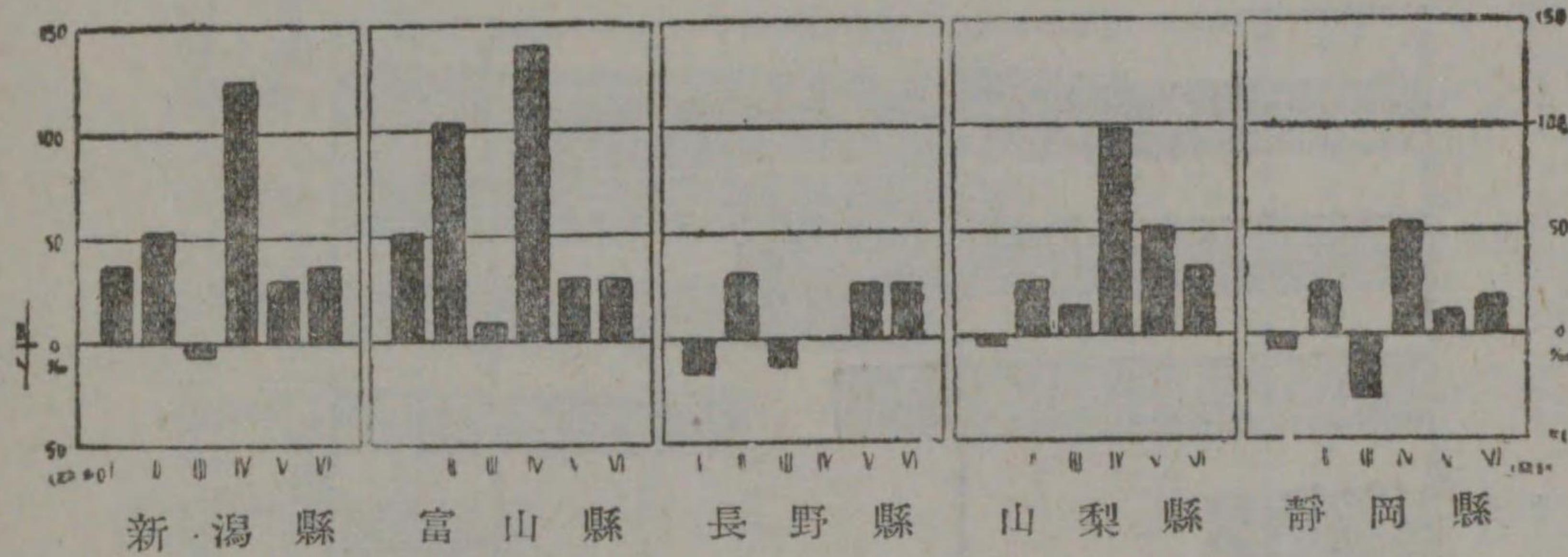
縣名	1920年	1930年	増減	(+) (-)
新潟縣	199.8	207.2	(+)	7.4
富山縣	268.2	265.6	(-)	2.6
長野縣	93.9	123.0	(+)	29.1
山梨縣	169.9	209.2	(+)	39.3
静岡縣	105.7	125.6	(+)	19.9

註 縣統計及帝國統計年鑑に據る

次に最近二回の國勢調査（一九二〇年——一九三〇年）によつて縣外移動（縣出生者の縣外現在者）の傾向を見るに、一九二〇年に於ては、富山縣は五縣の最高位を占め、縣出生者 二六八・二％は、縣外に現在し、新潟縣これに次ぎ一九九・八％である。その率の最も少ないのは長野縣で、僅かに九三・九％、静岡縣はこれに次ぎ一〇五・七％、山梨縣は五縣の中位にあつて一

五％長野縣も亦一五九・〇％の移出超過を示してゐる。山梨縣の移出超過は五縣の中位にあり四八・九〇％である。（第三表移出超過率表参照）

第四圖 移出入超過率比較圖——各期別



第三表 移出入超過率表（千分率）

期 間	新潟縣	富山縣	長野縣	山梨縣	静岡縣
第一期 1900—05年	36.9	51.2	△ 10.7	△ 4.5	△ 6.7
第二期 1905—10年	53.6	102.9	30.4	25.7	25.0
第三期 1910—15年	△ 6.7	9.8	△ 13.8	14.6	△ 31.5
第四期 1915—20年	124.6	139.0	0.9	97.7	53.1
第五期 1920—25年	29.6	29.9	25.3	51.0	11.3
第六期 1925—30年	35.4	29.2	25.0	32.0	19.5
平均 1900—30年	293.9	372.1	72.4	253.2	93.8

註 △印は移入超過その他は移出超過、縣統計及帝國統計年鑑に據る

かに七二・四％、静岡縣も亦九三・八％の低率を示してゐる。この移出超過が自然増加に對しての比率は、富山縣は最高位を占め、その比率が自然増加の九〇・六％に達してゐるのは、僅かに自然増加の一割にも足らぬ人口を縣内に止めてゐるに過ぎないことを示すものである。新潟縣は富山縣に次ぎ六九・二六％で、これ亦同じく自然増加の約三割を縣内に止めてゐるに過ぎない。五縣中その率の最も低い静岡縣は、僅かに一五四・

七 中部日本の人口移動の地域的考察

六九・一%を占めてゐる。然るに十年後の一九三〇年に於ける縣外移動率の順位は、一九二〇年に於ける傾向と略同様であるが、五縣の十年間に於ける移動率の増減傾向には著しい差異を示してゐる。それは大體に於て曩に移出超過の高かつた地に低く、移出超過の低かつた地に高い。即ち移出超過の最高率なる富山縣に於ては却つてその率の低下を示し、新潟縣は僅少なる縣外移出率の増加を示してゐる。これに反し、移出超過の低かつた長野・静岡・山梨三縣は増加を示し殊に山梨縣に於て著しい。第四表縣外(在者率比較表参照)

(註) 富山縣に於ける縣外現在數の多きことは、賣藥業の行商相當數を占むるであらうことが考へられる。

三 人口移動の經濟的解釋

我々は以上、人口の自然増加と現住人口の増加の傾向から、進んで移動傾向の地域的差異を明かにしたが、更に人口移動の經濟的解釋によつて、一層その地域的意義を究めやうと思ふ。その方法は種々あるであらうが、こゝには人口移動率を時間的に比較して、その經濟的解釋を試みやうと思ふ。

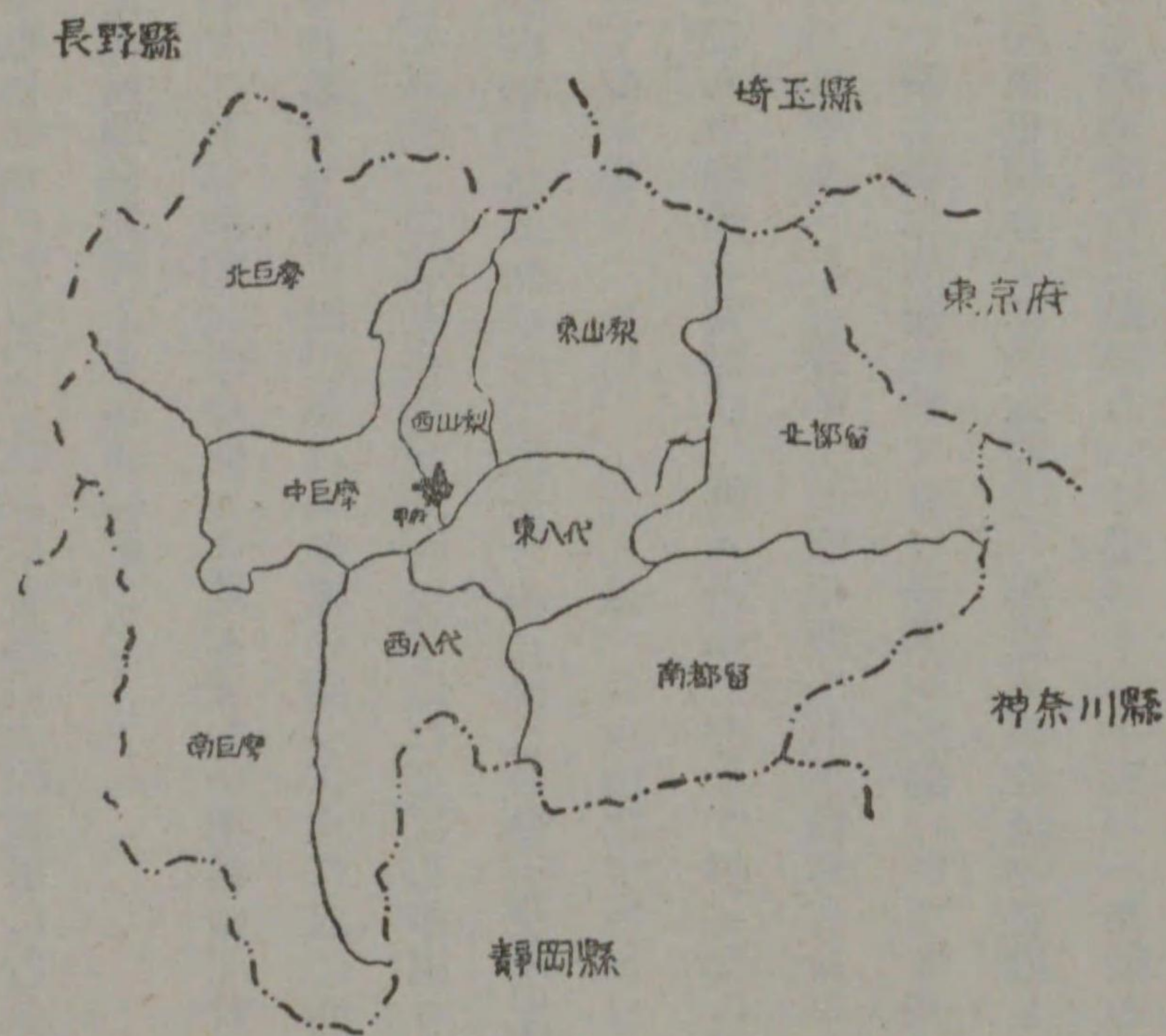
今、三十年間 一九〇〇年—一九三〇年(の人口移動を六期に分ちて考察するに、左の如くであつて、

第一期	1900—05年	第二期	1905—10年	第三期	1910—15年
第四期	1915—20年	第五期	1920—25年	第六期	1925—30年

三十年間に於ける五縣を通じての移出傾向は、その間に比率の著しき差異を示すにしても、何れも相當の移出率

を示してゐるのは、一般に農業に於ける人口吸収力の停滯が看取される。之を期別に見れば、第一期に於て富山縣が最高率であつて、静岡縣が最低率であるのは、風土と農業との關係を示し、山梨・長野二縣の低率なるは、養蠶業・製絲業・機業等の吸収力が反映してゐるのではあるまいか。第二期に於ける五縣の移出超過の傾向は、日露戰爭の影響の少なからぬことが見られ、第三期に於て、富山・山梨二縣の移出超過の減退及び静岡・長野・新潟三縣に於ける移入超過の現象は、日露戰爭の反動に伴ふ産業の發展及び都市發達の停滯が與へた影響を看取する事が出来る。第四期に於ける移出超過増大の現象が、各期を通じて最も著しいのは、世界大戰の影響を受けての産業及び都市の急速の發展に基く吸引力の大なりしものと思惟され、またこの期間に於て農産物價格が昇騰せるにも拘らず、却つて農村人口の停滯乃至減退を來してゐることは、工業品價格の暴騰に比して、農産品價格のそれが追隨し得なかつたこともその一因に舉げられ得るであらう。即ち製絲業の發展によつて、移出超過を極めて少なからしめた長野縣の外は、何れも移出の超過率が高く、富山縣の一三九・〇%を最高とし、新潟縣の一二四・六%、山梨縣の九七・七%の如き高率を示してゐる。また五縣に於ける都市發達の傾向が、更に農村人口の移動を著しくしたことも見逃してはならない。第五期及び六期に於ては、五縣を通じ移出超過を示し、特に山梨・新潟・富山三縣の移出超過率は高い。更らに國勢調査に於ける縣出生者の縣外移動の傾向に於て、一九二〇年に比し一九三〇年に於ける富山縣の減退は、奈良縣その他に於ける賣藥業の發展に伴ふ同縣の停滯により、長野縣に於ける移出超過の増大は

第七圖 山梨縣市郡別略圖



第六表 山梨縣郡別土地利用率表

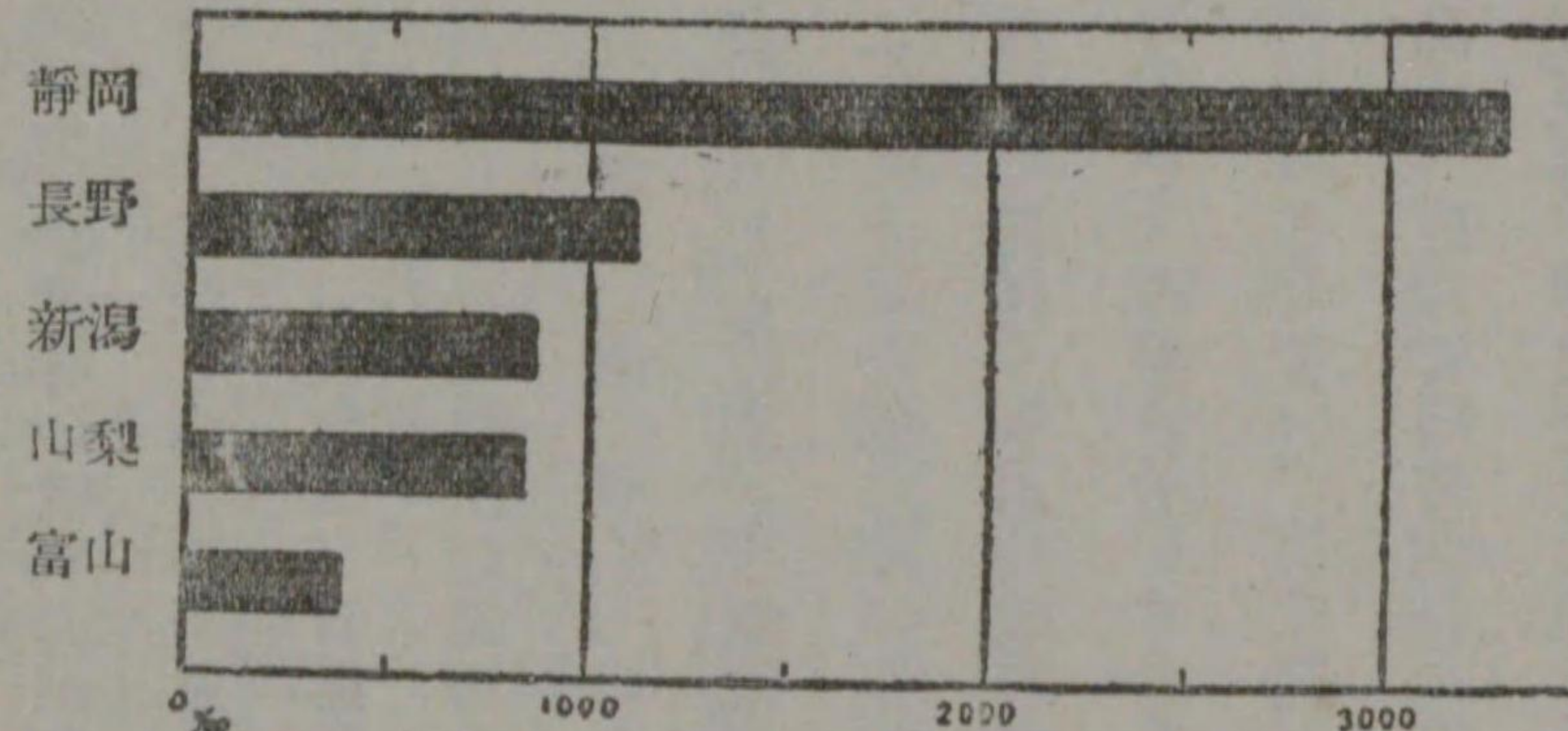
郡名	全面積に對する耕地面積の割合 (1929年)	耕地面積に對する田及畑面積の割合 (1929年)		農家一戸當耕地面積 (1933年)
		田	畑	
全國	154	541	459	10.77
山梨縣	117	346	654	6.33
東山梨郡	119	264	736	5.46
西山梨郡	246	596	401	8.22
東八代郡	238	308	692	6.53
西八代郡	76	235	765	4.82
南巨摩郡	53	247	753	4.13
中巨摩郡	208	479	521	6.61
北巨摩郡	139	492	508	8.45
南都留郡	97	199	801	7.21
北都留郡	68	88	912	4.58

註 昭和四年農業調査結果報告及縣統計書に據る

占めてゐる。しかしこれと同種の統計を基礎として、小地域(郡)の人口移動を考察する事は不可能であるから、次に出生留者に關する郡別の統計(山梨縣統計書)を資料として、左に人口移動の傾向を考察しようと思ふのである。

地域(郡)の人口移動を考察するに先ちその移動(一九三〇年出生地別人口)の方向を大觀するにその中で圍繞地域(東京・神奈川・長野・静岡)に赴くものはその大半であつて一三一、〇〇〇人に達し、東京府・神奈川縣に赴くものが、七割三分を

第六圖 都市人口増加率比較圖



第五表 都市人口増加率表

縣名	都市人口		増加實數	増加率
	1898年	1930年		
新潟縣	136,128	255,938	119,860	880.5
富山縣	91,048	126,859	35,841	393.6
長野縣	86,217	181,191	94,974	1,101.6
山梨縣	37,561	79,447	31,886	848.9
静岡縣	80,322	345,651	265,330	3,303.4

註 このに都市といふのは、市制を施ける都市及び1898年に於て、人口一萬以上を有せるものを指す、帝國統計年鑑に據る

製絲業發展の停滞に基くものと理解される。(第五表都市人口増加率表参照)
以上によつて、人口移動の經濟的解釋に基く地域性は、ほゞ大觀し得るが、それらの地域的差異は、更らに小地域(郡)に現はれる人口の自然増加、現住人口の増加と移出入人口との關係更らにそれらの經濟的解釋によつて一層鮮明にされる。
今五縣中、山梨縣に就いて小

この考察をなすに當つて、我々は各郡の土地利用にあらはれる地域性と、それらとの依存關係が不可分である農家一戸當の耕地を比較する必要がある。

九郡中、人口移動（出寄留）の最も著しい地域は、殊に山地多き南巨摩及び西八代郡並東八代郡の東部及び南都留郡の北部の地域で四〇％以上の率を示し、中に五〇％以上の率を示せるところが點在してゐる。これに次いで東山梨・北巨摩 二郡も亦比較的高い。これに反し移出の少ない地域は、中巨摩及び北都留の二郡で、殊に中巨摩郡は、移出率の高い北巨摩・南巨摩・西八代・東八代四郡の間に介在し、極めて低い移動率を示せることは、注目すべき現象である。

以上の人口移動の要因は、種々あるであらうが、これら移出率の高い地域は、殆ど耕地の狭少、即ち農家一戸當耕地面積は狭く、その農業生産額に於ても小額であることが明かに示されてゐる。これに反し、移出率の低い地域は農家一戸當耕地面積に於ても、農業生産額に於ても共に多額である。故に人口移動現象の解釋には、これらの農業生産關係を始め、工業生産等の滲透せる經濟的要因も綜合する經濟的解釋を要するのである。

なほ年齢構成特に勞働力の旺盛なる青年層（一五歳——二四歳）に就て、諸郡の比率を見るに、この割合は大體に於て以上述べた人口の移動 即ち移出との關係を示し、その男女の均衡は概して男より女が少ないことが見られる。

男子の青年層は西山梨郡に於て在留率最も高い。この郡は中巨摩・東八代二郡と甲府盆地（國中）を形成し、耕地は廣く、且人口密度が最も高い甲府市の圍繞地域を含んでゐる。これに反し在留率の最も低き地域は、山地多き南巨摩及び西八代の二郡である。これらの地域は、地勢の關係上耕地狭少であるから、人口移動の地域的差異は明かに農家一戸當耕地面積の廣狭との關係を示してゐる。

女子の青年層の在留率は、男より遙かに低い。その最も高い地域は、人口の移動の最も少ない中巨摩郡で、その原因は前に述べた如くで、これに次ぐは男の少ないにも拘らず紡績工業の盛んな南都留郡である。これに反しその率の低い地域は南巨摩及び西八代の二郡で、男と共に移出の最も大なる地域であることを示してゐる。

更らに壯年層（二五歳——五九歳）の在留率を見るに、男女の均衡は略ぼ順應してはゐるが、壯年期に於ては青年期に於いて少ない女子が却つて僅かながら増大を示すことは、人口の移動現象が、男女の年齢によつて相違する社會性、それは男子の移動移出は壯年期に及ぶのであるが、女子のそれは、比較的短期間であることが見られる。

男子の壯年層は、青年層に於て第一位を占めてゐる西山梨郡に於て同じく一位を占めてゐるが、二三位にある地域は反つて青年層に於て第五位及び第九位を占めた北巨摩及び南巨摩の二郡であるのは、この二郡は特に鐵道及び發電工事の影響少なからざる結果であらう。

女子の壯年層は、青年層に於ける在留率の最も低い南巨摩・西八代の二郡が、九位八位より逆轉して、一位二位

を占めてゐることは、さきに述べた如く、男子の移出率の高さは壯年期に及ぶが、女子の移出はその職業（女工、女中その他）の關係上、多くは青年層に移出し、壯年層には概ね歸郷する結果からであらう。

小地域（郡）の人口移動の經濟的解釋は、以上に述べたやうな概括的考察にとゞまらず、小地域に於ける各種産業に於ける企業形態の擴大、これに伴ふ生産組織、資本構成の高度化、産業合理化と労働強化とによる生産能率の増大とによる生産力の増大と労働者数の減退乃至停滞の關係——生産一單位中に含まるゝ人間の労働量が漸次排除されてゆく過程——の傾向の究明によつての人口移動の現象の解釋に待たなければならぬ。かゝる研究方法を遂行すべき小地域の單位は、地域的特質の近似性を示す數ヶ村にあらはれた人口移動現象に對して、經濟的解釋を試みる事が、最も科學的であるけれども、これらに要する統計資料の蒐集竝にそれらの集計的勞力が多大であるから、筆者の意圖は、かく五縣に於ける郡別の人口現象即ちそれらの諸地域の人口の自然増加と移出入口との關係を比較し、それらの經濟的解釋を試みる事を研究對象としてゐる。

以上の研究は、「日本の人口の増減に就ての地域的研究」に對して、日本學術振興會よりの援助により、柳澤統計研究所に於て、研究した過程の要約である事を附記して、感謝の意を表する。

八 地方人口研究の對象としての甲府盆地

地方人口の研究單位として、如何なる地域が最も基準たり得べきか。それに就いては研究すべき對象によつて、それぞれ基準を異にする事は勿論ではあるが、一般的にいへば、比較的狭い面積に於て、その地積のもつ地域的特徴が多様性を備へ、しかもそれが周圍の隣接地域と地域的關係上、それから生み出されてゐる人口の集積現象が、多様な地域的現象となつて現はれてゐる地域こそ、地方人口の研究單位として、最も基準たり得るものではないかと思はれる。かゝる立場から、それに該當すべき甲斐に就いて、かねてから山梨縣男女師範學校に課した郷土研究の指導した成果を通じて、地方人口の一基準としての人口研究の一端に觸れてみたいと思ふのである。

一 甲府盆地の地域性

甲斐は、誰人も知るやうに、我が日本の二大地域である東北日本と西南日本の境界線に横はつてゐる低地帯、即ち甲府盆地（國中）を中心として、その西側には西南日本外帯の最東端をなす赤石山地が峙ち、その北側から東側には關東山地が横はり、南側には御坂・天子山脈が連つてゐる所謂盆地地域である。しかも北境の八ヶ岳と南境の

富士山とは、この東北日本と西南日本との境界たる構造線に沿ふて、北境と南境とに噴出し以て廣大なる裾野を展開し、一層この地域性を複雑化してゐる。全日本から見て垂直的形態の複雑性を有つ甲斐は、それが氣候の上にも現はれて動植物生態にも特殊相を示し、それを基底としての農業地域のもつ區劃が、生活環境としての色彩を人口のもつ多様性に投影してゐる。

赤石山地の主體部は、富士山に次ぐ白根山を始め、三千米に達する高峯が連つて信州との境界の障壁をなし、その東方の西山山脈もまた平均二千米内外の山嶽が南北に續いて、その間の峽谷は甲斐の山村の中でも最も山村らしい西山村を抱いてゐる。なほ東方甲府盆地の中心までの間に、これらの山地は、城山高地 靜川高臺に續き、その間の水平的距離は、赤石山地の最高峯白根山から、盆地の中央である釜無川の左岸即ち信玄堤の所在する龍王村まで直徑僅かに二十四軒に過ぎない。さればこそ、その高山地域から流下する御勅使川は急流で、日本で屈指な複合扇狀地をつくり、それと釜無川との合流地域は、昔から水防の難所とされ、武田信玄がこの難所に施した防河の工役は、戰陣に於ける信玄流の戦法と似てゐたといはれてゐる。かくてこの扇狀地のもつ特異な自然性は、用水に乏しきため、産業開發の時代は明治時代にも後れ、それが已に人口の飽和點に達してゐる盆地の中にありながら幾分餘裕のある地域性となつて現はれて來る。

盆地の北側と東側を縁とる關東山地は、北側に於ては二百米から一百米の山嶽となつてゐるが、赤石山地が壯年

期の地貌を呈して屹立してゐるのに比べると、高度は勿論、傾斜もそれほど急峻でなく、開析程度も進んでゐて、盆地に面して櫛齒狀の丘陵となつており、また東側に於ては大菩薩嶺（二〇九七米）などの高峯もあるが、北方山地よりも低い。従つてその間を流れてゐる笛吹川は御勅使川ほど急流ではないが、數多の複扇狀地をつくつて、居住の適地を提供してゐる。即ちこの笛吹川の流域は、甲府盆地の中では古代文化の發生地域である山梨郡で、今日山梨縣名の出所である山梨岡はその中流右岸の丘陵に立地し、南方の八代郡と共に『倭名抄』に見ゆる郷の所在も多い。のみならず今日山梨縣での主要産業である養蠶業は、時代的にいへば、この山梨郡の東縁をなす郡内からこゝに移行したものであるといはれてゐるが、近代的産業にまで成長したのは、この笛吹川の流域を搖籃としたことは事實である。

以上の要述によつてすら、我々はこの盆地のもつ垂直的形態の變異に富んでゐる事を認め得るのであるが、その景觀を直視する事によつて、一層それが鮮明にされる。先づ、北の八ヶ岳と茅ヶ岳の裾野と、南の富士の裾野とは共に形態上よい對照をなしてゐるばかりでなく、それらの風土が冷温農業に適してゐる點からも、共通點を見出し得るのであるが、前者の開析が比較的進んでゐて、多くの輻射谷が裾野の下部に至るほど大きな幅をなして澤となり、夙に村落居住の適地なり得たのに、富士の裾野は之に反して開析が若く、爲に裾野を刻む谷の發達は乏しいから、開拓が後れて、その大部分が荒地又は森林で蔽はれており、村落居住地區は、僅かに五湖の附近や熔岩伏流水

の湧出する地區に點在するに過ぎない。この意味に於て、八ヶ岳裾野に於ても、輻射谷と輻射谷との間に介在してゐる廣い原型面は、徳川初期までは牧場や荒地として取残されてゐたが、先覺者やその協力者、また他の地方から移住者によつて、村山堰・浅尾堰・穂坂堰・楯無堰等の諸用水路の開鑿が遂行され、今日屈指の水田地帯を見るに至つた。穂坂堰の如きは、柳澤吉保の計劃によつたものと傳へられてゐる。だから同じ生活環境としての裾野でも、それらの自然性に基く經濟價値の差異は、人口の集積の上にもそれが著しく疎密の現象となつて現はれて來てゐる。しかし最近富士の裾野の水田に試みられた耐寒性の水稻は、忍野村の農業經營に輝きを見せてゐる事は、裾野に鄉村人口を凝集せしむる新しい引力である。

釜無川と笛吹川の水の集積して南下する富士川の峡谷も、甲斐の特殊な地域で、河谷の下から傳はる溫暖な氣温を有するにも拘はらず、兩岸は急な斷層崖や臺地または段丘で、耕地が少ない爲に畑作の外に林業によつて生計を支へるものが多く、行商などをするものすらあつて人口の流出が多い。生活程度の低い事は、中央沿線の農家と、この地域に沿へる富士身延鐵道の車窓から眺められる農家の家構とを比較する事によつても知られる。

次に見逃がす事の出來ないのは、圓の中心にも比すべき盆地、即ち笛吹川・荒川・釜無川の合流する低濕地域の農村地域と、圓の周邊とも云ふべき四境の山村地域との對比である。低濕地域の農村は、比較的高い場所や自然的堤防や防風に良好な土地に集團し居住して集村をつくつたらしく、多くの道路沿の街村もまたその著しい居住形態で

ある。この地域の農村の農業經營が、はじめは水田經營から養蠶經營に、更らに農業恐慌につれて最近は多角形農業に移行した事は當然である。かゝる農村と全く對照的な所は周縁の山村で、前に述べた西山村の奈良田部落の如きは、居住度からいつても早川の峡谷沿の崖錐に立地し、八三〇米の高度にある。従つて農作は麥・大豆・小豆を主作とするのであるか、蕎麥と粟をつくる焼畑の存在が、より以上この山村の主要形體となつてゐる。概ね山村に於ける農業と林業との對比に於て、一般に林業に重要な價値が認められてゐる。たゞその所有關係殊に恩賜林等によつてそれが著しく制限されてゐる。なほ本縣にとつて見逃がすべからざる事は、水力資源が豊富であるにもかゝらず、それも所有關係によつての利用價値の薄い事である。

圖第一圖 主要道路分布圖



一 甲府盆地の地域性

是等の生活環境の地域的差異を、最も具體的に實證するものとして、(一)道路分布圖、(二)森林分布圖、(三)配電區域圖を讀む事にしやう。

一、道路分布圖 によつて、我々は前の盆地の地域性としての垂直的形態が、如何に鮮明に道路網の濃度を規定し、盆地々

積の水平的距離が比較的近くに拘はらず、その山地・河谷・段丘・扇狀地・氾濫原・裾野等の諸地域にもつ經濟的並文化的意義が、著しく地域的に階級付けられてゐる事は、後述すべき人口の量的また質的地域性に反映してゐることをも物語つてゐる。殊に赤石山地と關東山地、また八ヶ岳裾野と富士裾野等に於ける主要道路の缺如を比較する事によつてもそれが明かにされる。

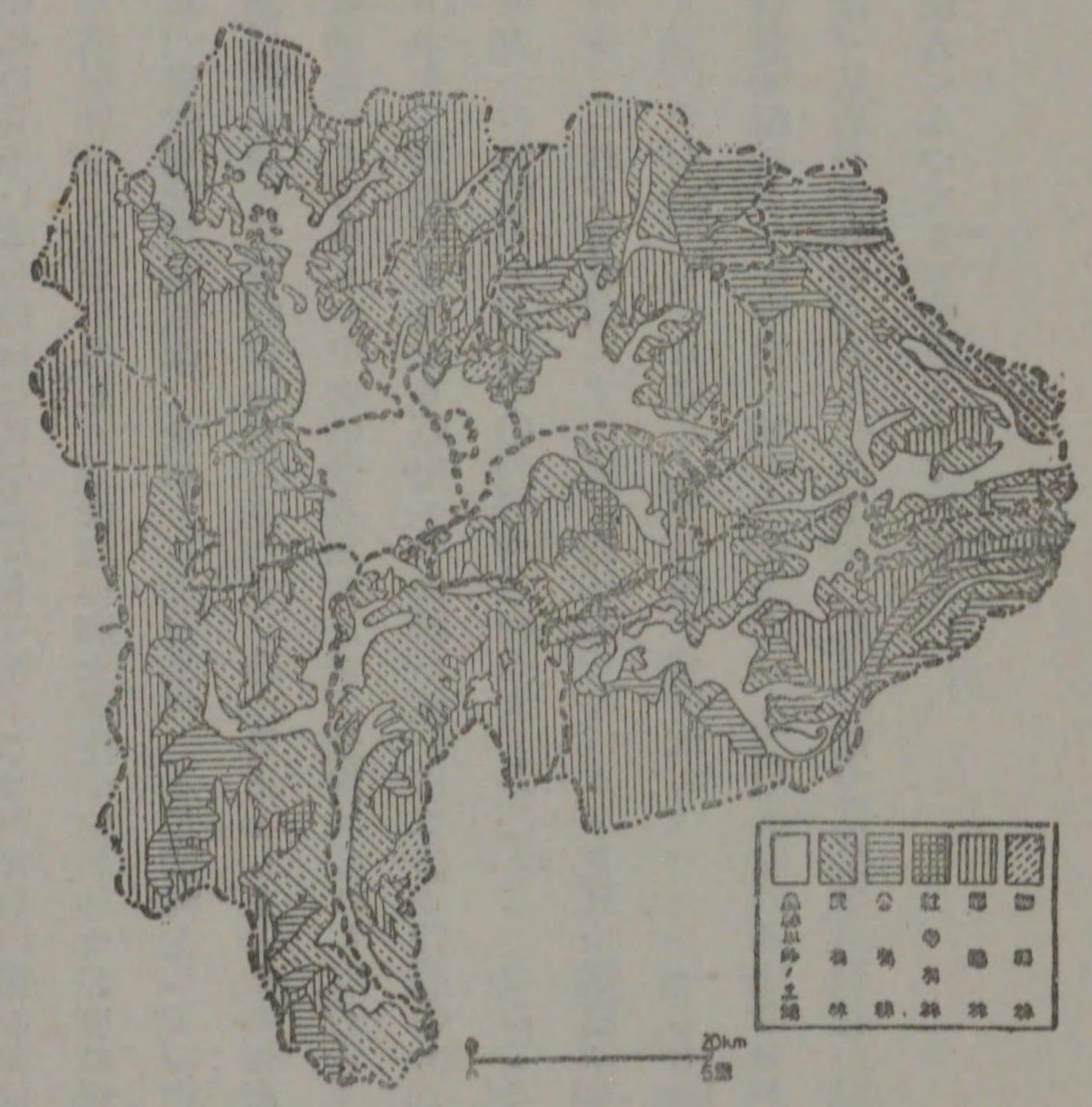
第一表 土地利用種別表

種別	面積	千分比
田	一九、八二四町	四四
畑	四二、六五二	九五
宅地	四、七三〇	一一
林野	三五二、〇三〇	七八二
その他	三一、〇七二	六九
計	四五〇、三〇八	一、〇〇〇

二、森林分布圖 によつて、我々は森林以外の土地に比して、その面積の廣大なるに驚かされる。昭和八年の土地利用種別表によれば、林野は約八割に近く、耕地は一割四分に過ぎない。故に、かゝる狹隘な地積に集積した農村人口に對する資源としての耕地は、内地平均一戸當が一町五畝であるのに、その五分の三に過ぎない六反

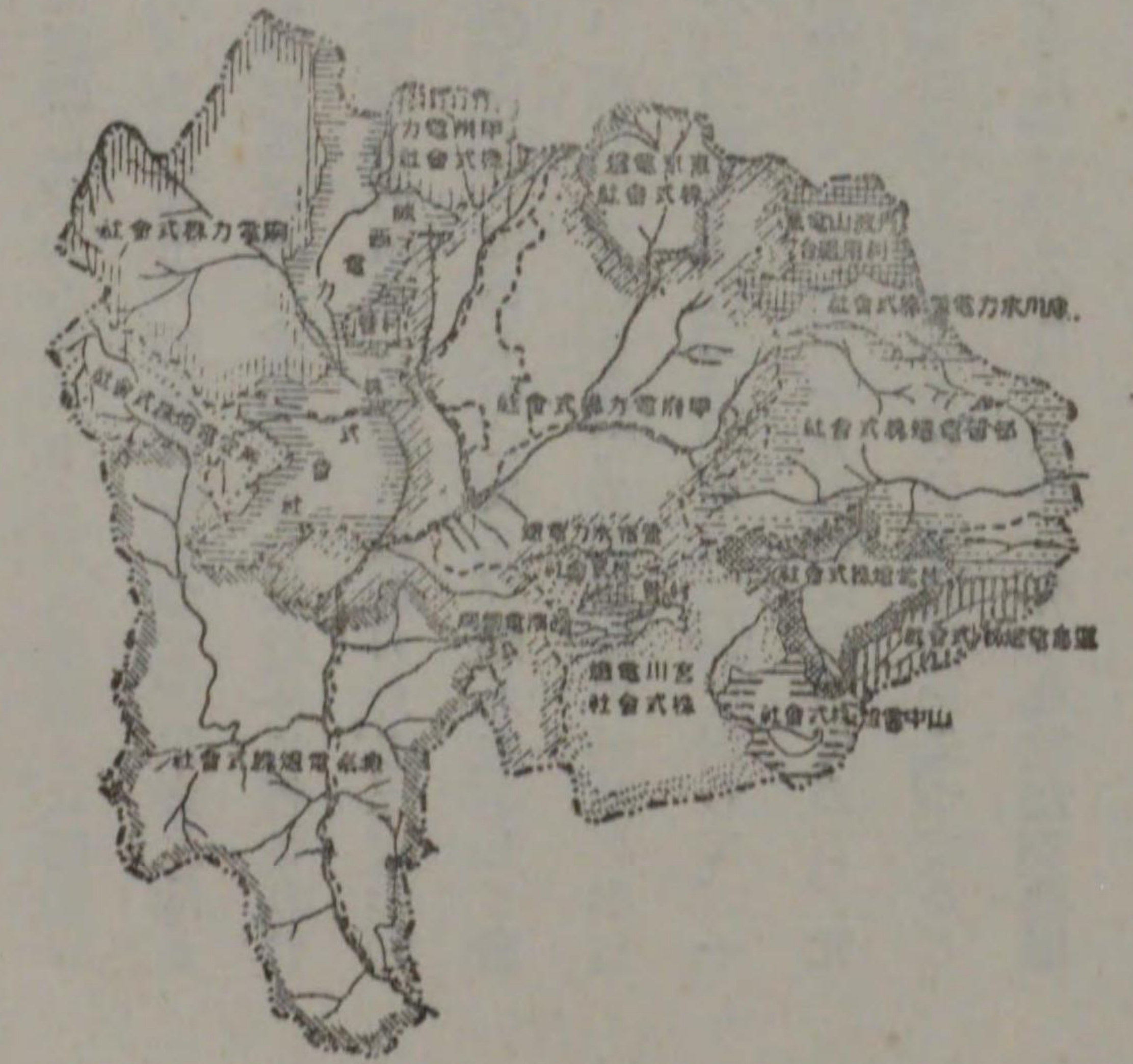
三畝であるのは已むを得ない。しかし一反當の生産額は内地の三十六圓に對して五十二圓の多額を示してゐる。また森林の所有關係は公有林野は最も多く、中にも恩賜林は約十五萬二千町歩、私有林は約十一萬町歩、市町村有林は約五萬三千町歩、御料林は約一萬九千町歩、部落有林は約六千町歩を占めてゐる。これによれば、森林資源の利用の集約化は將來に残された大きな問題である。最も廣い面積を占めてゐる恩賜林は、明治四十年の大水害の際に

第二圖 森林分布圖



一 甲府盆地の地域性

第三圖 會社配電別區域圖



下賜されたもので、地元町村と特別の關係が保たれる事になつてゐるから、甲斐の村落人口はこの山林に依存するもの極めて多い事を認めなければならない。たゞ町村自治體が流通經濟に移行しつつある今日、その生活様式の變革と都市集中への牽引力とが、從來の郷土定住の生活をせしめぬ現實に直面しつつある。

三、會社別配電區域圖 資源としての耕地、また資源としての森林は、その利用の歴史性に伴つて、民衆生活との關係は多分に所有關係に左右される。殊に資源としてのその利用が資本主義經濟の成熟に伴つて近年に行はれた電氣業は、その多くが中央の資本家によつて企劃せられると共に、その電力の供給も、最大供給電力一九三、〇〇〇kwの中、資源所在地たる縣内への供給が僅かに二〇、〇〇〇kw(約一〇・三%)であるのに反し、縣外主として京濱地方への供給が一七三、〇〇〇kw(約八九・七%)となつてゐることは、縣内に於ける電力の利用度の稀薄を示してゐる。これを會社別にすれば、縣外系ともいふべき東京電燈は本縣系の發電力總計二三、九九二kwに對して、一七九、〇一七kw、それに同じく縣外系の京濱電力は一一、一七七kwで、合せて一九〇、一九四kwに達してゐる。元來自然資源に乏しい甲斐に於て、産業上最も利用價值の多い電力が、かゝる所有關係からその地域性を失つてゐる事は、見逃がす事の出来ない問題で、發電並電力供給の國營化が國策とされてゐる今日、それを有つ地域性の活用が縣人にもつても反省さるべきである。

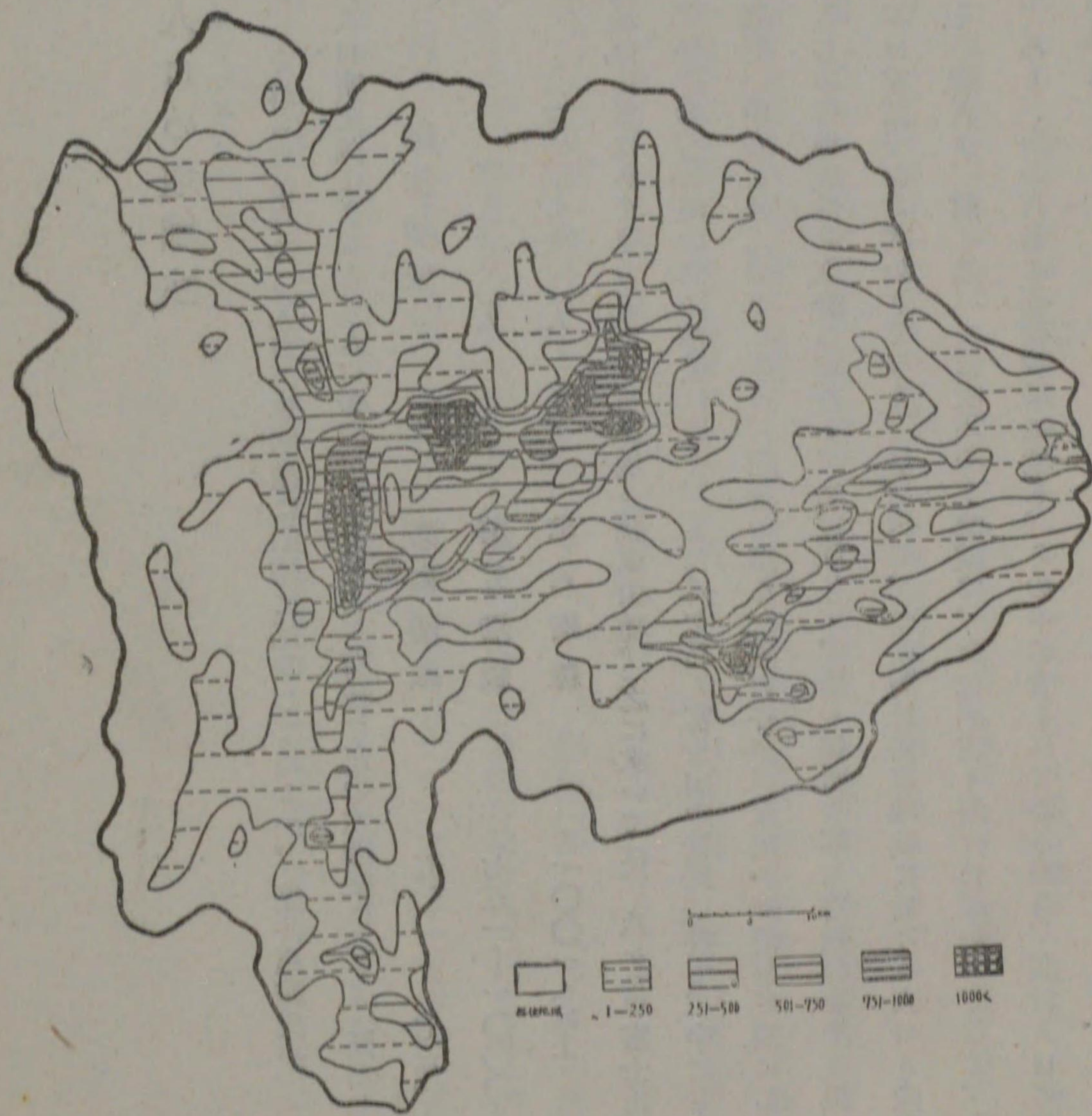
二 人口の地域性

以上述べた地域性が、それらに依存する人口の集團型に如何に反映してゐるか。笠井惠祐氏が、『山梨縣綜合郷土研究』に挿入された人口密度圖によると、人口密度(一方籽當人口)階級を左の六階級に分ちて圖示してゐる。

第一階級	無住地域	第四階級	五〇一—七五〇人
第二階級	一一二五〇人	第五階級	七五一—一〇〇〇人
第三階級	二五一—五〇〇人	第六階級	一〇〇一人以上

これを前に述べた諸地區に當はめて見ると、赤石山地と關東山地、之に次いで、八ヶ岳・富士山の裾野は、何れも無住地域であるが、殊に赤石山地の無住地域は廣く、また八ヶ岳と富士山の裾野に於て、中にも前者に於ける第二階級の等密度線が裾野の中腹に及んでゐるのは、開析の進んだ輻射谷が、水田の經營を可能にし、それがこの地域に村落居住を早からしめた地域性を立證してゐる。之に反して、最も稠密な第六階級の等密度線は、甲府市及其近郊に顯してゐる事は當然であるばかりでなく、なほ次の二つの對比的な地域に於ける人口と産業との關係の相關性を示してゐる。その前者は、前に述べた笛吹川の下流域で、文化が古く開けたばかりでなく、今日なほ養蠶及製糸業の盛んな地域であり、かの有名な葡萄栽培地域も、その中に含まれてゐるから、農村人口の包容力が高く、

第四圖 山梨縣人口密度階級圖



従つて、是等の農村人口の中心市場としての地方的都市たる鹽山・目下部・加納岩・勝沼の四町は、中央線の開通と相俟つて、一層活潑な人口凝集の地域となつてゐる。その後者は同じく前に述べた御勅使用の扇狀地で、この第六階級の等密度曲線は、甲府市附近が矩形的であり、笛吹川下流域が分散的であるのに反して、階圓的であるのは比較的広い村落地域に於ける人口と産業との相關性を最も具體的に示してゐるものといふべきであらう。即ち前にも述べたやうに、この扇狀地は御勅使用によつて運搬堆積された洪積層の砂礫多く、川は平時は涸川である丈に水利に乏しく、古來原七郷ともよばれて、明治初期までは開拓が十分に行はれてゐなかつた。即ち當時の村落居住は、左方の扇狀地の末端と右方の釜無川の氾濫原との限界線―西は畑右は田―に沿ふての街村型であつた。然るに明治中期以後の養蠶の發達は、この原七郷を甲斐での養蠶郷と化したばかりでなく、近年に至つては、果樹栽培また促成栽培すら行はれ、以上三つの人口凝集地域の中で、この中でも最も將來性をもつとなつた。

しかしこの人口密度圖を凝視して、我々の思ひ當る事は、各等密度曲線間の間隔があまりにも近かく、それらの轉移的關係が階級的聯關を示しておらず、殊に人口の稀薄である第二階級の密度曲線圏が比較的廣いにも拘はらず、階級が進むにつれて等密度曲線圏が孤立分散し、しかもそれらが無住地域の間さまへ見出され事は、人口の包容性に弾力性の乏しい事を現はしてゐるのである。

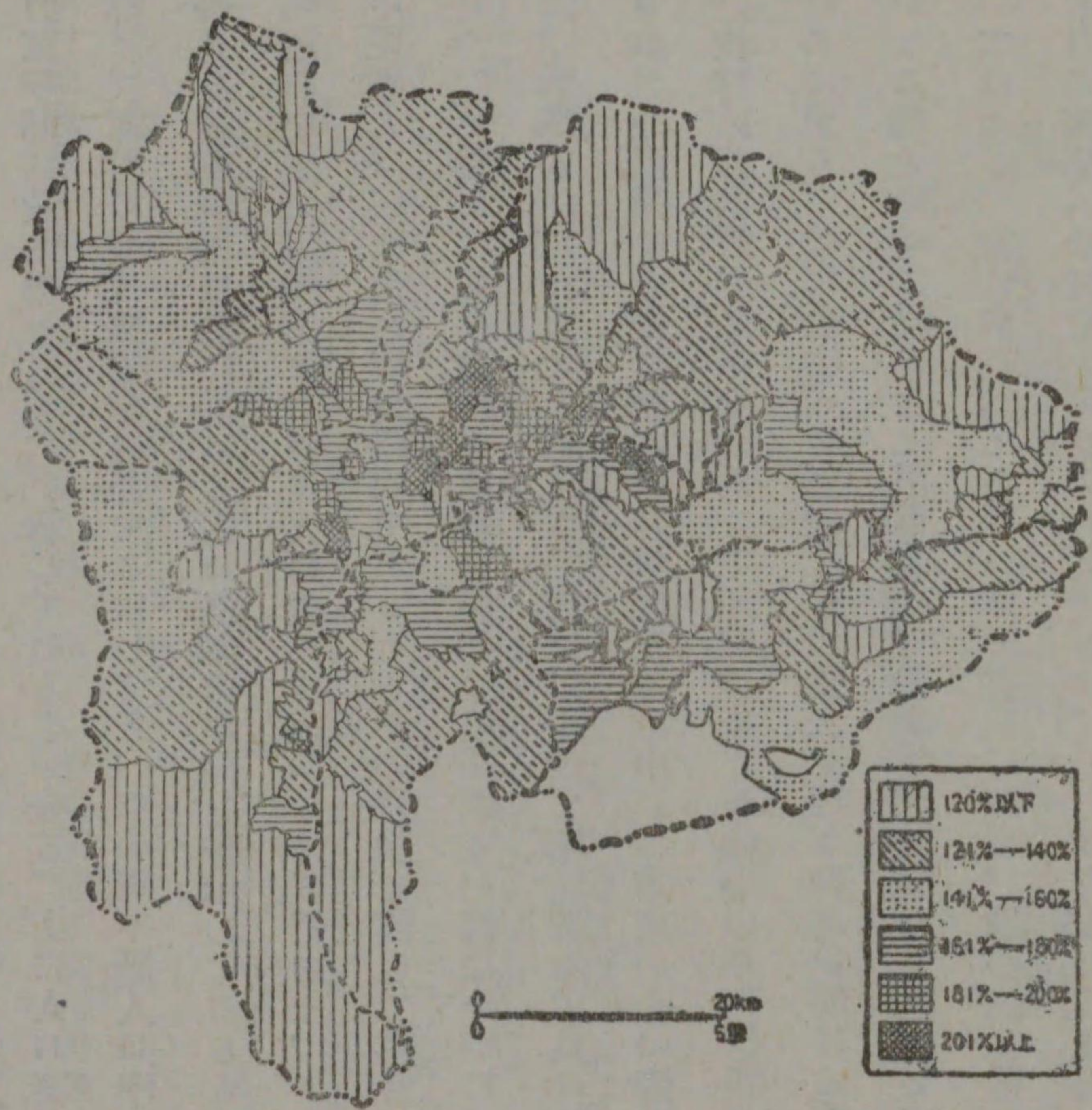
之を人口増減また人口移動の上から考察すると、徳川時代に、飢饉・流疫・人口制限等の自然的災害並に社會的制

約に基づく人口の停滞は、明治以後の産業の發達が職業の分化に伴つて増加に轉じ、殊に明治中期即ち明治十八年から二十三年までの五年間は最も人口増加の劇しい時期であり、續いて二十八年までの五年間もまた著しい増加を示してゐる。これは農産物價格の昇騰、製絲工業の發展等に基くもので、當時は現住人口が常に本籍人口の上にあつた事からして、流入人口が相當あつた事を示してゐる。然るに、明治三十六年六月に開通した中央線、それに次いでの日露戦争に促がされての資本主義の急速な發展、耕地所有關係の變遷等は、從來盆地内に凝集してゐた人口の流動即ち流出人口の超過を將來し、明治四十年を劃期として、現住人口は本籍人口より劣位を示すに至り、大正期を経て昭和に入つて、その現象が益々促進され、今日に於ては本籍人口の約四分の一は縣外に在留し、また自然増加(約一萬)の半は、年々縣外に流出する傾向を示してゐる。

是等の流出人口は、如何なる地域から多く移動するものであるか。これを前節の諸地域と比較する爲には、更に精確な集計を要する。試にこれを青年層人口率(一五歳—二四歳)の地域的分布に徴するに、大體に於て、山村地域からの流出の多い事が推定される。即ち青年層人口率の低き地域(二四%以下)は殆んど山地地域であるのに對して、甲斐盆地の中央部が、より多くの在留率を示してゐる。

之を全國と比較すれば、山梨縣の青年層人口率は、全國よりも低く、また全國の郡部よりも更に低い。更らに之を郡別に見るに、甲府市及その近郊たる西山梨郡を除いては、比較的新らしき開墾に屬し、なほ近代的農業經營

第五圖 青年層人口率



二 人口の地域性

第二表 青年層(一五—二四歳)人口對總人口率表

市郡別	總數	男	女
全國	一八・七%	九・五%	九・二%
同郡部	一六・九	八・四	八・五
山梨縣	一六・五	八・五	八・〇
甲府市	二二・六	一一・一	一一・五
東山梨郡	一四・七	七・九	六・八
西山梨郡	一一・二	一三・七	七・五
東八代郡	一五・七	八・四	七・三
西八代郡	一四・一	七・三	六・八
南巨摩郡	一三・六	七・二	六・四
中巨摩郡	一七・二	八・六	八・六
北巨摩郡	一四・七	七・七	七・〇
南都留郡	一五・四	七・四	八・〇
北都留郡	一四・八	七・六	七・二

「昭和五年國勢調査報告第一卷」に據る

をなす事の多い御勅使川扇狀地を有する中巨摩郡は、最高率一七%二を示し、之に反して富士川の峡谷に沿ふてゐる南巨摩郡は最低率一三%六を示してゐる事が分る。また人口密度の上では、第六階級の等密度曲線圏を有つ東山梨郡は、郡内に山村地域を包含するにしても、その青年層人口率は一四%七に過ぎないのは、笛吹川下流域の養蠶地帯及び葡萄栽培地帯に於ける人口過剰の傾向を暗示してゐるものではあるまいか。

明治の史家山路愛山は、甲州人に就いて語つてゐる。曰く、

甲斐國人は「人生が修羅羅場である」とその意義を極めて露骨に體得した者である。彼等の祖は石河原の瘠地に育つたが爲に、生存競争の原理を痛切に感ぜざるを得なかつた。自然と戦はねばならなかつた。また堀内熊男氏は、本縣人は、自然との絶えざる闘争によつて剛健進取の負けじ魂をその性格の根本となすに至つた。しかも鎖された生活環境の中に結ばれた集團生活の中に、古來からの情誼が結ばれ、徳川時代にはその直轄地となり、冷たい代官の行政の下にあつた爲に、民間に於て相結ぶの必要は親分子分の關係を生みて、それが互に吉凶禍福相扶けるに至り、代官政治への反抗など、強者を挫き弱者を助ける義俠的精神は俠客を生むに至つた。「山梨縣綜合郷土研究」かゝる郷土精神に培はれた甲州人は、所謂甲州財閥をも築いて、京濱の間に地方人口流出の目醒しい一つの例を開いてはゐる。常に求心的である一面を有しながら、遠心的な他の面をも示すことは人口の本質であるが最近の職業人口の調節への行政とアジア的發展とは、この地方人口の傾向にも大きな轉回を示すであらう。

九 小地域の人口研究と讀圖の重要性

— 山梨縣東山梨郡を對象として —

こゝに研究の對照とする東山梨郡は、甲府盆地の北東隅で、大菩薩嶺を有する關東山地は、郡内との東境をなし専ら北境なる埼玉・長野二縣に連り、その餘脈は郡の北半を占め、その間を南流する笛吹川沿には多くの複合扇狀地を作つて、居住の適地を提供してゐることは、前稿に述べた所である。山梨の縣名の出た山梨郷は、ほとその南西隅の山麓から川沿（岡部・春日居・平等三村）の地域にあつており、岡部村の大字鎮目（トウジ）の山梨岡にある山梨岡神社は、「延喜式」には山梨郡の官社とある。かく丘陵を負つてゐる岡部村が、田の面積が耕地面積の四五九%で、郡内で平野の綿塚村に次いで高率を示してゐることからも、古代文化の發祥地である遠因が首肯される。これを林野面積對總面積の割合から見ると三五〇%で、笛吹川沿の諸村が多くは一〇〇%以下であるのに對し、この村の林野面積が却つて中位を占めてゐるのは、丘陵地を利用しての水田耕作が古代から行はれてゐることを立證するもので

して、農村婦人としての自覺を促すやうにしてゐるのも、これを緩和する爲だと校長は語つてゐた。しかし之を青年層人口率（一五歳—二四歳人口の總人口中に占める割合）に就いて見ると一九一%で、隣村の春日居村を除いては郡内での高率であるのは、山村は勿論、この郡の各村が總じて離村者の多いこと推して知るべきである（東山梨郡土地人口表參照）。實地調査の際に小學校のH先生の離村調によると、左表の如くで主として京濱方面に多い

第二表 岡部村離村者調

離村者別	離村者先別
店員	東京
社員	横濱
職工	大阪
官吏	神戸
教員	千葉
商業	愛知
銀行員	群馬
彫刻	埼玉
運轉手	静岡
印刷業	新潟
僧侶	佐賀
計	滿洲
(註)不明	南洋
	南米
	計

更にこれを戸主との關係に就てみるに、長男は二三、次男以下は八三、年齢階級別にすれば、二〇歳未満は三七、三〇歳未満は六二、四〇歳未満は七である。

讀圖により隣村の春日居村と比較するに、林野・桑畑等の土地利用に於ては、著しき差異を見ないが、土地所有關係に於ては、春日居村は、岡部村に比して支配階級の所在が多く、それが地主小作の上にもあらはれてゐる。實地調査の際にも、また春日居村では、農民の各階級に組合がよく發達しており、農業の經營も、その多角的計畫が殆んど完成期に達してゐるので、人口の増加傾向は、岡部村に於ては交通機關の驛の所在もその一原因とはなつてはゐるが、大正九年から昭和十年に至る四回の國勢調査に、その指數が一〇〇、一〇九、一一八、一一八を

第三表 三富・西保・諏訪・中牧四村土地人口表

村名	對地面積				青年層人口對總人口	工業人口對總人口	農業人口對總人口
	林野對總面積	田對地	耕對地	桑畑對地	小作對地	對地	對地
三富村	786	3	637	459	115	70	808
西保村	694	34	737	382	120	21	929
諏訪村	617	210	811	451	153	137	678
中牧村	546	284	766	437	146	78	851
東山梨郡	480	264	816	525	155	146	665
山梨縣	516	346	722	526	165	192	606

第六表 東山梨郡町村別土地人口表參照

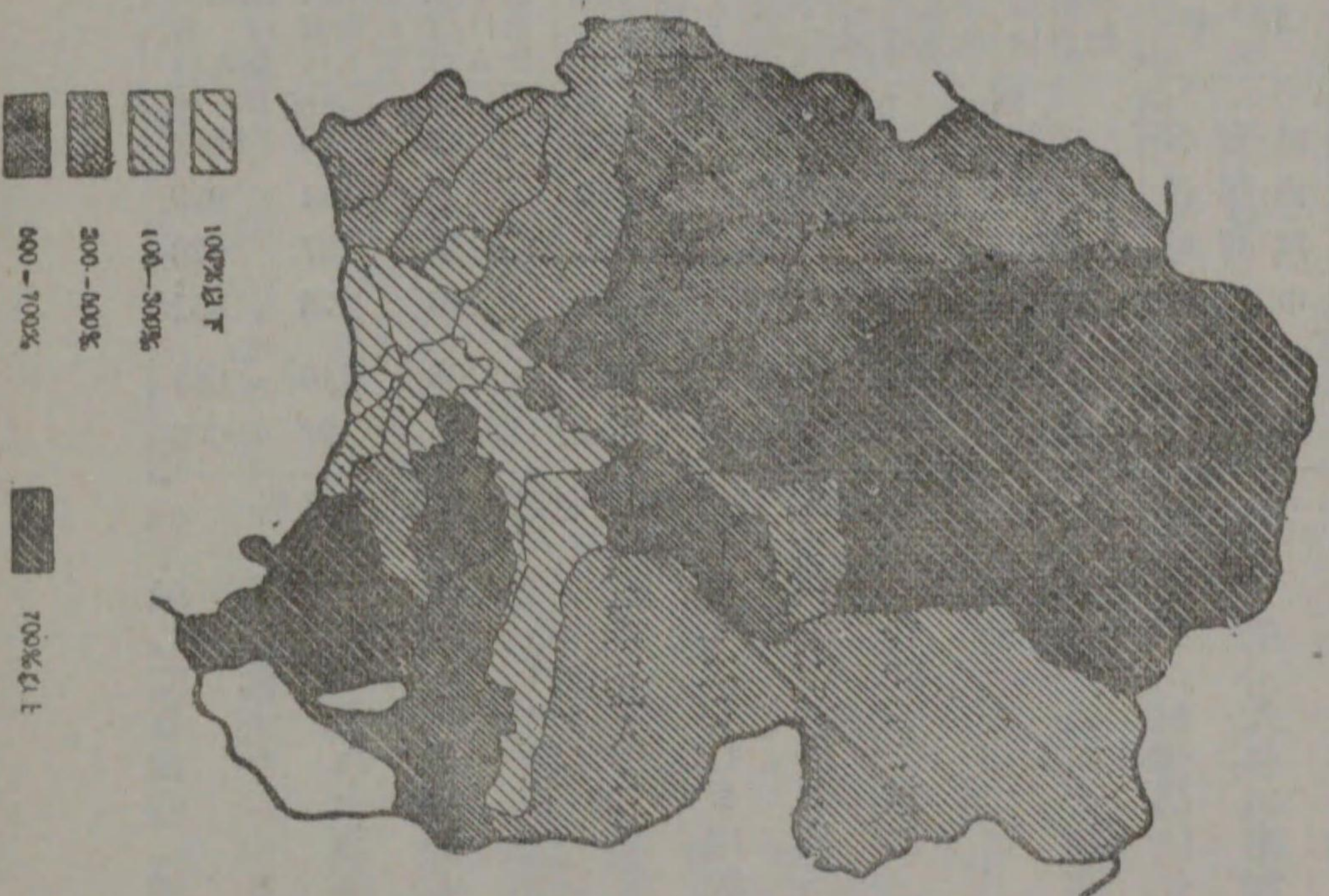
示してゐるのに、春日居村に於ては、却つて一〇〇、一〇三、一〇二、一〇〇と低下してゐる。故に地方人口政策の解決は、統計の大量的觀察をなすと共に、それを讀圖による比較によつて地域性を把握しつゝ更に村別の社會經濟的解釋を必要とする。

これを讀圖（第二圖）上に實證するに、林野・田・桑畑・小作地等の土地に關する差異、又青年層人口・農業人口・工業人口等の人口構成に關する差異に於て、著しき地域性が現はれ、統計表の比較のみによつて考察し得られぬ研究上の示唆が與へられる。

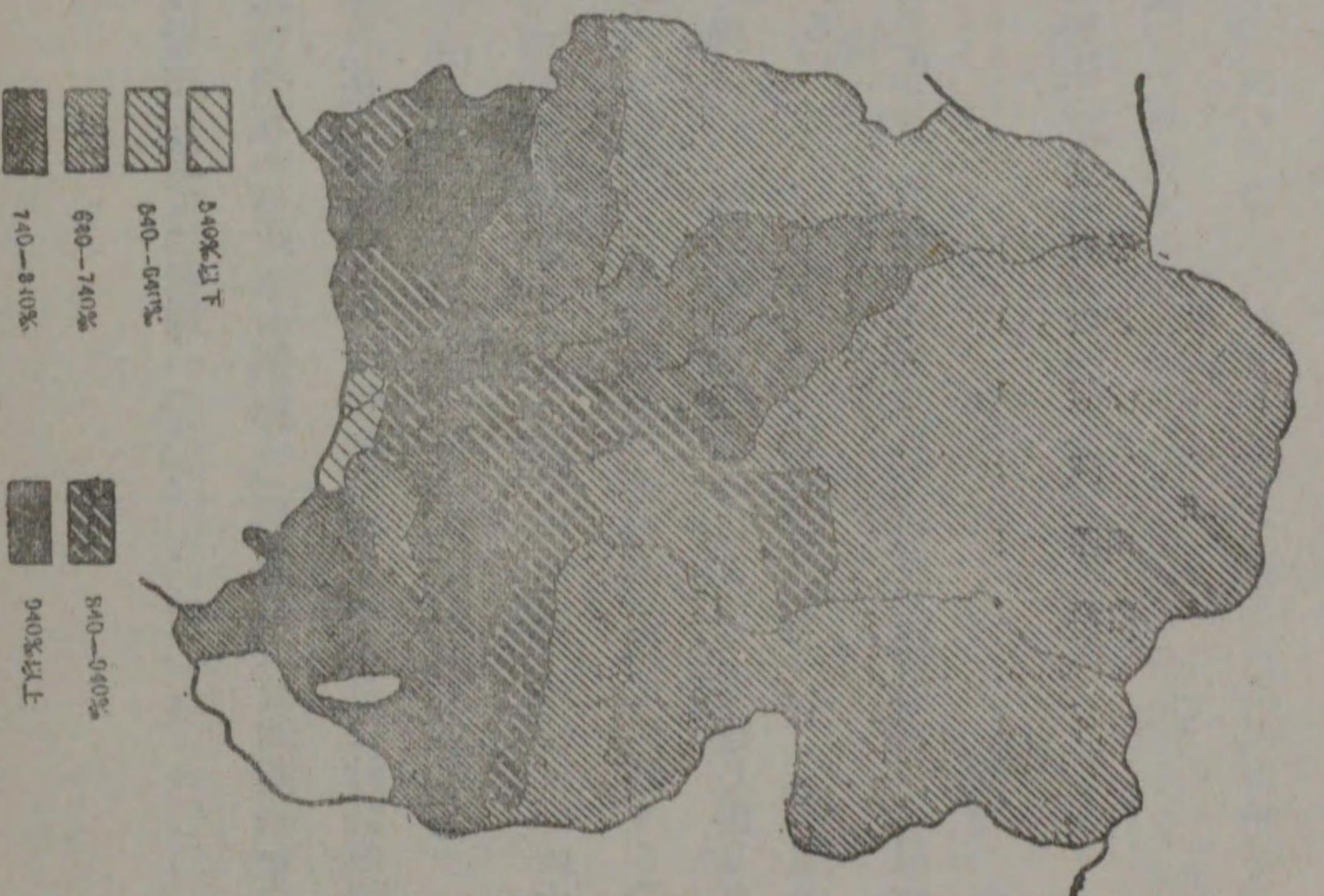
最近手にした Demangeon 教授から送られた村落居住並人口委員會の重要研究題目では、

- 一、人口の諸事實と居住の諸事實との間に於ける諸關係
 - 二、村落居住の事項
 - 三、人口の事實
- を擧げてゐるが、一の中に、

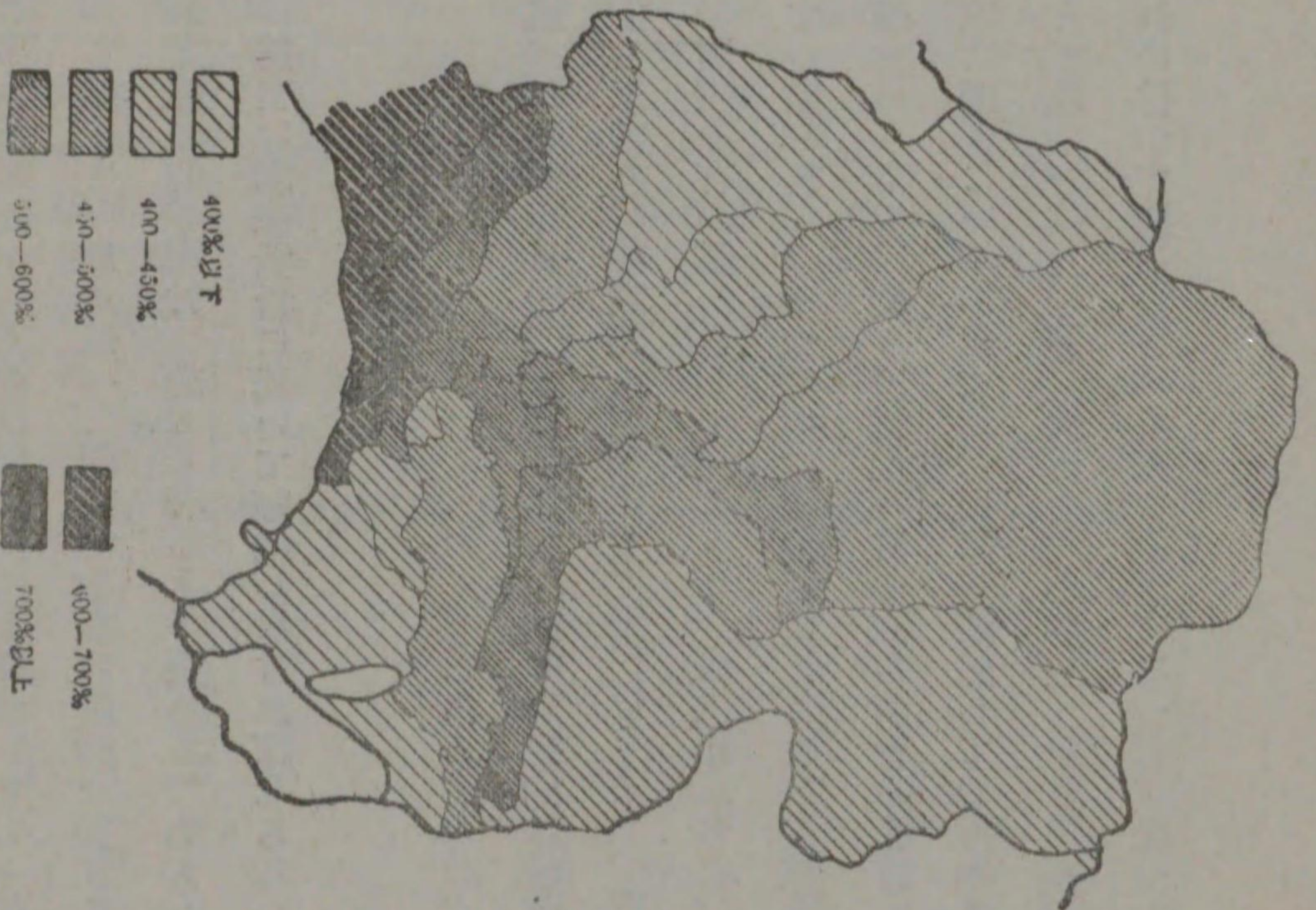
第一圖 林野面積對全面積百分率圖



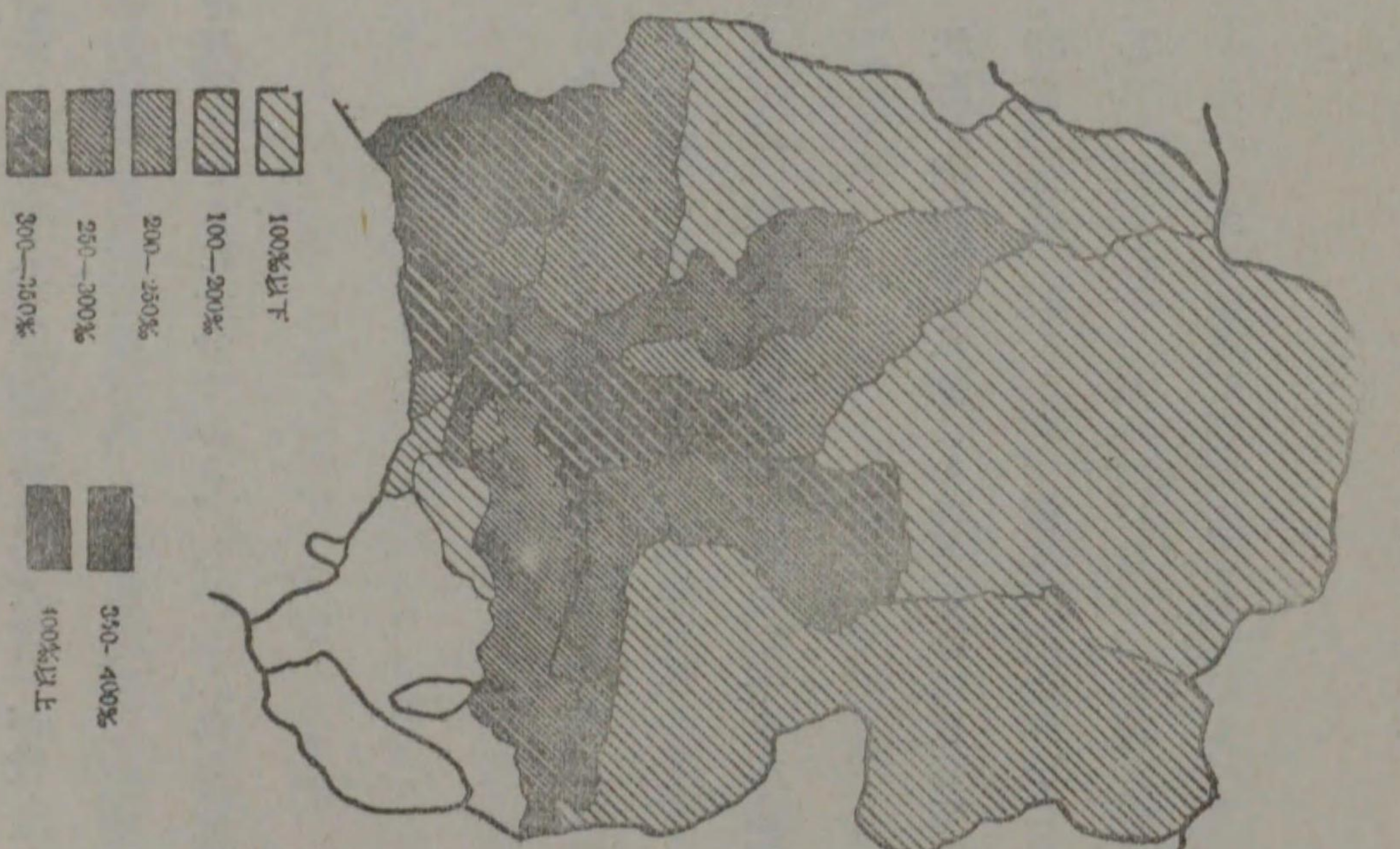
第三圖 桑畑面積對畑面積百分率圖



第四圖 田面積對耕地面積百分率圖



第五圖 小作地面積對耕地面積百分率圖



「人口學的諸事實が村落建造物に及ぼす影響」、また「住家の諸型に及ぼす人口學的諸事實の影響」が數へられてゐる所から推すと、以上述べた岡部村や春日居村に於ける人口學的諸事實も村落建造物と住家の諸型との關係は勿論、東山梨郡の他の諸村に於ても著しき差異あるであらうことを想定させるに十分である。しかしこれらの諸事實は、更に綿密な調査資料に基いて歸納しなければならない。

二

前に述べた岡部春日居二村に比べて、最も對比的な地區は、郡の北隅にあたる三富村を中心としての山村地域である。即ち三富・西保・諏訪・中牧の四つの山村のうち、西保村は交通上から見ると稍々西に偏してはゐるが、山村としての同型を有つ點からして、こゝに比較上揭示した。他の三ヶ村は、諏訪村の商業部落たる窪平を村落の中心地區とする點に於て、一つの山村地域と見ることが出来る。

先づ四村のうちで、最も山村型を有つ三富村を取上げて見る。林野が總面積の八割にも近くそれに反して田は僅かに三厘に過ぎない畑場所丈に、生活資源としての作物は著しく時代的推移を経てゐる。即ち明治十年頃には、畑には殆んど煙草を作り、麥（大麥七、小麥三）をその裏作としてゐた。然るに十七八年頃になつて養蠶が盛んになり、それに伴つて製糸場さへ出来るやうになつた。従つて明治三十五六年から桑畑が絶對的に多くなり、之に反し

第四表 現在人口減少指數表

村名	昭10	昭5	大14	大9
三富村	73	76	76	100
西保村	86	87	93	100
鶴瀬村	90	103	96	100
初鹿野村	94	98	100	100
神金村	98	106	99	100
玉宮村	98	92	93	100
東山梨郡	100	101	99	100

昭和10年國勢調査報告に據る

第五表 青年層人口率表

村名	總數		
	男	女	總數
三富村	71	44	115
西保村	71	49	120
鶴瀬村	79	27	106
初鹿野村	76	43	119
神金村	82	46	128
玉宮村	78	44	122
東山梨郡	79	76	155

昭和5年國勢調査報告に據る

て煙草は殆んど作らなくなつた。畑の作物にかゝる變化があつたばかりでなく、山林の所有關係や利用状態にも著しい變化があつた。即ち明治十年頃には、何處の山林でも出入が自由であり、伐採や製炭が思ふがまゝに出來た。その後所有關係が明かになるにつれて、その利用状態も制限され、殊に明治四十年後に大部が恩賜林となつてからその利用範圍が狭まると共に、生活資源としての森林が封鎖され、爲に著しく人口の移動を促進したかくて青年層人口率によつても見られるやうに、三富村は一一五%で、南東隅の山村、鶴瀬村（一〇六%）と共に最低を占めており、殊に女子青年が男子の七一%に比し僅かに四四%であることは山村生活の逼迫を示唆してゐる。これは三富村に限らず、この郡の山村の通型と見られることは、上掲の表によつて明かである。青年層人口率の低率が最近十五年間に於ける人口減少傾向と不可分の關係にあることは、第四表の人口減少指數によつてもそれが明かにされてゐる。かゝる山村の人口減少は、それが必然的のものであり、不可避であるばかりでなく南部の農村に於てすら、岡部春

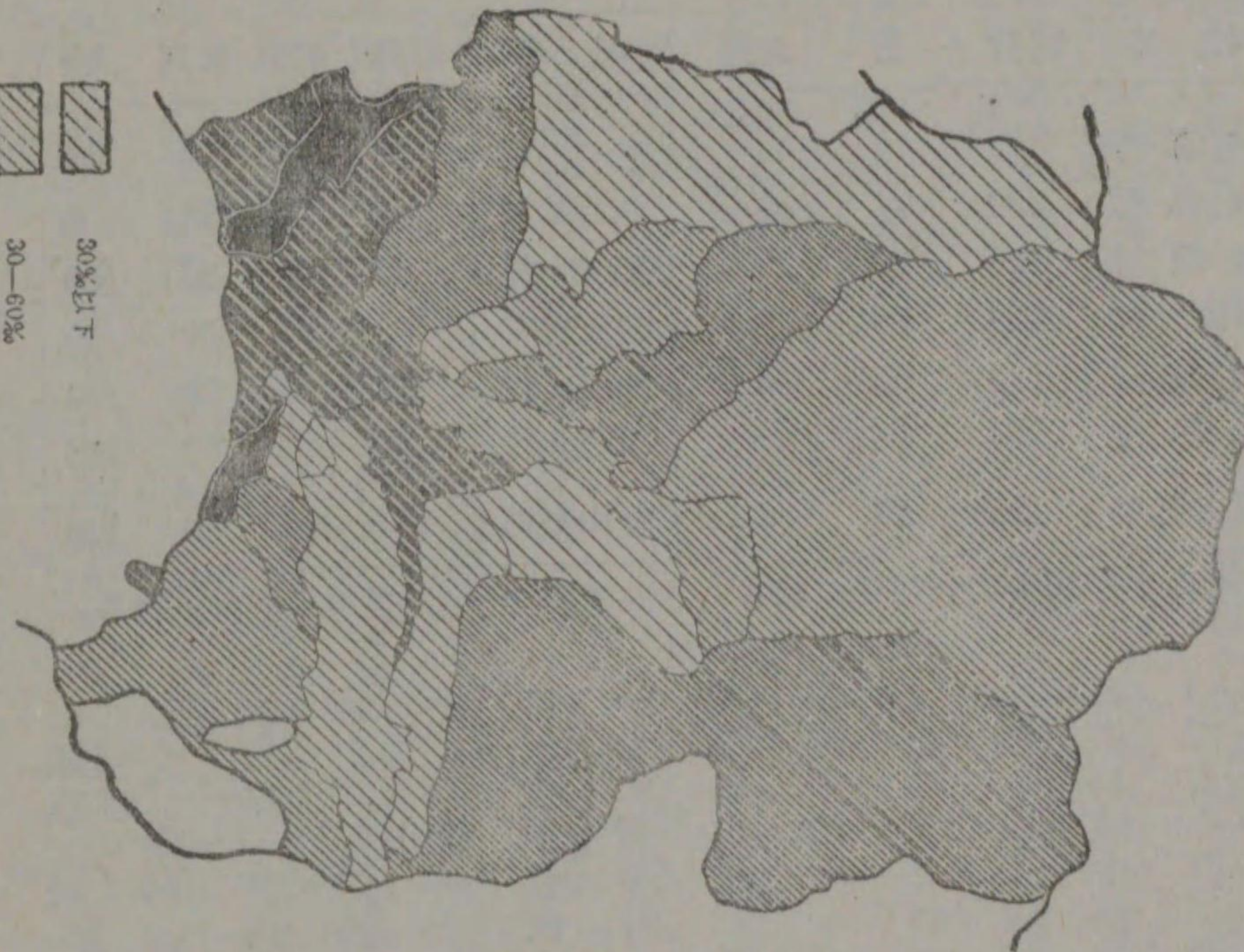
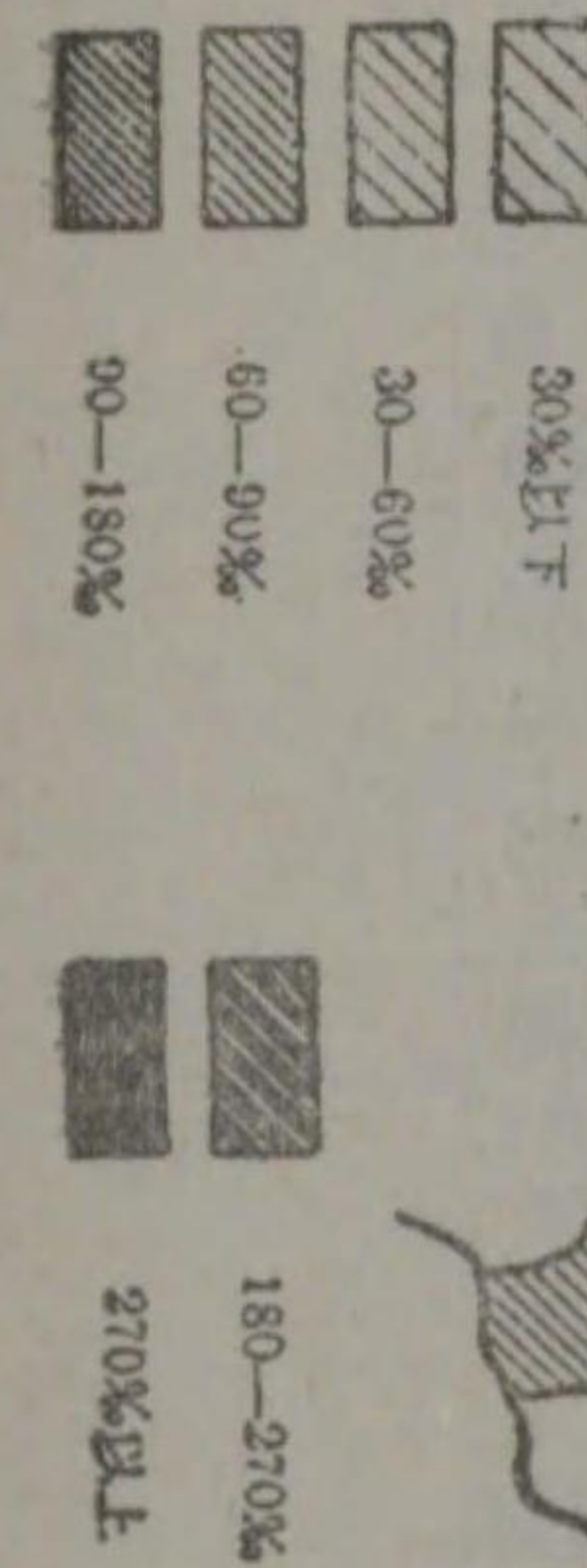
第六表 東山梨郡町村別土地人口表 (第二圖一第八圖對照表)

町村名	林野對總面積 %	桑畑對畑面積 %	田對耕地面積 %	小作地對耕地面積 %	青年層人口對總人口 %	農業人口對有業人口 %	工業人口對有業人口 %
山梨縣	516	722	346	526	165	606	192
東山梨郡	480	816	264	525	155	665	164
岡部村	350	916	459	664	191	563	244
三日居村	353	962	397	659	193	592	301
平等村	465	962	360	643	150	694	207
上萬力村	162	952	231	568	171	555	254
八幡村	451	809	302	476	136	753	149
岩手村	529	826	261	491	150	900	36
西保村	694	737	34	382	120	929	21
中牧村	546	766	284	437	146	851	78
諏訪村	617	811	210	451	153	678	137
三富村	786	687	3	459	115	808	70
松里村	337	898	311	532	126	834	69
日下部町*	30	946	275	552	173	447	248
後屋敷村	23	947	327	537	190	678	221
加納岩町*	48	930	354	622	201	502	242
日川村	5	898	334	669	184	662	206
等々力村	13	555	228	738	165	640	242
勝沼町	177	254	123	694	203	393	322
鶴瀬村	778	828	—	427	106	538	206
初鹿野村	885	793	—	381	119	739	63
菱山村	417	726	64	426	153	692	178
小佐手村	133	733	263	544	126	909	36
山村	60	875	200	425	173	910	46
休息村	111	853	375	606	136	831	45
綿塚村	2	994	613	708	135	877	43
奥野田村	536	803	269	464	140	885	55
鹽山町	177	918	328	521	156	400	244
大藤村	228	881	271	512	131	869	48
神金村	440	647	137	435	128	700	104
玉宮村	665	726	259	452	122	925	16

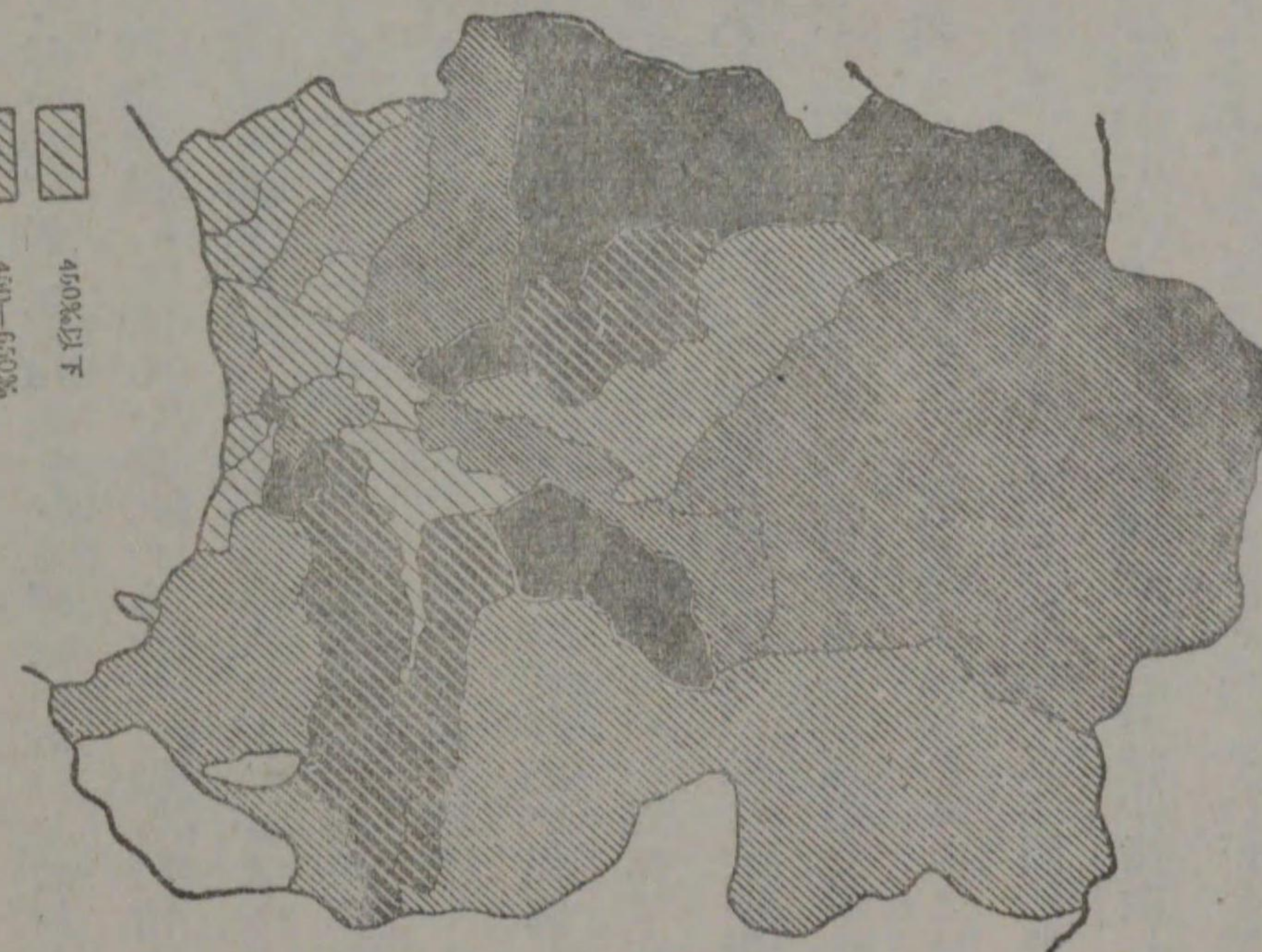
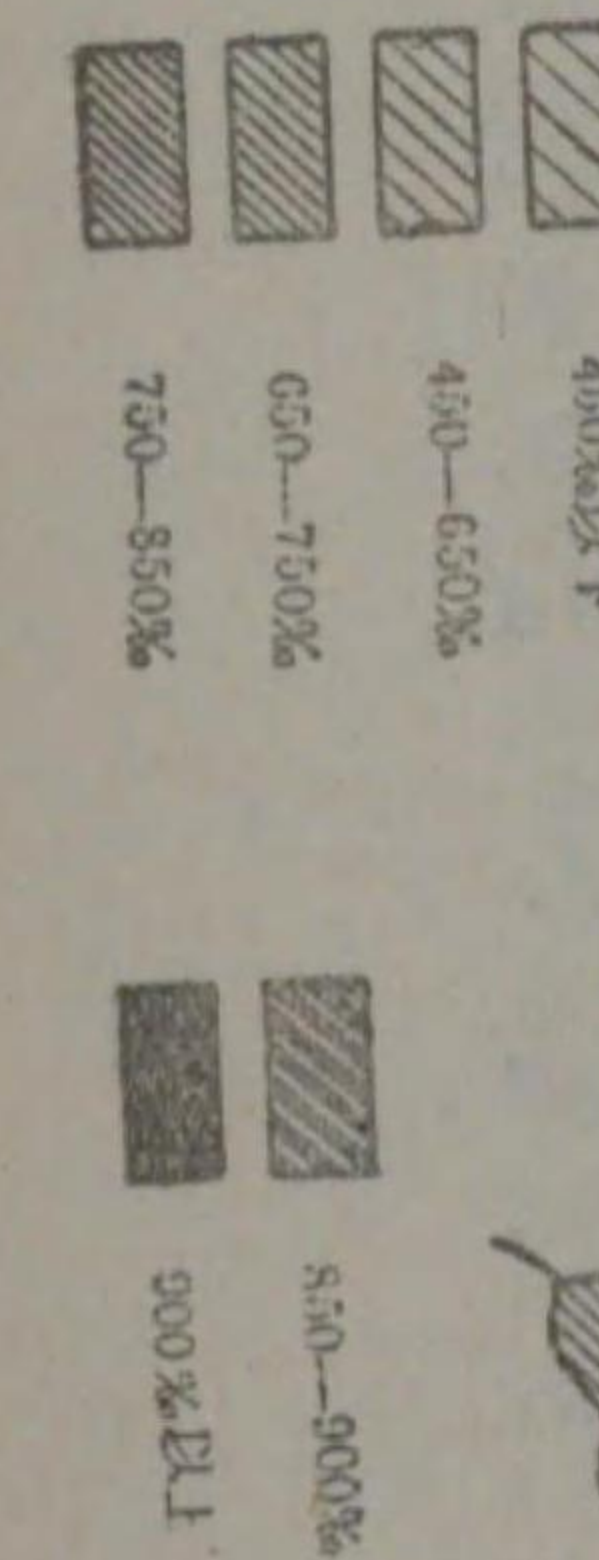
(備考) 林野面積は山梨縣統計書に據り昭和10年首の數字より、桑畑、畑、田、小作地は、昭和4年農業調査結果報告に據り、青年層、農業、工業人口は昭和5年國勢調査報告により計算した
*は昭和5年に於ては村であつた

九 小地域の人口研究と讀圖の重要性

二四一



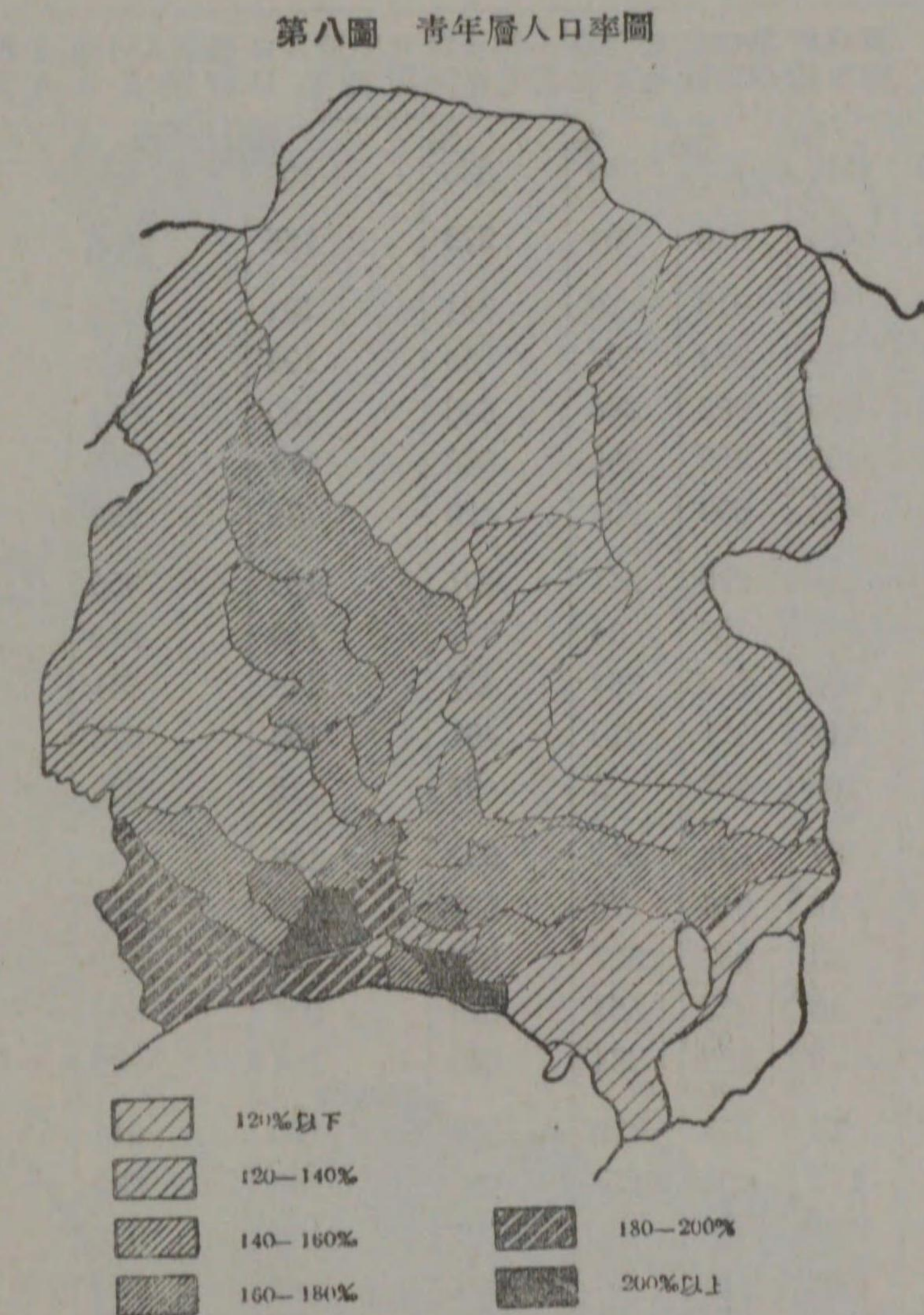
九 小地域の人口研究と讀圖の重要性
第六圖 農業人口對有業人口千分率圖



第七圖 工業人口對有業人口千分率圖
二四〇

日居二村で實證されてゐるやうに離村率が多いから、この郡の人口は郡外への流出が多く、町村を合せての青年層人口率は一五五%を示して、全縣の一六五%より遙かに低率であることが一層これを證據立てゝゐる。

三



この小論は、前稿に於て、「人口密度の上に第六階級（口一〇〇一人以上）等の密度圏を有つ東山梨郡は、郡内に山村地域を包含するにしても、その青年層人口率は一五五に過ぎないのは、笛吹川下流の養蠶地帯及び葡萄栽培地帯に於ける人口過剰の傾向をも暗示してゐるものではあるまいか」と述べた論旨を明かにしやうとする一過程であり、これらの研究の集積が綜合現象としての人口の地域性の眞の解釋とな

り得ることを意圖するもので、人口の地域性を見出す上に、村別に統計を比較することは、最も基本的のものであり、更にこれを圖化する事によつて、一層地域性が鮮明されるばかりでなく、統計數字のみの比較の上から見出されない暗示を受けることが少なくない。これ小地域の人口研究に讀圖の重要性を提唱する所以である。しかもこれらの讀圖の比較研究が、單に率の高低の水平的分布を記述するに止まらず、進んでそれらの社會經濟的原因を解釋するに至り、それらの全國的研究の集積によつて、始めて地方人口の眞意義が明かにされる。非常時局の今日としては、平和産業の萎縮から没落するに至つた職業人口を如何に處理するかといふことは、現下國策の最も重要なものであるとしても、地方生活に直面してゐる學徒並に教育者は、以上に述べたやうな平時の人口現象が、平和産業と戦時産業とに如何に配分されつゝあるか、それらの關聯が如何に地方生活に影響を及ぼしてゐるかを靜觀しつゝ、戦後への準備に役立たす心構は當然、今日から考へられて然るべき問題である。

終りに、この東山梨郡の人口研究過程に對して、特に援助を煩はした故柳澤保惠伯に深甚の謝意を表すると共に、實地調査を共にした藤間生大氏と、作圖並に集計の勞に當られた上田正夫氏の勞を謝したい。

(註) 「小地域の人口の研究」に現はるゝ地域性は、他の小地域と比較することによつて一層それが明瞭にされる。こゝに秋田縣の南秋田郡と比較すると、排地の分布が地形によつて支配されてゐることは東山梨郡と同様であるが、農業人口の率は、南秋田郡に於ては、必ずしも耕地の率と正比例してゐないことは、山麓から平野にかけての諸村に鑛業(石油)などの興起してゐる所があるのと、八朗湯畔の村々に漁業が營まれてゐること、また街村の多いことなどが影響してゐる。これを人口増加率の上から見ると、この郡に於ける増加傾向の著しい所は、秋田市・土崎町の影響ある村々や、小さな町のそれに過ぎない。郡全體の上から見れば、増加は極めて低率である。殊に青年層人口率を比較すると、東山梨郡が、南部の農工業地域に高率を見るのに反し、南秋田郡に於ては、かゝる地域的中心地區を有つてゐないことは、その産業の經營形態が、東山梨郡ほど高度化されてゐないことを立證するものであらうと思はれる。なほ村落の青年層人口率の高低を比較するに當つて、こゝに注意しなければならぬことは、村落に居住しながら、その勞働關係は、附近の都市との依存關係にある傾向であつて、これは大都市並に近代工業殊に軍需工業の勃興によつて、新に興りつゝある新現象である。最近、神奈川縣の囀を受けて、「農村ノ人的資源トシテノ青年ノ體力調査」をなすために、東京・横濱・川崎・平塚などの大都市、またその他の工場工業の影響が如何に附近農村の青年勞働力を吸収し消耗しつゝあるかを見聞した實驗は、かゝる青年は、居村から自轉車・電車又は汽車によつて、大都市又は工場に通勤するものが少なくないことを確めた。従つて農村に居住しつゝ農業に従事するものは、比較的自身の劣悪なものが殘存する傾向を生じて來てゐることは、國民體力の上から見て、看過すべからざる大きな問題であるといはなければならぬ。

一〇 村落居住と人口との關係の一考察

一 研究の基準

村落居住と人口との關係を考察するに當つて、村落居住の諸型がまづ問題となさるべきである。この村落居住の諸型の研究基準は、居住地理學の範疇としては、今日、村落集團の形態としての集中と分散とその混合との三つのタイプが、取上げられてゐることは、ドウマンジョン教授の所説に徴しても明かである。しかし日本のやうにかゝる研究の創始期にある國に於ては、この種の研究文獻が極めて少なく、従つてそれらの比較研究をする便宜が乏しい。殊に明治以後の地方行政上の村治の單位は、行政區劃としての村であつたために、村落の實生活に於ては、共同生活の單位としての部落の機能が、發生的にも經濟的にもまた社會的にも、常にその基底となつてゐるにもかゝらず、それが長く行政區劃としての村の姿にかくされてゐた。従つて部落を學術的に考察し、また科學的に分類することは、あまり試みられてはゐなかつた。

故に、この論文で取扱ふ村落居住の諸型の分類は、それらの居住の依存する地理的環境即ち生活環境としての土

地が、村落居住の單位たる部落の立地上、如何なる土地利用率を示してゐるかといふ標準から、大體、

- 一 主に山林に依存する部落
- 二 主に水田に依存する部落
- 三 主に畑地に依存する部落

に分ち、それらの諸型態に就きて、まづ人口集團・職業並構成の單一なものから複雑なものへの比較に於て、以上の三つの種別の村落居住型を説明し、またそれらの構成分子であり、基本型である一農家の居住様式・家族構成・土地利用・生産形態等をも分析比較しつゝ、それが村落居住の研究單位とした部落の居住様式・土地利用・人口密度・戸口増減等と如何なる關係にあるかを明かにし、以て、村落居住と人口との關係の研究に寄與すべく試みた。

こゝに研究資料として取扱つた基本的な部落の數は、

- 一 山村部落に關するもの 四五
 - 二 田を主とする部落に關するもの 四三
 - 三 畑を主とする部落に關するもの 三九
- であつたが、その中から特に統計資料の整備したもの
一 山村部落 一〇

- 二 田を主とする部落 八
- 三 畑を主とする部落 七

を選んで、本研究の對象とした。元來この種の研究は、現地を踏査して、

(一) 所定の村落居住が、如何なる土地形態に立地してゐるか、それらの自然的環境が生活資源として如何なる價値を有つてゐるか、またそれらの利用價値が社會經濟的變遷と如何なる關聯にあるかを觀察し、更にこれらの因果關係の諸原因を究明するためには、

(二) それらの村落居住の歴史的文献並聞取によつての研究をも併せ行ふべきである。

元來、この研究に用ひた資料は、筆者が一定の調査項目により、地方から蒐集したもので、その後現地を踏査する機を得なかつたから、これらの資料による研究の方法としては、左の二つの方法即ち

- 1 統計による村落居住と人口との關係の研究
- 2 地圖による村落居住と人口との關係の研究

以外に出づることが出来なかつた。

しかし、かゝる研究方法が、日本の村落居住の研究に對して、

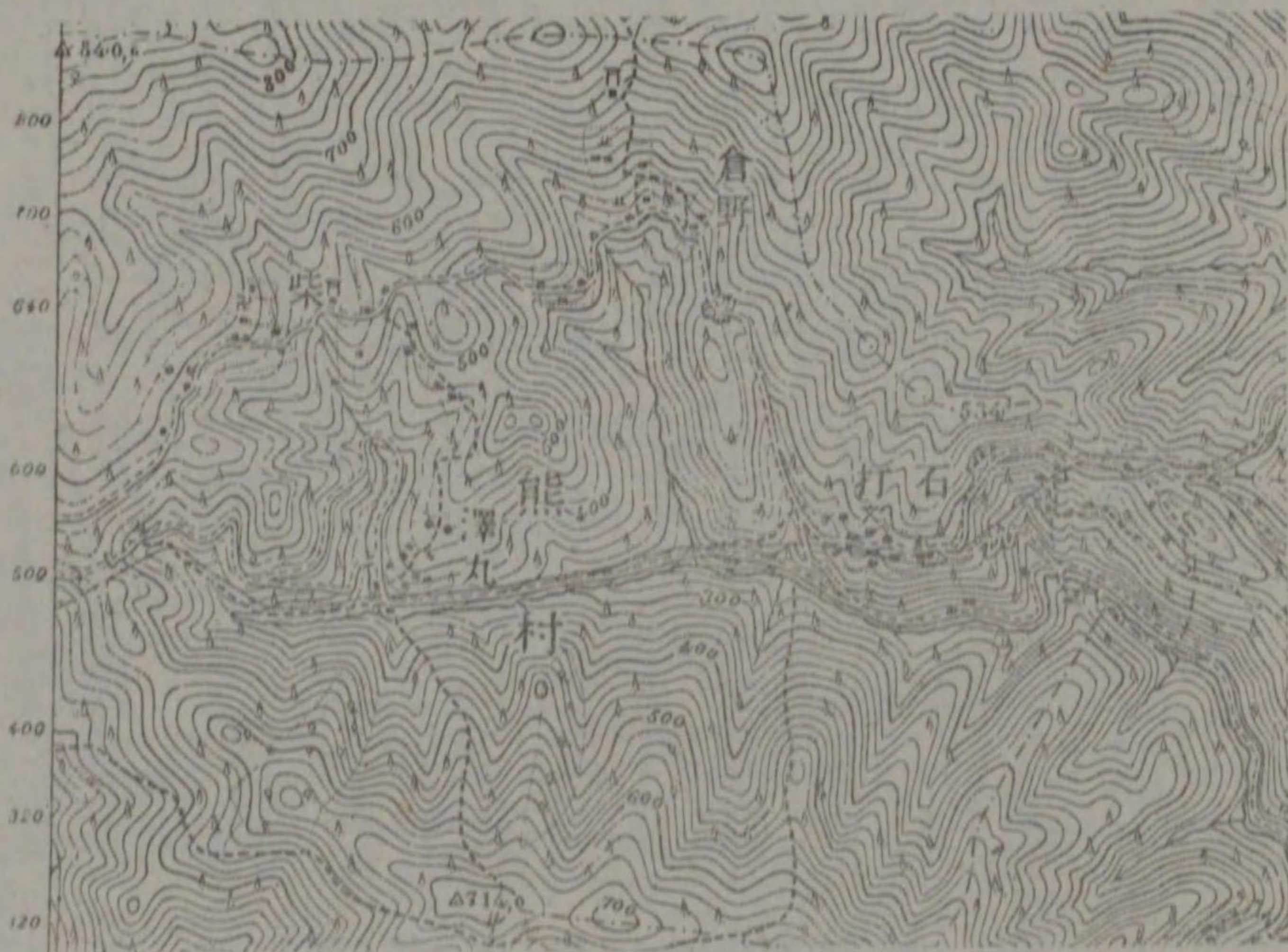
定義と方法の問題

に到達する一つの方法であり得ることは筆者の信する所である。故に現地を研究対象となし得る人達は、山村から農村への村落居住の地域的關聯を有つてゐる纏つた土地を選び、そこに立地する諸部落の特質並それらの相互關係に就き、實證的研究を試みられ、相携へて斯學の建設に寄與してほしいと思ふ。

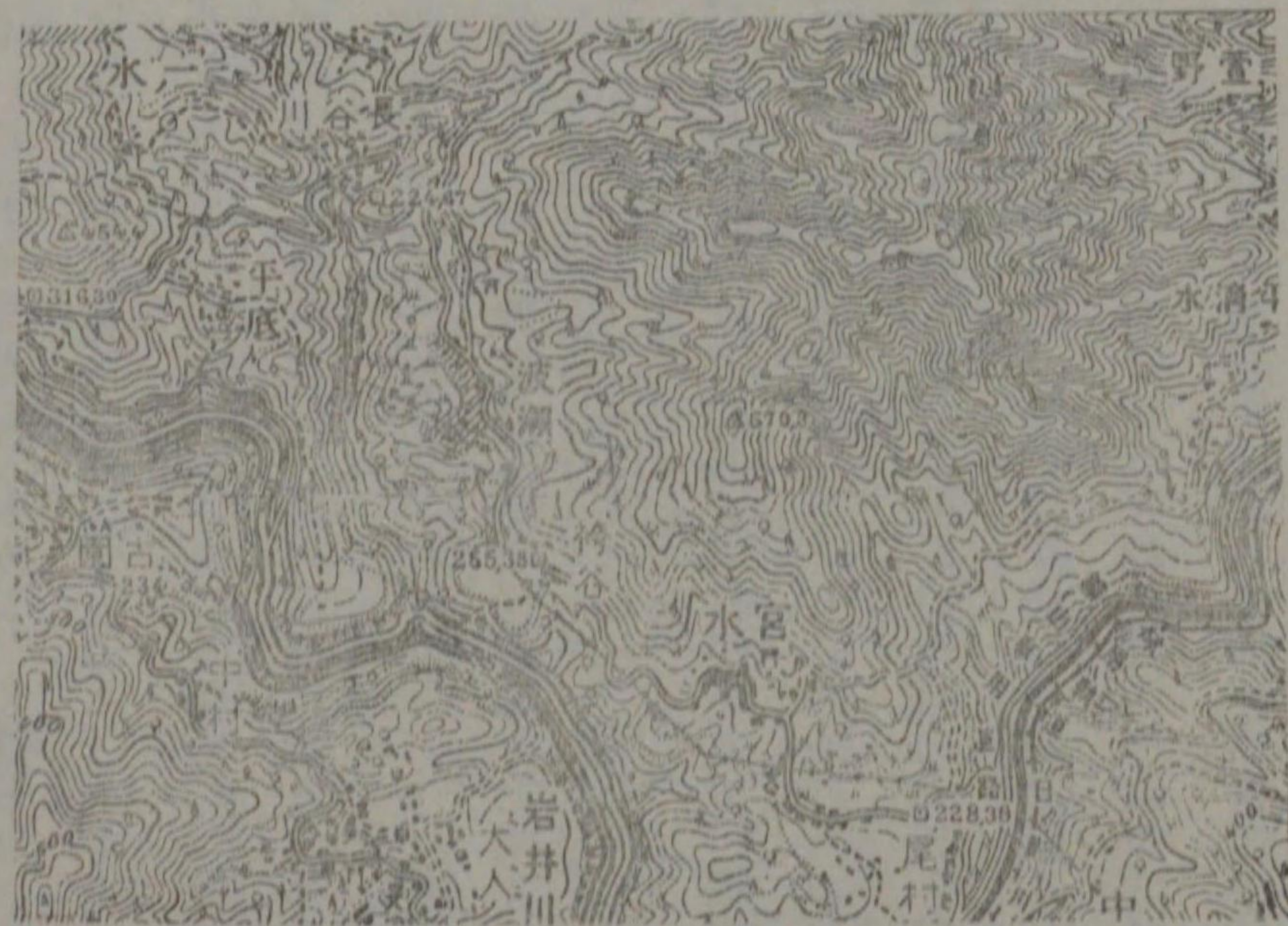
二 農山村部落の基本型にあらはれた居住と人口との關係

基本型としての農山村部落の選定は、最も戸口数の少ない、而も居住形態の單純な部落を基準にすることが効果的である。かゝる意味でこゝでは十五戸未満の五つの部落、即ち仙納原(山村)・澤丸(山村)・袴谷(山村)・荻野(田部落)・下新庄(田部落)を選び、その居住度即ち、部落面積對宅地面積率を比較した。山村にはそれが狭く田場所にはそれが廣いことは勿論、仙納原のやうに部落の全面積が特に廣い所と、荻野のやうに狭い所とを考慮の中に入れなければならぬけれども、それ自身が、山村として、また田場所としての立地關係の特色を示すものであるとも考へられる。

山村部落の中で、山林の中の島とも見られるやうな仙納原(富山縣東礪波郡利賀村)は、利賀川に沿つてゐるこの部落の北隅にあつて、戸数は僅かに七戸に過ぎないが、部落の面積は相當に廣いから山林の利用率は六一・二六%、原野のそれが九・〇九%であり、畑は一・三四%、これに對して宅地は僅かに〇・一四%に過ぎない。山林の中で



第一圖 澤丸部落



第二圖 袴谷部落



第三圖 下新庄部落

み考察するならば、一見して甚だ矛盾が感じられるが、澤丸の戸数人口の減少は、「好況時代ニ山林ノ採伐運搬ニテ

八〇町歩は保安林で、潤葉樹林が廣く針葉樹林も混つてをり、宅地まはり桑畑(春蠶五・夏三・秋二の割合)が多く、楮畑(製紙は冬季の主業)もある。これに續いてゐる原野は、住家の屋根に葺かる、茅の供給地であるが、漸次畑地に變りつゝある。かゝる山村の標準農家(自作)の生活資源は、主として山地(山林・原野・畑)に依存し、田は耕作が出来ず、養蠶を主業とし、製炭や製紙を副業としてゐる。これに比べると、風土の比較的暖かな澤丸(静岡縣磐田郡熊村)は、同じく山村であるが、標準農家の土地經營状態は、山林・原野・畑の外、田も耕作し、茶・果樹などを栽培してゐる。然るにこれを戸口増減の上から見ると、十年間(大正九―昭和五年)に、仙納原が僅に一戸を減じてゐるのに、澤丸では却つて十九戸のうち五戸を減じ十四戸になつてゐる。

他町村人ノ在住スルモノ多カリシモ、山林ノ伐採減少スルニ從ヒ、外來者ガ減少シタル結果ニテ、從來ノ本籍者ニハ増減ナシ」とあるによつて明かになつた。これによつてみても、統計數字の解釋は、それ自身ばかりからは得られないと思ふ。袴谷(宮崎縣西臼井郡七折村)に至つては、面積も以上の二つの部落に比べると、小さい街村である。

第一表 基本的農山村部落標準農家土地・人口・居住比較表 (昭和6年6月報告)

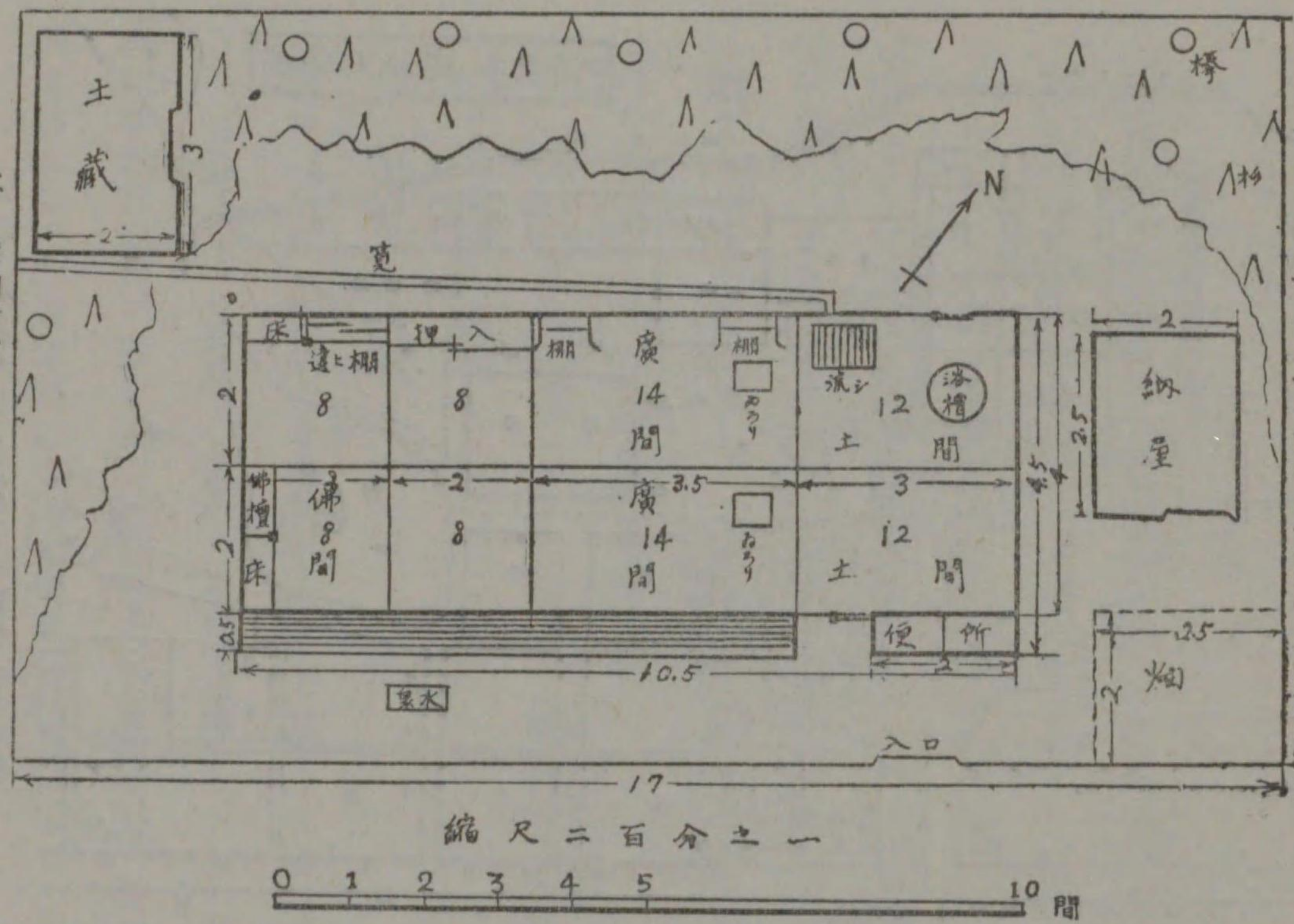
種別 (戸數)	面積	土地利用				人口密度		人口増減		標準農家		土地利用					
		宅地	田	畑	山林	戸數	人口	大正一	昭和五	標準	居住	田	山林				
仙納原 (7)	43708.48	0.14%	0.02%	11.34%	61.26%	0.89	12.5	87.50	84.61	7.9	自(7)	8.9	1.6	0	459.9	5950.4	1933.5
澤丸 (14)	30852.78	0.30%	0.51%	3.48%	95.71%	1.28	43.6	73.68	84.11	6.4	自(8)	8.4	2.2	34.2	112.1	3220.9	99.2
袴谷 (10)	3176.00	1.64%	25.19%	7.72%	54.28%	2.08	340.1	100.00	130.13	10.8	自(12)	7.0	1.7	150.0	52.0	0	0
田部 (12)	1694.38	4.10%	87.21%	3.75%	2.34%	0	1.14	602.6	107.6	105.5	自(9)	19.2	1.9	217.8	24.8	16.8	14.8
下新庄 (14)	3915.73	2.69%	95.26%	1.89%	0.06%	0.84	222.2	93.3	87.1	6.3	自(9)	12.9	4.3	227.7	0	0	0

れども、戸口指數は共に増加してをり、一戸當の人員もまた多いのは、氣候の暖熱な九州である丈に、土地經營が多様であること、また街村であることなどが、その原因であらう。

然るに、五つの部落の中で田部落としての荻野(新潟縣西蒲原郡彌彦村)と下新庄(石川縣石川郡富奥村)を比べて見ると、土地利用度は

共に田に依存し、前者は八七・二一%、後者は更に九五・二六%を示し、宅地の利用度も、山村部落に比べると、共に廣く、特に下新庄が二・六九%であるのに、荻野は四・一〇%に上り、荻野は人口密度も戸口指數も共に高い。それにはこの二つの田部落の畑の利用度と、標準農家の土地經營とを併せ考へる必要がある。まづ下新庄の標準農家(自作)に就て見るに、田は悉く二毛作をしてゐるが、畑の經營は荻野ほど多角的ではない。それが戸口殊に人口の減少に相關的にあらはれてゐる。即ち十年間に下新庄は一戸を減じ、更に人口は十三人を減じ、報告の中にも一戸數人口ノ減少シタルハ、漸次農業經營ノ發達進歩スルニ從ヒ、勞力ノ剩餘ヲ來シ、自然ニ他ニ轉住シ、生計ノ途ヲ講ズルニ至ルモノナリ」とあるのに反し、荻野の戸口指數は共に増加傾向を示してゐるのは、部落としても、土地利用が均衡し、なほ吉田町や彌彦神社の門前町などに隣接して交通の便よいため、下新庄に比べて畑作の經營の利用率が高く、それが一層集約化して、園藝から養豚・養鶏・蜜蜂・搾乳等へと進みつゝあるからである。即ちこれは部落の宅地を圍繞してゐる耕地が、蔬菜栽培は勿論、花卉栽培も共に行はれてゐるのでも明かであり、標準農家(自作)の宅地が、果樹・蔬菜の栽培、花圃等に利用されてゐることも徴せられる。なほこの部落の全戸數十二戸の中で、材木商・雜貨商・運送業・屋根職等、職業の複雑性を有つてゐることも、またこの部落の有つ特質が、單一的な仙納原・澤丸・下新庄などに比べて、著しくそれが人口の包容度を有つてゐることを證據立てゝゐる。

荻野部落の標準農家(自作)の宅地の利用度と、その居住様式は、仙納原の自作農のそれに比べて、寧ろ都市的

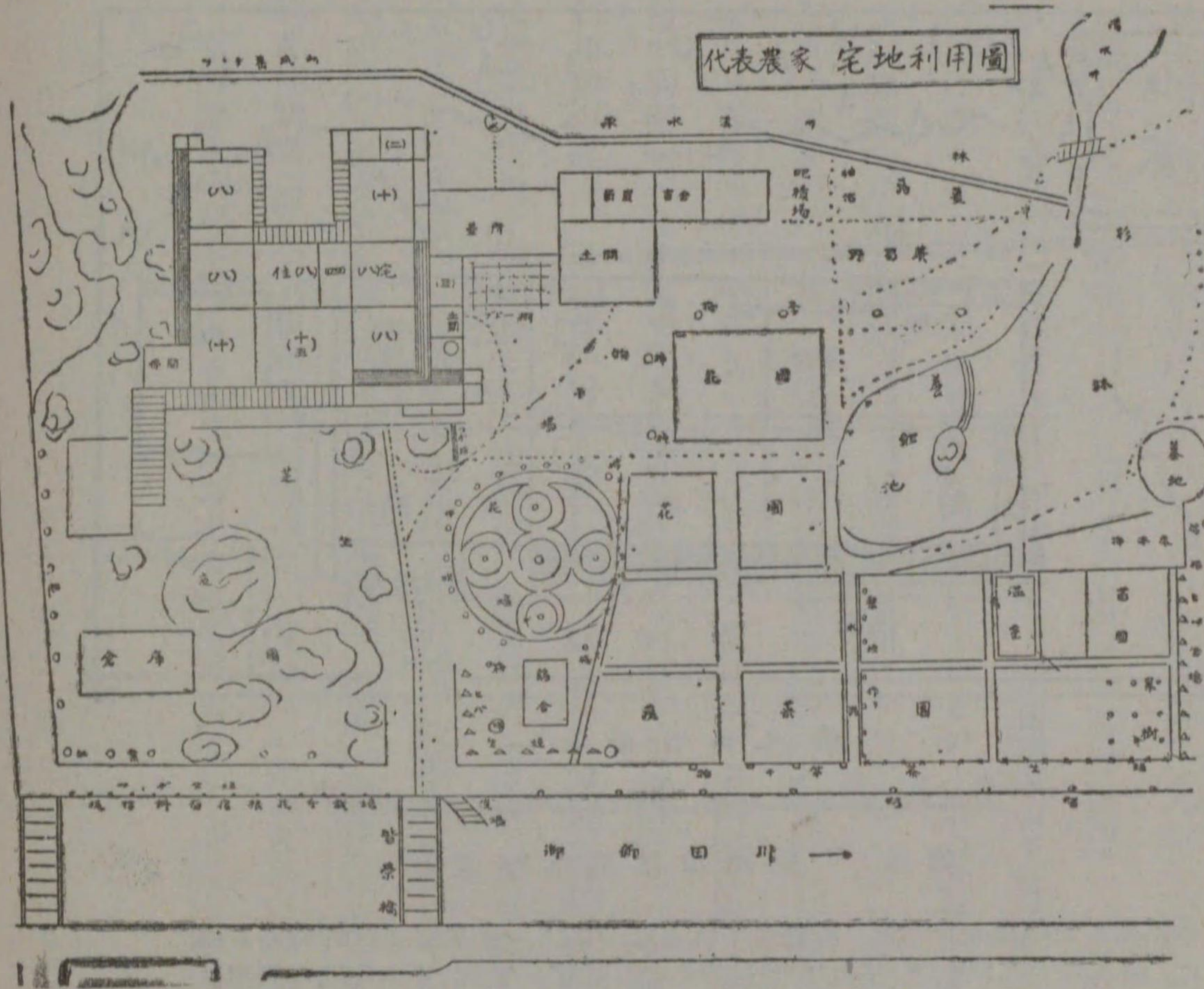


第四 仙納原部落標準農家

仙納原の標準農家の宅地と荻野のそれと比ぶれば、前者が270坪であるのに、後者が581.5坪で、優に2倍を超えてゐるばかりか、その宅地の利用は極めて集約的である。即ち庭園や芝生、花壇や池(養鯉)など觀賞と慰樂の施設を始めとし、手廣い蔬菜園(143坪)花卉の採種園、庭園に植ゑる樹木の苗木園が設けられ、外に蔬菜や花卉を培養してゐる温室、蔬菜の促成を試むる温床がある蔭地には獨活や蔞や玉蜀黍が栽培され、垣根には櫻や桃や梨、また茶や躑躅など植ゑられてゐる。荻野のこの標準農家は、田(22反)畑(2.5反)を兼營してゐる外、杉林(1.2反)や松林(0.4反)をも栽植し、なほ原野(1.5反)の開墾にも着手してゐる。

家族構成 戸主39 妻37 父62 母64 長男19 次男15 長女9 三男5 四男3

傾向さへ示してゐる(以下二部家宅地・住家参照)。即ちそれには、村落居住の基本型たる農家の居住形態と人口との統計的關係の解釋があらはれてゐるばかりでなく、廣い意味での生活水準の程度、またそれらを基底としての農村文化の複雑性が包含されてゐるのであつて、それがこの部落の村落共同體としての機能をも、保健・衛生等に關する思想をも、かゝる生活様式と緊密な因果關



第五圖 荻野部落標準農家

係から生み出してゐるものと見られなければならない。

以上、五部落を通じて、各部落の宅地面積が山村部落に比して田部落のそれが広いことまた標準農家一戸當のそれも同じ傾向を示してゐることは、生活環境としての地形の然らしむる所であるばかりでなく、田場所としての稲作經營に伴ふ干場の必要性が然らしめてゐることも考へられなければならない。

三 標準農家にあらはれた居間の廣狹と農山村居住との相關關係

村落居住の諸形態が、その最も單一な基本型に於て、それらの純正な姿をあらはすやうに、それらの構成分子である標準型農家の家構と宅地利用度にもあらはれてゐることは、已に仙納原と荻野によつてこれを實證し得たのである。かゝる個々の農家の居住型の特色は、單一な基本型にそれが現はれてゐるばかりでなく、複雑なる型の構成分子としても、それが現はれてゐるから、以下農山村の居住の諸型と人口との關係を述ぶるに先だち、その一般性を明かにすることが必要である。しかし農家の居住型の全機構を研究の對象とすることは、却つて居住の諸機能に關する種々の形態をその中に混入し、ために農山村としての構成分子たる農家の居住型を明かにし得ない虞がある。故にこゝでは標準農家三十五戸

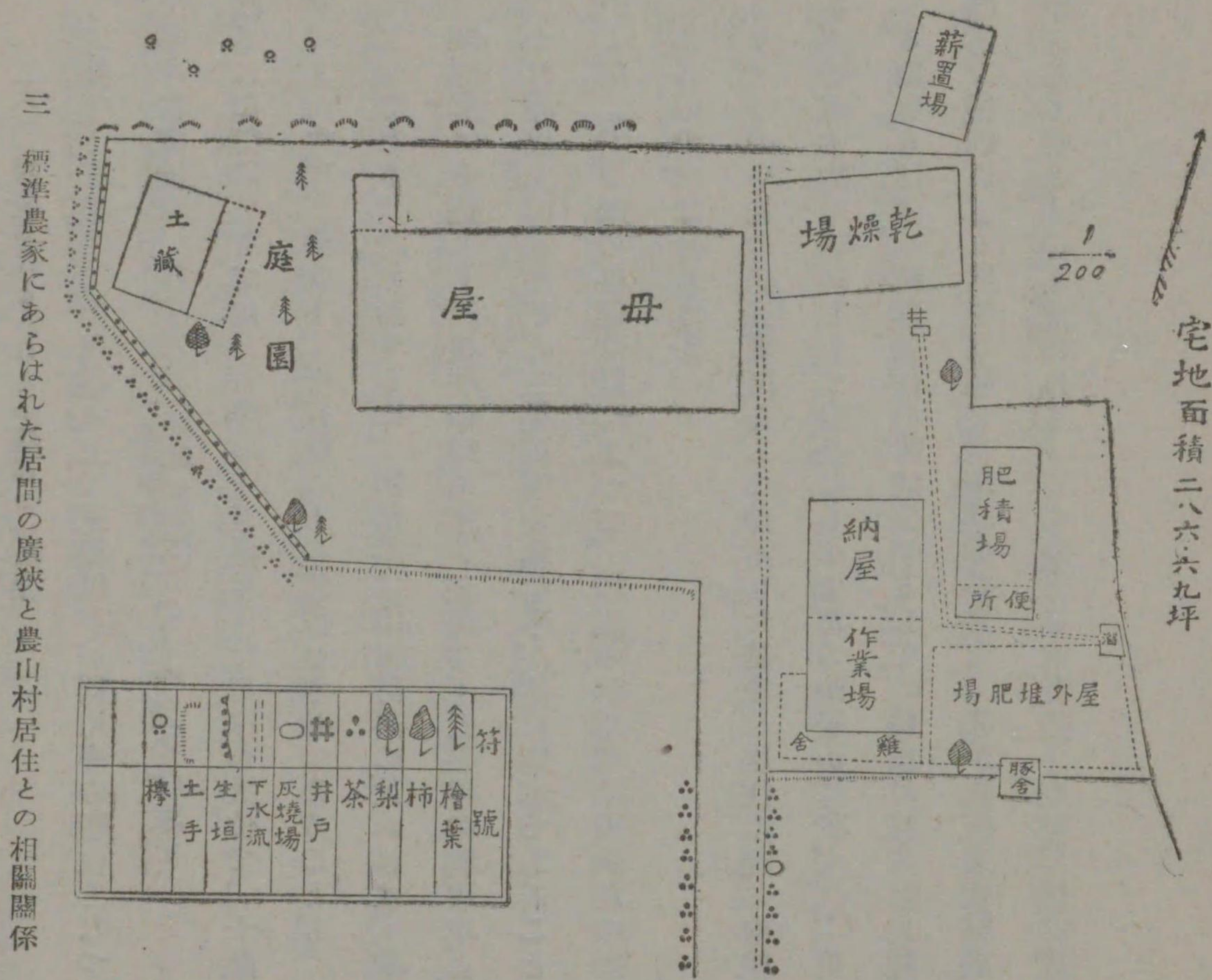
- (1) 山村部落の農家 一四戸(山形縣は地主・自小作・小作三戸を算入)
- (2) 田部落の農家 一一戸
- (3) 畑部落の農家 一〇戸

に就き、それを種別に、各農家の居住空間の中核たる居間を、廣狹別による左の五階級に分ちて、それらの間數

三疊以下 三疊半—五疊半 六疊—九疊半 十疊—十四疊半 十五疊以上

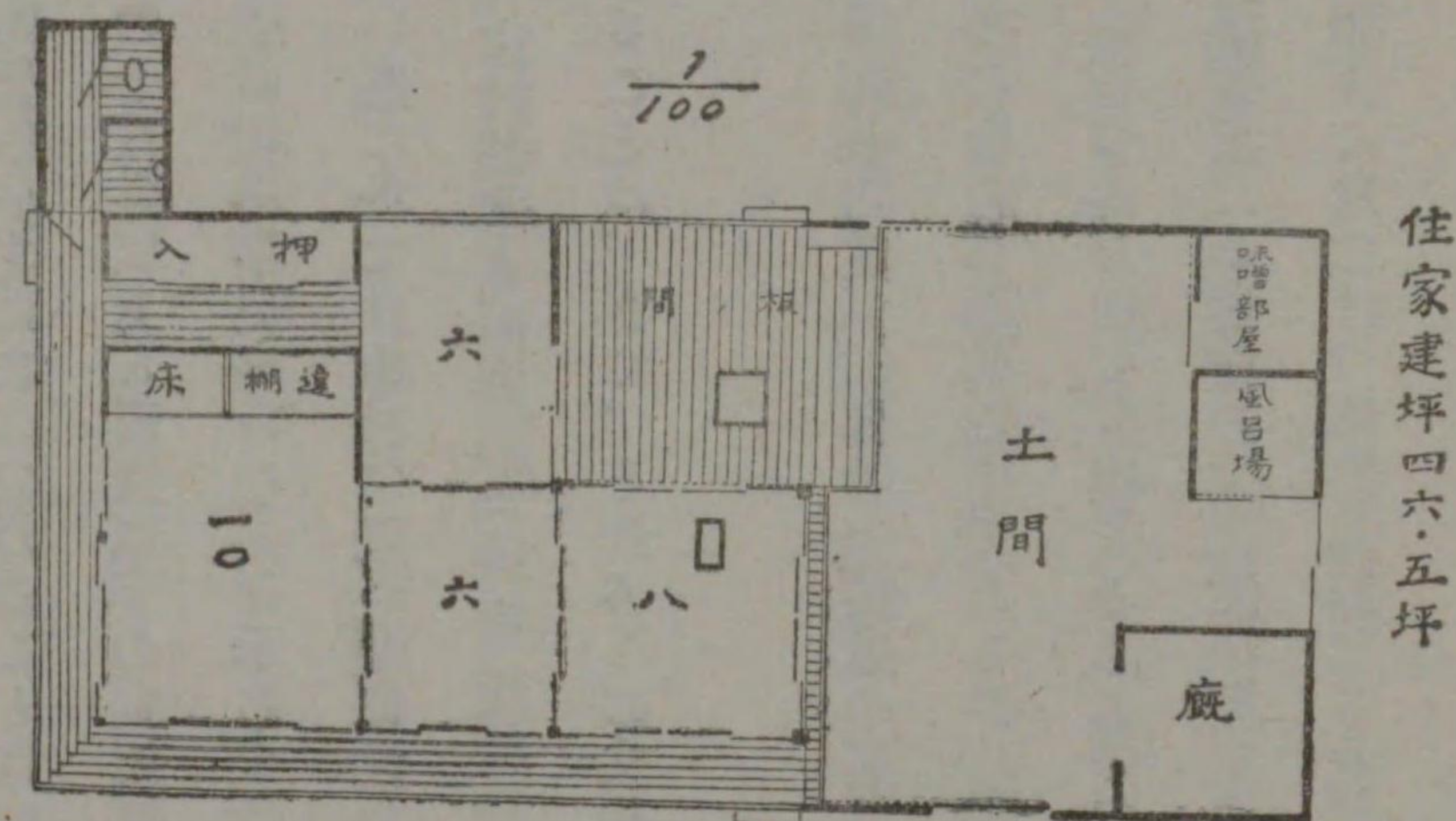
利用率を算出し、以て農山村部落の生活環境が、山地であり、水田であり、また畑地であることにより、農家の生活様式としての居住型が、如何なる差異を示してゐるかを明かにしようとして試みた。即ち各農家の母家に於ける居間

三 標準農家にあらはれた居間の廣狹と農山村居住との相關關係



三 標準農家にあらはれた居間の廣狹と農山村居住との相關關係

二五七



第六圖 鹽子部落標準農家

住家建坪四六・五坪

第二表 部落種別一戸當居間廣狹別利用率

居間廣狹別	種別		
	山村部落	田部落	畑部落
3疊以下	0.14	0.55	0.33
3疊半-5疊半	0.36	1.00	0.33
6疊-9疊半	3.00	4.09	2.56
10疊-14疊半	1.00	0.82	1.22
15疊以上	0.21	0.09	0.33
計	4.71	6.55	4.77

一〇 村落居住と人口との關係の一考察

二五六

の數を、以上の五階級の廣狹別に集計し、その各々の間數を、山村部落に於ては標準農家の總戸數十四、田部落に於ては總戸數十一、畑部落に於ては總戸數十を以て、それら廣狹別の居間數を除し、以て、山村部落・田部落・畑部落に於ける一戸當居間數の廣狹別利用率を算出して上表の結果を得た。

上表によれば、山村部落一農家當の居間數の平均利用率は四・七一間を示し、田部落に於てはそれがより高き六・五五間に上り、畑部落に於ては、兩者の間型とも見らるべき四・七七間の率を有つてゐる。更に一戸當の居間の廣狹別の配合率を見ると、農山村何れの部落に於ても、最も利用率の多き居間は、六疊-九疊半であり、それが山・田・畑の三つの部落種別により左の利用率

山村部落 三・〇〇
 田部落 四・〇九
 畑部落 二・五六

を示してゐる。即ちこゝにも、畑が他の兩者の中間の利用率を示してゐる。更に三つの部落種別によつて廣狹別の利用率を比較すれば、山村部落に於ては、最も利用率の多い六疊-九疊半の居間數に次いで、十疊-十四疊半で

あり、三疊半—五疊半、十五疊以上、三疊以下が利用率の順位となつてゐる。こゝに山村の居住型の基本的なものとして示す住家圖は、鹽子部落(茨城縣西茨城郡七會村)の小作農の住家で、その居間の利用率は前に述べた山村型の適例である。然るに田部落に於ては、三疊半—五疊半の利用率が次位で、十疊—十四疊半が之に次いでゐることは山村と逆であり、また次に三疊以下、十五疊以上の順位を示してゐることも、山村の十五疊以上と三疊以下の利用率の順位と逆になつてゐる。之を要するに、田部落は山村部落に比ぶれば、狭い居間の利用率が高いことを示してゐる。然るに、畑部落は十疊—十四疊半の利用率が三疊半—五疊半の利用率より高い點に於ては山村に近い類似性を示してをり、十五疊以上の利用率と三疊以下の利用率が共に同率であることが、山村部落と田部落との中間に位してゐる。かく山・水田・畑の各部落別によつて、居間の利用率に廣狹別の差異あることは、また、それらの文化度を暗示してゐるのではなからうか。

固より、この小論の研究資料として使用した農家の居住空間の中核たる居間の間数が、日本の農家の居住型を決定する丈の基本的な資料として完全なものであるか否かに就ては、更に嚴密な検討を要するのであるが、少なくともかゝる研究方法は、村落居住の構成分子としての農家の居住型を類別する一つの方法たり得ると思ふのである。また部落の種別による居住空間の利用率の差異は、我が民族文化構成の重要要素たる農村の文化度を測定する一つの基準となり得るものと思はれる。この村落の文化度と居住空間の廣狹の關係に就ては、博學達識なる故新渡戸博

士は、已に、「地方の研究」の名論文の中に、

僕は、又久しく、日本の家屋の建築法を調べて見たが、奥州の果から鹿兒島の隅まで、殆んど同一の建築法である。大和民族の標準的家屋といふものは何れも横長の家で、始めに土間があつて、次が板の間、奥が座敷といふ構造で、入口は必ず土間の所に在る。是より段々上等の家になると、壁を以て其の區劃を多くし、即ち部屋を澤山造る爲め、次第に土間が狭くなり、遂に土間が玄關と進化する。生計の程度と土間（一名庭或は中庭）とは反比例に進む。（『新渡戸博士文集』）

とあるのにも、以上の集計の結果が符合するのである。

思ふに、我が大和民族は、古來水田耕作に依存しつゝ生活して來たから、田部落はその生産形態を保持してをり従つてそれらの居住型には、山村部落がより原始的な生産形態を營みつゝある居住型を示してゐるのに比べて、より文化度の進んだ居住型を示してゐると云ひ得ると思ふ。新渡戸博士の所謂土間が狭くなりつゝあるといふ傾向も前に掲げた鹽子・仙納原・荻野三部落の農家の間取を示した住家圖によつても、それが實證し得られるのである。

以上、居住空間の中核としての居間の利用率の差異によつて、農山村居住の基本型を大觀した。しかしこれらの基本型も、農山村それらの機能と不可分の關聯を示す所の

附屬建造物の種別數・棟數並その利用度

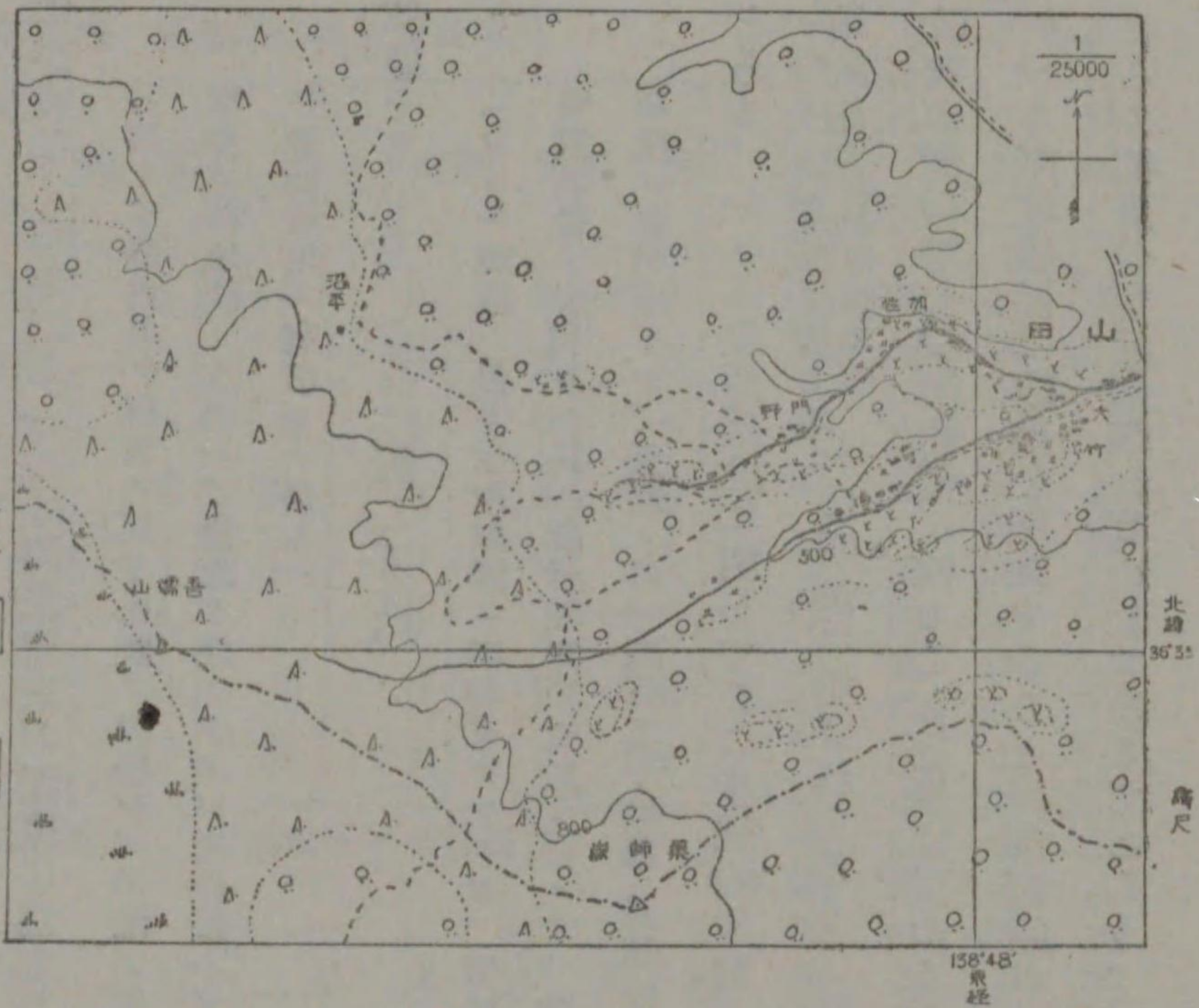
を比較考察することによつて、はじめて村落の居住諸型の核心を把握し、その文化度を測定し得るのである。しかし、さる微細な研究は、現地の調査によつて観察され比較されるべきものであるから、こゝには、農家の居住型は、農村生活の水準を下すべき重要な指標であるから、従来の如く建築學的興味また住宅政策的施設からばかりでなく、農村文化の傳統と、生活の全表現として農村の居住型の基本たる農家を、考察することの必要なことに言及するにとめておかう。

四 山村の居住の諸型と人口との関係

山村部落とそれらの標準農家に就て、各部落の土地利用や人口密度、戸口増減指数、また各農家の居住面積、

第三表 山村部落並標準農家土地・人口・居住比較表 (昭和6年6月報告)

部落名 (戸數)	面積	土地利用率					人口密度 (戸部 1方町)	戸口増減指数 (大正9昭和5)	標準農家 (1戸 家族 人員)	居住面積		土地利用面積					
		宅地	田	畑	山林	野				住宅	田	畑	山林	野			
栗 (5)	65303.12	0.48%	9.28%	1.31%	83.45%	0.20%	0.92	44.4	94.62	108.28	5.6	0.8	1.7	143.8	34.7	1537.2	0
大竹 (72)	15791.69	1.79%	1.65%	25.85%	66.96%	3.72%	1.56	28.4	100.00	111.33	6.1	10.2	1.8	29.8	128.9	297.5	0
吉澤 (87)	26354.00	2.22%	16.97%	12.24%	67.74%	0.06%	1.02	226.1	101.11	96.75	6.9	7.2	1.5	58.0	53.0	60.0	0
折敷地 (100)	454375.00	0.16%	2.27%	3.18%	80.09%	14.31%	0.80	11.8	103.09	107.03	6.4	5.2	2.5	120.0	109.0	99.0	0



第七圖 大竹部落土地利用圖

土地利用別面積などを比較しながら、居住型と人口との關係を考察してみると、山村部落の中で、最も小さな花栗(鳥根縣飯石郡飯原村)は、抽出した四つの部落の中で、山林の面積が一番廣く八八・四五%で、狭い溪谷に位してをり、宅地面積(〇・四八%)は、基本型としてあげた澤丸などに近い。田は九・二八%であるのに畑が僅かに一・三二%に過ぎないのは地形の然らしむる處であらう。それが標準農家の土地利用にも反映し、水田一四八・八アールを經營し、潤葉樹林の多い山林からは薪炭を、その一部から建築用材などを取り、三四・七アールの畑で、主に養蠶を副業としてゐる。平隱な山村らしいから、十年間(大正9—昭和5)に五十六戸の戸數が、四戸も減じてゐるのは、山村人口の遞減を示す適例ではないかと思はれるが、人口が却つて二十二人も増してゐるのは疑問であるが微すべき報告がない。これに比べる

一〇 村落居住と人口との關係の一考察

と、大竹(群馬縣吾妻郡澤田村)の方は十年間に戸數は同じく七十二戸であるのに、人口は四十五人を増して四百四十二人となつてゐる。この部落は花栗と同じく小さな溪谷に沿うた山村で、山林は六六・九六%、原野は三・七二%であり、田が少なくて畑の多いのは灌漑用水の困難な爲であつて、その土地利用度は、

「四十五度内外ノ直角ニ近イ丘陵ヲ開墾シ、山地ノ埴土ニ蒟蒻ヲ栽培シ、ソノ間作トシテ集約的ニ桑樹ヲ配シテ居ル。溪流ノ兩岸ノ臺地狀ノ水田ハ、灌漑不便ノタメ、米作振ハズ、ソノ收量ハ部落ノ全人口ヲ養フニ足ラズ、十五度内外ノ傾斜地ハ穀菽ヤ果樹栽培ニ利用シテ居ル」

状態であつて、これに對しては、

「カ、ル環境ハ農業生産經濟ニ不利デアツタガ、明治大正年間ハ、貿易ノ發達ト外國ニ於ケル順調ナル生絲ノ消費トニヨリ、養蠶經營ヲ有利ニシ爲ニ農家經濟ヲ安定セシメタ。然ルニ最近絲價ノ慘落ハ農家經濟ヲ根柢ヨリ破壊スルニ至ツタカラ、農業組織ヲ多角形トシ、養蠶ノ外、蒟蒻・栗・養鶏・養豚等ヲ副業トスル計畫ヲ立テ、キル」

とある。かゝる生活環境に對してこの生理的な努力は、この部落の傾斜度と土地經營との關係を具現してゐる土地利用圖(大竹部落土地利用圖参照)に明かに示されてゐる。なほこの部落將來の計畫として、生産物の販賣・物資の購入・農業改善の實行等を協同組織に據ることを擧げてゐるのに徴すれば、十年間に四十五人増したこの部落の増加人口は、かゝる産業發展の結果を意味することが解釋附けられなければならないし、かゝる産業發展に對しての努力は、またこの部落の生活水準を高めしゝあるであらう。

第四表 菖蒲部落民兼業類別表

兼業種別 業態種別	兼業種別						
	養蠶	養薪	蠶炭	公	吏	雜貨	豆
地主兼自作	2	0	0	0	0	0	0
自作兼小作	13	0	0	0	0	0	0
自作兼小作	3	5	1	0	0	0	0
自作兼小作	6	34	0	4	0	0	1
小教員*	3	13	0	0	1	0	0
炭業*	0	0	0	0	0	0	0
計	27	52	1	5	1	0	1

* は專業者 (昭和6年6月報告)

四 山村の居住の諸型と人口との關係

更に菖蒲(山形縣南村山郡東村)と折敷地(岐阜縣大野郡丹生川村)との對比は、あらゆる點から見ても、山村部落の比較研究によい基準である。この二つの部落の立地的關係から生ずる風土的差異は、同じ山村でありながら農業經營の上にもそれが反映してゐる。即ち菖蒲は相當に田の面積あるに拘はらず、濕田であるので、その利用的價値が少なく、標準農家(自作)の土地經營に徴すれば、畑作としては桑畑が主であり、大豆の間作がこれに次いでゐる。殊にこの部落の生産

形態の規模は、その兼業類別によく現はれてゐる。即ち總戸數八十七戸の中、養蠶と薪炭を合せて兼業とするもの五十二戸に及んでゐるのは、その經營の如何に小さいかを示すもので、戸數は十年間に一戸の増加を示しながらも、人口に於て、二十人を減じて五百九十六人にもなつてゐることは、この部落の生産力と人口支持力との關係を示すもので、その集村型は、たゞ發生過程の殘存を留むるに過ぎないであらう。然るに折敷地は、その居住形態は、寧ろ分散的な形態を示し、讀圖の上からすれば、菖蒲に比して戸口の稀薄を思はしむるけれども、十年間に戸數は三戸、人口は四十二人を増して六百四十人になつてゐることは、菖蒲の比ではない。折敷地の土地利用

第五表 折敷地部落標準農家生産形態表

居住	家族構成	土地經營	副業
宅地 5.2 ^a	戸主 59歳 三男 20歳	田 米 120 ^a	蠶種 11枚
住家 2.5	母 79 四男 14 妻 58 孫 13	畑 (大豆・小豆) 47 ^a (蔬菜・稗) 62 ^a (桑)	收繭 80貫
	長男 40 叔父 79 婦 34		木炭 1500貫
		山林 (杉) 744 ^a (杉・檜(植林)) 248 ^a	

第六表 鹽子・白子部落戸口遞減表

	大正9—昭和5 (戸數)	大正9—昭和5 (人口)
鹽子	308—292	1326—1269
白峯	420—422	2365—2260

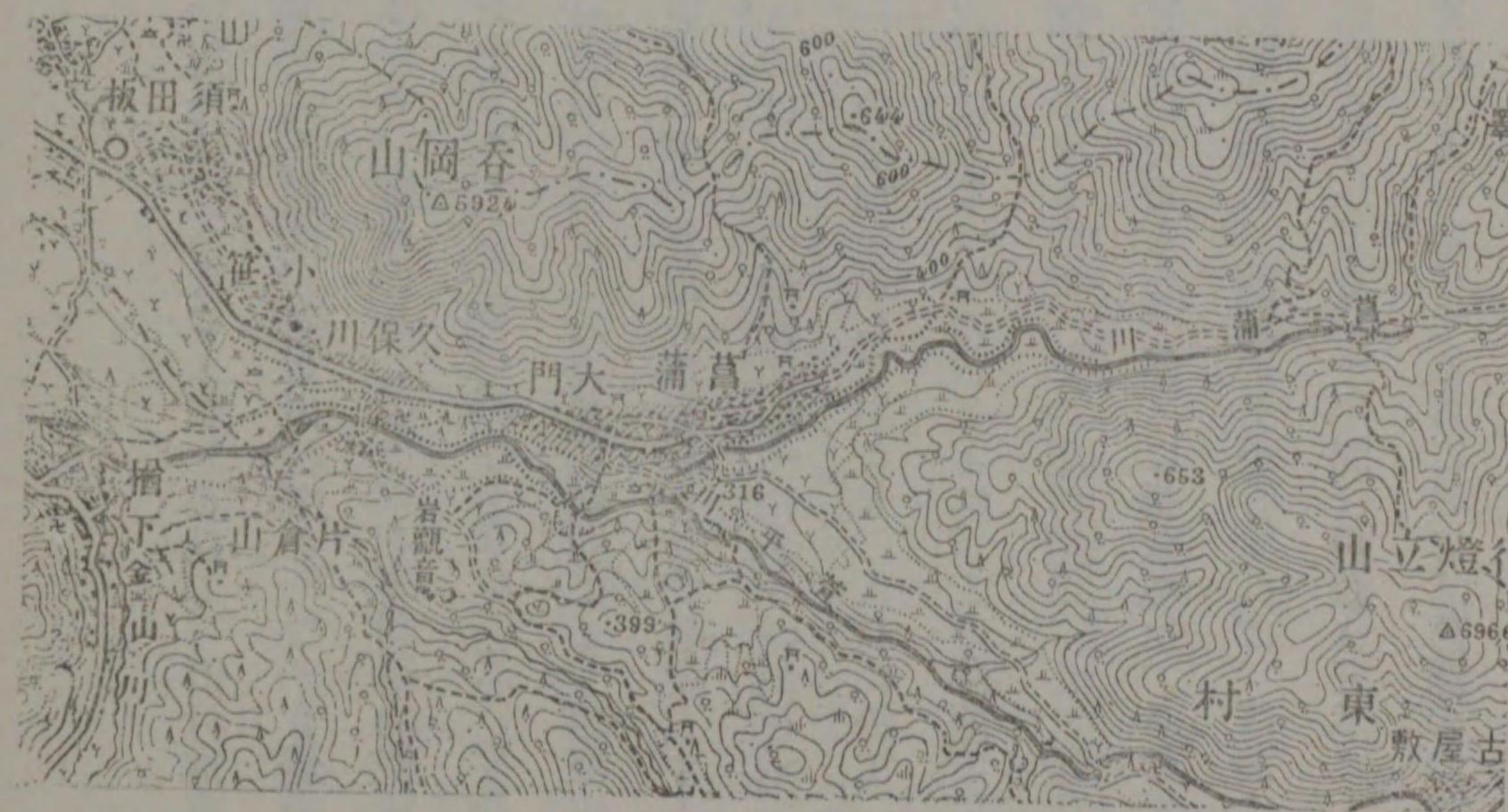
の戸口増加指數中、第一位を占めてゐる所以であり、戸口の増加もそれらとの關係からであらう。上に掲ぐる標準農家(自)の居住と家族構成と土地經營と副業の状態を示す數字は、日本の山村部落の生産形態を示す一つの適例であらう。

山村部落として抽出した以上の四つの部落に比ぶれば戸口共に多い鹽子(茨城縣西茨城郡七會村)と白子(石川縣能美郡白峯村)の二つの部落は、前者は二百九十二戸、後者は四百五十戸を算へ、この小論の引例としてその形態稍々大きく、職業構成なども複雑性を有つてゐるけれども、山國性を多分に有つ我が國としては、峠路の山麓に立地せる街村型としてかゝる居住型が相當に多く、交通路の變遷に伴ふかゝる山村部落の戸口の減少指數は、日本の山村人口遞減の一つの實例を示すものと思ふから、こゝに附説することにする。殊に自小作や小作の多い鹽子に於ける廣い國有林(五七・一%)に對する部落民の山林資源の利用に就いての窮狀が、戸口激減の原因をなすことも、また我が國



第八圖 折敷地部落

一〇 村落居住と人口との關係の一考察



第九圖 菅蒲部落

用率にあらはるゝ山林八〇・〇九%のうち、潤葉樹林と針葉樹林の比が三と五を示し、それが部落民に薪炭業を営ましめてゐることは、菅蒲と同じであるが、この部落の針葉樹林(杉・檜)は製材所をも設けさせ、更に原野が縣營と民營の牧場に利用されてゐることは、全山村部落

の山村に多いことであらうから、こゝに報告の一部を挿入して説明に代ふることとする。

「近時國有林ノ針葉樹ハ、南北ヨリ谷間ノ田ニ蔽ヒカフサツテ、所ニヨツテハ收穫白無ノ所(三町歩近イ)モ出來タ。一昔ハ濶葉樹種デアツタカラ、カヤウナコトハナカツタ。原野ハ殆ンド開墾サレタ……山林ノ大部分ヲトツテキル國有林ニハ、薪材ハ腐ルホド澤山アル。ダカラ部落ニ村營カ部落營ノ組合ノ設置ニヨリ、ソノ利用ノ途ガ新ニ講ジラレテホシイ。耕地面積ガ少ナク、一戸平均僅カニ六反七畝デ開墾シ得ル餘地ガ殆ンドナク、副業トシテモ見出シガタイ。ダカラ國有林ニ關スル事業ヲ一資本家ノ利益ニノミ委ネズニ方法ヲ講ズル必要ガアル」。

「現在二百九十二戸ノ中、農業階級ハ二百四十五戸アルガ、近年地主(一五戸)、自作(八〇戸)階級ガ自作兼小作ニ下リツ、アル……」

五 田部落の居住の諸型と人口との關係

田部落として抽出した友永(静岡縣磐田郡三川村)・石塚浮戸(群馬縣邑樂郡伊奈良村)・植木(富山縣下新川郡大布施村)・藤助新田(山形縣北村郡大富村)・篠原(高縣長岡郡大篠村)・文出(長野縣諏訪郡豊田村)の六つの部落の中で、友永を除いた他の五部落の居住度(部落面積對宅地面積率)は、四・八六%から七・九六%に及んでゐて、山村部落の二倍から四倍に及んでゐることは、水田地域の地形の然らしむる所である。一戸當の宅地々積も、田部落が山村部落より廣くなつてゐることは、前にも述べたやうに、稻作經營からの必要が然らしめてゐるのであらう。

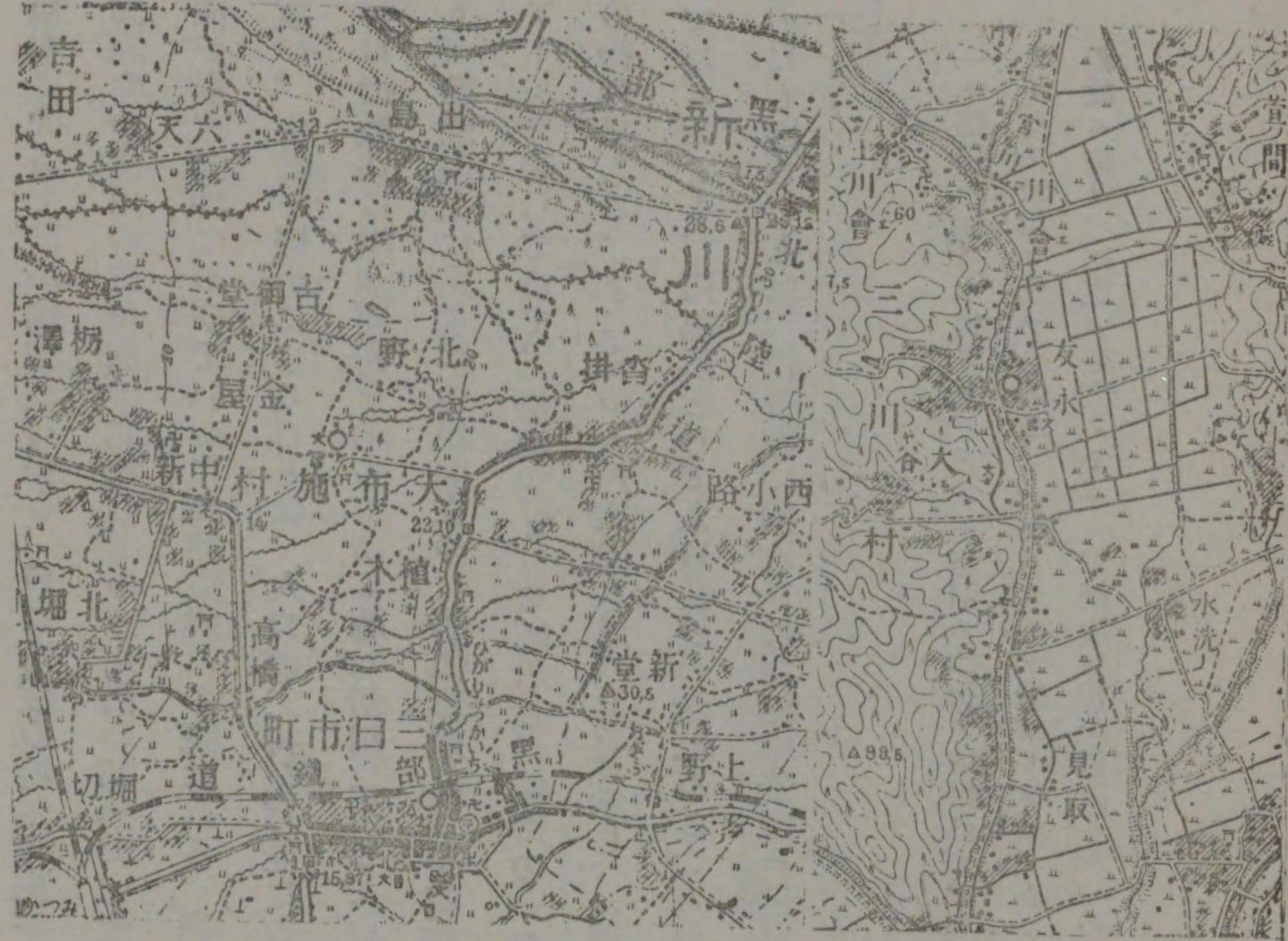
第七表 田部落標準農家土地・人口・居住比較表

(昭和六年六月報告)

部落名 (戸數)	面積	土地利用率					人口密度 1ヘクタール(1方町)	戸口増減指數	一戸當人口	標準農家 (家族人員)	居住面積 住宅	土地利甲面積			
		宅地	田	畑	山林	原野						田	畑	山林	原野
友永 (62)	9552.40	5.40%	60.11%	11.73%	19.21%	3.32%	91.2	93.1	6.5	7.9	1.4	163.4	39.6	54.5	14.8
石塚浮戸 (73)	24051.57	0.78%	33.60%	24.96%	0.49%	24.47%	111.2	107.6	6.2	13.9	1.3	163.4	153.5	0	0
植木 (82)	8262.94	5.30%	92.61%	0.55%	0.93%	0.52%	107.6	105.5	5.8	9.8	1.7	176.4	2.9	0	0
藤助新田 (125)	11816.53	7.96%	50.9%	33.36%	0	7.15%	107.6	112.1	6.7	19.0	1.2	140.0	100.5	0	0
篠原 (128)	10433.06	5.32%	93.25%	0.67%	0.10%	0.38%	102.4	102.2	5.1	?	1.1	143.6	?	247.5	0
友文 (136)	13234.57	4.86%	86.90%	4.31%	0	0.37%	107.9	104.1	4.8	8.3	1.2	128.7	39.6	0	0

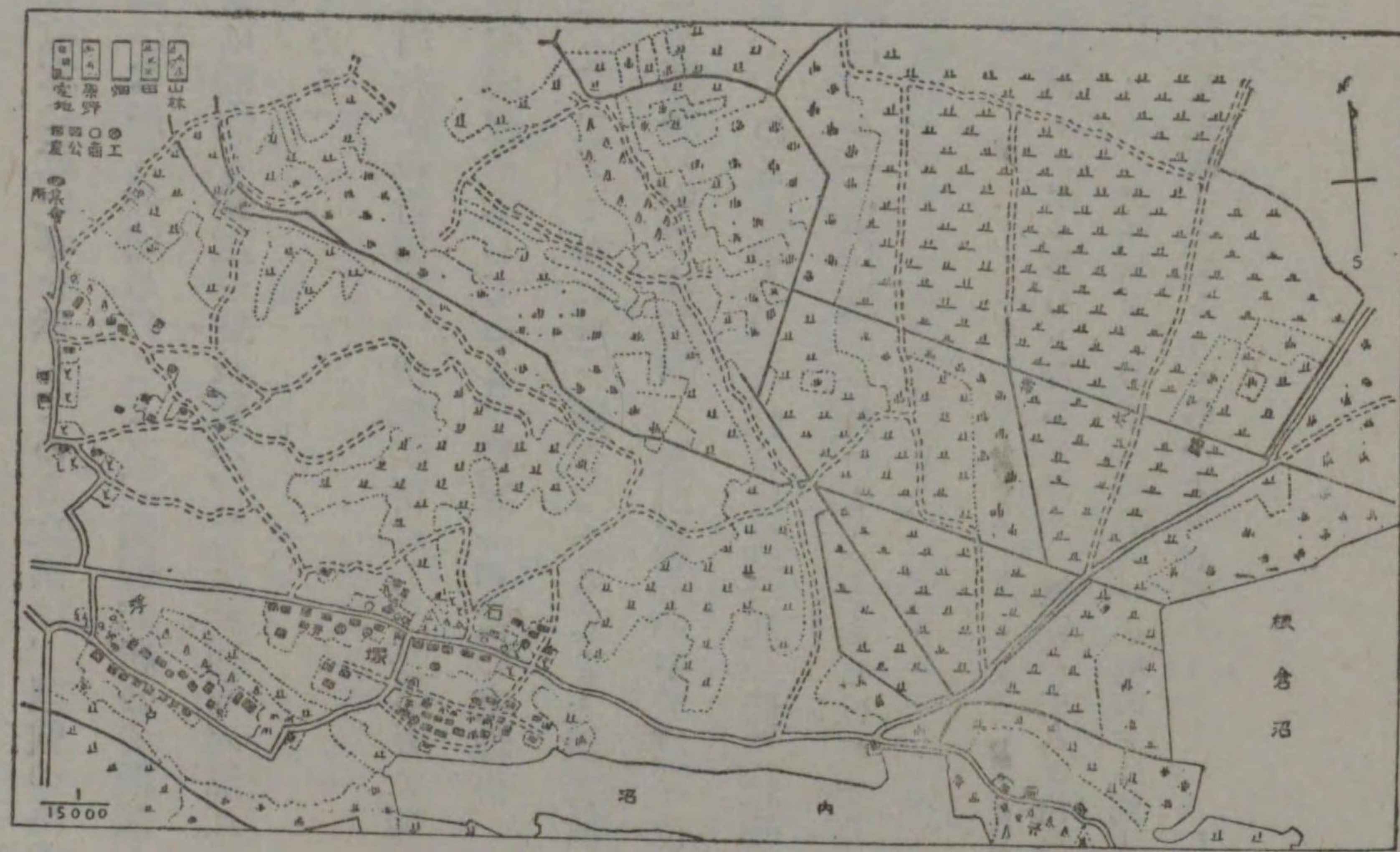
次に各部落の戸口指數に就て見ると、友永が戸口指數に減少を示してゐる外、他の五部落が何れも増加傾向を示してゐるのは、それらの生産形態が、比較的單一な山村部落に比ぶれば、あらゆる方面から見て複雑性を有つてゐるから、山村部落に於て試みたやうな比較研究を取り得ないのである。

居住度の上から、これらの六つの部落を比較すると、比較的低い友永は、丘陵地域と水田地域との接觸地區に立地し、しかもそれが太田川の小さな支流である宮川の上流であるから、周圍の村落居住の形態から推して、ふる



第十圖 植木部落圖

第十一圖 友永部落圖



第十二圖 石塚浮戸部落土地利用圖

第八表 田部落主要職業戸數

	農				商	工
	地	自	自小	小		
友永	1	14	11	25	4	2
石塚	2	11	20	35	6	5
浮戸	1	1	74	25	3	4
木新	3	14	67	11	6	4
田出	1	3	8	2	3	15
助新					0	0
藤文						
下庄						

一〇 村落居住と人口との関係の一考察

二六八

き村落居住の型を有つてゐる。しかも戸口の減少指数が基本型として取扱つた職業構成の單一である下新庄に近いのは、人口の飽和状態を示してゐるものであらう。これに反して、戸口共に増加してゐる植木は黒部川の氾濫原に立地し、しかも小さいながら北陸街道に沿つてゐる街村で、土地利用度の上から見ると、田の偏在を示してゐるから、これによつて人口増加を解釋することが出来ない。その職業構成の上にはあらはれてゐる商工各々三戸を有することも、三日市町に近いこの部落としては、その商工戸口は寧ろ三日市町に隸屬してゐるものではなからうか。故に十年間に二十六人を増加してゐる理由の一つには、水田の畑作化の集約度をあげ得ると思ふ。しかも、それは三日市町に近いことがその誘因となつてゐないだらうか。こゝに標準農家(自小)の土地經營を見るに、數字にあらはれた畑の利用率は田のそれが一七六・四アールであるのに對して、僅かに二・九アールに過ぎない。しかしその水田の畑作化の驚くべき集約な利用度は三四三・六アールに及び、それが麥類の一・九・八アール、蔬菜・瓜類の五六・六アール、薯芋類の一〇・九アール等に示されてゐる。従つてこの農家の九・八アールの宅地面積の中にも、二・八アールの温床が設けられ、それが主として、瓜類・花卉類を育成し、その移植後には胡瓜畑として利用されることになつてゐる。

植木に次いで田が偏在しながら、戸口指數の増加傾向が、共に植木に近い率を示してゐる文出は、氣候の冷涼な諏訪湖畔の宮川の三角洲に立地してゐる川沿の部落で、水害と闘ひながら發達したことは、信仰的組合の機能や、居住が漸次湖畔にのびていつた史的發達にも窺はれる。農業經營は稲作と養蠶を兼ね營み、なほ漁利や天然瓦斯の天恵が、生計を豊かにすることは、人口の支持を可能ならしめてゐる。

戸口指數共に増加傾向を示してゐる藤助新田に至つては、最上川右岸の新田で、田畑が併存してゐる外に原野もあり、讀圖の上に見られる規則立つた居住形態は、その新しい發生過程を示してゐる。農家一戸當の宅地が一九・〇アールを示してゐて、基本型として例示した荻野の一戸當の一九・二アールに近い廣さであることも田場所としての特色である。またその一戸當の人員六・七を示し、抽出した六部落の中では勿論、水田部落の中で第一位を占めてゐることも、田部落として人口發展の餘地あることを證據立てゝゐるもので、これには部落民の農業經營への努力にも因ることは、報告書に挿入された標準農家(主_地)の宅地利用、また自作農のそれにもよくあらはれてゐる。殊に、

「本部落八年々水害アリ、タメニ田畑ノ作物ノ被害多ク、農業經營ニ少ナカラザル努力ト苦心ヲ要ス、經營ハ主人ガ指導者トナリ自ラ鋤鋤ヲ執ツテ働キ、一家ノモノハ婦女年少者ニ至ルマデ、各々ツノ力量ニ應ジ、勞働ニ従事スル家庭的ナル獨立勞働組織ニ依リ、家族ノ努力ノミニテ、經營シ得ル程度ニテ、規模小ニ稻作及養蠶ヲ主業トスル單一ナル經營ナリ」

とあることにも、農家一戸當の人口支持力を暗示してゐる。

六 畑部落の居住の諸型と人口との關係

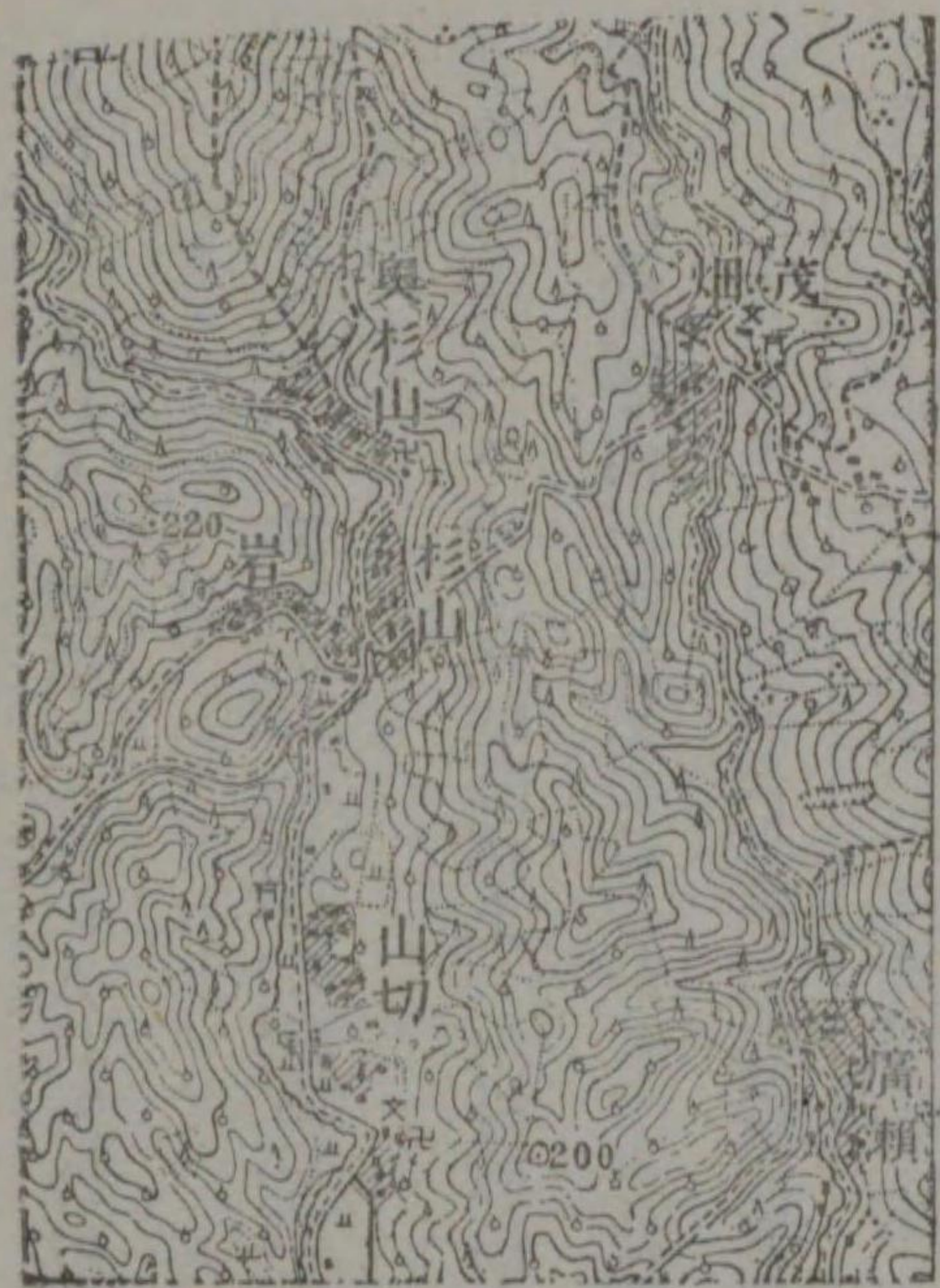
畑部落は、その立地的關係上、山村部落また田部落ほど、生活環境としての自然的諸條件が偏在してをらず、従つて山林・畑・田が併存してゐるから、土地利用度は勿論、それらの居住度にも、山村部落や田部落ほど一般性が明

第九表 畑部落職業別戸數・人口・土地比較表 (昭和六年六月報告)

部落名	人口 密度 (1方村)	主要職業別戸數				戸口増減指數		土地				
		農	商	工	其他	戸數	人口	宅	田	畑	山林	原野
松岡	85.6	43	0	0	1	125.7	109.8	0.92	19.26	35.86	38.49	4.75
杉山	290.8	77	0	0	5	105.3	100.2	2.22	0.35	63.14	34.11	0.19
川尻	241.9	47	2	0	2	105.2	116.5	5.26	28.12	36.30	30.32	0
上臺	778.2	24	5	0	2	100.0	108.1	7.28	45.95	44.98	1.05	0.61
大出	140.7	107	7	4	3	108.0	101.2	1.68	14.39	9.92	6.37	67.94
森房	825.4	105	14	8	4	122.5	109.9	6.83	10.32	80.70	0.75	1.70
下岩崎	150.5	210	14	15	15	98.8	93.4	5.96	0	89.47	2.03	0.15

確に把握し難い。従つてそれらと人口との関係は、寧ろ社會經濟的環境よりする考察が必要であり、それにはそれらの指標を職業構成に求むることが妥當である。特にこゝに研究資料として取扱つた諸部落は、職業構成の上から見ると、單一なるものと複雑なるものとが相半してゐるから、それらの各々が、社會經濟的環境を異にする畑部落の種々の型を例示してゐるものと見るべきである。

今、職業構成に關する資料の明確な七部落に就て考察するに、職業形態の最も單一である松岡(山形縣東田川郡廣瀬村)は、全部落四十四戸(一戸)の中、四十三戸は小作農であるが、戸口指數共に増加傾向を示し、十年間に戸數は十戸、人口は二十五人を増してゐるのは、耕地と山林との均衡が保たれてゐるばかりでなく原野をも有つてゐるので、生活



第十三圖 杉山部落

資源としてそれらを利用し得る餘裕があるためではなからうか。人口密度(一戸)は八十五人で、畑の十部落の中で最も低く、山村部落の白峯の八十二人に近いこともそれを示してゐる。たゞこの部落の發生過程と最も重要な關係にあるべき小作關係の資料のないことは、解釋の上に點睛を缺く憾がある。職業形態の單一さに於て、松岡に次ぐ杉山(靜岡縣庵原郡庵原村)また川尻(茨城縣鹿島郡矢田部村)は、戸數の増加指數に於て同率を示しながら、川尻が



第十四圖 森房部落



第十五圖 大出部落

人口増加指數に於て著しく高率で、十年間に、五十六人を増加してゐるのは、砂丘地帯に立地せる土地利用が果樹栽培に適してゐるからでありこれは先年筆者が實地に踏査し實見した所である。森房(宮城縣亶理郡逢隈村)の人口密度が、戸口指數と共に増加傾向を示してゐるのは、街村としての商業工業戸數の多いことが人口吸収を示すもので、その人口密度が八百二十五人であることも、その都市的であることを證據立てゝゐる。然るに大出(長野縣上伊那郡中箕輪村)が商工戸數を有ち、戸數に相當な増加指數を示しながら



第十六圖 下岩崎部落

人口指数が殆んど静止状態を示してゐることは、西天龍水路の疏通による隣村の開田が、この部落から、分家による労働人口の移住を可能にしたことが要因をなしてゐる。この部落が、この用水によつて、畑を田となし、米作を可能にし得たこともまた見逃してはならないことである。またその人口密度が僅かに百四十人で、山村部落に近い密度に過ぎないことは、天龍川右岸の段丘面に立地して、その立地が広い地積 四三一六五・四二（アール）を占めてゐるからで、田・畑・山林を利用する外、なほ原野が六七・六四％の高率を示してゐることによつてもこれが明かであり、將來の農業の發展性も暗示されてゐる。最後に我々は下岩崎（山梨縣東八代郡祝村）の土地利用度と戸口増減の關係に於て、生産形態の複雑性と人口飽和度との相關關係を明證し得る。この下岩崎部落は、全く水田を有さない畑部落であり、畑への利用度は、七部落の中で、最高の八九・四七％を示し、しかもそれが街道に沿うた集村であるから、居住度も、五・九六％、人口密度は一千五百四人で、この小論に抽出した農山村二十五部落を通じての最高であり、宅地一アール當の人口密度も二・五三で、二十五部落の第二位を占めてゐる。これを圖上

に檢するに、日川左岸の段丘に立地して、全國屈指の葡萄栽培地域の中心地區であり、標準農家（自小作）の如きは、八五・〇アールの葡萄畑を栽培しながら、葡萄酒の醸造をも兼營してゐる。集村としての職業構成は分化してをり、多數の商工業戸數の中でその工業戸數に八戸の製絲業者、商業戸數には、二戸の貨物自動車營業者さへ見出される。然るに、戸口指数は、共に減少を示してゐるのは、畑作としての葡萄栽培もその限度に達し、街村としての機能が交通の變化によつて崩壞期に近いこともその要因であらうと思はれる。

七 標準實驗地設定の必要

我々は、以上、國家社會の根幹である村落社會に就て、その生活環境を異にする村落居住の諸型と人口との關係を明かにし、こゝにそれらの有機的な諸現象が、人口問題の研究上、最も重要な一つの基準であることを發見するに至つた。この國家社會の部分的構造である所のいはゞその骨組ともいふべきこれらの諸機能は、常に村落社會の體位・智能・労働・保健・思想・移動等を醸成する酵母となつてゐることは多年の踏査からも確認することが出来る。故に類型的な村落社會を研究基準として、まづその統計的竝讀圖上の研究をなし、更に現地を觀察して、實證的研究を試むるならば、我々は、これらの村落社會が如何に我が國家社會機構の基底として重要な役割を演じてゐるかを明かにし得るであらう。

現在、國家社會機構の諸部門に於て、戦時の救済から戦後の更生を必要とする國策の遂行に就いて、從來、夫々の行政機構によつて講ぜられて來た農林行政・地方行政・社會行政乃至教育行政等に基く諸施設の遂行は、當然この際、より高度な國策的見地から再検討されなければならず、それには、これらと關聯を有つ諸科學の研究業績も、かゝる見地から批判され綜合されて、こゝにそれらの再検討と綜合との所産として、新に、

國家社會の根幹としての我が村落社會の機能を補強し十全ならしむるために、從來の割據的な行政機構、また分立的な學術的研究を、より有機的に綜合した適正な國策が、企劃され、實踐されなければならない。

これを顯現すべき方法としては、かゝる國策を實驗すべき標準實驗地の設定、即ち

村落社會の自然的環境乃至社會的環境、またその經濟生活乃至社會生活等から見て、優否何れからも標準的と思はれる村落若干（少なくとも道府縣別に、優否夫々の數部落）を設定し、先づこれらの居住と人口との關係を、研究基準となしつゝ、村落生活の全機能の優否を研究し、以てその因由と體位・智能・勞働・保健・思想・移動等との關聯を科學的に検討論議し、こゝに新しき村落社會政策を確立する實驗を試むることが緊要であると思はれる。

これは、中央行政としての村落社會政策の指導原理を生み出す一つの方法であると共に、地方行政を實踐してゆく指標でもあり得ると信ずる。こゝに考慮さるべきことは、かゝる施設は何れの行政機關によつて遂行さるべきかゝ問題である。

恒久的な國策遂行の基本となるべき調査研究が、應急的な諸施設と表裏となつて、常に國策の遂行に資してゆかなければならないことは、恰も遠心力が求心力と共に、宇宙的實在の大きな役割をなしつゝあると同理であることを忘れてはならないと思ふのである。

日本の村落居住を調査研究するに當つて、村落集團としてのそれらの基準を明かにすることは必要であるが、從來精確な數字に基いたそれらの基準がなかつた。然るに、内務省地方局に於て、地方制度調査會の基本資料を作製する必要上、各府縣四千七百四十部落に照會して蒐集した統計的資料を集計したものに、これらの基準を發見することを得た。これによれば、農・蠶・山・漁村を通じて、村落集團の恒常なものは、五〇—一〇〇世帯である。一〇

農・蠶・山・漁村部集團形態表（實數並比率）

（昭和十年十月一日現在）

10世帯未満	10—30	30—50	50—100	100—150	150—200	200—300	300—500	500以上	計	
農	46	293	306	406	153	74	42	20	5	1,345
蠶	34%	217	227	302	114	55	31	15	4	
蠶	42	239	281	347	137	70	49	19	9	1,196
蠶	5%	199	237	290	115	51	41	16	8	
山	77	517	392	346	99	29	27	6	2	1,495
山	52%	346	262	231	66	19	18	4	1	
漁	9	81	113	197	114	66	65	32	27	704
漁	12%	115	161	280	161	94	92	45	38	
計	174	1,130	1,095	1,296	503	239	183	77	43	4,740
	37%	238	231	274	106	51	39	16	9	

七 標準實驗地設定の必要

世帯未満のもの

が三七%、三〇

〇世帯以上のも

のが二五%であ

ることは對比を

なしてゐる。農

蠶村は三〇—五

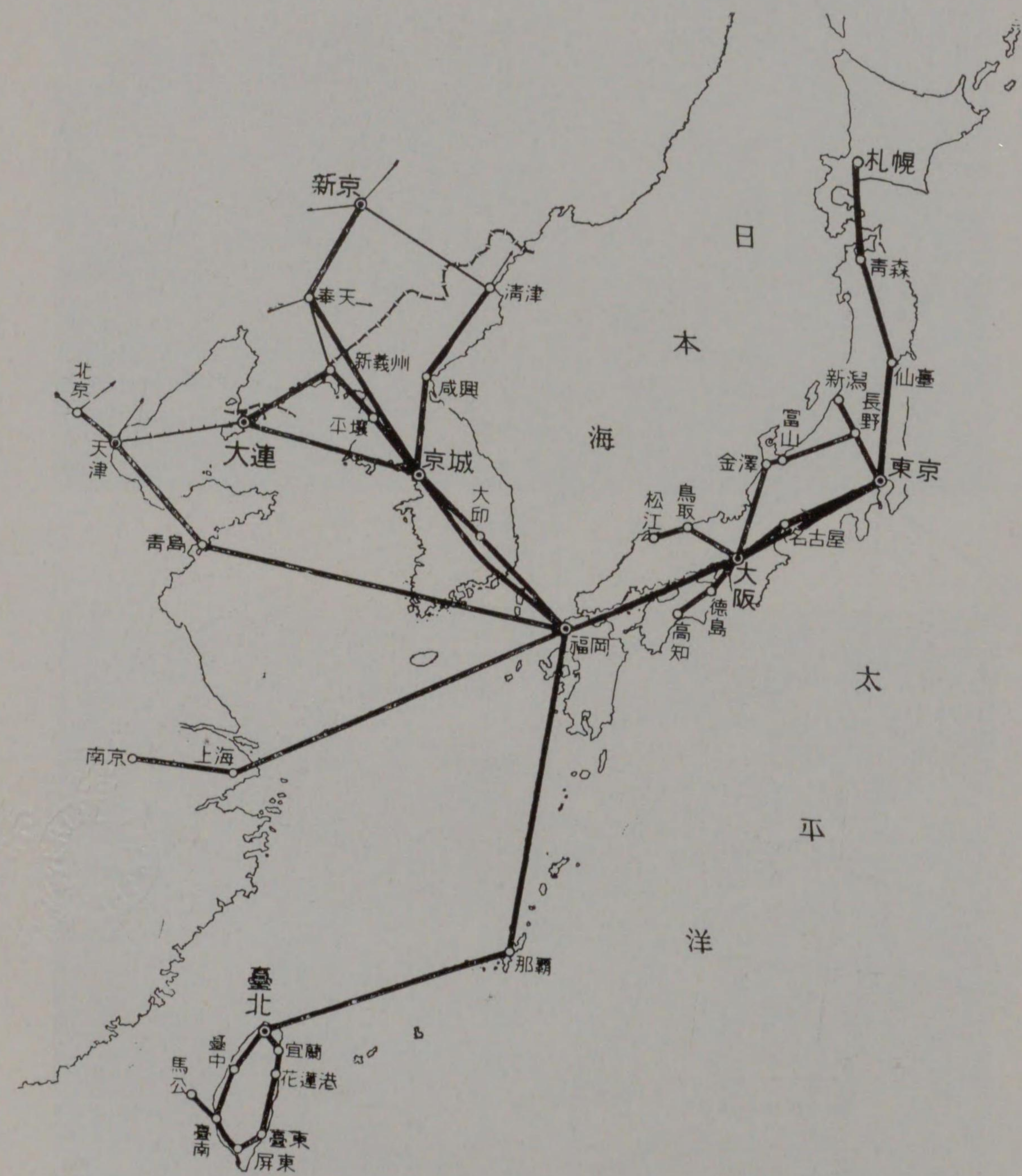
○世帯、五〇—一〇〇世帯が共に五二七—五二九世帯であることは、それらの立地的條件に基いての經營形態またそれらの發生過程の同質であることを示すものである。然るに山村に於てはそれが三〇—五〇世帯の集團は農蠶村より多く、五〇—一〇〇世帯の集團は反つて少なく、之に反して、一〇世帯未満並に一〇—三〇世帯の集團は、山村が農蠶村より多いこと、また一〇〇世帯以上が殊に少ないことも山村の特色である。漁村が三〇世帯以下が少なく、二〇〇世帯以上の所多いことは、漁港的な機能の特質を反映してゐる。

追記

香川縣の村落居住に於て、農家の庭は、一戸當の耕地の狭い東讃に狭く、それが廣い西讃に廣い。特に島嶼部に於ては狭く、人口増加による密度の上昇につれて、一層それが狭められてゆく。然るに納屋は庭と反對に廣くなつてゆく傾向があるのは、それが仕事場とされてゆくため、母家を二階建にしたり、寢室を「離れ」にしたりする。瓦葺の農家がガラス戸の使用と共に文化度の高い西讃の仲多度・三豊二郡に多いことも、生活水準を測定する一つの基準であり、小豆島が他の小さい島々は勿論、仲多度・三豊二郡にも優つて、各郡の第一位を占めてゐることも、交通多き大阪・神戸二市の影響である。耕地と人口との關係が、殆んど我が國の最大限に達し、明治中期より現住人口と本籍人口との平衡に分岐を來し、餘剩勞力の所理に對しては、最近、副業の複雑化にそれが著しくあらはれて來てゐる。

以上の村落居住の統計資料の整理に就て、馬渡敏君が三ヶ月に亘つての努力を深謝する。

朝鮮・滿洲



日·滿·支 航空路圖



火田民の獨立家屋(厚峙嶺)



農村部落(平安北道)

一一 朝鮮の人文地理學的諸問題

一 民族的交流地域

主體滿洲から南方に派出してゐる朝鮮半島は、北境は長白山系と鴨綠・圖們の二大水系によつて、他の三方は日本海と黃海とによつて、明かに地形的に限定せられ、自から地理的統一體を構成してゐる。しかし其の南東に近く日本群島を控へてゐる地理的位置は、此の半島をして自然的にも生物的にも移變地域 Transitional Region としての機能を保たしめ、人文的には常に民族的交流地域たる宿命を荷はしめてゐる。

されば、一定の地域に於ける自然對人類の關係を研究する人文地理學の對象としての朝鮮半島の研究には、古來居住してゐた民族生活を檢討する事を前提とし、進んで交流して來た諸民族の生活の特質と相互の接觸合成の傾向を究明する必要がある。之を史的に考察する事は、人類學・考古學及史學の領域であるが、現代を研究對象とする人文地理學に於ては、先づ其の人口の民族的構成を基調としなければならぬ。即ち現在朝鮮の全人口の九割六分は朝鮮民族であり、しかもそれが四十年前までは獨立國家を組織してゐた。故に當時國政が振はなかつたにして

も、此の半島の民族對自然の永く且深き地理的關係は、人文地理學的研究の對象として最も本質的なものである。之に比すれば日本民族の數は遙かに少なく六十萬八千餘で、二千百三十七萬の朝鮮民族に對しては少數である。しかし併合前の數に比すれば、三十倍に達してをり、其の活動は、政治・經濟・教育など半島統治の樞機に參して居り又私的事業の進展にも資してゐるから、其の業績は人文地理學の重要な研究題目である。支那民族の數に至つては日本民族の一割にも達しないが、其の經濟的活動は一つの統一ある民族的潮流と見るべきである。かく宿命的關係に置かれてある此の三民族の人文地理學的研究は、如何に取扱はるべきであらうか。

エワルド・パンゼは、ペーテルマンズ報告^{一九一一年}に發表した論文「地理學」に於て、「ミリウ Milieu は地表のある地域にあらはれた特性（外面的のみならず内面的をも含む）を總括したもので、それが地理的特質の精華又は地理上の精神的內容である。此の闡明によつて地理學の研究は全く綜合的となる。……かゝる特徴ある地域の風土的特性は、其處に棲息する數多の民族の生活方法の交互作用と滲入と相俟つて一つの特色を形成する」といつてゐる。

パンゼの前述の論旨に誤ないとすれば、民族的色彩の交錯する朝鮮に於ては、諸民族の相互關係が如何に人文地理學的事實として表現されてゐるかを研究する事を歸結とすべきである。自分の此の論文は、朝鮮に於ける三民族個々に關する人文地理學的問題に就きての私見を陳べ、其の相互關係が如何に人文地理學的事實として表現さるべきかの研究の前提としたい。

二 『八域誌』と『大東輿地圖』

朝鮮民族が此の半島を郷土とし、此の風土に適應しつゝ、こゝに生活資料を獲、こゝに國家を建設して村落や都市を營んだ生活記録、言を換へれば地理的環境と人文との關係は、李朝後期にあらはれた地理學者李重煥の『八域誌』によく認識せられよく表現されてゐる。之を熟讀すると、李重煥は小藤博士の所謂 a good geographer a century ago であり、其の山脈に就ての記述も同博士の所謂 The above statement of the Korean geographer is in the main correct である。曰へ、

崑崙山一^二枝、行^二大漠之南東、爲^二醫巫閭山、自^レ此大斷、是爲^二遼東之野、渡^レ野、起爲^二白頭山、卽山海經所謂不咸山也、精氣北走^二千里、挾^二一江、向^レ南爲^二寧岡塔、背後抽^二一脈、爲^二朝鮮山脈之首、八道總論の始……白頭山、在^二女真朝鮮之界、爲^二一國華蓋、上有^二大澤、周回八十里、西流爲^二鴨綠江、東流爲^二豆滿江、北流爲^二混沌江、豆滿鴨綠之内則我國也、自^二白頭^二至咸興、山中脈行、東枝行^二於豆滿之南、西枝行^二於鴨綠之南、山水の章

更らに全一體としての半島の考察には、

古人謂^二我國爲^二老人形、而坐^レ亥向^レ巳、向^レ西開^レ面、有^レ拱揖^二中原之狀、故自^レ昔忠順^二於中國、而且無^二百里之野千里之水、故不^レ生^二巨人、西戎北狄、與^二東胡女真、無^レ不^レ入^二帝^二中國、而獨我國無^レ之、惟謹守^二封域、恪勤事^レ大、然闢在^二

海外、別は一區、

以上簡單ではあるが、よく朝鮮の地理的環境と人文との關係を道破してゐる。其の向、西開、面の一句は、朝鮮の東岸と西岸の特質を約言し、小藤博士が地質や地形や人文の上から、東岸を裏朝鮮、西岸を表朝鮮といはれるのに吻合してゐる。また謹守、封域、恪勤事、大の句は朝鮮の支那に對する永い地理的歴史的關係の表徴ともいへやう。更らに左の數節を摘録して、讀者に其の人文地理學的表現の味識に資する事にしたい。

即ち高峻なる山嶽地帯の氣候と産業の關係に就いては、或は咸興以北、山川險峻、風俗勁悍、土寒地瘠穀惟粟麥、少、稗橋、無、綿絮、土人衣、狗皮、禦、冬、性耐、飢寒、一如、女真、矣、咸鏡道と述べ、或は北自、淮陽、南至、旌善、皆亂山深谷、水皆西流、入、漢江、多、燒畚耕作、水田甚少、風氣高寒、地瘠民魯、江原道と記し、南海の暖き島嶼に就きては、靈巖東、南海上、有、八邑、大槩同俗、惟海南、康津、縮、耽羅、出海之口、有、牛馬革皮珠貝橋柚驛竹之利、然八邑地俱卓遠、逼、南海、冬日草不、凋、虫不、蟄、山嵐海氣、蒸為、瘴癘、と記し、よく北鮮と南鮮の風土的差異を表現してゐる。

山地の開墾につれて山川の荒廢するを叙べては、自、數十年前、山野皆被、開墾、為、耕稼場、而村落相接、山無、寸木、以此推之、他邑亦可、知、其同然、江原道といひ、都邑の環境と特質に就きても、高麗の舊都開城を松岳爲、鎮、而下爲、滿月臺、宋史所謂依、大山、立、宮殿、者即此地也、山間の盆地に發達せる原州を山谷間錯、開原明秀、而不、甚險阻、介、折嶺間、輸、東海魚鹽人蔘棺槨宮殿之材、爲、一、道都會、と記せるなど、熟讀玩味すれば、パンゼの所謂ミリウ

や風土的特性がよく表現せられておる。

其の我が國に關する記述に就いては、或は追、海隣、倭、水泉皆瘴、不、可、居、慶尚道と記し、或は密邇、日本、土雖、膏沃、非、可、居樂土、也、全羅道とある。殊に對馬に就いて、此島既不、屬、倭國、國、兩國間、借、倭而安、於我、借、我而又見、重、於倭、爲、編蝠之役、自、網、其利、と記せるが如き、前の支那に對する考察と比較して深く考察を要すべきものであり、對馬を人文地理學的に研究する上にも大なる暗示を與へるものである。

『八域志』に對して雙壁ともいふべきは、金正浩の『大東輿地圖』である。二十二冊から成る此の全鮮の大地圖に對する時、全く巨匠の Design に對するが如き感のあるは恐らく余のみではあるまい。八度登山したといふ白頭山の描寫の如き殊に筆意の躍動を見る。全鮮の山勢河系すべてよく其の神を傳へてゐる。想ふ、黃海道の名の青年だつた彼が、一意發心九十餘年前京城に來り、妻に油賣をさせて生計を立てながら、十餘年を費して全鮮を踏査した上、一々古圖の誤を正し、かくて出來上つたものは即ち本圖である。かく苦心慘憺の末漸く製圖を了り、其の原稿を當路者に致して翻刻を頼んだが許されず、其の内妻が死したので彼は娘と共に、自から其の翻刻を企て、十年を経て其の功を竣つた。然るに大院君は之を出版しては國情を國外に漏らす恐ありとなし、其の版木を取毀つたばかりか彼は罪に問はれて獄に投ぜられ、終に獄中で死したといふ哀話がある。史家崔南善は、常に朝鮮文化の發揚を念としてゐるが、此の圖の翻刻を企て、未だ果さずゐる。

今此の地圖を精讀すると、山川の趣を始め、營衛・邑治(無城)・城池(山城)・鎮堡(無城)・驛站・倉庫(無城)・牧所・燧燧・陵寢・坊里・古縣・古鎮堡・古山城・道路の配置一々指呼すべく、全く航空寫眞 Airplane Photography の精彩あるものを見るの感あらしむる。

故に朝鮮の人文地理學的研究は、民族的精神の躍動する以上の二書を精讀玩味する事から出發すべきものと信じてゐる。

三 境界線

移變地域に位する國家たりし朝鮮に於ては、北の支那に對し、南の日本に對する境界に就いての意識は常に深刻であつた。殊に陸續きの滿洲との境界は、古來鴨綠・圖們的兩江を中心とし、兩國の政治的勢力の消長に伴なへる地域の争奪の足跡に外ならなかつた。しかし十五世紀の中葉以後は兩江の主流を境界として今日に及んだ^①。従つて對岸への防備は、天險に據り隘路を塞ぐべく地理的條件を利用した。之を鴨綠江岸に探るに、義州は支那への通路の咽喉であり、國の北門である關係上、城壘も堅固に儼然たる一鎮城とした。背後の統軍亭は鴨綠江に臨んだ形勝の地で、高麗の時には燈燧を置いた地點であり、日清・日露の兩役には我軍の司令部の駐劄地となつた。義州ばかりでなく、江を溯る沿岸には第一の防禦線として朔州・昌城・碧潼・楚山・渭原・江界の六邑は壘を高くし溝を深くしたば

かりでなく、其の間にも江に沿うて多くの城塞を築いて緩急事に應ずるやうにした。しかし其の背後に第二の防禦線として、西は鐵山から東は熙川に至る間、植松・安義・天摩・幕嶺・特塞・委曲・柔院の諸鎮を夫々主要な諸邑の近くに置き、險に據りて路を扼するやうにした。殊に其の後、第三の防禦線となつてゐる寧遠城と安州城とは、共に清江の下流を挟み、北と南に對峙してゐるので、此の二城を兼領すると、一道を控制する事が出來たといはれてゐるが、安州城に上つて見て、北に寧遠城の崇險を望み伏して安州城の地形を相し、天險・地利共に兼ね備はる事を知つた^②。今日政治の状態を異にし、鴨綠江は軍事的には國境の川ではなく寧ろ國內の川といふべきであるとの見解である^③が、滿洲に於ける匪賦は圖們江岸と共に對岸から來襲するので、今日警備機關は兩江岸の主要な諸邑に置かれてある^④。されば鴨綠江と圖們江に沿へる諸邑の位置・分布・發達及其の形體は、境界線に沿へる小都邑の人文地理學的研究として重要である。

圖們江口左岸の間島の如き、日本海中の鬱陵島の如き、朝鮮海峡の對馬^⑤、濟州海峡の濟州島の如きは、何れも境界線に立てる地區として人文地理學的に研究すべきである。

① 小藤博士 韓滿境界歴史 (東亞同文會報告第六十回)

② 朝鮮地誌略 (平安道之部)

③ 陸軍參謀本部某將校談

- ④ 朝鮮總督府施政年報 (大正十二年度總說)
- ⑤ 朝鮮總督府警務局 朝鮮警察之概要 (大正十三年度)
- ⑥ 桑原八司 間島の近況 (朝鮮彙報第三十九號)
- 篠田博士 間島問題の回顧 (朝鮮第九十一號)
- 東洋拓殖株式會社 間島事情 (大正七年)
- ⑦ 幣原博士 日鮮關係から見た對馬 (朝鮮史話)
- ⑧ 濟州島廳 耽羅誌 未開の寶庫濟州島

四 北朝鮮と南朝鮮

北緯三十三度から北緯四十三度の間に延長してゐる此の半島は、之を内地に比するに九州の北端から北海道の南端の間に延長してゐる。此の地理的位置から北朝鮮と南朝鮮の氣候に差異を來たすべき理由がある。然るに北朝鮮には北境白頭山から南方に高大な蓋馬臺地^①があり、之に反して南朝鮮の山地は丘陵性であるから、一層南北の氣候に差異あらしむる。北から南に延長したこの朝鮮に於て、地理的單元としての地域は將來定めらるべきであるが、從來なされた地域的區別は、自分の知れる限りでは、小藤博士が二回十四ヶ月の踏査に基き、北朝鮮と南朝鮮の二大域に分れたのが最も學術的なるものと思ふ。

小藤博士に據れば、^②「北東日本海岸の朝鮮灣から南西黄海岸の濟物浦に近い江華灣に達する一線は、全半島を殆んど等分的に分つものであり、此の線の北西側は咸鏡南北・平安南北・黄海の五道、其の南東側は京畿・江原・忠清南北・全羅南北・慶北南北の八道である。

此の分界線は Rift Valley (裂谷) である關係上、比較的低く從つて踰へ易く、元山から京城を経て濟物浦に達する唯一の通路である。

此の北西部と南東部とは、地形の高低に差異あるばかりでなく、氣候も前半は滿洲的であり後半は日本的である。従つて北朝鮮は一般に生産力弱くて栽培植物も限定せられるが、^④南朝鮮は一般に生産力強く全半島の穀倉とよばれる米の主産地であり、富の程度も高い。のみならず、住民の體格や性質も南北相異り、『南男北女』の諺さへある。又北西部の西岸は、最も古く支那の文化に浴せる古朝鮮 Paleo-cho-syon で、東岸は女眞、其の他ツングース系の來侵多く、之に反し南東部は古朝鮮に比ぶれば、比較的遅く開けた三韓で古來日本に關係深い地域である」といふ。南北鮮の限界は、竹林の分布によつても、稻種の分布によつても明にする事が出来る。即ち竹林は日本海岸に於ては江原道の襄陽郡^{北緯三十七度}を北限とし、黄海岸に於ては忠清南道の唐津・瑞山二郡^{北緯十八度}を北限とし、京城^{北緯三十七度}附近に於ては天然生の竹を見ない。^⑤更らに之を稻種に見るに、暖地に適する神力・穀良都の如きは、日本海岸に於ては江原道の南端壽珍・寧越・原州の三郡を北限とし、黄海岸の京畿道に於ては更らに北進して抱川・楊州・長湍の諸郡

にまでも及んでゐる。又、在來綿は殆んど全鮮に適するが陸地綿は京畿道以南である。動物の南北の限界に就いては今之を明にする材料を手にしないが、渡瀨博士の話によれば、滿洲種の家畜は平壤から京城邊までを南限としてゐるといふ。

又全鮮の畑と田との百分率が、江原・黃海二道以北に於て畑が六割以上の所多く、以南に於て田が五割五分以上の所の多い事は、農業地理の上から見て南北の差異であり、人口の分布は、北西側の黃海岸の新義州から、南東側の日本海岸の慶州にかけて結んだ一線を界として、一部を除いては南西部が稠密であり、北東部が空疎であるのも亦北朝鮮と南朝鮮の對立を示す著しい事例である。

以上は北朝鮮と南朝鮮の差異に就いての概説に過ぎないが、更らに適確な地理的地域を定むるには從來朝鮮民族の常用し來つた、三南（湖西（忠清）湖南（全羅）嶺南（慶尙））・兩西（海南（黃海）關西（平安））・關東（江原）・北關（關北（咸北））・嶺東（大關嶺）・嶺西（以東）・左道（洛東江）・右道（清南）・清川江（以南）・清北（以北）等の風土的稱呼を參酌すると共に、從來白鳥博士監修の下に公にせられた『朝鮮歴史地理』の諸研究等を参考にし、更らに之を自然地理學的・生物地理學的、又、人文地理學的に考察すべきである。

①② B. Koto : An Orographic Sketch of Korea (東京帝國大學紀要理科第十九册第一編)

③ 岡田中央氣象臺長 朝鮮の氣象觀測は李朝初期(四代)世宗王の時、測雨器をつくつたのは、西洋より約二百年早い。これ朝鮮の雨量の少ない氣候之を然らしめた。

仁川觀測所中村技師 内地の東海道附近を標準とすれば、朝鮮の氣候は概括して、冬は二季、夏は一季、春と秋とを合せ一季といひ得る。冬は十一月から三月まで、四月になると遽に春らしくなるのは大陸的氣候の特色で、春は天氣がよく乾燥し、夏には豪雨が多い。梅雨の徴候は慶北の大邱以南にある。

中央氣象臺佐木技師 大陸からの低氣溫線が内陸まではいつてゐる。朝鮮の雨量の大部分は七、八の二ヶ月に降る。日本海岸は暖流の關係上黃海岸より遙かに暖かい。

- ④ 朝鮮總督府勸業模範場 朝鮮に於ける主要作物分布の狀況
- ⑤ 吉田猶藏 朝鮮に於ける竹林に就て (朝鮮第百八號)
- ⑥ 吉田京畿道技師談
- ⑦ 小田内通敏 朝鮮郡別耕地面積比較圖 (朝鮮部落調査報告第一册)
- ⑧ 小田内通敏 朝鮮郡別人口密度圖 (朝鮮部落調査豫察報告第一册)
- 中村新太郎 朝鮮人口分布圖 (地球第三卷第四號)

五 社會階級の血縁村落

李朝時代に朝鮮の社會階級として最も顯榮を極めたものは、京城で文武官に用ゐられた兩班^①である。而して其の世襲なる事と、^②姓を尊重する家族制度の儼然たる事とが相互に作用し、其の血縁關係を主體として構成せられた所謂血縁村落は、朝鮮の村落形體として最も民族的特質を發揮したものである。是等の血縁村落は、李朝時代に所謂

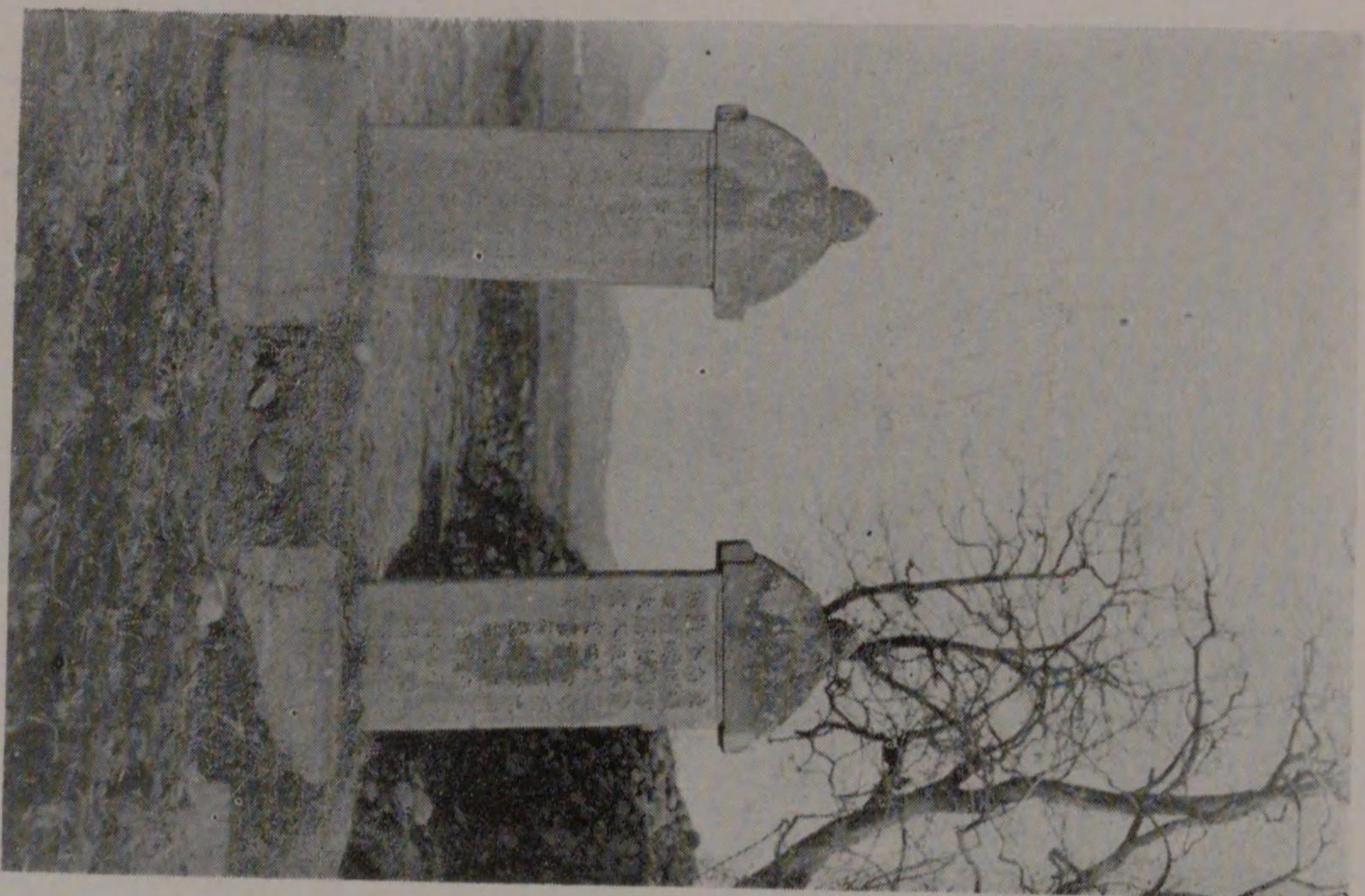
五 社會階級の血縁村落

兩班を出した京畿・忠清・慶尙の諸道に多く、其の村構の統一的であり家構の古典的であるが爲に、一見普通の農民村落と異なるものがあり、其の本質が支配階級たる兩班と、之に隸屬する下人との二つの截然たる群より成立つ結果時代の進運に後れ勝ちである。是等の村落は風水の説に信憑する朝鮮民族の常として、風色勝れた地點に依據してゐる事の多いのは、地理的意義からしても興味ある問題である。慶尙北道安東郡豊南面河回洞の如きは、河回の柳氏とよばるゝ全鮮を通じての兩班の盤據してゐる村落である丈、社會階級の血縁村落の標式的のものである。

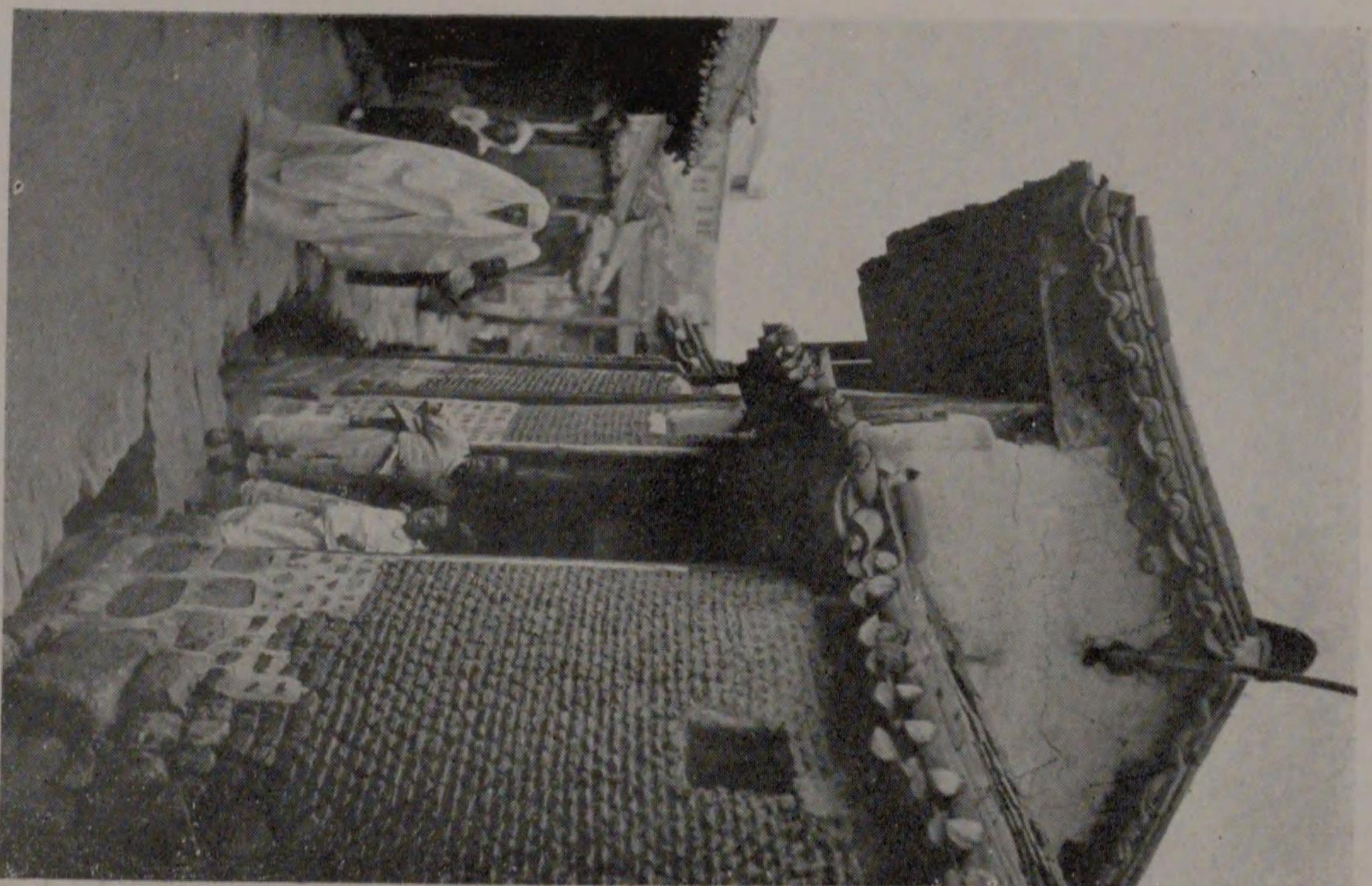
此の固定的な血縁村落に對し、蓋馬臺地を始め全鮮の山間に原始的農業を營んでゐる火田民の村落は、病める朝鮮の社會の生み出した一つの現象であり、血縁村落の固定的なるに對して流動的である。以上二つの村落の對比は朝鮮の村落地理 Rural geography 研究の中心問題である。

- ① 朝鮮駐劄憲兵司令部 朝鮮社會考
- ② 稻葉君山 朝鮮の姓の由來
- ③ 小田内通敏 部落の特相 (朝鮮部落調査豫察報告第一冊)
- ④ 小田内通敏 火田民 (朝鮮部落調査報告第一冊)

六 邑内の崩壊



開市記念碑(南原)



舊き民家(開城)



城 門 (水原)



市 場 (大邱)

日本の町ともいふべき朝鮮の邑内即ち李朝時代に郡治が置かれていた所は、併合後、廢合が行はれた結果、郡廳が廢せられて見る影もなく崩壊した處が多い。今日なほ郡廳が置かれてある所でも、併合後、行政組織の變つた結果政治的小都市としての統制が一變すると共に、其の住民、殊に支配階級だつた吏族の失職は、其の歸農を促したり、移住を已むなくしたりし、爲に邑内は農村化すると共に其の形體も著しく崩壊し、其の戸口の質量も著しい變異を來たしてゐる。これ朝鮮の特殊な都市地理 Urban Geography の研究問題である。殊に李朝時代に苛斂誅求を免れやうとして、邑内の有産階級が其の附近の農村に遁逃した結果、邑内からあまり遠からぬ距離に、それらの血縁村落の點在を見る事の少なくないのも、朝鮮の社會の産み出した聚落の一標式と見るべきである。而して朝鮮の社會で一般に信ぜられてゐる風水の説と軍事的防備の必要とが相待つて、邑内の位置が殆んど山麓を背にして南面してゐる事も、朝鮮に固有な形式と見るべきであらう。

所謂邑内ではないが、高麗の舊都開城と、内地人の移住によつて新に生れたともいふべき裡里は、最も充實せる小都市である。前者は李朝に事へる事を潔しとしなかつた開城人(松都民)の發奮が其の因をなしてをり、後者は移住せる内地人が堅實なる農業經營を基調として協同努力せるに礎が置かれてある。是等の比較研究も、民族的特質が如何に表現してゐるかを知らるには最も適切な研究問題である。

① 今和次郎 朝鮮部落調査特別報告第一冊

七 定期市の經濟的社會的價值

何れの民族でも、昔は何等かの方法で互に有無相通する交換經濟を營む結果、最初の形式として「市」の發生と制定を見たが、需要供給の關係が以前より廣大なる地域の住民と共に經濟地域を形成する所謂國民經濟の成立となり、「市」の經濟上の重要さも著しく減退し、それが常設店舖に轉化するやうになつた。①我が國に於て中世には市が一郷一莊の經濟中心であつた事は、今日の村落の大字や小字に市場村・市村・町屋村などの名が残つてをり、又、市日を聯想せしむる四日市・六日町・八日市場などの地名が之を證明してゐる。今日も日限市の面影がなほ處々に見られるが、②經濟組織が進歩した結果、今日其の機能の殘存を留めてゐる所も少ない。

然るに我が朝鮮に於ては、今日なほ其の交換經濟が殆んど「市」によつて行はれてゐる所が多い。此の市は、或は村落に於て或は邑内に於て、月に六回開かれ、それが生活に要する物資の需給以外、重要な交歡の機關であり娛樂の機關でもあつて、かゝる設備の少ない朝鮮の社會に於て、重要な役目をなしてゐる。これ「市」を一見した人の誰でも首肯する所である。此の市場の數及大小は前に述べた人口の分布と經濟程度を異にせる北鮮と南鮮によつて著しき差異がある。自分の作製した「市場分布圖」未刊によれば、最も疎なる地域は北鮮の蓋馬臺地附近であり、

最も密にして、且つ大きな市の多い地域は、人口の稠密であり生活程度の比較的高い南東部である。しかし其の主要商品なる農産・水産・織物・畜類による市場の大小は、地方的生産によつて差異がある。而して是等の市場は、併合後、道路及鐵道の開通に伴ふ交通經濟の影響を受けて、消長を來たしつゝある。

以上述べた地方的定期市は、所謂「京市」に對する「郷市」である。京城には京市即ち官設塵舖が設けられてあり、なほ外に特殊の市としては大邱には令市、國境附近には中江鳴綠開市、北關會臺開市、倭關梁草開市などあつて、これ亦特殊に研究すべきものである。④

かゝる研究は、近年歐洲の地理學界にもほの見ゆる「定場市」Fairの地理學的研究に類するものである。

- ① 黒正巖 朝鮮經濟史の研究 (經濟史論考)
- ② 柳田國男 町の經濟的使命 (時代と農政)
- ③ 小田内通敏 部落の概相 (朝鮮部落調査豫察報告第一冊)
- ④ 朝鮮總督府 朝鮮の市場 (調査資料)

八 支那民族の經濟的潮流

支那民族が經濟的潮流として郷土から國外に流出し、陸又は海によりて世界の各地への瀰蔓は、民族的發展とし

て確かに世界的驚異である。しかも此の大數が國外に移住するに際しては、歐洲諸國民の移住に反して政治的に何等の特典なく國家的に何等の保護がない。しかも年々多數の流出を見るのは、彼等の社會に發達した組合制度^②が其の支持となつてゐるから、支那人の世界的移住は政治的植民でなくして、經濟的移民である。

朝鮮を旅する人で、京城・仁川を始め、北では新義州・平壤・鎮南浦・元山・清津、南では大邱・釜山などの主要都市を訪れる時、支那人が商人として蔬菜栽培者として、また労働者として優越な活躍を示してゐる事に目が付く。支那民族の朝鮮半島への來住は、文献上では遠く漢代に樂浪・臨屯・玄菟・眞番の四郡を置いた時とされてゐるが、其の地理的關係から推すと、更らに舊い時代からであらう。李朝時代に於ては、開港前には絶對に外國人の入國を禁じてゐたが、支那民族に對してのみは、鴨綠江岸に於て農耕の爲に一里以内の地域にまでの來住と中江開市を許し圖們江岸に於ては、會寧と慶源で北關開市を許した。しかし近年の半島内部への來住は、各開港場の開港即ち明治九年以後である。近年、朝鮮民族の「東亞日報」が「中國人の特長」と題して、彼等の勤儉と努力が齎らす業績につきて反省を促し、「中國人の民衆の勤儉と努力は社會の基礎である。朝鮮人はこの社會的に堅強なる中國人の勤儉な努力に學ばなければならない」と結んでゐる。

商人として蔬菜栽培者として、また労働者として活躍する彼等が、最小限度の生活に堪へ得る事は驚くべきで、其の地理的分布が主要都市近郊に多い事は、需給關係上當然の事といはなければならぬ。^{④⑤}

- ① Mac Nair: Chinese Emigration (The Chinese Social and political Science Review, April, 1923)
- ② 木村増太郎 支那の財政と經濟
- ③ 小山 清次 支那労働者研究
- ④ 小田内通敏 朝鮮に於ける支那人の經濟的勢力 「東洋講座第七輯」
- ⑤ 朝鮮總督府 朝鮮に於ける支那人 (調査資料)

九 日本民族の發展

日本民族の此の半島への親遼は、神代の昔、所謂、韓郷の頃からである。其の後、神功皇后の征韓や、任那日本政府の設置や、倭寇や、文祿の役など、人類學や考古學や言語學や史學や歴史地理の研究に屬すべき領域極めて廣い。しかし、現代を基調とする人文地理學的研究として取扱ふべき主題は、明治四十三年の日韓併合後に於ける民族的發展—政治的・經濟的・文化的の地理學的研究であらねばならぬ。而して其の基準としては、先づ人口學的研究を先にすべきである。筆者の作製した「内地人郡別人口密度圖」^本刊によれば、戸口の最も密集せる都市は、京城・釜山・平壤・大邱・仁川・木浦・群山・馬山・元山・新義州等であり、地域としては京城・大邱・馬山の附近と、農業移民の多い全羅北道の西海岸とである。

警務上、教職上また産業上、到る處の村落に點在してゐる同胞は、數の上からいへば、まだ少ないが、民族的發

展の基礎としては見逃がすべからざる現象である。

朝鮮に於ける日本民族の發展過程の地域的研究は、統治的使命と交渉を有する我が國に取りて、最も重要な命題である。これは此の半島に居住してある職業を有し、或は居住せぬまでもある關係を此の半島に有する人々が、最も深き智識とし、最も廣き理解として有してゐるべき筈である。しかし、何等職業的、また利權的關係を有しない學徒が、個々の經驗的實感を超越し、多くの事例を綜合し、主觀的よりも客觀的に、演繹的よりも歸納的に、嚴正な學的立場から批判する所に、事象の真相を把握し得る。此の意味からすると、之を究明する朝鮮の人文地理學的研究は、學としての外に、國家的の深い意義を有つものである。たゞ、此の半島が民族の交流地域たるが故に、其の研究には、先づ民族個々の分析的研究^②に出發し、次に相互關係の綜合的研究を必要とする。滿洲に於てまた北支に於て、我が民族的發展が意圖されてゐる今日、其の前提ともいふべき此の半島の研究は、益々重要性を有つ。

① 朝鮮總督府 朝鮮に於ける内地人 (調査資料)

② 村田 懋磨 朝鮮の生活と文化

③ 淺見倫太郎 朝鮮法制史稿

一〇 人文地理學と中心思想

人文地理學の研究目的は、一定の地域内に於ける自然對人類社會の觀察に始まり、其の相互關係の考察によつて完成されるもので、其の觀察に種々な方面の専門的知識の補助を要するが如く、其の考察の完成には哲學的思想によつて統一する事を最も必要とする。ラ・ブラーシュは、其の遺著『人文地理學原論』Principes de Géographie Humaineの緒言『人文地理學の意義と其の對象』に於て、「人文地理學は吾人の棲息する地球を支配して居る物理的法則と、地球上に群居して居る生物相互の關係との一層綜合的なる認識である」といひ、次いで人文地理學的思想の發達せる徑路を述べ、最後に「人文地理學の問題は、人間が自然から受けた影響の量をはかり、歴史上の事變にあらはれた人類の地理的な宿命的方面を理解するにある」と結んでゐる。之によれば人文地理學の實證には、史觀を要し、哲學を要する。従つて人文地理學の研究には、此の目的を達成する觀察方法を必要とするのは勿論であるが、觀察方法は要するに手段であつて目的ではないから、常に其の目的とする法則の發見と相互關係の闡明に透徹する中心思想の把握が肝要である。これ最近歐洲の地理學界に於て思想的方面の高調され來つた所以であつて、フランスに於てはラ・ブラーシュ及ブリューンが、其の著書に於て地理學的精神 Esprit Géographique を唱へ、ドイツのバンゼは、其の著『地理學の精神』Die Seele der Geographie に於て、地理學の眞諦を説いて「地理學自身を世界觀にまで高めなければならぬ」と主張してゐる所以である。

かゝる見地から朝鮮の人文地理學的諸問題を顧みる時、民族の交流地域としての朝鮮が、今日如何なる宿命的關

係にあるかの理解は、重要な課題である。それに對する我々日本民族の責務は、學術的研究題目とするにとゞまらず、指導者としての自覺と反省に於て果されなければならない。朝鮮民族の觀察は、前に述べたやうに、朝鮮に於ける彼等の生活が其の主體とさるべきであるが、一面には併合後に於て、西は滿洲に移動して水田耕作に貢献し東は日本本土に移住して來た多くの人達の生活をも、また傍證的な研究題目となすべきである。

一二 朝鮮の主要聚落

一 概 説

北緯三十三度から、北緯四十三度の間に延長してゐる半島朝鮮の地理的位置は、内地に於ては、九州の北端から北海道の南端の間に廣がつてゐる。而して其の地形たるや、李朝末期にあらはれた地理學者李重煥が、其の著『八域志』に向し西開し面といつてゐるやうに、東の日本海岸に急に、西の黄海岸に緩やかに、また其の氣候に就いても咸興(咸南)以北、山川危險、風俗勁悍、土寒地瘠といひ、靈巖(全南)東南海上有し八邑……冬日草不凋。蟲不蟄といつてゐるやうに、北寒南暖の風土であり、従つて産業の發達人口の疎密も、共に北よりも南に集約であるから主要聚落の地理的位置も、北東に少なく、西南に多い事は、我々は讀圖の上からも之を實證し得るのである。

(註) 聚落の原義が、もと村落居住を意味する事からすれば、聚落とは、村落もこれを含むとも解すべきであるが、限られたに頁數に於ては、村落にまで及ぶ事が困難である。しかし長く國家的存在であつた朝鮮の聚落を述ぶるに當つては、村落を構成する民家の家構と、定住せる村落居住以外に、火田部落の多い事に就いて一言せざるを得ない。

民家の家構は、小さいものは、温突の間と附屬する厨あるに過ぎない。それが中農になると、一間の温突が上房・下房の

二間となり、更らに離れともいふべき越房がある。各室共屏式の窓で出入するやうになつてゐるが、その屏が小さいから室内が暗く、内地の住家に比べると著しく閉鎖的である。

家族制度の著しく發達してゐる朝鮮としては、同姓の多く居住してゐる部落では、宗家を中心とする大家族の居住状態を示し、それらの家構は一般の民家に比べると規模が大きい。また火田部落は、新に林地を開墾して居住するもので、地力が衰へると他に移動するから、林野を荒らす事が夥しいので、其の整理に總督府が努力してゐる。火田部落は風土の關係上、北鮮の咸鏡南北、平安南北の四道に多い。また南鮮には、新に内地人の移住した部落のある事も見逃してはならない。

聚落の地理的位置を明かにする上に、なほ我々の注意すべき事は、北朝鮮と南朝鮮との限界である。これに就て小藤博士は、

北東日本海岸の朝鮮灣から、南西黄海岸の濟物浦に近い江華灣に達する一線は、全半島を殆んど等分的に分つものである。

となし、此の限界線によつて分たれた半島朝鮮の北西部と南東部の特質に就いて、地形・氣候・生産力・民俗・文化

第一表

北西部	北 關 關北(咸北)・關 東 原 江 兩 西 海南(黄海) 關南(咸南)
南東部	三 南 湖西(忠清南北)・湖南(全羅北)・嶺南(慶尙南北) 關 東(原江)・京畿

第二表

北西部	面積%	主要都市數
南東部	四三	府
	五七	八
		一〇

等の差異を比較しておられる。此の限界線によつて、朝鮮でよばれてゐる風土的呼稱による地域を分けて見ると、第二表の如くである。

此の二大地域が、主要聚落の地理的分布に如何なる關係を有つか、それらと面積と人口との對比を比較して見ると第三表の如くである。

南東部は、面積に於ける比率以上に、人口及主要都市數に於て、高率を示してゐる。故に、主要聚落の地理的分布は、南東部は北西部に比して遙に多い事になる。前掲の主要都市が、府と邑とに分たれてゐるのは、府は内地の市に比すべき都市で、道廳所在地(京城・大邱・平壤・新義州・咸興)・貿易港(仁川・群山・木浦・鎮南浦・釜山・元山・清津)であり、邑は之に次ぐ都市で、多くは郡治のある所である。

二 邑 内

府に對しての邑は、郡治のある處であるが、邑といふよりも、邑内といふ呼稱が、朝鮮の固有都市としての實感を伴ふのは、今日の所謂邑の外に、李朝時代にはなほ多くの郡治のあつた邑内があり、それが、朝鮮固有の聚落としての都市の原型であつたからである。此の邑内は我が郡役所所在地に該當する町で、これを内地の町に比べると地方的商業の中心機能を有つてゐる點は同じであるが、其の地理的位置並に其の形態の上から見ると著しき差異が

ある。即ち其の地理的位置は、殆んど其の一角たる丘陵または山麓に城郭を有してゐる處が多い。だから邑内または邑城ともよばれる。例へば昔任那の都であつたといはれる金海邑に關する記事を見ると、

金海邑城ハ、東西凡四百四十米突、南北二百八米突、周圍八百九十六米突、石壁高サ四米突、銃眼ヲ穿テ四門ヲ開キ、壁周突起部ヲ築キ以テ側防ニ供ス。周邊土地平坦東百餘米突ヲ間シテ山巒屏立ス、其ノ上一山城アリ、規模小ナリト雖ドモ稍々形便ヲ得タリ。〔朝鮮地誌略〕

と記されてゐるのに徴しても、邑内の地理的位置と其の形態の特異性を明かにし得るであらう。

是等の邑内の商業的機能として、内地の町に比べて特異に感ぜられる事は、常設店舗の外に、定期の市場の爲に一定の空地が設けられてある事であり、また昔郡廳であつた建物の門前附近に、昔の郡守であつた人達に對しての善政碑なるものが多く建てられてある事である。しかも是等の善政碑の多くは、眞の善政碑ではなく、其の虐政に對しての諷刺標であつて、これによつて彼等の遷徙が早められるやうに工夫されたといはれてゐる。

以上は邑内の形態並に機能に於ける一般性に就いて述べたのであるが、日本と支那との間に介在してゐた半島朝鮮としては、兩國に對しての國防を國境の邑内に施したのは當然であり、これが朝鮮の邑内としての形態に一特色を加へてゐる。殊に滿洲と僅に鴨綠江や圖們江を隔てゝゐる邑内に於ける防備は中々であつた。こゝに鴨綠江岸に就いて述べるならば、義州は支那への通路の咽喉であり、國の北門である關係上、其の邑内の城壘を堅固にし、背

後の統軍亭は鴨綠江に臨んだ形勝の地で、高麗の時には燧燧を置いた地點であり、日清日露の兩役には、我軍の司令部の駐劄地ともなつた。義州ばかりでなく、江の沿岸及其の附近には、第一の防禦線としては、朔州・昌城・碧潼・楚山・渭原・江界の六邑の壘を高くし、溝を深くし、なほ其の間にも江に沿ふて多くの城塞を築いて、緩急事に應ずるやうにした。また其の最後には第二の防禦線として、西は鐵山から東は熙川に至る間に、植松・安義・天摩・幕嶺・恃塞・委曲・柔院の諸鎮をば、夫々主要な諸邑の近くに置き、以て險に據つて路を扼するやうにした。殊に其の後の第三の防禦線となつてゐた寧遠城と安州城とは、共に平安南北道の境を流れてゐる清川江の下流を挟み、北と南に對峙してゐるので、此の二つの城を兼ね領すると、平安南北道を控制する事が出來たといはれてゐる。私は安州城に上つて、北に寧遠城の崇險を望み、伏して安州城の地形を相して、天險と地利とが兼ね備はつてゐる事を知つたのであつたが、讀者のために安州城の邑内に就いての記事を抄録すると、

南ハ丘陵ニ據リ、北ハ清川江ヲ帶ビ、丘脊環ラスニ堞壁ヲ以テシ、分チテ内城外城トナス。内城ハ山勢ニ從ツテ街路凹凸戸數僅ニ二三百戸ニ過ギズ。節度使營ハ堂宇宏壯塼墼修潤儼然トシテ鎮營ノ威容アリ。外城ノ玄武門ノ西ニ百祥樓アリ、江ニ臨テ翼然屹立ス、高麗ノ時創造スル所今尙舊觀ヲ存ス。〔朝鮮地誌略〕

この文を読んで瞑目すると、安州城内の形態は、江山の姿百祥樓の印象と共に、腦裡に浮んで來るのである。故に我々は朝鮮の主要聚落としての大きな都市に關する記述を地圖と對照しつゝ、研究するに先ち、都市研究の基準と

してそれらの都市の原型である邑内が、朝鮮固有の都市として、如何なる機能と形態を有つてゐたかを精確に認識する必要がある。

この朝鮮固有の都市の機能と形態とに比較すべきものとしては、日本との近代的貿易のために新に發生した都市例へば仁川、また日本人の移住によつて新に發生した都市、例へば裡里の如き新興都市の發達過程がある。かゝる純日本式の主要都市の認識は、記述と讀圖との對照によつて得られるが、朝鮮固有都市の研究基準は之を邑内に求めなければならぬ。

三 慶州と開城

ふるき邑内として、また現在邑内としての機能と形態を備へてゐる類型として、筆者は慶州と開城をこゝに取る。

一 慶州

約千年の昔、新羅の都として奠められた所で、二百七十餘年間、其の都城の所在地であつた事は、東北迎日灣に達する兄山江の平野と、東南蔚山灣に向ふ南川（兄山江の支流）の平野と、西方琴湖江の平野に連つてゐる毛良川の狭き平野の交叉點に位する交通の衝に當つてゐる咽喉の地である事からも首肯される。今日でこそ人口二萬に過ぎ

ないが、新羅當時は都城としての大都市であつた。東北の兄山江の江口に浦項港を控えてゐるので、古代日本との交通關係の多かつた地理的位置が理解される。筆者は、内地よりの朝鮮への觀光客が、常に釜山から直ちに鐵路京城に向ふコースを取られるのは、日本と朝鮮との古來の關係を明かにする所以でないと考えてゐる。此の意味から釜山から蔚山に出て、それより佛國寺に詣で、後方の吐含山上の石窟庵から日本海を下瞰し、下つて古都慶州を訪れ、時あれば浦項に出て、古代交通の關係を明かにする事が、日本と朝鮮との關係を明かにし得る主要な聚落の調査であると信じてゐる。

二 開城

其の地理的位置を見ると、東には臨津港西には禮成江の下流域の間に介在し、しかも臨津江に注ぐ支流雲溪川に跨り四方殆んど山嶽で圍まれてゐる。形勝は小規模ながら確かに都城となすに好適な土地である。新羅の王族弓裔が開城の北東に當つてゐる高原にある鐵原に都したのに、之に代つた王建が、更らに地理的條件の好適な此の開城に都したのは、こゝが王建の生地であるばかりではあるまい。かくて高麗朝四百六十餘年間、こゝが都であつた統治の面影は、北境の松嶽山麓の高臺滿月臺の廣場に残つてゐる礎石や石階に探り得るし、また古都の床しさは、通り抜けの出来ない特有の袋小路が裏通りに多い事や、高麗朝の遺物だといはれる二階建の民家にもそれが味はれる。

しかし雲溪川に沿ふてゐる整つた瓦葺の多くの民家は、朝鮮の民家といへば、矮小な藁葺小屋のやうに思ひ勝ちな内地人に一目見せたいやうな氣がする。筆者は朝鮮の聚落の調査の公務のために、屢々此の開城を訪れ、しかも相當な民家に入居したが、朝鮮の都市の中で、こじんまりとしてしかも洗練された朝鮮文化を味ひ得る所といへば、先づ指を此の開城に屈したいと思ふのである。一般に朝鮮の民家では、庭内に草花を植ゑて觀賞する事が内地のやうに多くないのに、開城の市民は之に反して、小さい民家でも草花を植ゑてゐるのは他に見られない慣しである。

しかし開城の主要聚落としての價値は、其の商業的機能の特質にある。高麗朝が亡ぶと共に、都が京城に遷つて開城市民が仕官の途を失つた事に刺戟され、それが商業的活躍となつて全鮮にあらはれた。即ち彼等は行商となつて忍苦の中に物貨の取引をなし、其の發達は殊に卸商組合たる白木塵(木綿類)、楡塵(絹物)、青布塵(麻)、魚果塵(魚類・果物)、衣塵(被服類)としての實權を握るに至つたし、なほ商取引は簿記の發達、去來紙(手形)の使用を促し、殊に簿記の精巧は、今日の複式簿記に遙色なきほどだといはれてゐる。かく男子は開城を本據として行商を營んだので、留守居の主婦は、營々として一家の經營に努め、かくして今日の開城の富商が出來上つたのである。勿論、時勢の推移、經濟界の變遷は、開城商人の勢力にも相當の影響を及ぼしてゐるであらうが、是等の經濟的實力が、李朝五百年の間に此の小都市に集積され、其の機能が自から家構の上にもまた市民の行動の上にもあらはれ、それらが他の都市に見られない充實を示してゐるのである。

四 平 壤

地圖にあらはれてゐるやうに、平壤は實に形勝の地である。東に大同の大江を控え西には小さな普通江が流れてゐる間に、侏羅期の狹長な丘陵を負つてゐる此の都市の地形は、我が水戸市に髣髴たるものがある。邑城は丘陵の要害を利用して築かれてゐて、檀君以來、箕子、高句麗等の史蹟名勝に富み、殊に丘陵から大同江を下瞰する風景はよい。筆者の印象では、浮碧樓からの展望は、其の家構と共に鮮かに残つてゐる。

しかし、主要都市としての平壤は、かゝる史蹟に富めると共に、近代的な工業都市たる事で、其の重因は、航運の便ある大同江岸の平野の咽喉に位しながら、附近に無煙炭の埋藏量の多い爲に、海軍燃料廠を初め、電氣・製糖・製鐵等の工業が起り、政治(道廳)教育の中心地たると共に近代都市的發達をなしつつある。従つて其の人口には、京城・釜山に次いで十八萬五千を算し、内地人は、京城・釜山・大邱に次いで多い。軍事上からいつては、驛附近に旅團司令部・聯隊・兵器製造所が置かれてある。

五 京 城

京城は、平壤が大同江を東に控えてゐるやうに、漢江を東に控えてゐる地理的位置は似てゐるが、其の距離はや

、遠く、しかも其の立地的關係は、平壤よりも開城のそれのやうに青溪川を挟んでの盆地である。だから京城驛に着いた我々の目標は、北には峨々たる北漢山（三四二米）を仰ぐ事であり、南には稍々低い南山（二六五米）を顧みる事である。北漢山の麓には、李朝五百年の都城の礎を置かれた景福宮があるし、其の東方には、昌徳宮（明治四十年來の李王の居殿）宗廟・經學院等がある。従つて此の一郭を遺棄すれば、これらの形態を通して、我々はこゝに李朝文化の遺影を探ぐる事が出来る。のみならず、この附近には李朝時代の文武官（兩班）の大きな邸宅の残つてゐるのをも見得るので、東京市でいふならば、麹町區のやうな感じがする。

（註）總督府は、景福宮の前に新築せられ、京城帝國大學は昌徳宮の東方の山麓近くの閑靜な處に建てられた。

是等の一郭の南方を東西に通ずる鐘路通こそ、朝鮮固有の商人町で、十年前までは其の店構、其の商品等に特色を味ひ得たが、僅か一ヶ月前にこゝを通つた筆者は、家構の中でも瓦葺の屋根は以前と變らないが、店構は内地のショーウィンドーらしくなつてゐる處があつたり、商品なども、形態こそ變らないが、多く大阪市附近で製造されたと聞いて驚いた位である。鐘路の少し南の方を、それにはゞそれに平行して流れてゐる青溪川には、水標橋、觀水橋などいふ石橋が架つておつて、其の構に朝鮮固有の趣があり、今は水浅き川中に水深を測る石造の標さへ残つてゐる。

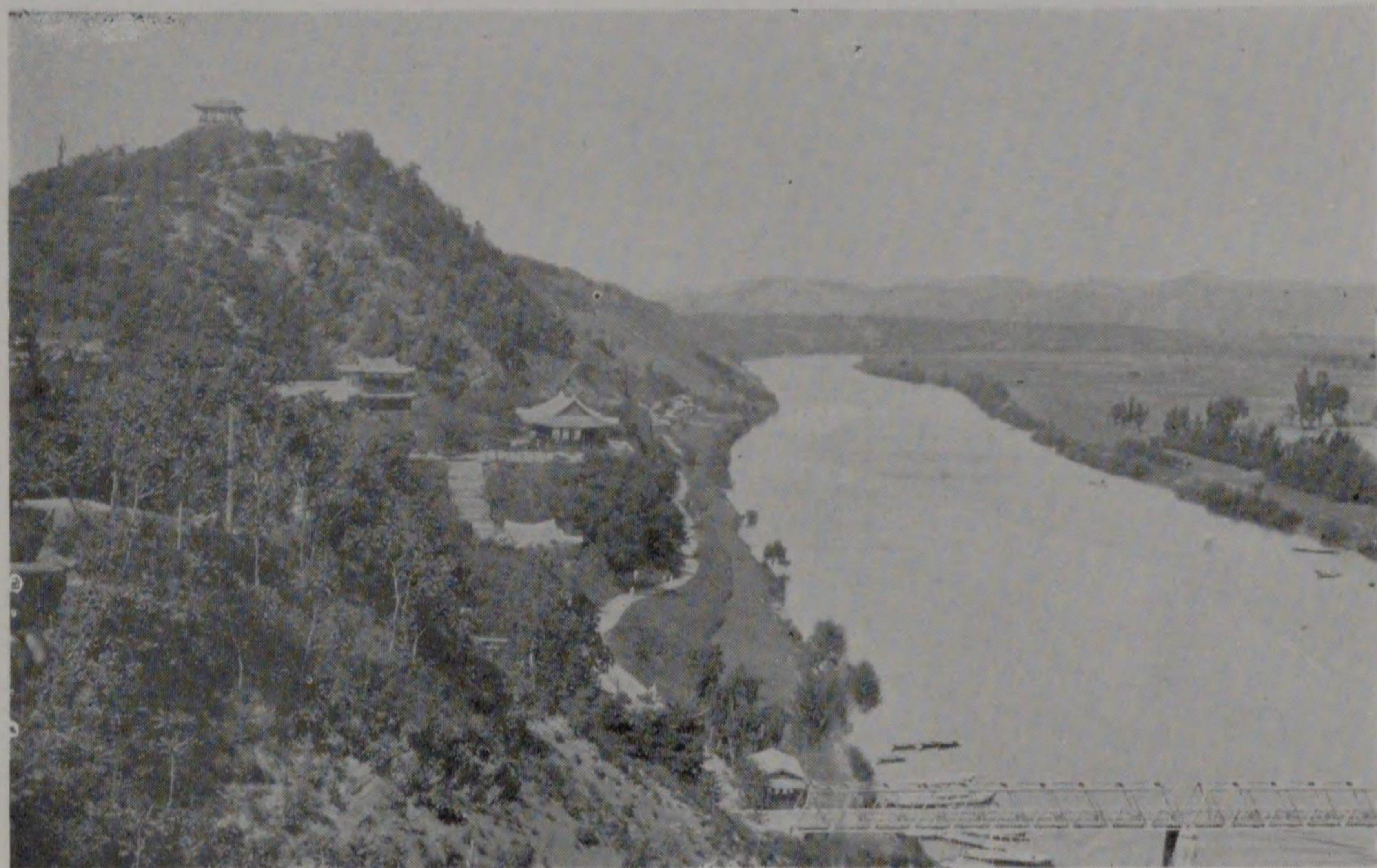
青溪川を境としての南半には、内地人の居住地區が多く、殊に南山の麓に沿ふてゐる本町通の狭き路幅は、當時



慶會樓と北漢山（京城・景福宮内）



民家の諸相（京城）



牡丹臺と大同江



景福宮外郭

石窟庵より日本海遠望

内地人に初めて許された居住地区の状態を物語つてゐるが、其の商店並は殆んど内地の大都市に異ならない。其の本町通の西端と交叉する南大門通も、また内地人の新に發展した商業地区である。本町通の後方の山麓に朝鮮神宮を初め、京城神社が建てられ、日本の公使館のあつた所謂倭城臺もまた此の一郭である。

京城驛は、本町通の西方、南大門を出た處にあるが、京釜本線の次驛龍山驛までの間の東側の一郭は、師團司令部を初め、軍事的造營物の多くが建てられてゐる。

京城府の人口は約七十萬六千餘であるが、朝鮮人は約五十七萬三千、内地人は約十三萬一千を算し、外國人は約二千五百である。

(註) 京城のやうに、五百二十年も一國の首府であつた處が、我が國と併合し、我が統治を受くるやうになつて、其の都市的施設は殆んど内地人の意圖によつて遂行されるやうになつた。従つて其の機能は勿論形體の上にもそれがあらはれて來てゐる。是等の都市的變化を綜合的に説述する事は極めて困難な事である。故に筆者は特に以上の如き描寫を試みたが、之を都市的區劃からいへば、舊京城・新京城に大別すべく、更らに龍山附近をつけ加へるべきであらうが、其の眞の描寫は、舊京城と新京城の特色が全一體の都市として如何に配合されてゐるかを考察しなければならぬ。都市の記述は、所謂地誌的描寫の次に、綜合的な觀方が加へられなければ生きないであらう。

六 港 市

六 港 市

第三表

府名	總人口	内地人
京城	七〇六、三九一	二二二、二六
釜山	二二二、一四二	五九、三二
平壤	一八五、四二九	二二、八四
大邱	一一〇、八六六	二七、八二
仁川	一〇三、四七三	三三、九七
清津	六六、九六六	二二、三七
元山	六三、九六六	一一、八四
木浦	六二、四七七	八、八二
咸興	六一、四三〇	九、六一
光州	五七、四六一	八、四九
開城	五五、九五五	一、六三
新義州	五二、三四七	八、四三
鎮南浦	四八、八二六	五、四九
全州	四二、五二〇	五、七六
群山	四二、八五一	一〇、三五
大田	四〇、〇〇一	九、七八
馬山	三三、四二二	五、〇三
羅津	二四、五〇八	四、九二

朝鮮の主要聚落たる「府」は、全鮮を通じて十八を算する。其中、港市は十を占め、人口の總和から見ると、他は百二十六萬に對して港市は七十一萬を占めてゐる。其の中、内地人口數は、前者が十四萬であるのに後者は二十一萬餘であるのは、港市に於ける日本人の數の多き事を示してゐる。なほこゝに一言すべきは、日本人の増加率は、港市に於て著しき事で、これは港市に於ける日本人の經濟活動の著しき證左である。これに反して、京城府が十年前に比して、總人口が三十三萬を増加してゐるのに、日本人の増加僅かに二萬七千に過ぎないのは、都市計畫地域の擴大による増加人口を包容してゐる事を見逃してはならない。港市に於て、要塞地帯たるは、釜山・馬山・元山・羅津の四港であるが、殊に羅津に於て、附近の雄基港から豆滿江の河港慶興附近の地域まで擴大されてゐるのは露境に對する關係からで、かの李朝時代に、鴨綠江岸を唯一の國境とし、小さい河境でさへも要害視された當時を顧みれば全く隔世の感がある。港市たる諸府中、統監府時代には、釜山・平壤・仁川・清津・元山・木浦・新義州・鎮南浦・群山・馬山・城津の十一港は、急

に設備され、總督府となつて規模を擴張し、各港の修築が行はれた。

一 釜山

朝鮮第一の港市、東港は水深く、こゝに水陸連絡の設備が整つてゐる。貿易の大部は内地との移出入、漁業は内地からの通漁で盛んであるが、原料と勞力の豊かな南鮮を背後地とする關係上、近年工業（精米・麥・製材・硬質陶器・醸造・紡績・機業・車輛製造）が發達して來た事は注目し値する。

二 仁川

釜山が天然の良港に立地してゐるのに反し、仁川は、四圍の環境は良灣ではあるが、内港夫自身は水淺く干満潮の差が多いから、閘門式の船渠で之を補つてゐる。地理的關係上、對支貿易盛んに、支那商人の居住が多い。地理學的には觀測所の設られてある事を見逃してはならない。

三 元山

港市としての發達は新しいが、其の一部である元山里、即ちもとの元山津の地理的位置が、古來江原道の北部と咸鏡道の南部との交通の要衝、更らに首府京城及平壤への通路の集點となつてゐたので、水陸連絡の中樞點たる大

市場であつた。今日港市たる元山の中心地區が、新に北西部に發生したのは、近代的港市の發達過程としては當然の事で、こゝを中心とする港灣一帯即ち永興灣は、要塞地帯であり、要塞司令部は元山にある。

(註) この永興灣に對しての南の鎮海灣(釜山・馬山・鎮海の沿海一帯)は同じく要塞地帯で、鎮海には司令部がある。

四 鎮南浦・清津

鎮南浦は大同江口に位し、平壤と不可分の關係にあり、日清戰役後、内地人の移住によつて、漁村が港市にまで進展した過程は群山に似てゐる。安東・大連にも定期航路が開けてゐる。鎮南浦と殆んど表裏の位置にある清津は、日本海岸第一の要津で、浦鹽・敦賀・新潟への定期航路は開け、陸路新京にも一日一回の直通列車が通じてゐる。

五 木浦・群山

木浦は米穀・棉花の移出、群山は米の移出が夥しいのでも、また新しく開かれた點でも似てゐる。たゞ木浦が昔は鎮營があつた所であるのに、群山は全く寒村であつた事が異つてゐる。前者は榮山江口に、後者は錦江口にあつて、共に干満の差が大きい、殊に群山の方がはげしい。

七 地方的中心都市

港市に次いで、我々の注目すべき所は、地方的中心都市の發達である。既に前に述べた所謂邑内は、李朝時代には何れも地方的中心都市であつた。しかし併合後に於ける地方行政の變革並に交通網の推移は、是等の地方的中心都市の經濟的價値に變化を來たすに至つた。例へば、地方行政の中心地でありながら、北鮮の海州、南鮮の清州・公州・金州・光州は、何れも邑内でありながら、北鮮の新義州・咸興と南鮮の大邱・光州は、共に府として地方的中心都市としての優位を占め、殊に大邱は、京城・釜山・平壤に次いで近代都市的發達をなしてゐる。大邱が地方的中心都市として發達したのは、こゝの市場は、李朝時代に全鮮でも有名な大市場であつたからで、附近の沃野は、併合後の農業的施設の進歩と共に、穀類・果樹・棉花・煙草等の集散が夥しくなり、地方行政の中心地たるに加へて、經濟的中心地となつた。それが内地人の數が京城・釜山に次いで多い事にもあらはれてゐる。地方的中心都市としての新義州は、大邱が經濟的中心地たるのに反し、國境都市としてまた港市としての重要性が、地方的中心都市としての特殊性——對岸の安東に對する位置、また對支貿易の關係、支那人の居住等——をもたらしめてゐる。鴨綠江上流の森林地帯が、こゝに製材業を發達さしてゐる事も注目すべきである。

八 結 言

朝鮮の主要聚落の都市的形態と機能とが、如何に近代化しつゝあるか。その近代化する過程に對して、内地人と

朝鮮人とが如何に協働しまたは對立しつゝあるか。是等は直接地理學的研究の對象ではないとしても、それらのあらはれが、都市的現象として生起する種々相を、我々は、地理學的にも之を分析し綜合する必要がある。こゝに將來研究すべき新しき問題が伏出してゐる。朝鮮の聚落に生起すべき是等の新しき問題の分析と綜合に就ての考察は今日日本の地理學界に提示されてゐる研究方法のみによつてそれが可能であらうか。朝鮮の此の問題に對しては、少なくとも純地理學の見解に、更らに地域主義的考察を添加する必要があると思はれる。然らば地域主義とは何か地域主義に、各地域の個性的特質たる精神的並に物質的發達を完全に發達せしめ、それらの自由さを失はさせず、全國家の經濟・社會並に文化の統一と進展に寄與させるために、各地域の科學的研究と之に適應する經濟的意圖を建設し、其の必然的發達を確實にする行政組織を要望し、更らに、之を遂行すべき社會的並に文化的諸事業を實踐しようとするものである。

歴史を異にした二つの民族が、相携へて複雑な都市生活を營爲する事から、朝鮮の聚落に生起する諸問題は、かかる思想の實踐によつての解決が、日本よりも一層必要になつてゐる。こゝに朝鮮の主要聚落研究の必要と興味がある。



な食品であるのと同じものであるのを見て、今更ながら風土の類似と植物との關係を感じたのであつた。山地を下つてから高燥な平原に出ると、一面に廣い草原の牧畜に適する景觀が眼前に展開する。牧草が堆く積まれてゐたり、また廣く生えてゐたり、其の中を馬車が牧草を満載して驅けていつたり、ロシア人が野外に働いてゐたりするのが目につく。九月十六日とはいふものゝ、晩秋ともまた初冬ともいふべき大興安嶺附近の風物は、廣大ではあるが淋しいし、色彩の上からいつても單純でありまた消極的である。しかしかゝる土地にも、一年のある時季には春が訪れて、萬事が活動的になる。七月になると、白薔薇が此の附近の野原一面に咲き亂れて、すつきりした景觀が車窓からも眺められるし、海拉爾附近の平野などには、赤薔薇と小さい赤い姫百合が咲き揃ふて美しいと聞いて、自然の恵の恰き事を今更感じたのであつた。

かく北西部の乾燥地域は、滿洲を通じての廣大な牧畜地域で、其の中心に立地してゐる都市海拉爾は大きな集散地である事を目撃した。此の乾燥地域を除いての滿洲の中で、其の西部には、新に加へられた西遼河と潢河との上流域から成る熱河省があるが、残れる大部は從來の所謂滿洲であつて、それは黒龍江・吉林・奉天三省に亘つてゐる廣い領域で、北部の森林地域と中央平原と北東から東部への森林地域とである。

二 北部の森林地域

大興安嶺から東方小興安嶺に續く黒龍江省の北部は、黒龍江右岸の森林地域で、其の樹種は氣候の關係上、針葉樹と闊葉樹とが混生し、外に礦物資源としては金、野獸は貂を産する。其の地名がよく民族遷移の過程を示してゐる事は、大半蒙古索倫語諸書音譯多訛莫可得而考也、とあるによつても明かである。

三 中央平原

北部の森林地域の南方は、北は嫩江の流域、南は遼河の流域から遠く遼東灣岸に亘つてゐる滿洲の中央平原で、我が國でこそ之を北滿と南滿に分けて呼びなされてゐるが、亞細亞大陸に於ける地理區としては、滿洲なる一大地域内の農業可能地域としてのセントラル・プレーン（中央平原）として世界的にそれが知られてゐる。かゝる地理的解釋からすれば、新國家滿洲國の成立と共に、其の首都が此の中央平原の略々中央に立地してゐる長春に遷つた事は、寧ろ妥當とすべきである。しかし此の廣大なる中央平原の人文の考察には、これを基礎付けてゐる風土及産業の差異からしても、それを北と南に分けてするのが至當であるといはなければならぬ。

然らば何處が北滿と南滿との限界であるか。我々は南滿から北滿に通じてゐる南滿鐵道と東支鐵道によつて、此の平原を車走しても、何處が北滿と南滿との限界であるか。日本では到る處に山岳多き景觀に見慣れてゐる我々には、此の中央平原を通る車窓からの展望は、全く平原の連続であると感ずる外ないのである。しかし地圖に據つて

其の限界を辿るならば、北流する松花江と南流する遼河との流向を決定する限界が、はつきりと跡付け得る事が出来る。然らばはつきりした其の分水嶺は何處であるか。滿鮮の地理的踏査の先驅者である我が小藤博士は、其の論文「西比利亞及滿洲に於ける哈爾濱の位置」(『東洋學藝雜誌』三六ノ四四八)に於て、此の限界に就いて左の如く述べられてゐる。

滿洲平野を南北に分割する界線は、長春と其南方の公主嶺驛との間、最高三三〇米點より洮南西位の突泉(醜泉)に延長する一線とす。此の線は分水嶺をなすも、平原中にある事とて、極めて平低なれば人の注意を惹かさるも、氣候・風土・動物總體の境界をなし、其の分水線寧ろ分水嶺以南は遼河の灌漑域に屬し、衆水悉く渤海灣に朝宗し、而して以北は松花江灌漑域に入り、諸水脈は嫩江及吉林省に注ぐ。とし、それを圖上に跡付けつゝ、

長春南方の分水線三三五米より哈爾濱迄の鐵道は、西に傾斜地面を走り、大體二〇〇米以下なり。と附記してゐる。

公主嶺から長春に赴く車窓からは、北と南との此の限界なるべき目標を感じ得なかつたが、長春から哈爾濱までの間では、窓外の展望、何處となく低下する地形を感ずるのである。

更らに氣候の上からの南北滿洲の限界は何處であるか。公主嶺農事試驗場技師村越信夫氏は、「大陸氣候と海洋氣候」に於て、

北滿洲地域内の都市としては、哈爾濱・安達・齊齊哈爾・札蘭屯・海拉爾・滿洲里・一面坡を擧げ、南滿洲地域としては、長春・公主嶺・奉天・營口・大連・旅順を擧げてゐる。

即ち長春と公主嶺との氣候の差異は、地形夫自身が、北滿と南滿との分水界をなすほどに明確な表現となつて居らぬのに、此の二都市以北地域の氣候は、反つて北滿としての大體氣候を特色付けてゐるから、かういふ氣候的區別が定められたものであらう。なほ同書に

滿洲に於ける降水量の分布を研究して見ると、南滿洲特に滿鐵沿線中、旅順・大連は比較的少なく、内陸に進むに従つて漸次降水量を増し、長春が最も多雨である。……滿洲に於ては、降水を齎らす方向の大陸沿岸地方に山脈なく、奉天・公主嶺・長春と漸次内陸に進めば進む程、漸次其の海面上の高さを増すから、夏期濕潤な南西風は所會の水蒸氣を分離して内陸に進むに従つて降水量を多くする理である。しかしこれは南滿洲各地の降水の分布状態を述べたもので、北滿洲に於ては聊かこれと其の趣を異にする。

とあるによつて見ても、長春・公主嶺附近から北する大地域と、南する大地域との氣候の特異性は、中央平原を南北に區劃する自然現象である。なほ村越氏は更らに「特用作物栽培と氣候」に於て、

滿洲の氣候状態は、生育初期に於ては、溫暖多濕、生育末期から成熟期に至る迄は寒冷乾燥である。と述べてあるのに徴しても、人類社會の生活の基調としての滿洲の氣候を考へる時、生育期に於ける雨量の差異

は、滿洲を氣候の上から南北に分つ最大な因子であるべきであり、此の見地からしては、公主嶺と長春とは、南北滿洲を分つ氣候の限界とならずして、更らに北方に展開してゐる大地域に立地してゐる諸都市をば、北滿に包括して見るのが妥當な見解である。

なほ村越氏によつて公にされた「滿蒙雨量分布圖」(滿鐵農務課)は、明かに雨量が北滿と南滿とを分つ基準となる事を示してゐる。即ち所謂北滿としての大地域に立地する諸都市、哈爾濱・安達・齊齊哈爾・札蘭屯・海拉爾・滿洲里・一面坡の中で、南滿の諸都市と同質の雨量を有するは、北滿の東部に位する一面坡であつて、其の西部に位する滿洲里・齊齊哈爾・海拉爾の諸都市は、何れも乾燥氣候を示してゐる。北滿の西部即ち齊齊哈爾以西に於いて、札蘭屯のみが比較的雨量の多いのは、それが大興安嶺の東麓にあるが爲であつて、大興安嶺の東麓に立地する此の都市が、水の清い木立の繁つた環境の中にあり、それが夏の避暑地として選ばれてゐる事も、雨量と密接な關係にある事を首肯し得るであらう。

かくして我々は中央大平原に於ける北滿と南滿の自然的限界を理解し得るである。

四 北東から東部への森林地域

北東から東部への森林地域は、北は松花江を隔て、黒龍江北部の森林地域に對し、それから南下して吉林省の大

部と奉天省の東部に亘つてゐる。即ち北は安達山脈から小白山脈に續いて吉林省の大部を占むる森林地域であり、それが南方朝鮮との國境にある長白山脈に續いて、松花・豆滿・鴨綠の三大江の分水嶺たる森林地域である。是等の山地が森林の寶庫である事は、安達山脈は、富於森林其北端傾斜之勢甚緩覆以樺樹林南端森林最多といはれ、小白山脈は、多自古未受斧斤之森林也；此一帶山脈傾斜之勢甚緩其峯頂高峻不一焉有美蔭之森林覆之と記され、長白山脈もまた山腹全係土質森林鬱茂不見天日とある。以上何れも誇張な記事でない事は、中牟田氏の『滿洲森林調査書』に徴しても明かである。

鴨綠江右岸ノ森林及松花江流域ノ森林ニ非ザレバ、直チニ企業ヲナスベキ森林ナシト云フコトヲ確認シ得タリと前提してゐる。更らに

南部滿洲ニ於ケル木材ハ、主トシテ清國木材即チ鴨綠江木材及吉林木材ヲ以テ供給セラレタリ、今其ノ分配ノ有様ヲ査察スルニ、大連・旅順口・天津・芝罘及營口等ハ、民船又ハ汽船ニヨリテ之ヲ搬致シテ鴨綠江材ノ主ナル市場トナリ、又奉天・遼陽又鐵嶺方面ニ在リテ東山ノ木材ト稱シ、懷仁(桓仁)・通化方面ヨリ陸路興京・永陵ヲ經テ渾江ノ上流ニ出テ、雨期ニ當テ水運ニヨリテ之ヲ奉天ニ致シ又一面ハ清河ヲ利用シテ鐵嶺又ハ開原ニ致ス、其ノ吉林木材ハ船廠産ト稱シ、陸路寬城子(長春)ヲ經テ、昌圖・通江子及法庫門等ニ致セリ。故ニ之ヲ概括スレバ、遼河沿岸ノ地方ハ吉林木材ヲ利用シ、其ノ他ハ鴨綠江材ヲ需要スルヲ見ル。其ノ材種ハ杉松・紅松・榆木・椴木及

柞木等ニシテ相異ナルモノナシ。

といつてゐる。即ち此の森林地域は、之を圍繞してゐる廣大な滿鮮の居住地域に多大の用材を供給してゐるのである。しかも此の森林地域は、單にその經濟的價值が大きいばかりでなく、それが廣漠たる中央平原に對しての景觀上にも重大な役割をなしてゐる事は、同書の始に、

東清鐵道ノ沿線及之ニ伴フ鐵嶺・奉天・遼陽等ノ如キ地點ノ租借地ハ如何、實ニ將來ニ於テ新市街トナルベキ所ハ悉ク是荒漠タル地域ナリ。樹蔭ノ以テ暑ヲ避クルノ由ナク、更ニ炎熱ニ苦シメラレ、樹梢ノ以テ寒ヲ防グニ由ナク、冬ハ以テ零下三十度以上ノ寒氣ニ苦シメラレ、花ノ艷麗ナルヲ觀ル能ハズ、現在唯是殺風景ナリ。何ヲ以テカ在外居留民ノ精神的快樂ト愉慰トヲ得ベキ乎。故ニ滿洲ノ經營ヲ念ズルモノハ第一着ニ植林ノ必要ナルヲ感ゼザルモノナシ。是實ニ永久的滿洲經營トシテ邦人ノ來住ヲ促シ、以テ諸般ノ企革ヲナスニ於テ少ナクトモ望郷ノ念ヲ去ラシムルニ必要ナルノミナラズ、又以テ樹林ノ繁殖ト共ニ、農耕・牧畜・水利ニ及ホス影響多大ニシテ、永遠ニ滿洲ノ利源ヲ涵養スルモノナレバナリ。

とあるによつても明かである、本書の調査は明治三十八年十月から三十九年一月に亘つてのそれであるから、三十餘年後の今日に於ては、滿鐵沿線の諸都市は、何れも街路樹、公園等の施設に於て林政漸く整ひ、従つて以上に述べられた殺風景な都市的景觀は少ないが、其背後地たる廣い中央平原大部の現状は、恐らくは今日と雖ども、

此の忠實にして遠大なる森林調査者の達見に聽くべきもの多きを認めざるを得ないのである。新國家の建設が年處を經るにつれて、審美的價值としての森林經營にまで着手せらるゝに至るべきは、此の新國家に特殊關係を有する我が國民としても、大に熟慮すべき問題である。

五 南端の半島部

南端の半島部は、以上述べ來つた諸地域に比ぶれば、其の地積の狭小全く猫額大ともいふべきである。しかし我々日本國民に取つては、最も親しみ深き地域である。即ち今朝鮮海峡を渡つて釜山に着き、一路朝鮮鐵道によつて鴨綠江を下瞰しつゝ滿洲に入る我々の同胞は、安奉線の西の車窓に落ち來る注目物は、實に其の半島部を構成する千山山脈に屬する諸山の翠影である。殊に其の名稱の出た千山は、四時溪山の勝景を以て知られ、春の梨花夏の新緑秋の紅葉冬の白雪、何れも温泉湯崗子からの探勝に任してゐる。筆者は滿洲第一の古都といはれる遼陽に宿りかの太子河畔を逍遙しつゝ、此の千山や摩天嶺の翠影に見とれた印象は、今猶腦裏に鮮かである。今『遼陽縣郷土志』を手にして、其の記述を見るに、

東西二方面距城三十餘里外群山攢聚之區而以千山爲名勝：太子河南諸山之幹爲摩天嶺其勢北起於二道河遙接河北朝鮮嶺脈而南注於鷄爪山登爪山四望諸山羅列如兒孫

以上簡單ではあるが、群山攢聚といひ、羅列如兒孫といふ。よく其の山貌を描寫してゐる。千山山脈は、かく景觀には富んではゐるが、其の森林價値は極めて少ない。即ち多係山巖積成土質殊少山脈之兩旁逼近海岸故河流細小而短激其間林木稀疏較之内陸森林之富蓋判若霄壤矣に盡きてゐる。かゝる山巖積成の景觀は、我々は海路大連港の埠頭に入る甲板上からでも大觀し得るのであるが、大連から遼陽に向つて走る車窓からでも、其の山脈の觀察によつても得られる。

(註) ① 地域的の區劃は、地形上からは、遼東半島區・遼東山地區・遼河流域區・遼西區・松花江上流域區・北東山地區・松花江及嫩江流域區・北部山地區・西遼河流域區・興安區の十區に分たれる。(田中秀作氏)

(註) ② 大興安嶺は、長白山脈と共に、大きな斷層の面を有つてはゐるが、山脈の生成から見れば褶曲山脈であつて、岩層の皺の性質も、西方からの壓力を受けた事を明かに示してゐる。兩山脈の傾斜が西方に緩かで、東方に稍々急であり、また遼東半島の西岸が淺く東岸が急に深い事なども、西方中心説を助けるばかりでなく、それが東西の居住地域の限界をも制限してゐる。

(註) ③ 長白山脈は其の最高峯を白頭山といひ、滿洲語でも果毅敏(長)珊延(白)阿林(山)といつてゐるのは、白頭山の絶頂が石灰岩で、遠くから四時雪を戴いてゐるやうに見ゆるからである。長白山脈は支脈多く、林産・鑛産に富んでゐるばかりでなく、奥深い溪谷は馬賊の棲家となつてゐる處もある。例へば小藤博士には、松花江の上流右岸の樺甸附近(吉林の東南)に於ける、もと馬賊であつた豪族に就いて述べられた論文がある。松花江の支流拉林河の溪谷は、百餘年前に吉林將軍富俊が漢人を移住させて開墾を行つた所で、北滿の開墾史上特筆すべき地域である。



龍首山と遼河(鐵嶺)



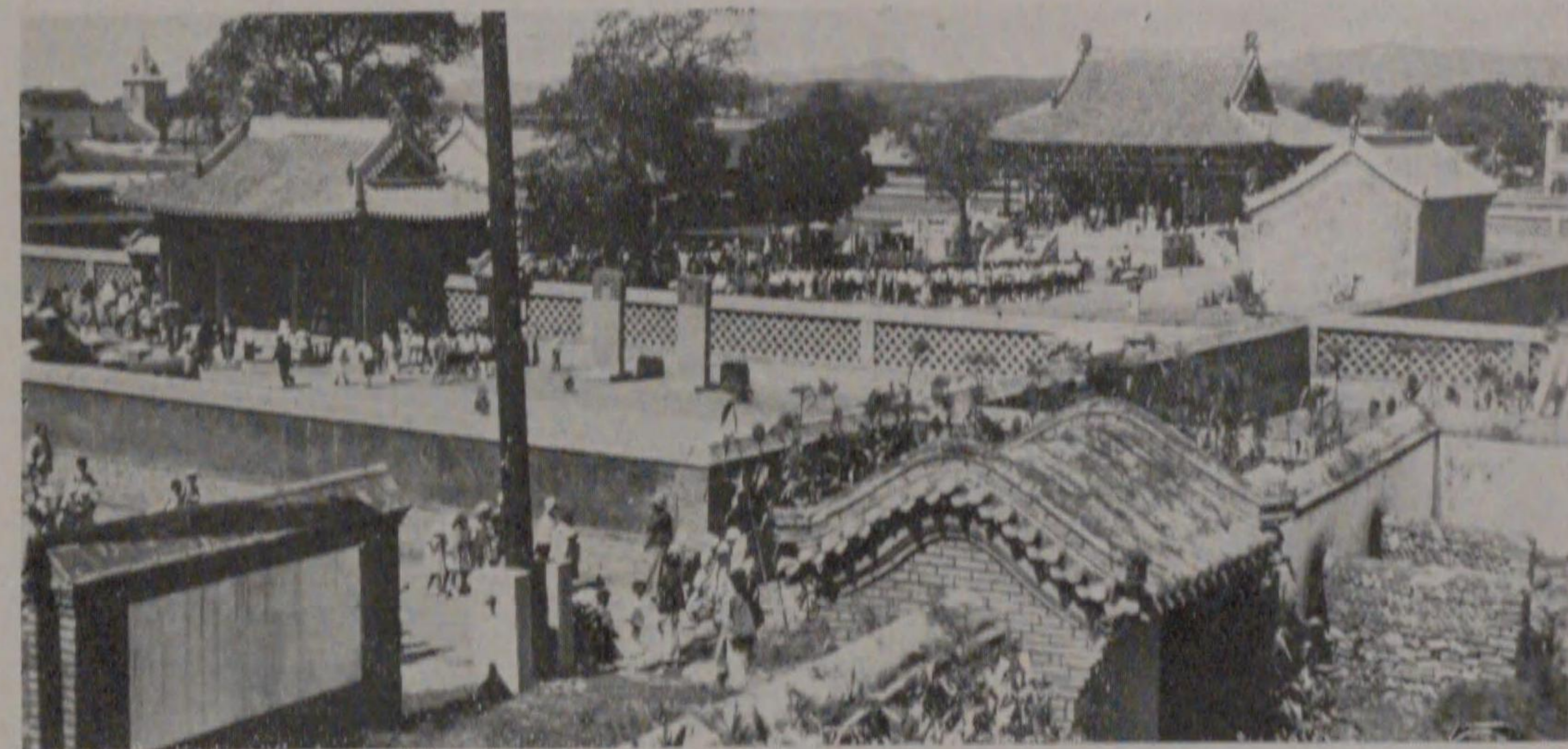
松花江を隔て、吉林を望む



大豆の馬車輸送



海 拉 爾 市 街



金 州 文 廟 祭



新 京 日 本 橋 通

二 河 流 と 航 運

我々人類に居住環境として興へられた山地と平野に對して、縦横に其の間に人類活動を可能にするものは交通の可能度である。殊に近代的交通機關の發達しなかつた廣大なる農業地域に於ては、其の交通路の基準は、可航し得る河流の分布でなければならぬ。此の意味に於て、居住地域としての半自然的社會形態の初期にある滿洲の廣い農業地域に於ては、其の河流の航運の可能性が附近地域を耕作し、また居住する條件を決定する最大の要因である。だから、滿洲の文化發達の過程の基底的考察には、大河の可航度と附近の文化關係でなければならぬ。

一 遼 河 流 域

遼河は全滿洲の文化中心地域たる南滿の動脈である。即ち東からは東遼河、西からは西遼河・潢河が合流し、其の會合地域としての中流域に廣大なる農業地域を形作つてゐる。其の右岸には小河港三江口の發生してゐるのも、またそれ以下を巨流河と呼ぶのも、よく此の河の活動を實證してゐる。鐵道開通前までは、此の中流域の農産物は、殆んどジャンク船によつて河口の營口に運ばれ、農民の衣食住の必需品中他に仰がなければならぬものは、營口から逆に北送された。だから當時營口は滿洲中での第一の港であり、今日でもまだ大連や安東に次ぐ貿易港であ

る。中流域にも幾多の河港が發達したが、殊に鄭家屯（通遼）と通江口は主なるものである。鄭家屯は百餘年前に鄭姓の漢民族が、蒙古王の許可を得た所である事は其の地名でも證據立てられるが、漸次發達して東蒙古貿易の中心となり、また漢民族の移住の増加するにつれて、行政上の必要から巡檢廳を置き、今は州となつて遼源州とよび中心都市は通遼となつた。即ち窩棚が屯となり、屯が市となつたよい例である。通江口の成長年齢は更らに短かく五十年にもならない間に都市に急展したのは、附近の昌圖府管内を始め、長春府附近からの大豆が、それから輸送されるやうになつたからで、明治三十五六年頃は其の全盛時代であつた。しかし南滿洲鐵道の開通は其の輸送を奪ひ、城壁かと思はれるやうな穀物問屋や雜貨舖の家構が、僅かに過去の河運を物語る姿をとゞめるに過ぎない。之に反して、鐵嶺の外港ともいふべき河港馬蜂溝が、比較的其の衰運を感じないのは、鐵嶺の地理的位置が之を維持してゐるのであらう。また

三江口以下至營口約千里水大時小汽船可通至牛莊及遼陽帆船上溯八百里達昌圖之通江子滿載黃豆豆油豆餅輸出營口惟冬春之間營口以上有三閱月之冰期不通舟楫
はよく遼河の航運を説明してゐる。

遼河の航運と之に伴ふ經濟活動の關係は、以上の概説によつて略々之を窺知する事が出來ると思ふのであるが、それが灌溉に及ぼす影響、更らに其の改修に依つての効果は、將來考慮さるべき大きな問題である。岡崎工學博士

の「滿洲の治水」なる論文を見るに、

近年遼河の水を引用して隨所に水田の勃興を見るに至り、逐年造成反別を増加するの傾向がある。……即ち奉天附近・撫順奥地・開原奥地・四鄭線沿線及白音太拉附近丈でも一萬町歩を超へてゐる。……今後灌溉事業の増加する傾向から見ると、進んで適當なる貯水池の位置を選定する必要がある。……遼河の沿岸殆んど到る處に堤防の存在を見るが、是等は主として、沿岸の農民が耕地や生命・財産を保護する目的で、自から築造したもので、水理上の原則を無視したものであるから、今後一定の統一した合理的標準に準據するやうにし河道の安全を圖らなければならぬ。……

なほ同博士は、遼河と松花江の間を連絡する航路の開設、遼河口の浚渫の必要を述べ、最後に

若し遼河と松花江とを連結せしめて、南北滿洲に跨る大水系完成の暁は、豫め推測し能はざる莫大の程度に上下荷物の輸送を見るに至るべき事は、之を海外各國に於ける大水系利用の歴史に徴して明かである。

といつてゐる。先年筆者がマルセイユ商業會議所に於て、書記長ブレネル博士が主査として、マルセイユ港からローヌ河を通じての運河開鑿によつて、中央ヨーロッパへの新しい航運の計畫を聞いた事に思ひ合せ、今回新國家滿洲國が、其の國際的經濟活動の進展の爲には、此の計畫が必ずしも空想にあらざるを思はざるを得ない。

なほ遼河流域に就いて一言しなければならぬ事は、其の支流渾河に就いてある。渾河は、南滿洲鐵道沿線に

於て、奉天驛の一つ手前の驛であるから、一たび南滿洲を訪れた人達は、誰でも記憶する地名である。此の渾河の流域は、滿洲の河流と航運との關係、更らに河谷と文化との關係を實證する一つのよい實例である。即ち其の中流の右岸近くは、清朝の始祖が南方の古都遼陽から遷都して盛京した處で、其の後都が北京に遷つてからは陪都でありまた首城である奉天府となり、最近までは東三省の行政・軍事・教育の中樞地であつた。しかし筆者の考察の主眼は、此の地點が古來滿洲に興つた諸民族の要地であつた事である。而して要地であつた理由は、そこが陸路と水路との接合點、つまり陸運と水運との接合點であつた事を證據立てゝゐる。即ち今日では渾河岸の碼頭は奉天から西南の川下右岸の長灘とされてゐるが、水源地の山林が繁茂し、従つて水量の豊かであつた昔には、奉天の南方渾河の岸には無論碼頭が在り得たであらう。即ち『滿洲紀要』（黒田甲子郎著）に

滿洲ニ於ケル往古民族ノ交通路ハ、大抵河筋ヲ傳ヒ、其ノ河源盡クル所ニ於テ分水界タル山脈ノ鞍部ヲ超過シタルモノデ、大體ニ於テ山海關ヨリ錦州ヲ經テ瀋陽（奉天）ニ出デ、更ニ懿路・鐵嶺・開原ヲ經テ呼蘭城ニ至リ、南ハ遼陽・鞍山站・海城・蓋平・熊岳城・復州ヲ經テ金州ニ至リ、又開原ヨリ伊通州ヲ經テ吉林・寧古塔ニ至リ、遼陽ヨリ摩天嶺ヲ經テ朝鮮ノ義州ニ至リ、若クハ瀋陽ヨリ興京・通溝ヲ經テ朝鮮ノ江界都ニ至リ、錦州ヨリ義州ヲ經テ熱河ニ通ズル通路ノ如キハ、一千年以前ノモノト今日ノモノト甚シキ相違アルマイ
と述べられてゐるのは、南滿洲に於ける陸路と水路との接合過程をよく立證するものであつて、中にも「錦州ヲ

經テ瀋陽（奉天）ニ出デ」「瀋陽ヨリ興京・通溝ヲ經テ」とあるのは、直接に渾河流域に於ける水路と陸路との接合を立證するものであり、清朝の發祥當時の都であつた興京が、更らに渾河の上流域に立地してゐる理由と河谷に於ける交通と文化との關係をもよく説明してゐる。興京の景觀が明治二十七年頃に（參謀本部『滿洲地誌』）

清國始祖創業ノ地ナリ、曾テ繁昌セント雖モ今既ニ衰頽シテ商賣行ハレズ、人々亦甚タ少シ。城ハ山麓ニ位置シ周圍凡ソ三十丁、四方老樹繁茂ス俗ニ之ヲ老城ト云フ。……滿洲各地ニ於テハ昔時盛ニシテ今既ニ廢墟ニ屬シタル城市ノ尙地圖上ニ其ノ名ヲ存スルモノ許多アリ。往々爲メニ人ヲ惑ハシム。興京ノ如キモ亦其ノ類ナリ。

と記述されてゐるのに徴すれば、今日の興京は更らに淋しい景觀に陥つてゐるであらう。これに比すれば同じく渾河の流域に沿へる小城市でありながら、炭鑛の採掘によつて勃興し、其の舊城市は渾河右岸の所謂龍脈に據つた天嶮に、小規模な築造を残してゐるに過ぎないのに、左岸は千金寮と稱せられて、日露戰役當時まで戸數僅かに五六の小部落に過ぎなかつた所が、今日は人口約八萬を算する近代都市撫順を現出するに至つた。

興京から奉天、奉天から北京、また奉天から新京と、政治的都市の遷移、また通遼・通江口・馬蜂溝・營口等の河港としての盛衰に關する描寫は、以上極めて簡單ではあるが、これによつて讀者は、南滿洲に於ける航運と文化發達の關係を推知する一つの基準を得られたであらう。